

# 池上曾根遺跡

——拠点集落東方の墓域の調査——

1999年3月

大阪府教育委員会

遺跡東方から大阪湾を望む

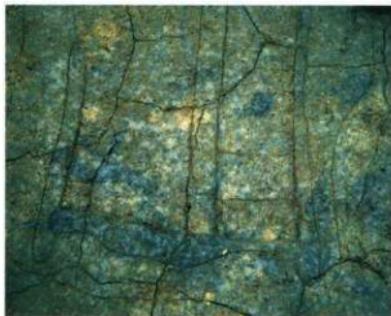


方形周溝墓SI164



方形周溝墓SI165





主体部SK157木棺痕跡



主体部SK153裏込め土

供献土器



主体部SK159墓壙底面の整形



主体部SK159墓壙掘削時の凹凸

## はしがき

弥生時代の大環濠集落として全国的にも著名な池上曾根遺跡が発見されてから、おおむね百年の歳月が流れようとしています。近年この遺跡では従来の考古学の常識を覆すような重要な発見が相次いでおり、弥生時代のクニのひとつと目される池上曾根遺跡の持つ価値はますます高まったといえるでしょう。

地元の方々を中心とする多くの先人の努力によって昭和51年に国史跡に指定された遺跡の中心部では、現在、巨大な神殿や住居など弥生時代の景観をそっくり復元する史跡公園の整備が進められており、2年後には、府立弥生文化博物館、体験学習施設、史跡公園が一体となった、21世紀の開幕を飾るにふさわしい空間が誕生します。

このたび史跡の東側で府道建設に先立つ発掘調査を実施しましたところ、環濠の外側に展開する墓域を確認することができました。60ヘクタールにも及ぶこの遺跡の全容解明にまた一步近付く成果が挙がったものと考えます。

発掘調査の実施にあたって、地元をはじめ関係の皆様方の多大なご協力がありました。厚くお礼申し上げますとともに、今後とも本府の文化財保護行政にご理解とご協力をためわりますようお願いいたします。

平成11年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野一美

## 例　　言

1. 本書は、都市計画道路池上下宮線建設にともなう、和泉市池上町所在、池上曾根遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地における調査は、大阪府上木部交通政策課から依頼を受けた文化財保護課が、3年次にわたって実施した。第1次調査は、調査第1係技師　榎本哲、西川寿勝を担当者として1996年8月17日から1997年3月31日まで、第2次調査は、調査第1係技師　藤澤真依、井西貴子を担当者として1997年8月18日から1998年3月31日まで実施し、その間一時榎本の協力を得た。
3. 遺物整理及び報告書作成は、調査第1係主査　広瀬雅信、資料係技師　地村邦夫を担当者として1998年4月1日から1999年3月31日まで実施し、隨時調査担当者の参加を得て検討を重ねた。
4. 第1次調査の結果については、「池上曾根遺跡発掘調査概要」(大阪府教育委員会1997)でその概略をすでに報告しているため、本書の構成は第2次調査の結果を中心とした。
5. 本書に使用した遺構実測図の基準線は国土座標第VI系、水準高はT.P.である。遺構の実測はヘリコプターによる航空写真測量を主とし、微細図、略測図等にはオフセット測量、平板測量も併用した。
6. 本書の執筆は広瀬、大洞真白（本府調査補助員）、地村、藤澤（現、貝塚市教育委員会出向）、井西（現、記念物係）が行い、5名の協議に基づいて地村が編集した。文責は文末に示した。
7. 本書で報告する遺構の遺構番号は、アルファベット2文字の略号で遺構の種類を示し、番号については遺構の種類に関わらず通し番号を付した。略号は、S A = 砧畔、S B = 建物、S D = 溝、S E = 井戸、S I = 墓、S K = 土坑、S X = その他の遺構、S P = ピット、N R = 自然河川である。  
また、報告に当たっては発掘調査の段階で付した番号をそのまま使用しているため、S E、S K、S X 等の遺構の略号が若干混亂している。たとえば、検出時には上坑と認識して S K の略号を付した遺構が掘り下げの結果井戸になった場合もあえて略号を S E に変更していないが、これは複数の遺物取り上げラベルの照合にあたって錯誤のないようにするためにある。
8. 遺物写真は阿南写真工房に委託して撮影した。
9. 出土遺物及び記録資料は大阪府教育委員会で保管している。

## 目 次

### はしがき

### 例 言

第1章 位置と環境	1
第1節 立地と自然環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査に至る経過	2
第3章 調査の方法	4
第1節 調査区の設定	4
第2節 地区割り	4
第3節 遺構名・遺構番号	5
第4章 調査結果	6
第1節 基本層序	6
第2節 遺構と遺物	11
(1) 97-1 区の調査結果	11
(2) 97-2 区の調査結果	11
(3) 97-3 区の調査結果	20
(4) 97-4 区の調査結果	35
(5) 97-5 区の調査結果	44
(6) 97-6 区の調査結果	59
(7) 97-7 区の調査結果	67
(8) 97-8 区の調査結果	86
第5章 考察	
第1節 和泉地域第III・IV様式の編年 97年度調査出土土器の検討	88
第2節 方形周溝墓から見た池上曾根遺跡	111
第6章 まとめ	126
遺物觀察表	134
報告書抄録	150

# 第1章 位置と環境

## 第1節 立地と自然環境

池上曾根遺跡は和泉市池上町と泉大津市曾根町を中心として、和泉市千原町、泉大津市森町の一部に広がり、その範囲は南北約1,000m、東西約600mのほぼ60ヘクタールに及ぶと推定される。

遺跡は海岸線から1.5～2kmの低位段丘上に立地しているが、この段丘は和泉山脈に源を発する楨尾川が信太山丘陵から流下する際に形成した扇状地が段丘化したもので、池上曾根遺跡付近にも多くの支流が形成した旧河道や埋没自然堤防が見られる。遺跡付近は保水力豊かな信太山丘陵に由来する地下水が豊富で、現在でも地表面下1.0～1.4mあたりに地下水位面があるほどで、弥生時代の農耕社会にとっては良好な生活環境であったと推測される。

遺跡周辺の現在の植生は農地以外ほとんどが二次林あるいは人工林となっているが、既往の調査の花粉分析の結果から弥生時代の植生は、丘陵から平野部にかけては照葉樹、落葉広葉樹を中心としてマツなどの二次林が混在し、海岸添いの後背地に近いところにはアシ、マコモなど湿地性の木本科植物が繁茂していたことがわかっている。湿地性植物群落の名残は現在も所々に見ることができるが、一次林の痕跡はきわめて稀で、社叢として残るウバメガシやシリブカガシ、楨尾山のアカガシ林や国の天然記念物に指定されている和泉葛城山のブナ林などにわずかに見られる他は、クス、ビャクシン、ヤマモモなどの老木が府指定天然記念物などの単木で残されているにすぎない。

## 第2節 歴史的環境(第1図)

遺跡周辺は高度に市街化が進んでおり、まとまった緑地が残されているのは池上曾根遺跡の史跡指定地のみと言ってもよい。史跡指定の契機となった調査が行なわれた国道26号線の開通によって順次進展してきた周辺の開発は、近畿自動車道和歌山線、阪神高速道路鷲岸線、堺泉北自動車道などの開通によって飛躍的に進み、関西国際空港の開港のころにはピークに達した。

古来大津川河口域は良港として知られ、瀬戸内海、大阪湾岸の流通の拠点として繁栄してきたことから、周辺の農村も比較的豊かであったと考えられる。再開発の波のなかで姿を消した古い町並みも多い中で、池上町の旧集落に見られるように、立派な屋敷によって構成された江戸時代からの景観を今に伝える場所もところどころに残されている。

池上曾根遺跡周辺の丘陵から平野部にかけては、その数は少ないものの旧石器時代から人類の生活的の痕跡が残されている。国府型ナイフ形石器が採集されている遺跡としては伯太北遺跡、信太山丘陵(和泉市)、大園遺跡(高石市・泉大津市)などが知られている。

旧石器時代末から縄文時代草創期の所産である有舌尖頭器は池上曾根遺跡を含む広範な遺跡で採集されているが、縄紋土器の出土する遺跡はさほど多くなく、中期の箕土路遺跡(岸和田市)、中・後期の轟中遺跡(泉大津市)、後期の板原遺跡(泉大津市)、府中遺跡、伯太北遺跡(和泉市)、春木八幡山遺跡(岸和田市)、晩期の四ツ池遺跡、黄金山遺跡(堺市)、伽羅橋遺跡(高石市)などが知られているにすぎないし、それらの遺跡では残念ながら住居跡などの遺構は明瞭には確認されていない。

弥生時代になると遺跡の数は飛躍的に増加する。泉州地域を代表する拠点集落としては、池上曾根遺跡をはじめ、四ツ池遺跡(堺市)、栄の池遺跡、下池出遺跡(岸和田市)などがあり、それぞれが分村ともいうべき小集落と群をなしている様子が見て取れる。

池上曾根遺跡を中心になると、海岸から平野部にかけては土生遺跡、春木八幡山遺跡(岸和田市)、府中遺跡、伯太北遺跡(和泉市)、七ノ坪遺跡、池浦遺跡、豊中遺跡、助松遺跡(泉大津市)、大園遺跡(泉大津市・高石市)、日明山遺跡(高石市)などが展開し、後期の高地性集落としては觀音寺山遺跡、惣ノ池遺跡(和泉市)が著名である。

四ヶ池遺跡のように古墳時代になっても連続と存続する遺跡もあるが、池上曾根遺跡は弥生時代中期後半に拠点集落としての最盛期を迎えたのちは一気に縮小するようで、古墳時代の集落は七ノ坪遺跡、豊中遺跡、府中遺跡、和氣遺跡、上町遺跡(和泉市)、大園遺跡などに分散していったものと考えられる。

前期の前方後円墳としては和泉黄金塚古墳、丸笠山古墳(和泉市)、摩湯山古墳(岸和田市)などが知られる。大仙古墳に代表される大王墓を含む大規模な百舌鳥古墳群(堺市)が形成される古墳時代中期には貝吹山古墳(和泉市)、富木車塚古墳(高石市)、久米川古墳群(岸和田市)などがあり、泉北丘陵一帯で陶邑窯跡群として著名な大規模な須恵器生産が展開されるようになるが、大庭寺遺跡(堺市)では最古形式の須恵器窯跡が発見されている。信太山丘陵一帯には中期末から後期にかけて大規模な信太千塚古墳群が形成される。

律令期には府中遺跡付近に和泉国府が置かれたと考えられるが、その詳細な実態は明らかにならない。白鳳期創建の和泉の寺院跡は15ヶ寺が知られるが、池上曾根遺跡周辺の寺院跡としては、信太寺跡、御寂寺跡、池田寺跡、春木廢寺、小松里廢寺、秦廢寺などがあげられる。いずれも地方豪族の氏寺としての性格が強いと考えられるもので、秦廢寺、池田寺跡などでは寺院の建立と経営に携わった氏族に關係すると思われる集落跡が寺に隣接して検出されている。

冒頭に述べた大津は和泉国府の外港で、もとは小津と呼ばれていたことが土佐日記などの記事からわかるが、国府津の訛りであろうといわれている。開港の起源は不明だが、11世紀には大津に国府直轄の木屋があり、紀伊産の木材のターミナルとして重要な役割をはたしていた。のちに自治都市として世界に名を馳せる埠の経済的発展を支えた国際港埠津の中世以降の発達の影で和泉国の中心的港としての大津の地位はやや薄れたかもしれないが、流通の拠点としての重要度はいささかも変わることなく現在につながっている。

(広瀬)

## 第2章 調査に至る経過

池上曾根遺跡発見から百年の歴史については、すでに紹介されているものもあるので、ここで詳細を述べることはしない。第二阪和国道(国道26号線)の建設に先立つ調査を契機に、学会、行政機関のみならず、教育関係者や市民の広範な努力によって、60ヘクタールに及ぶ遺跡の中心部約11ヘクタールが1976年に国の史跡に指定されてからでもすでに20年以上が経過している。実のところ、第二阪和国道の調査成果以外には環濠集落の中核のことは未だ解明されていない段階のことであった。池上遺跡と呼ばれていたこの遺跡の指定名称は池上曾根遺跡という。指定区域が和泉市池上町と泉大津市曾根町にまたがっているからである。環濠集落全体が納まる範囲をまず保存し、指定後時を経ずに、地元自治体が保存、整備、活用に主導性を發揮することを見通した、当時の関係者の英断であった。

第二阪和国道と交差する都市計画道路として当時すでに都市計画決定されていたのが、府道松之浜曾根線および池上・下宮線である。史跡指定により、第二阪和国道と泉大津市側の松之浜曾根線が計画どおり建設されると、その一部が指定地内を通過するという問題が生じた。第二阪和国道は、大阪和



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

歌山間の大動脈建設という社会的要請が優先された結果、現状変更許可により予定路線上で開通し、集落の東側をぬける環濠は分断されてしまったが、その時点では大阪府教育委員会文化財保護課は「これ以上史跡を損壊せず、分断せず」との決意を表明していたことから、松之浜曾根線建設の是非について広範な論議が巻き起こることとなった。結局松之浜曾根線建設の現状変更が許可されたのは1989年、昭和から平成への改元の年であった。その間、発掘調査結果に基づく予定路線内の重要遺構の保存、史跡の買い上げの促進、整備計画の早期策定などの方針が決定された。文化庁の指示による発掘調査の結果、環濠集落入り口の存在を推定させる多重環濠や土器棺墓などが検出され、盛上、道路幅員の一部縮小などで主要な遺構の保存を図ったうえで松之浜曾根線は建設された。また、この時史跡北側の隣接地を一部追加指定し、公有化もされている。

本章で報告する和泉市側の池上・下宮線は史跡指定地北東部に隣接する国道26号線からJR阪和線までの間約370mの区間で、付近の既往の調査で自然河川に設けられた堰が検出されていることから、史跡指定地に近い部分では水田などの生産域の存在を推定する向きもあったが、1995年に実施した試掘調査の結果では方形周溝墓の存在も予測された。調査は用地買収の終了した部分から着手することとし、1996~97年の2カ年で大半の予定地については調査が終了したが、本書執筆中の'98年末現在も第二阪和国道取り付き部の一部が用地買収に協力を得られず、予定地全域の調査完了については未だにめどがたっていない状況である。また、第2次調査は諸般の事情により調査着手が予定よりも大幅に遅れたにもかかわらず、そのことに伴う調査期間の延長といった随伴措置が不十分であったことから、年末年始の厳寒の時期に投光器の下で深夜に及ぶ調査を行なったこともしばしばであったといふことも付言しておきたい。

史跡池上・曾根遺跡は2度にわたって道路によって分断されたが、このことが関係者の間に史跡は単に保存するだけではなく整備し活用しなければならないという気運を盛り上げるきっかけとなつたとも言える。指定後20年を経た年に、「神殿」とも目される大型掘立柱建物跡が発見された。この大型掘立柱建物に使用された木材の伐採年代は、紀元前52年であることが判明している。

国庫補助事業「地方拠点史跡等総合整備事業(歴史ロマン再生事業)」第1号の採択を受けて現在文化庁、府、両市が一体となった大規模な整備事業が進められている。  
(広瀬)

## 第3章 調査の方法

### 第1節 調査区の設定

1996年度に未買収地であったところが、今回の調査対象地である。調査区は、最も東側(JR阪和線側)の調査区を97-1区とし、以下西に向かって97-2区、97-3区・・とした。

### 第2節 地区割り(第2・3図)

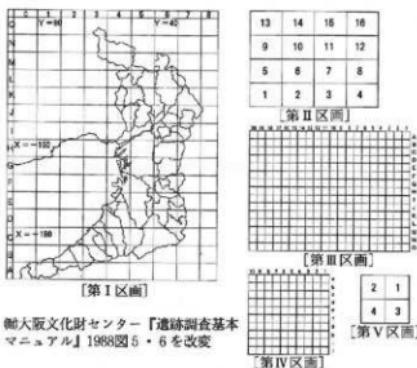
地区割りは国上座標第VI系に基づき、1万分の1の地形図を使用した縦6km、横8kmの第I区画、2500分の1地形図を使用した縦1.5km、横2kmの第II区画、第II区画内を100m単位で区画した第III区画、第III区画内を10m単位で区画した第IV区画、第IV区画内を5m単位で4分割した第V区画の5つの区画を用いて位置を表示する。このうち第I~IV区画については必ず記録するものとし、遺構の位置や遺物の取り上げにあたっては必要に応じて第V区画も用いて更に詳細な位置を表示するようにしている。なおこの地区割りは(財)大阪文化財センター(現:(財)大阪府文化財調査研究センター)の地

区割りに依拠している。

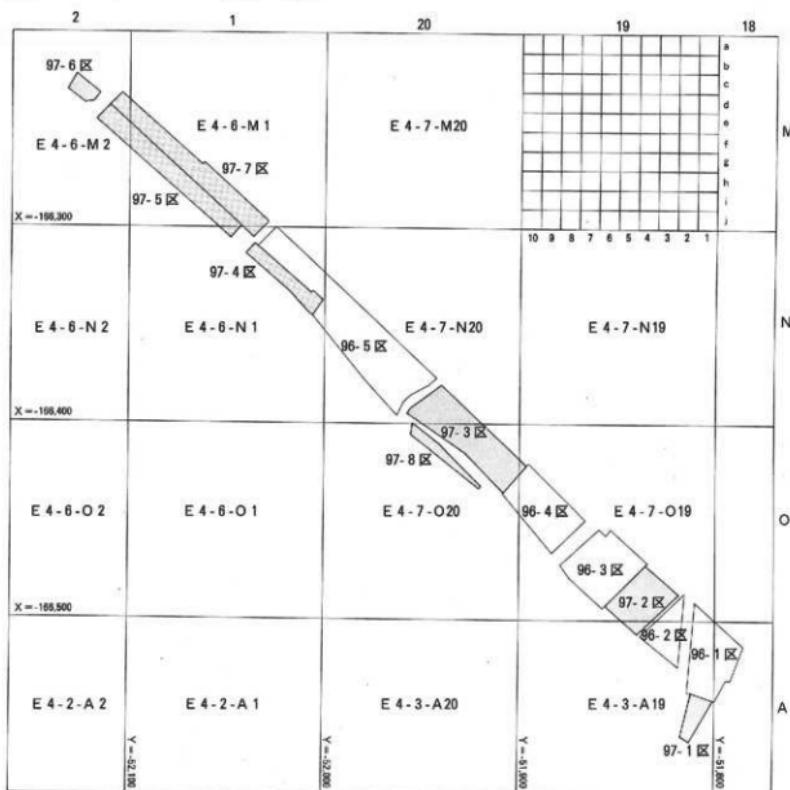
### 第3節 遺構名・遺構番号

本調査では例言において述べたように、遺構の種類については記号で表している。遺構番号については遺構の種類に関係なく、検出した順に通し番号をついている。たとえば遺構番号1は97-2区第1遺構面のSD1であり、他の調査区、遺構面にはない。遺構名については、例言で記したように、調査段階での略号は変更していない。遺構の記述にあたっては、整理した遺構の見解を見出しとした。

(地村・井西)



第2図 地区割り方法



第3図 調査区地区割り設定図 ( $S=1/2500$ )

## 第4章 調査結果

### 第1節 基本層序

各調査区ごとに基本層序を記述する。97-1区は、盛土を除去後すぐに段丘礫層が検出されたので、97-2区から説明する(第4図)。

#### 97-2区

第0層：盛土 層厚約0.7m。

第1層：5Y3/1オリーブ黒色土

近代の水田耕土である。層厚0.02~0.25m。

第2層：5Y4/1灰色砂混じり粘土

近世の水田耕土である。旧地表面の標高は10.2m前後である。調査区の西側では、第1層にあたる近・現代の耕作上は、削平されてなくなっている。層厚0.05~0.1m。

第3層：5Y6/1灰色土

第4層の上面に部分的に客土された近世の耕作に伴う床上である。層厚0.01~0.03m。

第4層：5YR5/8明赤褐色土～2.5Y6/6明黄褐色土

近世以前の床上で、含まれる最新の遺物は江戸時代の伊万里青磁、染付などである。上面が第1面である。層厚0.02~0.05m。

第5層：2.5Y6/6にぶい黄褐色土

弥生上器、上飾器・須恵器が多く含むが、わずかながら瓦器が出土した。中世の遺物包含層である。上面が第2面である。層厚0.5~0.6m。

第6層：10YR4/4褐色土

古墳時代後期までの遺物を主として含むが、瓦器も出土しており、上下の土層との関係から判断して奈良時代から中世の遺物包含層である。上面が第3面である。層厚0.01~0.1m。

第7層：2.5Y3/1黒褐色礫混じり土～2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫

調査区の南側に堆積している土層で、古墳時代後期の須恵器をかなり含む。上面が第4面である。層厚0.05~0.1m。

第8層：10Y5/4にぶい黄褐色土

第7面で検出した自然河川によって形成された自然堤防である。上面が第5面である。層厚0.05~0.17m。

第9層：7.5YR3/4暗褐色土

調査区の北側に堆積する。上面が第6面である。

第10層：砂礫層

上面は第7面である。第9層以下は、自然河川の堆積層である。

## 97-3・8区

第0層：盛土 層厚0.1～0.4mである。

第1層：5Y3/1オリーブ黒色土

近代の水田耕土である。上面の標高は9.6～9.7mで、若干の凹凸はあるが、ほぼ水平に堆積する。層厚0.06～0.14m。

第2層：N7/0灰白色砂

付近に存在する近世の自然河川の氾濫に由来する砂層と考えられる。調査区全域には広がっていない。層厚0.02～0.03m。

第3層：10YR5/6にぶい黄褐色土

近世から近代の耕作に伴う床土である。層厚0.01～0.05m。

第4層：10YR7/2にぶい黄橙色土

近世の遺物包含層で、江戸時代の陶磁器を包含する。小砾、マンガンノジュールを含む。上面が第1面である。層厚0.1～0.16m。

第5層：10YR5/2灰黄褐色砂

中世の遺物包含層で、鎌倉時代までの瓦器、土師器を包含する。基本的には中世の耕作土であると考えられる。上面が第2面である。層厚0.1～0.2m。

第6層：10YR5/2黄灰色粘土

古墳時代から平安時代の遺物を包含する。上面が第3面である。層厚0.08～0.12m。

第7層：10YR6/1褐灰色粘土

弥生時代の遺物包含層である。下面の地山面が第4面である。層厚0.08～0.3m。なお、第6層と第7層の間には、方形周溝墓の周溝の窪みに堆積した間層が数層挟在する。

## 97-4区

第0層：盛土

第1層：10YR3/1黒褐色土

近・現代の水田耕土である。地表面の標高は8.9m、層厚0.08～0.15m。

第2層：10YR4/6褐色～2.5Y5/2暗灰黄色土

近世の水田耕土である。層厚0.08～0.2m。

第3層：10YR7/8黄橙色土

近世の水田耕作に伴う床土である。上面が第1面である。層厚0.05～0.1m。

第4層：10YR5/3にぶい黄褐色土

中世の遺物包含層であるが、基本的には耕作土であろう。調査区西端から8mまで、ほぼ水平に堆積するが、そこから東に向かって若干傾斜し、層厚も増す。部分的に細分は可能であるが、境界は明瞭でない。上面が第2面である。層厚0.06～0.3m。

第5層：10YR6/8明黄褐色土

中世の遺物包含層である。調査区東半部では下半が灰色を帯びるが、境界は明瞭でない。鎌

倉時代の瓦器、土師器、青磁などが出土した。上面が第3面である。層厚0.04~0.28m。  
第6層：10YR3/4暗褐色粘質土

奈良~鎌倉時代の遺物包含層である。調査区東半には認められない。5mm前後の小礫を多く含む。上面が第4面である。層厚0.1~0.3m。

第7層：10YR3/4暗褐色土

古墳時代の遺物包含層である。調査区東端から堆積するが、SX99の上層で一旦途切れ、調査区東端のSD97上層の窪みに堆積した7.5YR4/2灰褐色粘質土層が対応する。古墳時代後期の土師器・須恵器が出土した。上面が第5面、下面の地山面が第6面である。層厚0.06~0.2m。

## 97-5・7区

第0層：盛土

第1層：N3/0暗灰色土（耕土）

近・現代の水田耕土である。上面の標高は8.6~8.9mである。層厚0.1~0.2m。

第2層：2.5Y6/1黄灰色土~2.5Y6/2灰黄色土

調査区西端から30m付近まで存在する近世から近代の水田耕土である。層厚0.05~0.2m。97-7区では一部上面に第1層の耕作に伴う床土が残る。

第3層：2.5Y6/2黄褐色土

第2層の耕作に伴う客土による床上。中世までの遺物を包含するが、最新のものは室町時代に下りものを含む。97-7区では粘土混じりの10YR 7/8黄橙色土となる。自然河川の上面では一部途切れるところもある。層厚0.04~0.15m。

第4層：2.5Y4/2~5/2暗灰黄色土

調査区西端から25m付近まで存在する土層で、マンガンノジュール、0.5~2cm大の礫を多く含む。包含される遺物は中世までのものが大半であるが、わずかながら近世初頭の遺物が含まれることから当該期までに形成された土層と考えられる。上面が第1面である。層厚0.06~0.1m。

第5層：5YR3/1黒褐色土

97-5区東半ではやや黄色がかる。全体に砂混じりで、97-7区西側では灰色の砂層となり、部分的に小礫を含む。東側は客土と考えられる灰黄褐色土が第5層に相当するが、これは調査区中央部に堆積する自然河川上層の自然堤防を削平して整地したものであろう。堆積時期を示す遺物としては黒色土器△類、瓦器、土師器等が包含されており、上限は平安時代から下限は鎌倉時代のものである。上面が第2面であるが、検出した造構の半分は第1面からの掘り込みと理解できるものである。層厚0.06~0.1m。

第6層：2.5Y5/4黄褐色土

97-7区西半では10YR3/3暗褐色から10YR4/1褐灰色の砂混じり土になる。古墳時代後期までの土師器、須恵器を包含する。上面が第3面である。層厚0.08~0.3m。

第7層：第6層の下層は調査区全体に広がる自然河川が埋没する過程で生じた凹凸に多様な土層が堆積したもので、複雑な切り合いを呈しており、微妙な時期差もあると思われるが、連続が不明瞭である。97-7区では黒褐色~黒色の礫混じり土が明瞭な自然堤防を形成している状況も観

察された。全体に砂礫を含み、主として弥生中期の土器を包含するが、部分的には古墳時代後期の土器も出土しており、一まとまりの土層あるいは造構面としては把握しにくい。上面が第4面である。層厚0.1~0.15m。

#### 第8層：5Y6/1灰色粘質土

西に向かって傾斜する地山直上の堆積上で、基本的には第7層同様自然河川の形成した七層である。灰黒色粘土や灰色シルト、砂の間層を挟在する。主として弥生中期から後期の土器を包含するが、部分的に古墳時代前期の土器も出土しており、これらが本来第8層に含まれるものか、流水による凹みに溜まつた、あるいは投棄されたものであるかは不明確である。この層の下層は部分的に地山面となるが、大半は古い川河道の埋没面となり、その面が第5面である。層厚0.1~0.5m。

### 97-6区

#### 第0層：盛土 層厚約1mである。

#### 第1層：7.5GY5/1線灰色土

近・現代の水田耕土である。上面の標高は8.2m、層厚0.08~0.16mである。

#### 第2層：10YR8/6黄橙色粘土

近・現代の水田耕土に伴う底土である。上面の標高は8.1m、層厚0.02m~0.1mである。

第1・2層からは、土師器、瓦器の破片が多く出土し、江戸時代の染付碗も含まれる。調査区東側では第2層の下に砂礫の多く混じる灰褐色土が薄く(層厚0.04m以下)堆積していた。

#### 第3層：10YR5/2 砂混じり灰黃褐色土(径5mm以下の白色石粒を含む)

中世の遺物包含層である。上面が第1面である。上面の標高は8.0m、調査区中央部では層厚0.12mで、西側と北東隅では0.05m前後である。瓦器碗の破片が多く出土したが、下限を示すのは室町時代の土師器の羽釜である。

#### 第4層：7.5YR4/2灰褐色土

古墳時代から奈良時代の遺物包含層である。上面が第2面である。上面の標高は北西で7.85m、南東で7.95m、層厚0.1mである。第3層と同様、西側と北東隅では、層厚が0.04mと薄くなる。古墳時代から奈良時代の須恵器の破片を多く出土した。

#### 第5層：5Y6/1灰色砂

弥生時代の遺物包含層である。西側ではなく、中央部の溝(SD96)の覆土上面の窪みや、調査区東側に部分的に薄く見られる層で、層厚は東端で0.04mである。97-5・7区で検出した河川の影響による砂であると考えられる。弥生時代中期の土器片を含んでいた。

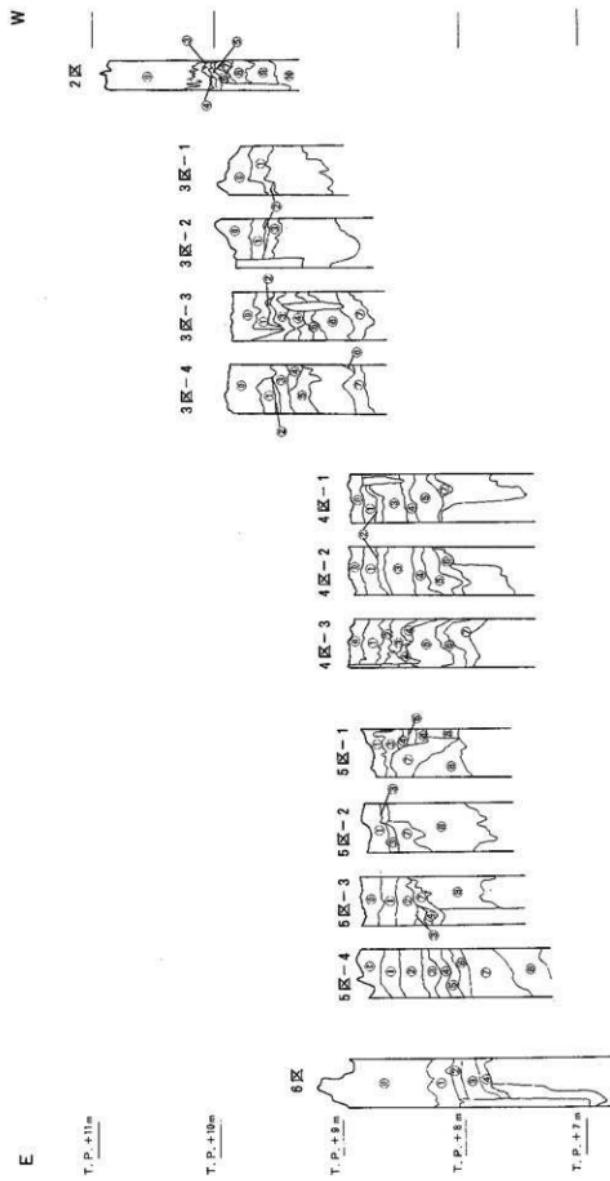
#### 第6層：10YR4/1褐色灰色砂混じり土(黄色・白色石粒を多く含む)

弥生時代の遺物包含層である。調査区西半部に認められる。標高は7.7m、層厚は0.1mである。遺物は弥生時代中期の土器片が出土した。

#### 第7層：10YR6/6明黄褐色土

弥生時代中期の遺物包含層である。調査区の東半部にのみ堆積している。上面は、西半部に堆積する第6層とともに第3面を形成する。上面の標高は7.85m、層厚は0.1m以下である。調査区東側で比較的厚く堆積していた。

第4图 调查区基本剖面模式图(纵S = 1/40、横S = 1/1000)



## 第2節 遺構と遺物

以下、各調査区ごとに遺構と遺物について記述する。個々の遺物についての詳細は、卷末に観察表としてまとめた。

### (1) 97-1区の調査結果

97-1区では盛土を除去すると、すぐに段丘疊層が検出された。JR信太山丘陵縁辺部の開発により旧地形が大きく削平された結果である。遺構・遺物ともに検出されなかった(図版1)。

### (2) 97-2区の調査結果

第1面(第8図、図版1) 近世の遺構面である。

耕作に伴う溝を検出した。

第2面(第8図、図版1) 近世の遺構面である。

自然河川 NR 6を検出した。

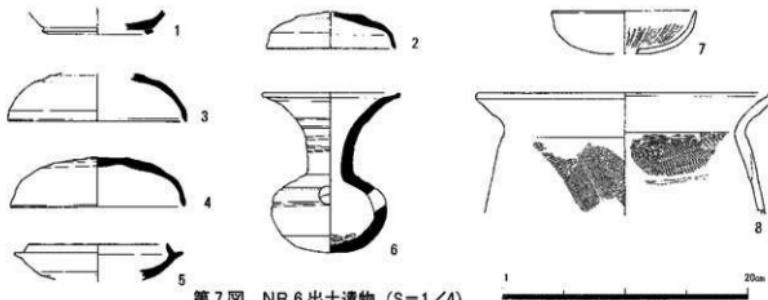
#### NR 6(第7・15図)

調査区の北東隅で西肩のみ検出した。上層からは、Ⅲ型式の須恵器の杯身(1)、飛鳥時代の上飾器の杯身(7)、腰(8)等が出土した。下層では弥生土器とⅡ型式の須恵器の杯身(5)、杯蓋(2~4)、甌(6)等が出土した。本遺構は第7面で検出したNR108の最終埋没段階の堆積と考えられる。



第5図  
97-1区地区割図  
(S = 1/500)

第6図 97-2区地区割図  
(S = 1/500)



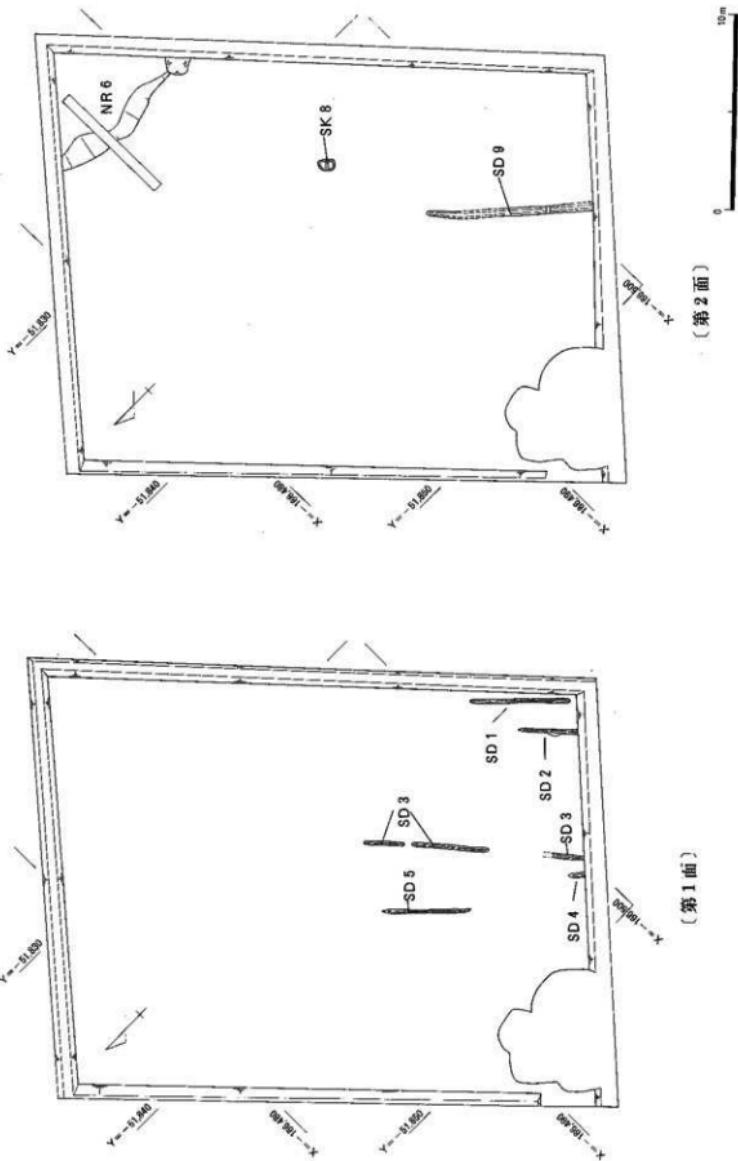
第7図 NR 6出土遺物 (S=1/4)

第3面(第9図、図版2) 中世の遺構面である。

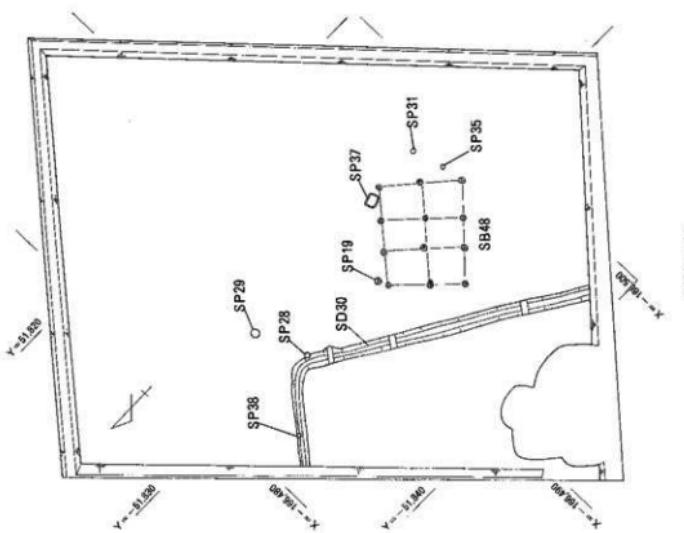
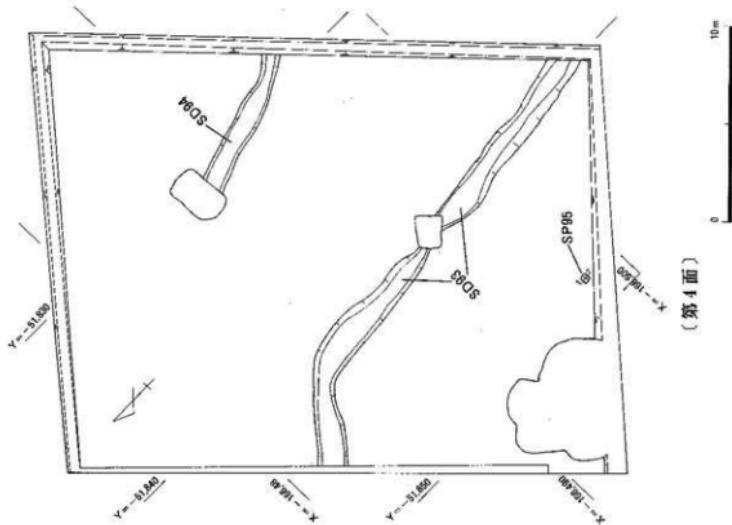
掘立柱建物 SB48を検出した。

#### SB48(第10図、図版2)

E4-7-019-j 4-2-4~j5-1-3で検出した、2間×3間の純柱建物である。上軸方向はN-132度-Wである。規模は桁行5.1m、梁行4.3m、面積は約22m<sup>2</sup>である。柱間寸法は桁行方向が1.6~1.8m、梁行方向が2.0~2.2mである。柱穴の平面形は円形、規模は径0.4~0.7mで、深さは0.1~0.3mである。柱痕



第8図 97-2区 第1・2面平面図(S=1/250)



第9図 97-2区 第3・4面平面図(S=1/250)

跡から推定される柱径は約0.2mである。掘形埋土からは時期を決定できるような遺物は出土していないが、層位関係と検出面から推定される時期は中世である。

溝 SD30を検出した。

SD30

EA-7-019-i5-1・3～j5-1・2・4で検山した溝である。掘立柱建物SB48の北西を区画するように南西から北東向きに開削されているが、SP48の真北ではほぼ直角に曲がり北西方向に向きを変える。規模は幅0.5～0.8m、深さは0.15mを測り、断面形は半円形を呈する。検山長は20mである。覆土はほぼ1層で、占墳時代後期の土器、須恵器が出土したが、SB48との関係が深いものとみて、時期は中世と推定する。

第4面(第9図、図版2) 平安時代の造構面である。

柱穴 SP95を検出した。

SP95(第11図)

EA-7-019-j5-4で1個だけ検出した柱穴である。平面形は隅丸方形、規模は1辺0.4m、深さは0.2mを測り、断面形は逆台形である。

中央に径0.15mの柱痕跡が認められる。掘形埋土は3層に大別できるが、時期の決め手となるような遺物は出土しなかった。

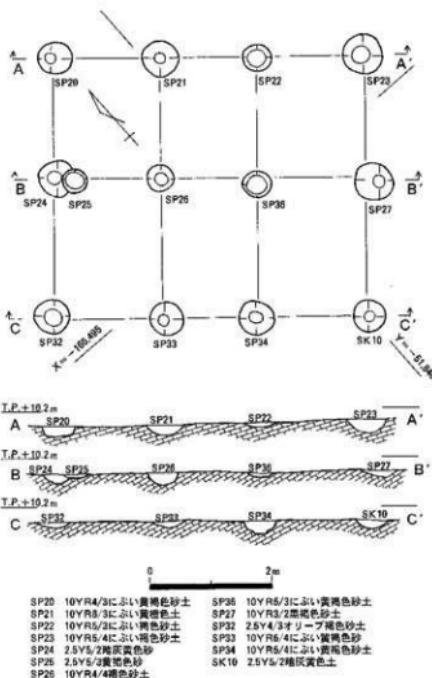
溝 SD93、SD94を検出した。

SD93(第12図)

EA-7-019-i5-1・3～j5-1・3、a4-2～a5-1で検出した溝である。溝の方向はほぼ南北で、北でやや北西に方向を変える。規模は幅0.5～1.8m、深さは0.1mを測り、断面形は浅い皿状を呈する。検出長は25mである。覆土は1層で、弥生時代中期から古墳時代前期の土器が若干出土したが、時期の決め手とはならない。

SD94(第13図)

EA-7-019-i4-3～j4-1、j3-2で検出した溝である。溝の方向はN-15度-Wである。規模は幅0.8～1.2m、深さは0.15mを測る。覆土の中心が周囲より盛り上がっており、断面形はレンズ状を呈する。検出長は7.8mである。覆土は1層で、古墳時

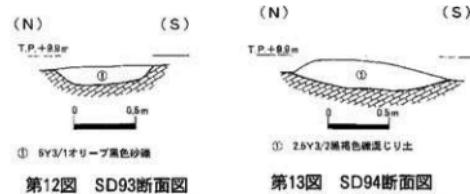


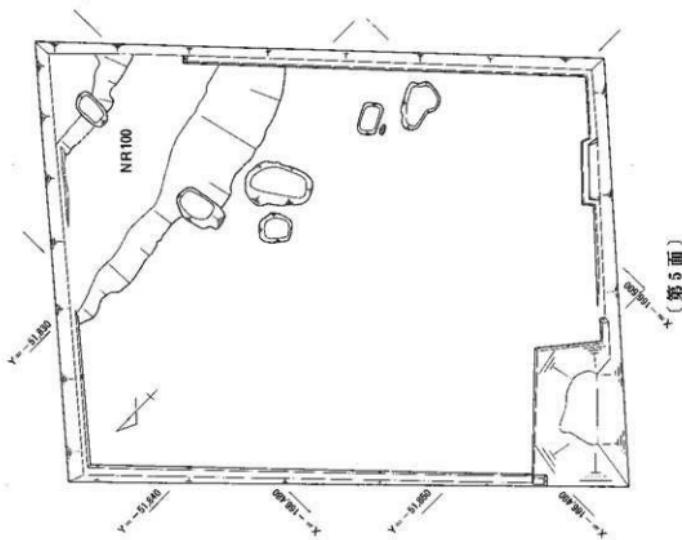
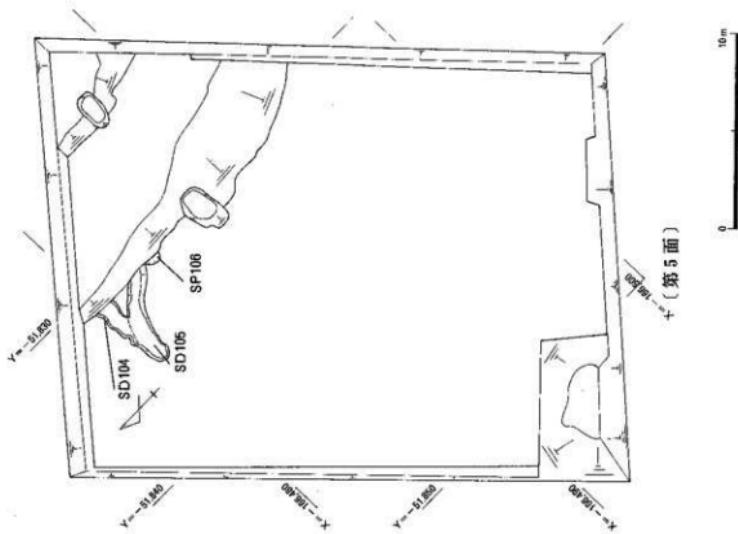
第10図 SB48平面図 (S=1/80)

(N) (S)  
T.P.+8.2m



第11図 SP95断面図  
(S=1/20)





第14図 97-2区 第5・6面平面図(S=1/250)

代の上師器片がわずかに出土した。

第5面(第14図、図版2) 奈良時代の遺構面である。

自然河川 NR100を検出した。

NR100(第15~17図、図版43~45)

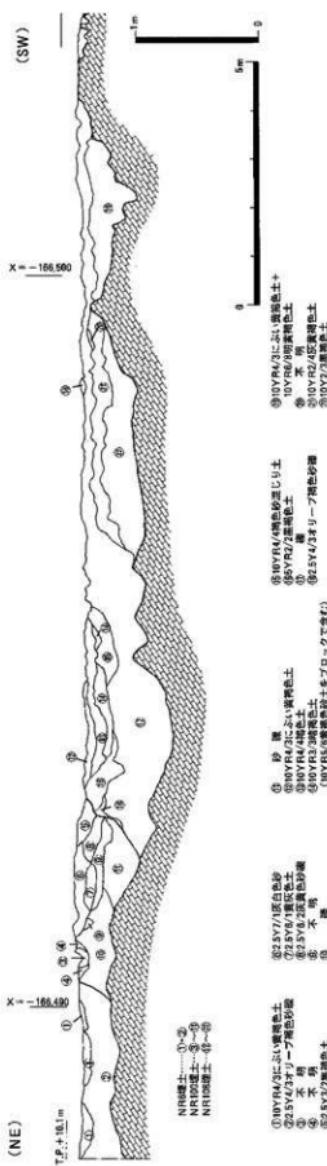
2区東半で検出した蛇行する幅広く浅い自然河川の一部である。人が調査区外に出るため規模はわからない。図示したのは最終的な埋没時の肩である。深さは0.2~0.3mである。覆土は砂礫を主体とし、かなりの水流があったことがわかる。下層出土遺物としては、I型式3ないし4段階の須恵器の杯身(23)、有蓋高杯(38、39)、高杯(40、41)が最も古く位置づけられるが、出土量が多いのはII型式の須恵器である。杯蓋(9~22)、杯身(24~37)、有蓋高杯(45)、無蓋高杯(46)、高杯蓋(43、44)、壺(49)、甕(50~53)、把手付鉢(47)、台付甕(42)、小型壺(54)、台付長颈壺(48)、蛸壺(55)等各器種が認められ、ほぼ並行する時期の土師器の甕(56、57)も認められる。(21)は大井部に叩き板痕が観察され、(22)は天井部に、(32)は底部にヘラ記号が記される。上層には奈良時代の遺物が少量ではあるが含まれていた。また、上流から流されてきたものであろうが、弥生時代中期の上器の底部(59、60)、縄紋上器片等がある。(63、P719)は、縄紋時代後期の深鉢である。(P719)は、福田K.II(四ッ池F)式である。特異な器形の上師器高杯(58)は口縁が三重に外反するもので、内外面に粗雑な波状紋を施す。器形、胎土とともに和泉の土器ではないが産地は不明である。(64)は剣形木製品かと思われる。針葉樹材である。

第6面(第14図、図版2)弥生時代後期の遺構面である。

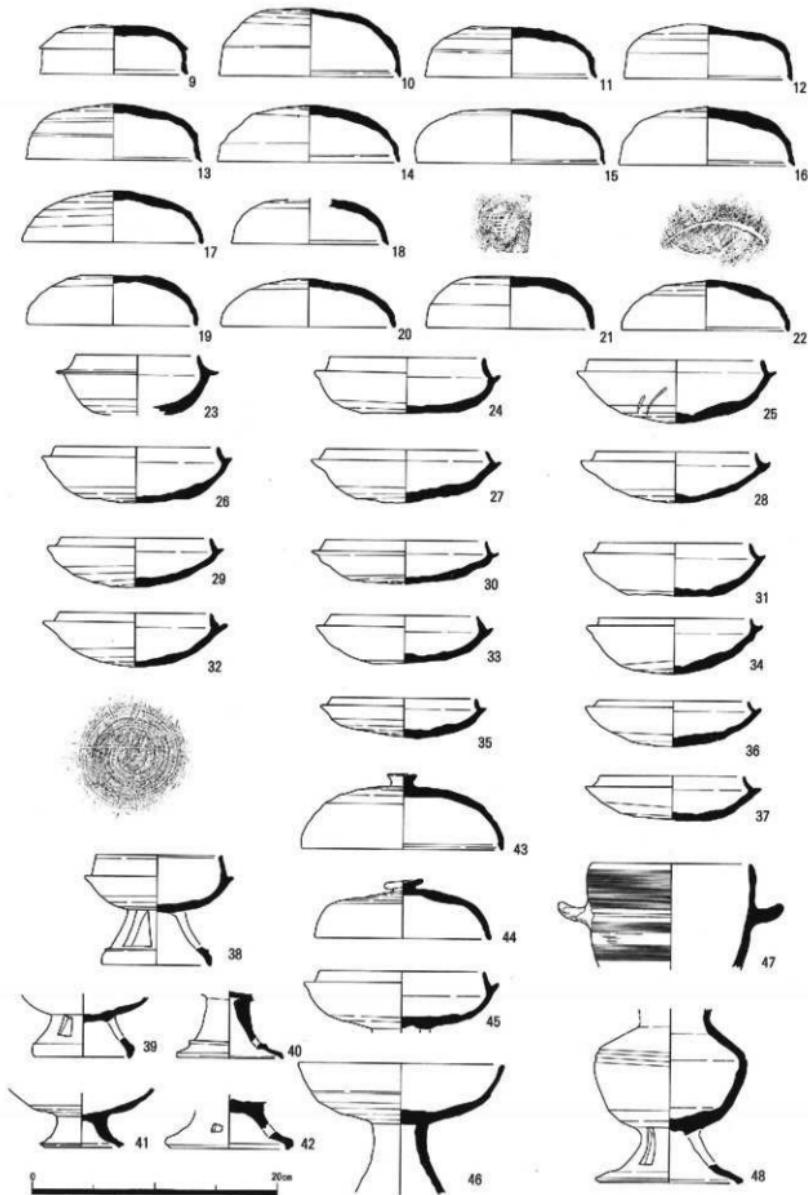
溝 SD104、SD105を検出した。

SD104

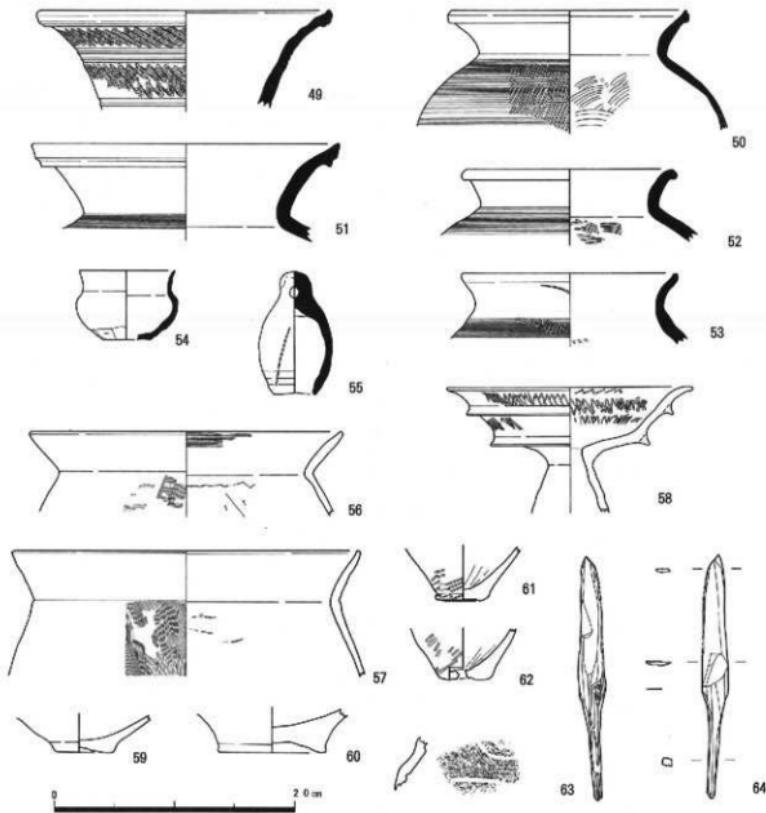
EA-7-019-h4-3~i4-1で検出した溝である。溝の方向はほぼ東西である。規模は幅1.2m、深さは0.05mを測り、断面形は浅い皿状を呈する。検出長は2.5mである。覆土は1層で、遺物はほとんど出土しなかった。



第15図 NR6-100-108断面図  
(縦S=1/40、横S=1/100)



第16図 NR100出土遺物・1 ( $S=1/4$ )



第17図 NR100出土遺物・2 (S=1/4)

### SD105

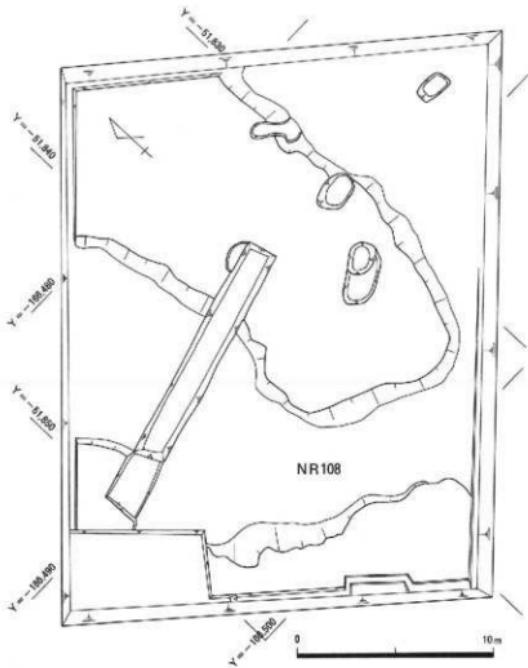
E4-7-019-i4-1で検出した溝である。溝の方向は南東から北西にやや蛇行する。規模は幅1.0m、深さは0.05mを測り、断面形は浅い皿状を呈する。検出長は5mである。覆土は1層で、遺物はほとんど出土しなかった。本遺構はSD104を切っている可能性が高い。

第7面(第18図、図版2) 弥生時代後期の遺構面である。

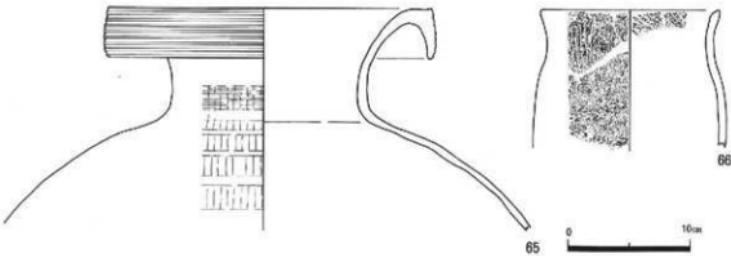
自然河川 NR108を検出した。

NR108(第15・19図)

西半で検出したNR6、NR100の前身と考えられる自然河川である。埋没後NR100が上層を押し流している。西側の肩は調査区外に出ているため規模はわからない。深さは0.3~0.4mである。覆土は砂礫を主体とし粘質土の偽礫を含む。少量の弥生時代後期の土器と第IV様式の広口短頸壺(65)、縄紋時代後期(中津式)の深鉢(66)等が出土した。



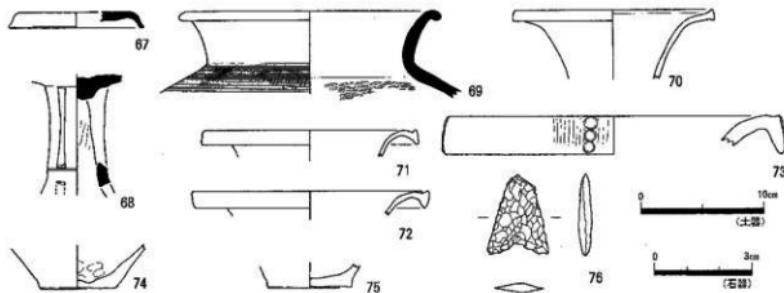
第18図 97-2区第7面平面図 ( $S = 1/250$ )



第19図 NR108出土遺物 ( $S = 1/4$ )

#### 包含層出土遺物(第20図、図版67)

第5層からは須恵器の壺蓋(67)、長脚高杯の脚部(68)、甕(69)等が出土した。いずれも古墳時代後期の遺物である。第8層からは第IV様式の広口長頸壺(71、72)、弥生時代中期の土器の底部(74、75)等が出土した。第9層からは第IV様式の広口長頸壺(70、73)等が出土した。第10層からは縄紋時代の石鏡(76)等が出土した。

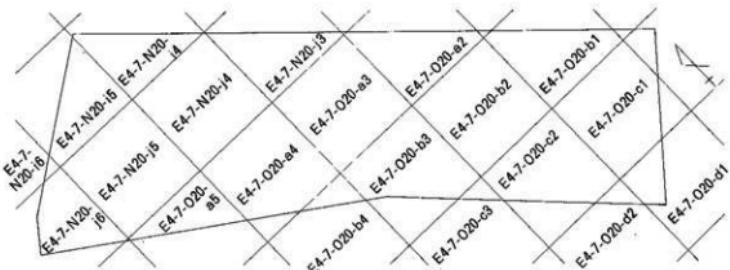


第20図 92-2区包含層出土遺物（土器S=1/4、石器S=2/3）

## 小結

第5面から第7面で検出した遺構は、自然河川及び人工河川によって形成された溝等である。いずれも同一の河道内で流路を変更しているものと考えられる。第4面は、第5面で検出した自然河川の自然堤防上に検出された面である。自然堤防は調査区のほぼ中央で形成されることから、この時期の流路は調査区より東に移動したと考えられる。調査区内の地表面はやや安定するようであるが、自然河川の影響はまだ随所に見られる。第3面では、総杜壙物と区画溝を検出した。自然河川の影響はほとんど見られない。河川が埋没した後、周辺を整地して土地を利用していたようである。ただ、上面がかなり削平されている状況ではあるが、遺物の出土量が少ないことと、周辺調査区で同時期の遺構が検出されていないことから、大規模な開発がなされたとは考えにくい。その後は近世から近代に至るまで、耕作地として利用されていたようであるが、近世になっても一時期シートバーのような形で自然河川の流入が見られる。

## (3) 97-3区の調査結果



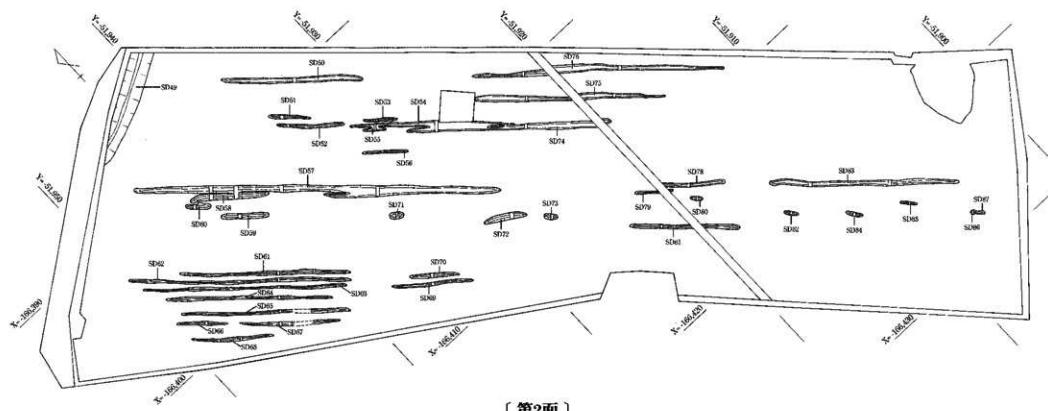
第21図 97-3区地図割図 (S=1/500)

第1面(第22図、図版3) 中世の遺構面である。

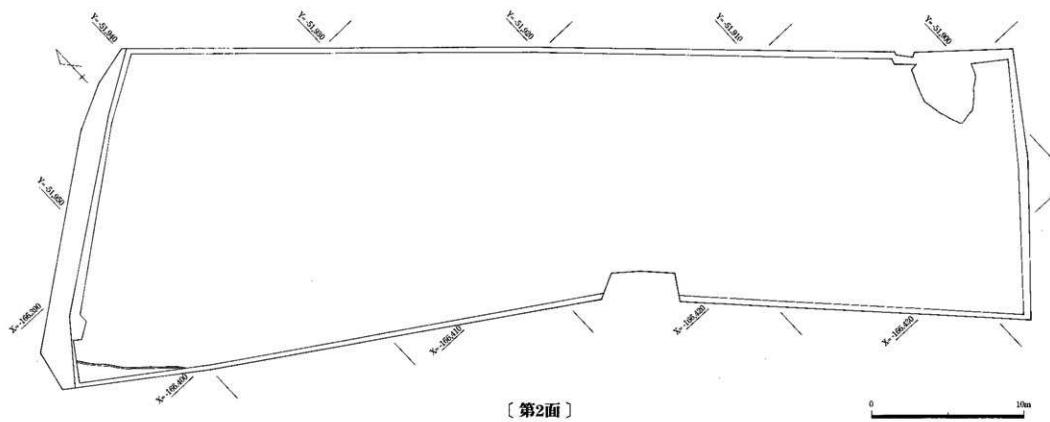
耕作に伴う鋤溝が検出された。

第2面(第22図、図版3) 中世の遺構面である。

耕作に伴う鋤溝が検出された。

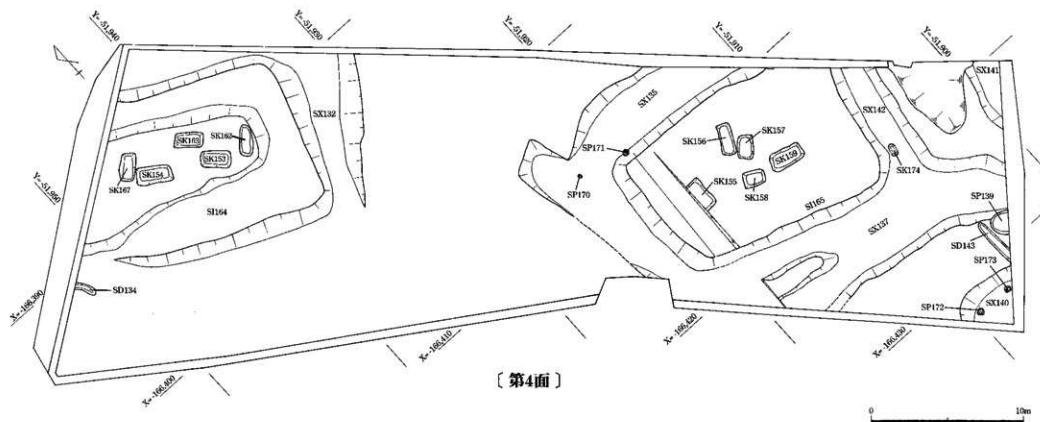
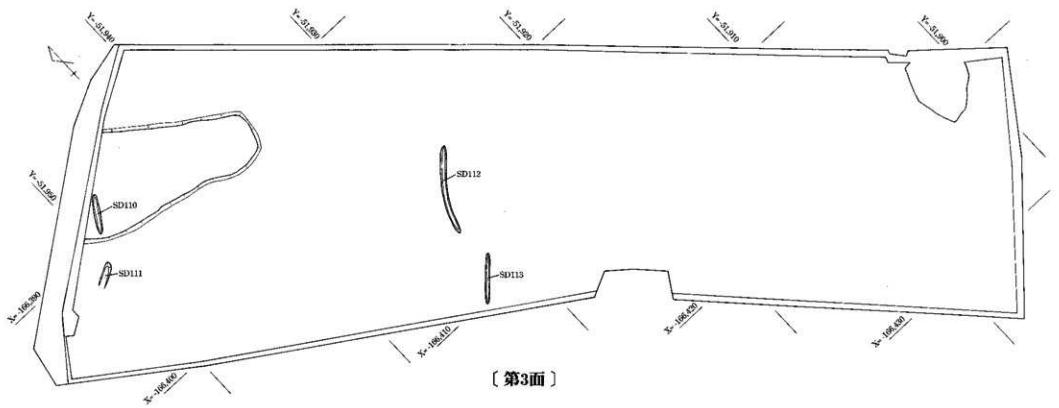


〔第2面〕

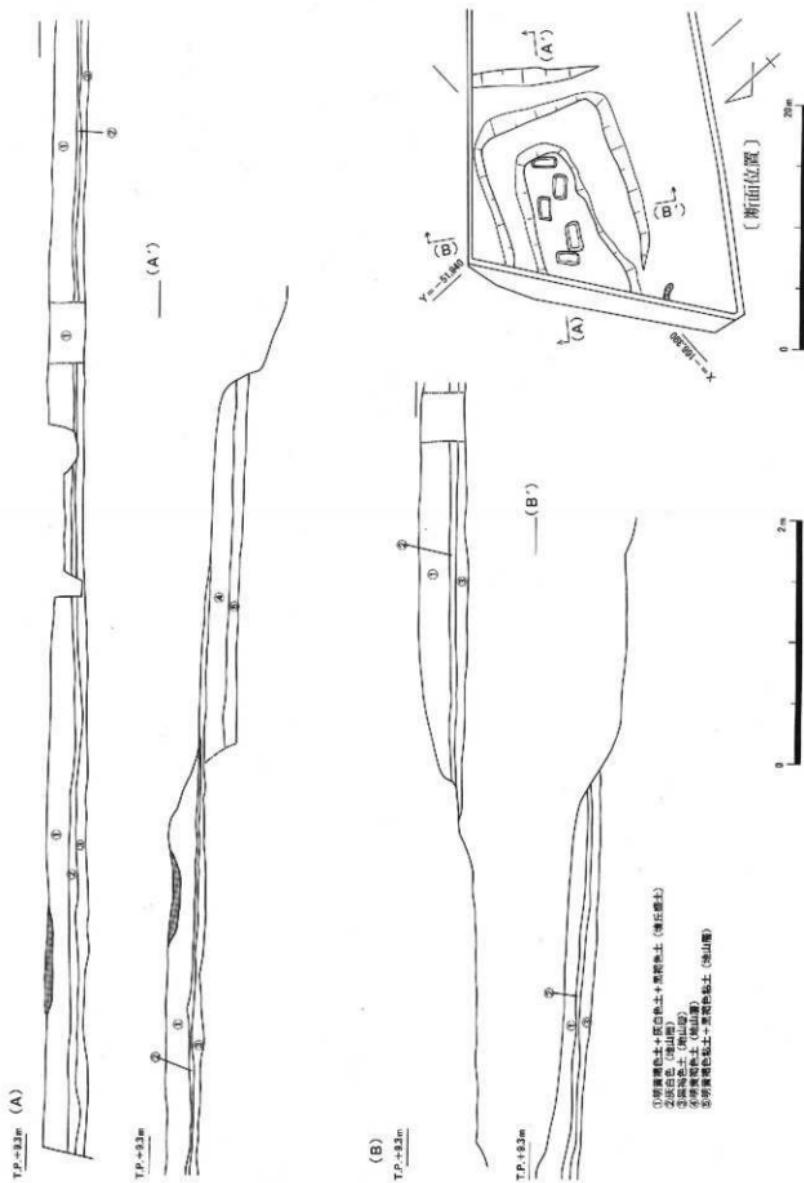


〔第2面〕

第22図 97-3区第1・2面平面図 (S=1/250)



第23図 97-3区第3・4面平面図(S=1/250)



第24図 SI164墳丘断面図図（断面 S = 1/40、位置 S = 1/400）

第3面(第23図、図版3) 平安時代の遺構面である。

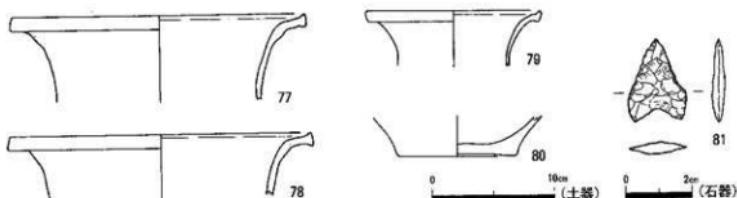
耕作に伴う鋤溝が検出された。

第4面(第23図、図版4) 弥生時代中期の遺構面である。

方形周溝墓 SI164、SI165を検出した(図版4~15)。

SI164(第24~30図、図版67)

E4-7-020-a3~5、E4-7-N20-j3~6、i4-2~4、i5-1・3・4で検出した。北西の端は調査区外に出ている。墳丘上面はかなり削平されているが、若干盛土が残っている。規模は墳丘裾で長辺17m以上、短辺約12mを測り、平面形は長方形を呈する。墳丘の長辺の主軸方向はN-65度-Wである。墳丘盛土は10YR6/8明黄褐色土、2.5Y7/1灰白色土、10YR2/2黒褐色土のブロック上で、構築面を形成する土層に由来するものである。幅2.5~5m、深さ0.6mの周溝が巡るが、調査した範囲内に陸橋部はない。周溝の断面形は浅い皿状である。周溝覆土は4層に分層できる。第1層は周溝埋没後の窪みに堆積した基本層序第6層の亜層である。第2~4層に第IV様式の遺物を含むが、明らかに供獻上器と考えられるものは出土しなかった。ただ、出土位置が周溝内でも墳丘に近いものについては墳丘上にあったものが転落した可能性がある。図示した遺物はすべて黒褐色粘土層から出土した。東周溝から弥生時代中期の土器の底部(80)等が、南周溝から第IV様式の広口短頸壺(77~79)等が、北周溝から弥生時代の石鏟(81)等が出土した。



第25図 SI164周溝出土遺物 (土器S=1/4, 石器S=2/3)

主体部 SK153、SK154、SK163、SK162、SK167の5基を検出した。

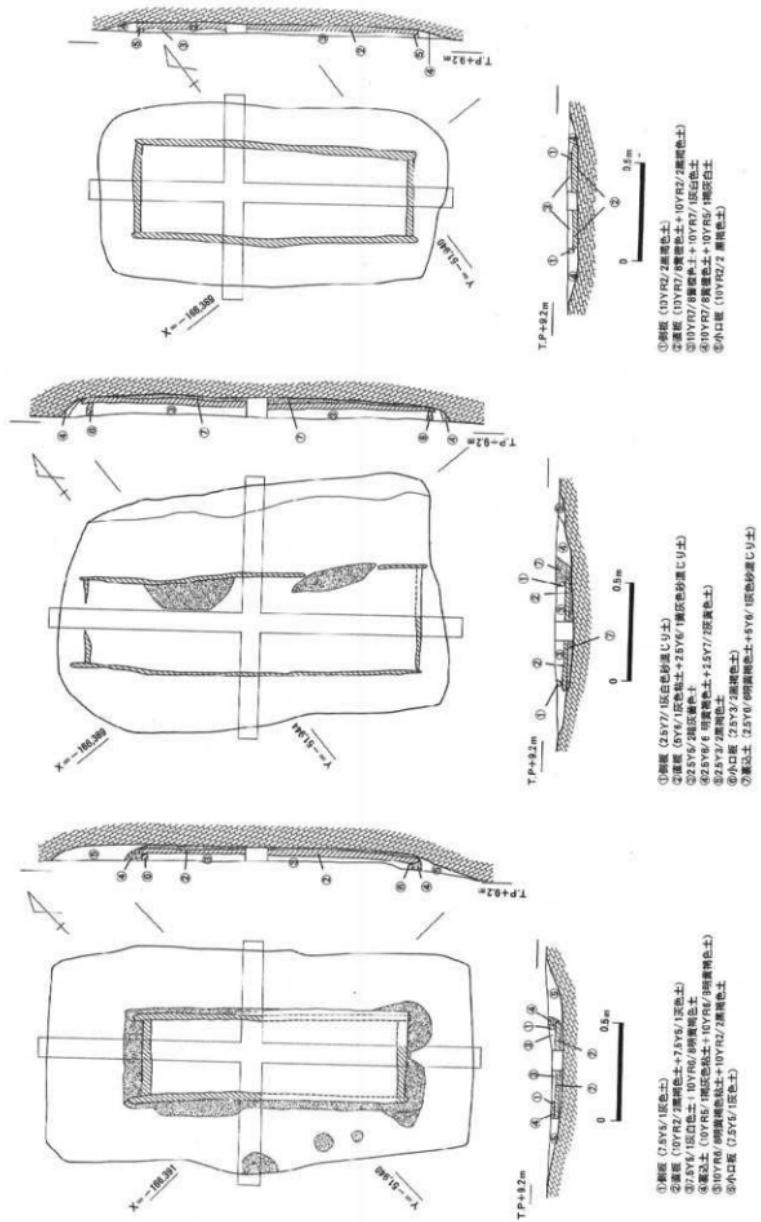
SK153(第26図、図版5)

墓壙は2.16×1.15mの隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-48度-Wである。深さは0.05~0.09m残存する。墓壙底面はやや凹凸があるが、底板を据える前に薄く粘土を充填して水平に整えている。底板は長さ143cm、幅51~53cmの長方形で、厚さ3cmを測る。その上に側板と小口板が載る。北の側板は西端から65cmしか残っておらず、厚さは2~3.5cm、南の側板は長さ142cm、厚さ4cmを測る。小口板は側板の端から少し内側に入って側板で挟む形で固定している。西の小口板は幅39cm、厚さ4~5cm、東の小口板は北半が欠けていたが、幅26cm以上、厚さ5cmを測る。それぞれの部材の組合せ部に切り欠き等の細工があったかどうかは確認できなかったが、墓壙底面を整形している粘土と同じ土を裏込めとして各部材を押さえている状況が確認できた。蓋板の落ち込みはなかった。副葬品はなく、人骨も残存していなかった。

SK154(第27図、図版6)

墓壙は1.95×1.24mの隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-48度-Wである。深さは0.08~0.1m残存

第26図 SK163平面・断面図 (S=1/25)



第27図 SK154平面・断面図 (S=1/25)

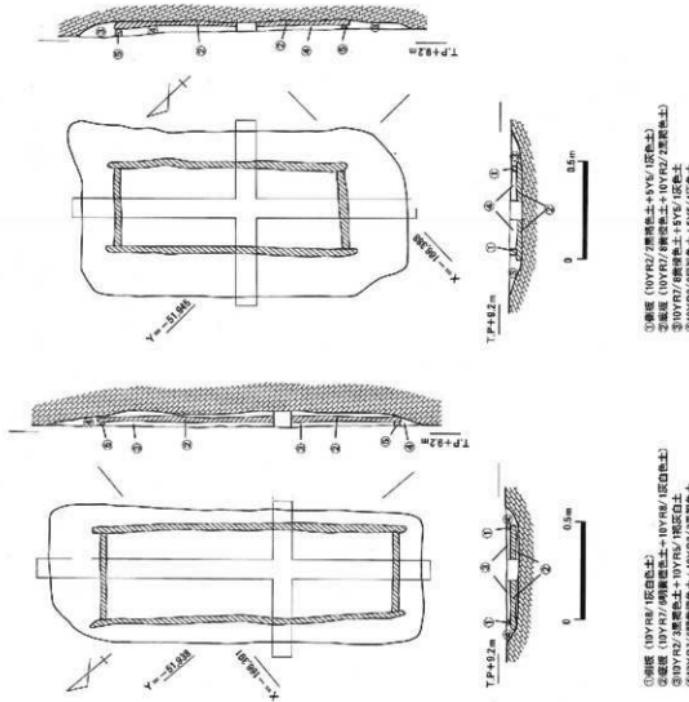
第28図 SK153平面・断面図 (S=1/25)

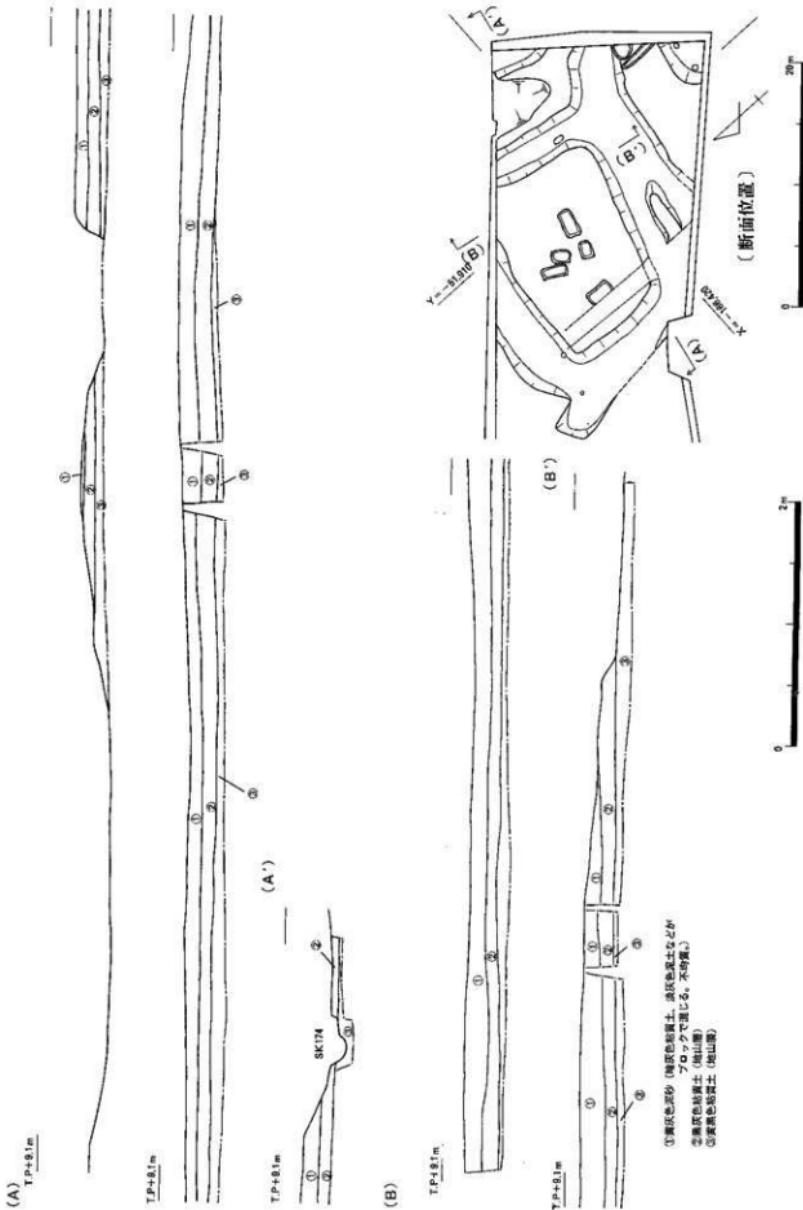
する。SK153同様墓壙底面を整形している。底板は長さ181cm、幅56cmの長方形で、厚さ1.5~3cmを測る。北の側板は長さ179cm、厚さ1~2cm、南の側板は長さ177cm、厚さ1.5~3cmを測る。西の小口板は幅52cm、厚さ3cm、東の小口板は幅43cm、厚さ3cmを測る。それぞれの部材の組合せや構造はSK153と同様で、特に側板を押さえる裏込めの粘土が棺内に倒れ込んでいたため明瞭に分離できた。所見では、裏込め土は側板や小口板の全体を一様に押さえるのではなく、こぶし大から人頭大の粘土を要所々に配置していることがわかる。副葬品はなく、人骨も残存していなかった。

#### SK163(第28図、図版8)

墓壙は1.73×0.93mの隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-51度-Wである。深さは0.05m残存する。墓壙底面は平坦に掘り上げており、粘土等による整形は認められない。底板は長さ136cm、幅57cmの長方形で、厚さ2.5~3cmを測る。北の側板は長さ142cm、厚さ3~4cm、南の側板は長さ145cm、厚さ3~4cmを測る。西の小口板は幅46cm、厚さ3~4cm、東の小口板は幅39cm、厚さ3cmを測る。北の側板は底板の上に載るが、南の側板は底板の外側に接して立てられている。小口板は側板で挟む構造であるが、挟まれる位置は底板の短辺いっぱい、側板の両端ぎりぎりのところで、前2例の構造と若干異なる。部材を固定するための裏込めの粘土も認められなかった。副葬品はなく、人骨も残存していないかった。

#### SK162(第29図、図版7)





第31図 SI165填丘断面図 (断面S=1/40、位置S=1/400)

墓壙は $1.9 \times 0.67\text{m}$ の隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-41度-Eである。深さは0.06~0.07m残存する。SK153同様墓壙底面を整形している。底板は長さ142cm、幅53cmの長方形で、厚さ2~4cmを測る。東の側板は長さ159cmを測る。北の小口板は幅44cm、厚さ3cmを測る。それぞれの部材の組合せや構造はSK153と同様である。裏込め土は認められなかった。副葬品はなく、人骨も残存していなかった。

#### SK167(第30図、図版8・9)

墓壙は $1.7 \times 1.0\text{m}$ の北東の角が少し出っ張る隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-45度-Eである。深さは0.04~0.07m残存する。墓壙底面は平坦に掘り上げており、粘土等による整形は認められない。底板は長さ116cm、幅48cmの長方形で、厚さ1.5~3cmを測る。東の側板は長さ122cm、厚さ4cm、西の側板は長さ128cm、厚さ3~4cmを測る。北の小口板は幅40cm、厚さ3~4cm、南の小口板は幅40cm、厚さ4~5cmを測る。それぞれの部材の組合せや構造はSK153と同様であるが、部材を固定する裏込め土は認められなかった。副葬品はなく、人骨も残存していなかった。

#### SI165(第31~37図、図版9・46)

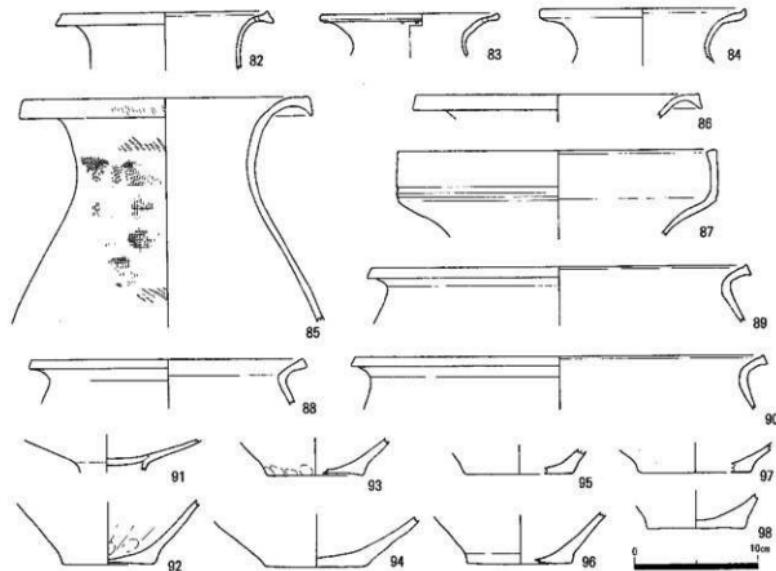
E4-7-020-a2・3、b1~3、c1~3で検出した。北東の端は調査区外に出ている。墳丘上面はかなり削平され、墳丘盛土は残っていなかった。規模は墳丘縦長辺14m以上、短辺約10mを測り、平面形は長方形を呈する。墳丘の長辺の主軸方向はN-80度-Wである。SI164と比較すると、上面がかなり削平されており、十層の堆積状況から両周溝墓の時期差を指摘するのは難しい。幅2.5~5m、深さ0.6mの周溝が巡るが、調査した範囲内に陸橋部はない。周溝の断面形は浅い皿状である。周溝覆土は4層に分層できる。第1層は周溝埋没後の窪みに堆積した基本層序第6層の亞層である。第2~4層に第IV様式を中心とする弥生時代中期の土器が多量に出土した。供献土器と考えられる上器は周溝底面に接して出土した。供献土器は主に南周溝(SX137)と東周溝(SX142)に集中しているが、東周溝出土遺物は、土器の状態が非常に悪く復元できるものはなかった。図示したものは、すべて黒褐色粘土から出土した。SX137(南周溝)から、第IV様式の広口短頸壺(83、84、92)、段状口縁壺(87)、中期の壺の底部(93、94)等が出土した。SX135(北周溝)から第IV様式の広口短頸壺(85)、広口長頸壺(86)、壺(88、98)等が出土した。西周溝から第IV様式の壺(89、90)、中期の土器の底部(95~97)、高杯(91)等が出土した。(84)と(92)、(88)と(98)は同一個体である。(91)は生駒西麓産である。

墳丘上面で木棺直葬の主体部を5基検出した。主軸方向はやや振っているが、長軸が墳丘の長辺に平行するものが2基、短辺に平行するものが3基である。削平のためいずれの墓壙も残りは浅かったが、すべての主体部で組合せ式の木棺の痕跡を確認した。木質部はすべて粘土化したり砂質土と置き変わっていたが、1基をのぞいて各部材の法量は測定可能で、構造もある程度確認できた。

主体部 SK155、SK156、SK157、SK158、SK159の5基を検出した。

#### SK155(第33図、図版10)

墓壙は $1.95 \times$ 検出幅 $0.83\text{m}$ の隅丸長方形を呈し、西側は確認トレンドで切られている。主軸方位はN-2度-Wである。深さは0.06~0.08m残存する。墓壙底面はやや凹凸があるが、底板を据える前に薄く粘土を充填して水平に整えている。側板と小口板は残っておらず、底板も一部が痕跡的に残っていただけである。底板の痕跡は長さ174cm、幅32cm以上の長方形で、厚さ1~2cmを測る。副葬品はなく、人骨も残存していなかった。



第32図 SI165周溝出土遺物

#### SK156(第34図、図版10・11)

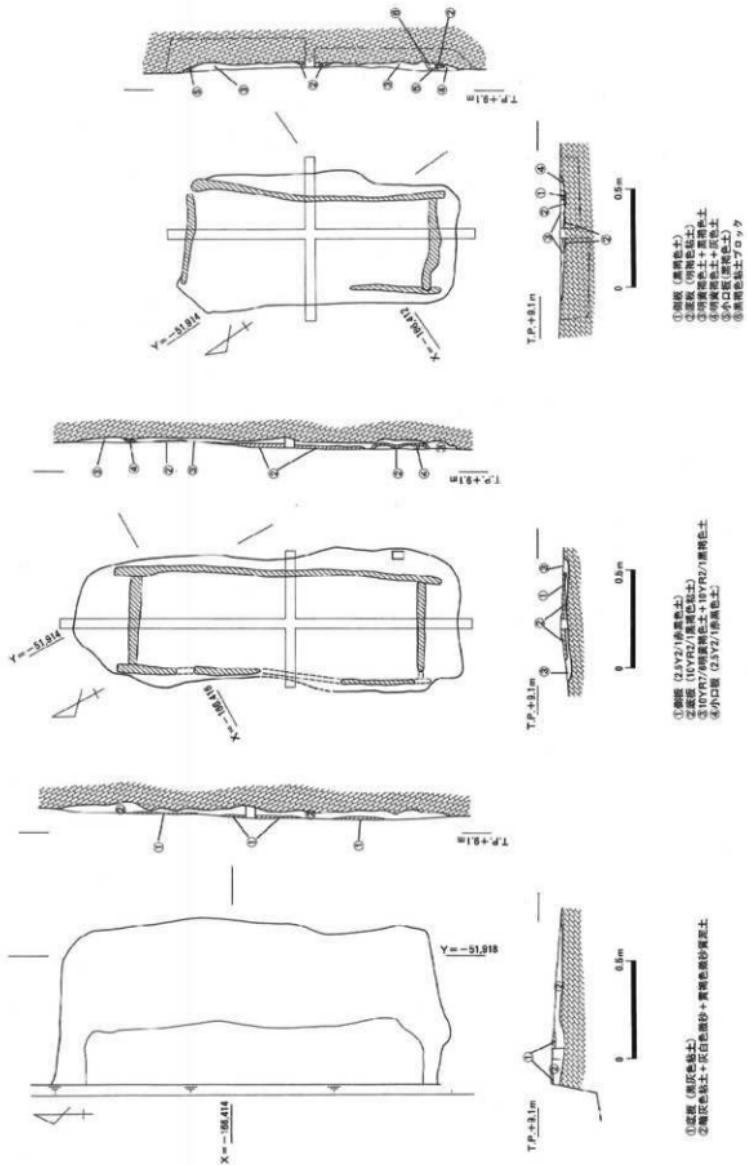
墓壙は $1.96 \times 0.74\text{m}$ の隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-30度-Wである。深さは0.03~0.05m残存する。底板は長さ155cm、幅45cmの長方形で、厚さ1~2cmを測る。東の側板は長さ167cm、厚さ2~5cm、西の側板は一部失われているが、長さ150cm以上、厚さ1.5~4cm、北の小口板は幅45cm、厚さ4~6cm、南の小口板は幅48cm以上、厚さ3~4cmを測る。構造は底板の上に側板と小口板が載るもので、側板で小口板を挟んで固定している。断面を観察すると、底板が上部の土圧によって変形した状態が確認されたので、墓壙底面は整形されていなかったのかもしれない。副葬品はなく、人骨も残存していなかった。

#### SK157(第35図、図版11)

墓壙は $1.59 \times 0.74\text{m}$ の隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-43度-Eである。深さは0.06~0.08m残存し、底面にはやや凹凸が認められる。底板は北西側の一部が失われているが、長さ126cm、幅59cmの長方形で、厚さ1.5~2cmを測る。東の側板は長さ139cm、厚さ2~6cm、西の側板は南半部47cmが残存し、厚さ2~3cm、南の小口板は幅48cm、厚さ4~7cm、北の小口板は幅46cm、厚さ2~4cmを測る。それぞれの部材の組合せや構造、墓壙底面の状況は、SK155と同様である。副葬品はなく、人骨も残存していなかった。

#### SK158(第36図、図版12)

墓壙は $1.71 \times 0.76\text{m}$ の隅丸長方形を呈し、やや小型である。主軸方位はN-120度-Wである。深さは0.06~0.08m残存する。底板は西側の残りが悪いが長さ126cm以上、幅35cmの長方形で、厚さ1.5~

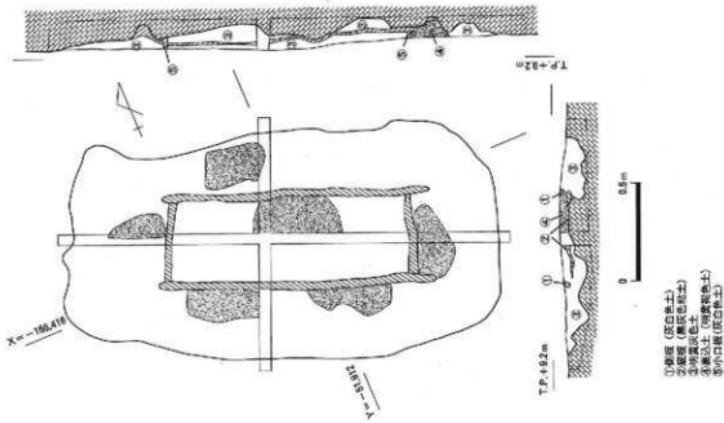


第33図 SK155平面・断面図 (S=1/25)

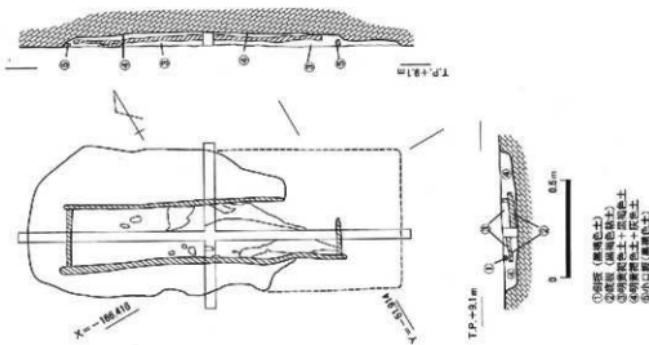
第34図 SK156平面・断面図 (S=1/25)

第35図 SK157平面・断面図 (S=1/25)

第37図 SK159平面・断面図 (S=1/25)



第36図 SK158平面・断面図 (S=1/25)



3 cmを測る。北の側板は長さ146cm、厚さ1～2cm、南の側板は西端が欠けるが長さ112cm、厚さ1～2cm、西の小口板は南側が欠けるが幅20cm以上、厚さ2.5cm、東の小口板は幅39cm、厚さ2～3cmを測る。それぞれの部材の組合せや構造、墓壙底面の状況は、SK155と同様である。副葬品はなく、人骨も残存していなかった。

#### SK159(第37図、図版12・13)

墓壙は2.7×1.13mのやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-70度-Eである。深さは0.07～0.15m残存する。墓壙底面にはかなりの凹凸があり、粘土を充填して整形している。底板は長さ133cm、幅49cm以上の長方形で、厚さ1～2.5cmを測る。北の側板は長さ137cm、厚さ3～4cm、南の側板は長さ142cm、厚さ4～5cm、西の小口板は幅39cm、厚さ3～4cm、東の小口板は幅39cm、厚さ3～5cmを測る。それぞれの部材の組合せや構造はSK153と同様で、特に側板や小口板を押さえる裏込め土がきわめて明瞭に分離できた。所見では、裏込め土は側板で2ヶ所、小口板で1ヶ所にかなり大きな固まりを置いていることがわかる。副葬品はなく、人骨も残存していなかった。

土壙墓 SK174を検出した。

#### SK174(図版15)

方形周溝墓SI165の東側周溝の底面E4-7-O20-b1-4で検出した土壙墓と考えられる遺構である。平面形は $0.91 \times 0.44$ mの隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-21度-Wである。深さは0.14mで断面形は不整なU字形を呈する。覆土は1層で遺物はまったく出土しなかったため、墓壙であるという確認はないが、周溝内埋葬のひとつと推定する。検出面から壙底までが0.14mと浅いことから、周溝がある程度埋没した段階で掘り込まれたものと考えられる。

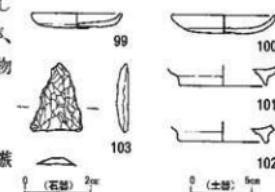
#### 柱穴状遺構

2基の方形周溝墓周辺で柱穴状の小穴が散発的に検出された。SP171~173は掘形内に柱痕跡が認められたが、SP170は柱痕跡が認められなかった。埋土は黒色ないし黒褐色粘土で、土色・土質は弥生時代の遺構としてよいものであるが、きわめて浅かったことから、上肩造構の可能性も否定できない。埴物としてまとまるものではなく、性格は不明である。

#### 包含層出土遺物(第38図)

第2肩からは室町時代の土師器の小皿(99)、縄紋時代の石器(103)等が出土した。

第5肩からは黒色土器A類の碗(101、102)、土師器の小皿(100)等が出土した。



第38図 97-3区包含層出土遺物  
(土器=1/4、石器S=2/3)

#### 小結

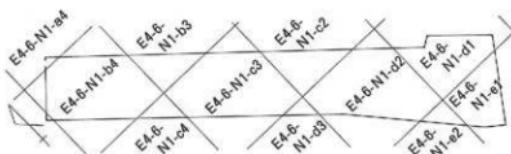
本調査区で特筆できる遺構は第4面で検出した方形周溝墓群である。以前から確認されている方形周溝墓群の立地からも理解されるが、幾筋も確認された縄紋時代以前から流れる自然河川によって形成された自然堤防上に、方形周溝墓群が形成されているようである。周溝は、他の遺構に削平されたり、調査区外に出たりと全体を把握するのは難しいが、陸橋部は存在しなかったようである。SI164では墳丘盛土が確認された。主体部の削半の状況からみて墳丘高はかなり高かったものと理解される。主体部については、各5基づつ検出した。棺材は残っていないが、木材が粘土化または微砂質土化した状態で痕跡が確認された。いずれも構造は底板の上に小口板を載せ、側板で挟んで組み合わせた構造であったと考えられる。墓壙底部は木棺の底板を据え付けるため、粘土を充填して平坦にするという作業がなされているものがある。SK159の底板をはずした墓壙底部で、底辺10cm程の先端の丸い三角錐形のブロック状の土塊が、同方向に並んで確認された。これらの上塊は墓壙掘削の一単位と推定することが可能で、土塊に残された工具痕跡の鋭利さから、掘削の勢いがかなり強かったことがわかり、推定の域を出るものではないが墓壙掘削に使用された工具に金属製品が利用されていた可能性も指摘できる。SK153・154・159では側板と小口板の背面に裏込めの土が確認された。背面全体を帯状に押さえているもの(SK153)と、土艘頭のような状態で数カ所押さえているもの(SK154・159)がある。木棺材が残っていないため、組み合わせ方法の詳細な検討ができなかったことは残念であるが、一部の木棺には側板に切り欠きのような細工を施していたのではないかと思われる痕跡も確認している。

本調査区付近は、弥生時代に墓域として利用された以降は現代に至るまで耕作地として利用されていたようである。

(広瀬)

#### (4) 97-4区の調査結果

第1面(第43図、図版16) 近世の遺構面である。



第39図 97-4区地区割図 (S=1/500)

小穴 SK11・12を検出した。

SK11・12(第40・41図)

いずれもE4-6-N1-b4-2で検出した土坑で、坪境上に並んでいる。平面形はどちらも円形、規模はSK11が径約0.4m、SK12が径約0.25m、深さはいずれも0.4mを測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は1層で、遺物はほとんど出土しなかった。

第2面(第43図、図版16) 近世の遺構面である。

井戸 SK 7を検出した。

SK 7(第42図)

E4-6-N1-d1-3・4で検出した井戸である。調査区内では約半分を検出しだけだが、平面形は円形、規模は径約1.9m、深さは0.9m以上を測る。湧水のため完掘できず断面形は不明である。掘形の一段下がったところに半円形に巡る木杭があり、円形に組まれた井戸枠があったことがわかる。掘形埋土は1層、井戸枠内埋土は3層に大別できる。時期を決定できるような遺物は出土しなかったが、検出面から近世のものと推定される。

畦畔 SA13を検出した。

SA13

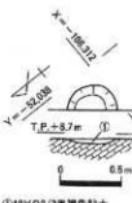
E4-6-N1-a4-4、b4-2で検出した条里坪境の畦畔で、方向はN-40度-Eである。幅は不明であるが0.4m以上、高さは0.1m程度で、検出長は4.8mである。断面形は台形を呈する。この坪境は現代まで存続する。

第3面(第44図、図版17) 中世から近世の遺構面である。

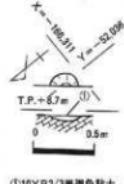
小穴 SP15~17を検出した。

SP15~17・115

溝SD18の北西の肩を切る形で小土坑が4基検出された。畦畔SA13の上面である。いずれも一部が調査区外になるものの、平面形はほぼ円形と推定される。SP15は直径約0.5m、深さは0.1mを測り、断面形は逆台形で

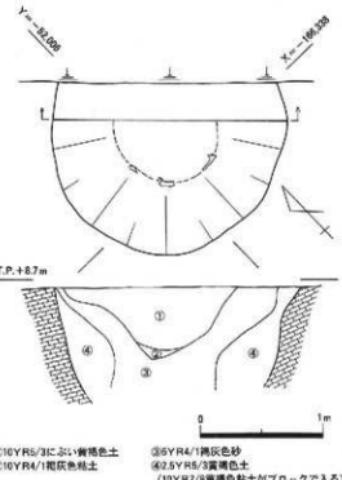


①10YR2/3黄褐色粘土

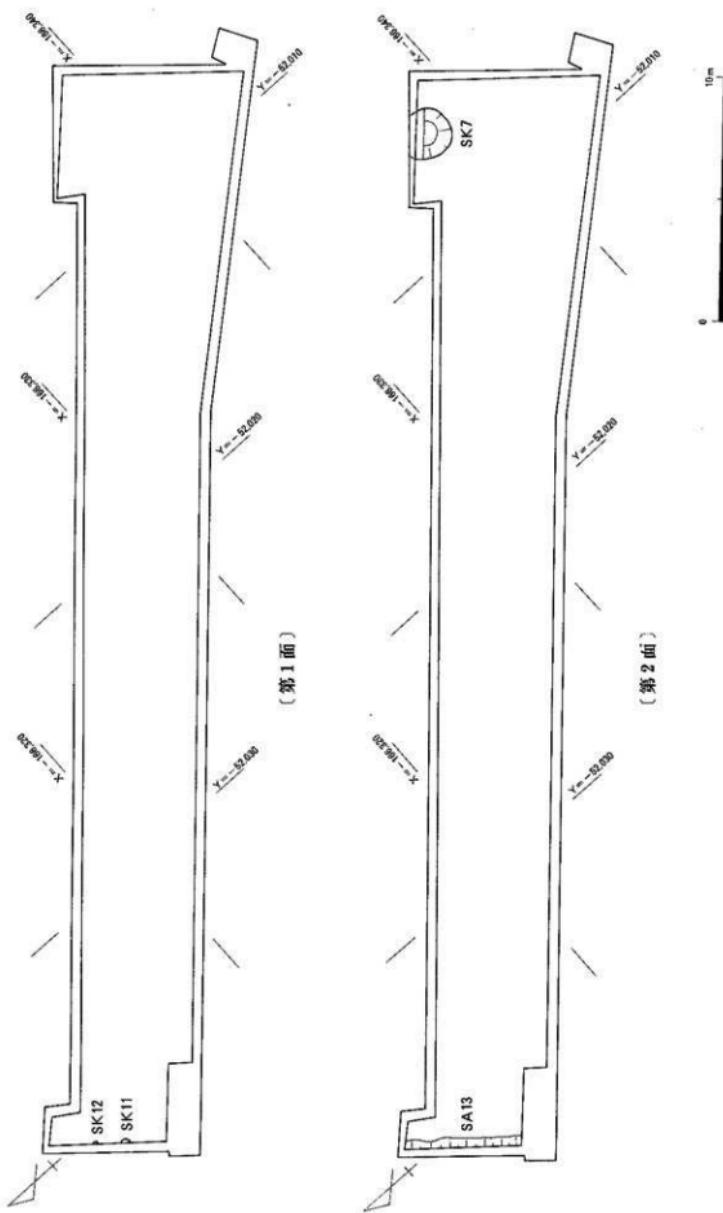


①10YR2/3黄褐色粘土

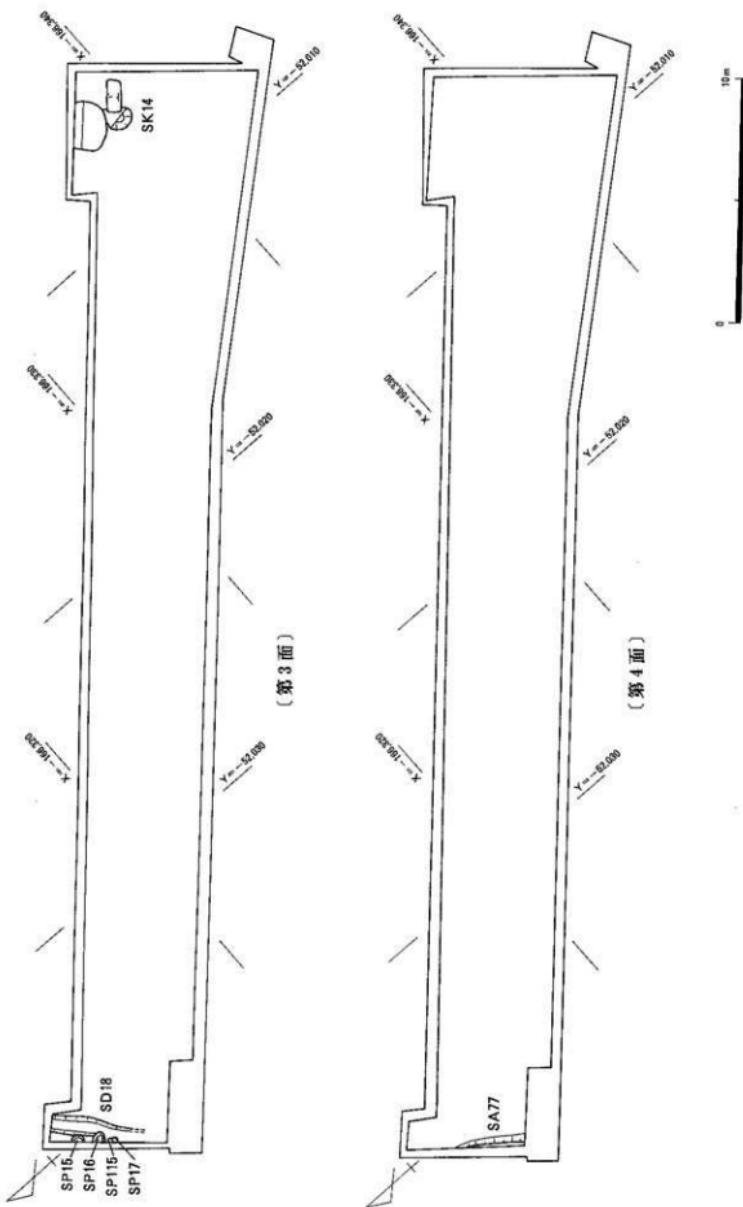
第40図 SK11平面 第41図 SK12平面  
・断面図 (S=1/40) ・断面図 (S=1/40)



第42図 SK7平面・断面図 (S=1/40)



第43図 97-4区第1・2面平面図 ( $S = 1/200$ )



第44図 97-4区第3・4面平面図 (S=1/200)

ある。SP16は直径約0.5m、深さは0.15mを測り、断面形は方形である。SP17とSP15はどちらも直径約0.2m、深さは0.1m程度と同規模で、断面形も半円形である。遺物は少なくSP15から瓦器の破片が出土しただけである。

土坑 SK14を検出した。

#### SK14(第45図、図版17)

E4-6-N1-d1-4で検出した井戸SK7に切られる土坑である。平面形は不整円形、規模は長径1.3m、短径1.1m、深さは0.45mを測り、断面形は半円形である。埋土は2層に大別でき、2層から瓦器、陶磁器片が出土した。本遺構の時期は近世である。

溝 SD18を検出した。

#### SD18(第46図、図版17)

条里坪境の畦畔SA13の下層で検出した溝で、方向はN-40度-Eである。規模は幅0.9m、深さは0.1mを測り、検出長は3.2mである。

断面形は逆台形を呈する。埋土は1層で、時期を確定できるような遺物は出土しなかった。この溝の北西側が畦畔になって坪境になると考えられる。

第4面(第44図、図版18) 中世の遺構面である。

畦畔 SA77を検出した。

#### SA77(図版18)

条里坪境の畦畔SA13、溝SD18の下層で検出した畦畔で、方向はN-40度-Eである。幅は不明であるが0.5m以上、高さは0.1m程度で、検出長は2.7mである。断面形は台形を呈する。

第5面(第47図、図版18) 平安時代の遺構面である。

畦畔 SA89を検出した。

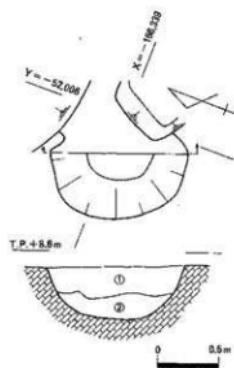
#### SA89

前述の条里坪境の畦畔SA13、溝SD18、畦畔SA77の下層で検出した畦畔で、この位置に坪境がおかれた最初の段階のものと考えられる。一部を検出したにとどまるため方向は不明であるが、後出する坪境と大きくは変わらないと推定される。幅は不明であるが0.6m以上、高さは0.15m程度で、検出長は1.0mである。断面形は台形を呈する。

溝 SD88を検出した。

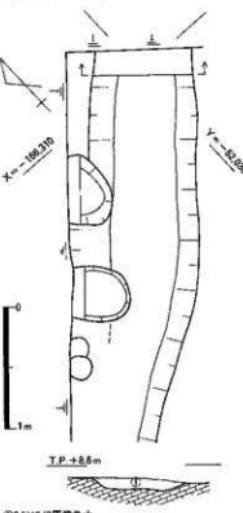
#### SD88

E4-6-N1-c2-4、d2-1~3で検出した溝である。溝の方向はN-36度-Wで、条里坪境にほぼ直交する。規模は幅0.6~1.0m、深さは0.06~0.07mを測り、検出長は9.0mである。断面形は半円形を呈する。覆土は1層で、遺物は出土しなかった。耕作に伴う溝である。



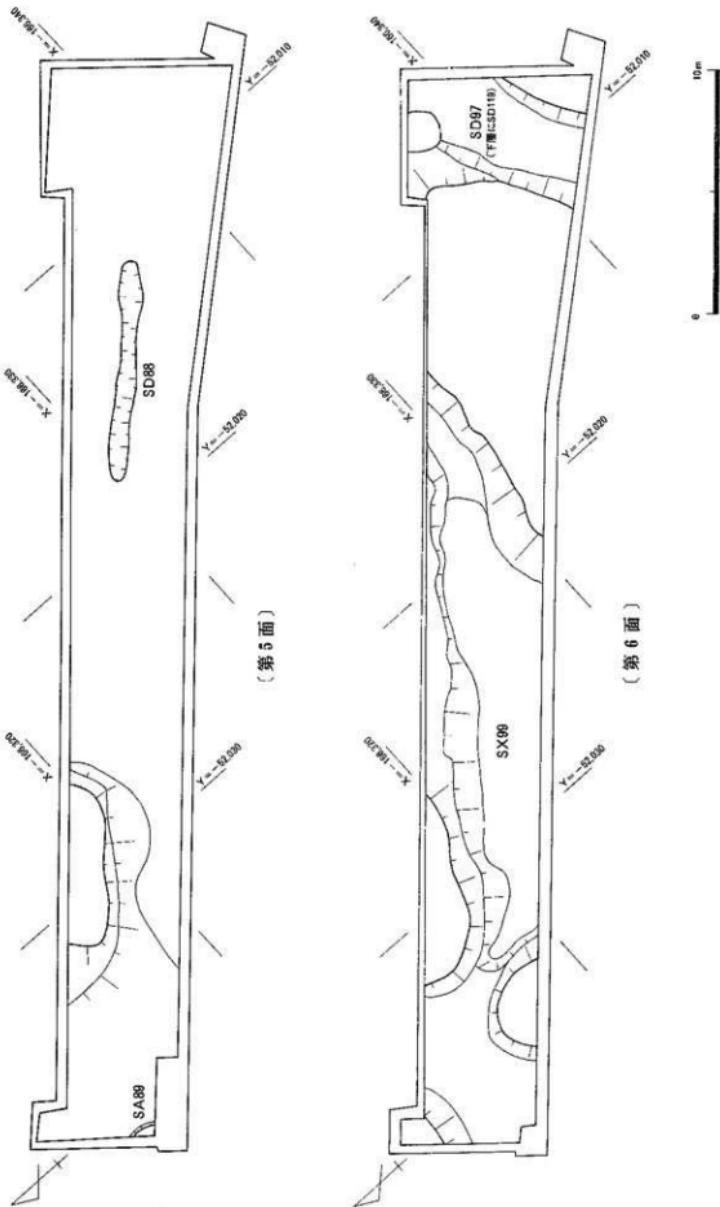
①10YR6/1暗灰色砂混じり土  
②10YR6/1暗灰紫色土 + 10YR6/8明黄褐色土  
+ 10YR3/4暗褐色土

第45図 SK14  
平面・断面図 (S=1/40)



①25Y6/2灰黄色土

第46図 SD18  
平面・断面図 (S=1/40)



第47図 97-4区第5・6面平面図 (S=1/200)

第6面(第47図、図版19) 弥生時代中期から古墳時代前期の遺構面である。

自然河川 SD97、SD119が検出された。

#### SD97(第48図、図版19・47)

E4-6-N1-d1-4、d2-3、e1-1、e2-2で検出した自然河川で、下層の古い自然河川SD119の最終段階の流水堆積である。方向はN-60度-Eである。規模は幅3.7~5.0m、深さは約0.2mを測り、検出長は7.2mで、断面形は浅い皿状を呈する。覆土は2層に大別できる。わずかに古墳時代中期から後期の土器も見られるが、上層からの混入と考えて差しえないものである。

図示したもののうち弥生時代以前の遺物を除くと最も古いのは庄内式の壺(105)であるが、この遺構の埋没時期を示すと考えられるのは、伝留式の直口壺(106)、二重口縁壺(107)である。(107)は装飾のない二重口縁である。他に土師器の高杯(108)、小型丸底壺(104)、弥生時代中期の壺(109)、土器の底部(110)等が出土した。本遺構の時期は弥生時代後期から古墳時代前期である。

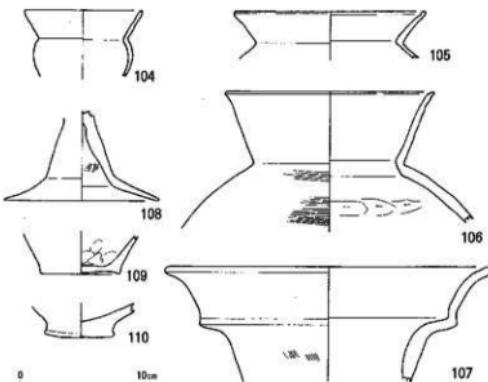
#### SD119

前述の自然河川SD97の下層で検出した地山面を下刻する自然河川で、方向はN-60度-Eである。規模は幅約4m、深さは約0.5mを測り、検出長は7.2mで、断面形は逆台形を呈する。覆土は7層に大別できる。上層から若干の弥生土器が出土したが、SD97からの混入ではないかと思われる。

落ち込み SX99を検出した。

#### SX99(第49~51図、図版20・21・47・48・65)

E4-6-N1-b4-1~3、b3-4、c3-1~3、c2-4、d2-1~2、d3-1で検出した。本遺構は、調査区南側にもともとあった約30mに及ぶ自然地形の落ち込みと、落ち込みが回らない所に溝を掘削するという状況が確認された。落ち込み最下部では黄色粘土下層の黒色粘土が露出している部分があり、北側にその上を人為的に盛り上げたと考えられるブロック状の土層が認められた。また、落ち込み斜面には盛土が流失した土層が薄く堆積している。土器は落ち込みの斜面と北側の盛土に密着した状態で出土したが、完形に復元可能なもの、正立しているもの、掘形は確認できなかったが埋められたと考えられるものなどがあり、器種は壺、高杯等が多く認められた。多量の土器が出土した溝内の覆土は3区で検出した方形周溝墓の周溝の覆土と酷似している。北側に盛土があることと土器の山上状態から判断すると、隣接する96-5区では確認されていないが、本遺構は方形周溝墓の周溝の可能性があり、遺物は周溝内の供献土器である可能性が高い。第IV様式の復元可能な上器が多量に出土した。遺物の遺存状態が非常に悪く、図示できた遺物としては、第V様式の広口短頸壺(111)、第IV様式の広口短頸壺(112、114~118)、細頸壺(119)、壺(120、121)、高杯(125、126)、台付水差し(113)、弥生時代中期の壺(124)、土器の底部(122、123)、大型蛤刃石斧(129)、柱状片刃石斧(127)、スクレイバー(128)がある。(117、123)は生駒西麓産である。(129)は、ほぼ半分に欠損した刃部に近い破片で、わずかな刃こぼれが認め



第48図 SD97出土遺物 (S=1/4)

(105)庄内式壺 (106)伝留式直口壺 (107)二重口縁壺 (108)高杯 (104)丸底壺 (109)壺 (110)土器の底部

(106) (107) (108) (104) (109) (110)

10cm

第49図 SX99出土遺物 (S=1/4)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

(111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129)

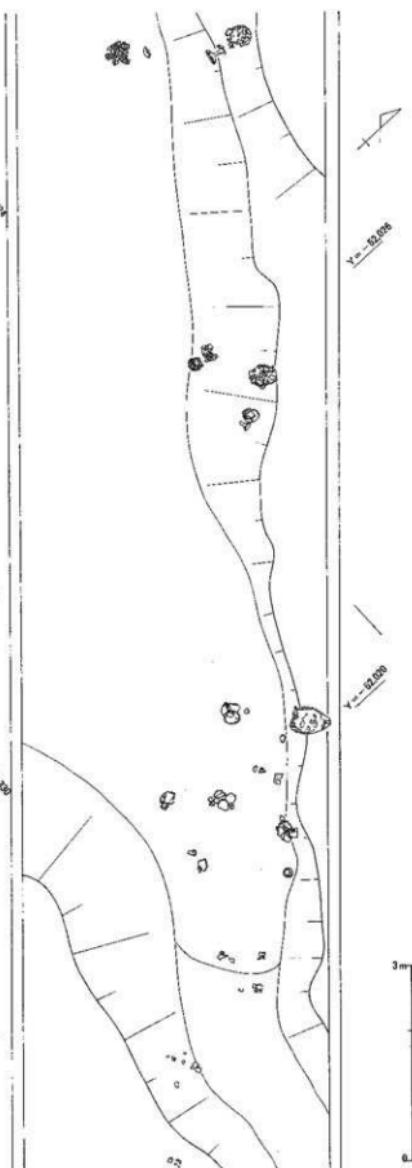
(111) (112) (113) (11

られるが、ほとんど使用した痕跡がない。きわめて優れた造りの大型品である。本遺構の時期は弥生時代中期である。

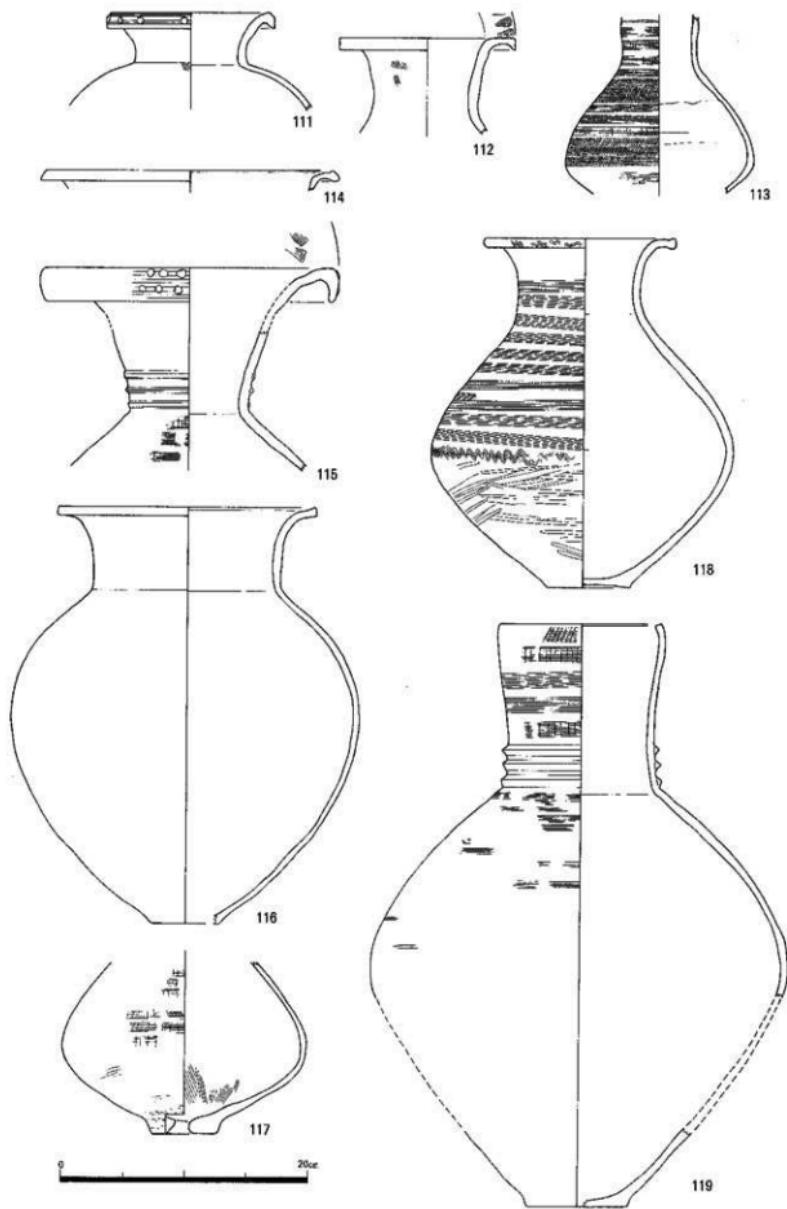
## 小結

本調査区は、弥生時代前期以前は大半が自然河川の河道にあたる。弥生時代中期に自然河川が大きく西に河道を変えて以降はこれらの河川が形成した谷状の落ち込みが居住域と97-3区以東の墓域との間に存在していた。特筆すべき遺構としては、ここで検出した方形周溝墓と考えられるSX99がある。谷の肩を形成する自然堤防上に立地しており、谷に向かう落ち込みの一部を周溝の一部として利用したものである。96-1区や97-3・8区で検出した方形周溝墓の一群の西限に位置するものかもしれない。隣接する96年度調査区で確認できなかったことは残念であるが、97-3区との間にも方形周溝墓が展開していた可能性は高いといえる。中世以前に土地条件がやや安定するのはその時期だけで、弥生時代後期から古墳時代初頭には若干の遺物を伴う小規模な自然河川が繰り返し流入する。部分的に農地として開墾されるのは平安時代のこと、この地区周辺の全域が農地化されるのは、時期はわからないが千草池の築造により古い谷地形がせき止められ、河川の流入が制御できるようになるまで待たなければならなかつたであろう。それ以降は耕作地として今日まで継続して利用されてきたことが重層的に残る坪境の畔壁によってわかる。ちなみに、本調査区の南辺、千草池の北辺を通る線が東西の坪境である。

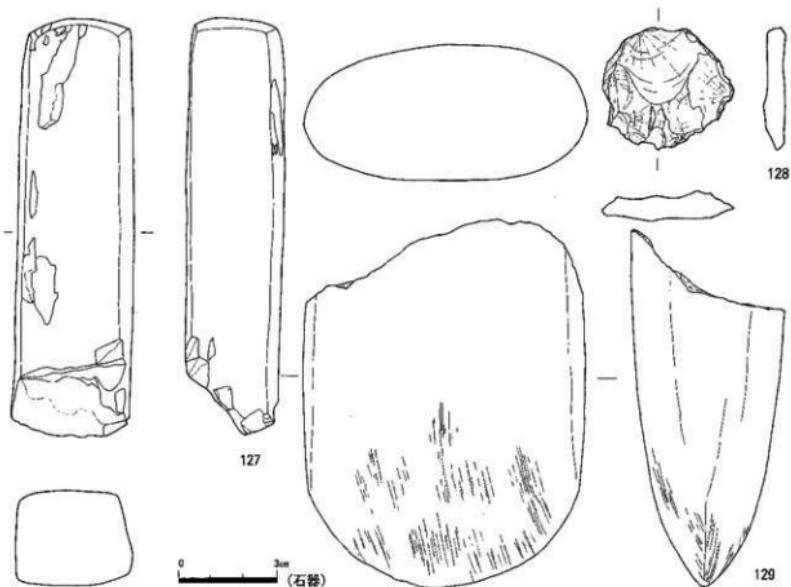
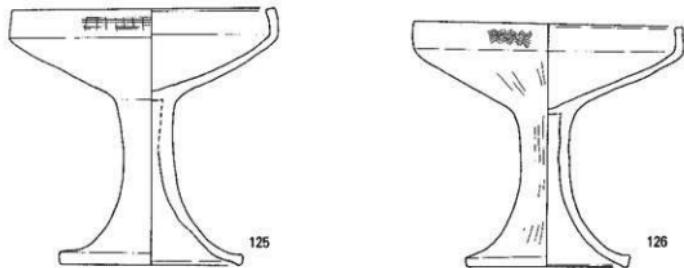
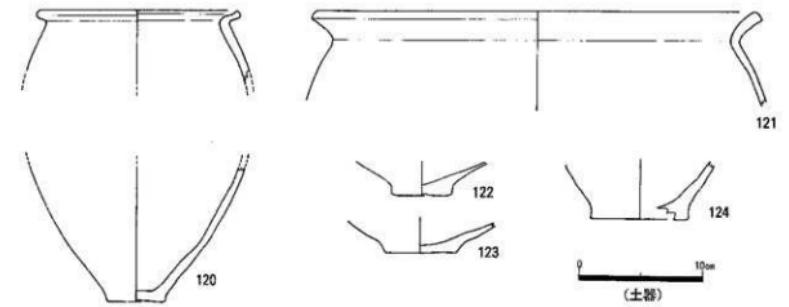
(広瀬)



第49図 SX99遺物出土状態 (S=1/75)



第50図 SX99出土遺物・1 (S=1/4)



第51図 SX99出土遺物・2 (土器S=1/4、石器S=2/3)

## (5) 97-5 IXの調査結果

第1面(図版22) 近世の造構面である。

耕作面と考えられるが、  
顕著な造構は検出されなかっ  
た。

第2面(第54図、図版23)

近世の造構面である。  
この面も耕作面と考えら  
れるが、顕著な造構は検出  
されなかつた。

第3面(第54図、図版23)

中世の造構面である。  
井戸 SK90を検出した。

SK90(第52・53図、図版23)

E4-6-M2-fl-3・4で検出さ  
れた井戸である。南半は調査  
区外に出ているが、平面形  
は円形、規模は直径3.7m、  
湧水のため完掘できていな  
いので深さは不明だが、1.  
8m以上あり、断面形は、  
上半は逆台形であるが、検  
山面から1.2m以下はほぼ  
垂直に落ちる。覆土は5層  
に大別でき、堆積状況から

①が掘形埋上、⑨・⑩が井  
戸枠内埋上、②～⑧が井戸

棒抜き取り後の埋土、①が埋没後の窪みに堆積した土層と考えられる。2層  
から瓦器碗(130、131)が出土した。本造構の時期は鎌倉時代である。

第4面(第54図、図版24) 弥生時代後期から古墳時代の造構面である。

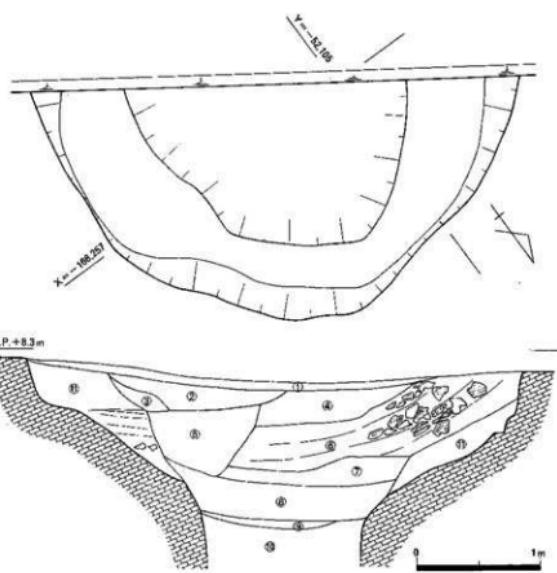
自然地形の落ち込み以外は、顕著な造構は検出されなかつた。

第5面(第55図、図版24) 弥生時代中期から後期の造構面である。

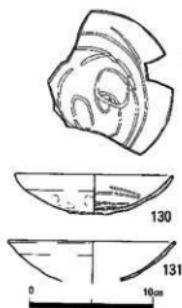
土坑 SK136、SK168が検出された。

SK136(第56・58図、図版25・28・51)

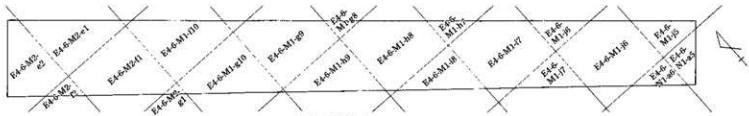
E4-6-M2-fl-1・3で検出した土坑である。溝SD147に切られる。平面形は円  
形、規模は直径約2.5m、深さは0.6mを測り、断面形は半円形である。覆土  
は3層に大別でき、各層から多量の弥生土器が出土した。第IV様式の広口長  
頸壺(132～134)、段状口縁壺(135)、甕(136)、弥生時代中期の甕蓋(139)、底



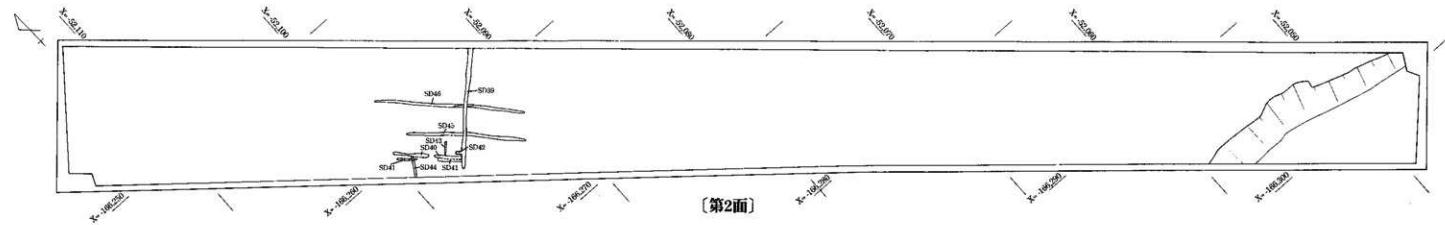
第52図 SK90平面断面図 (S=1/40)



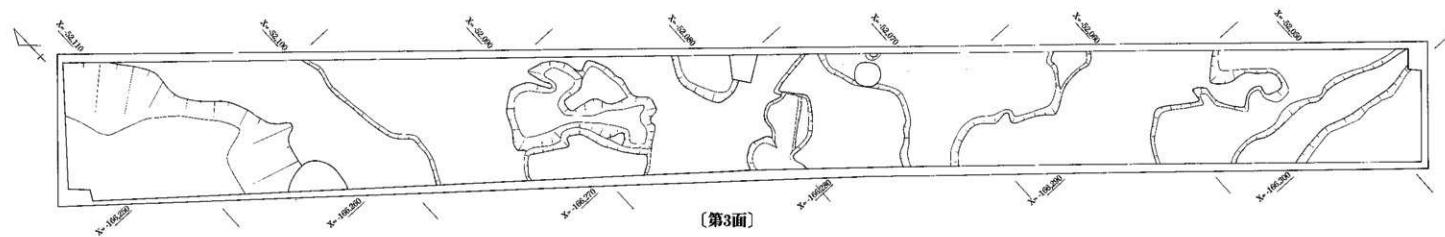
第50図 SK90出土遺物 (S=1/4)



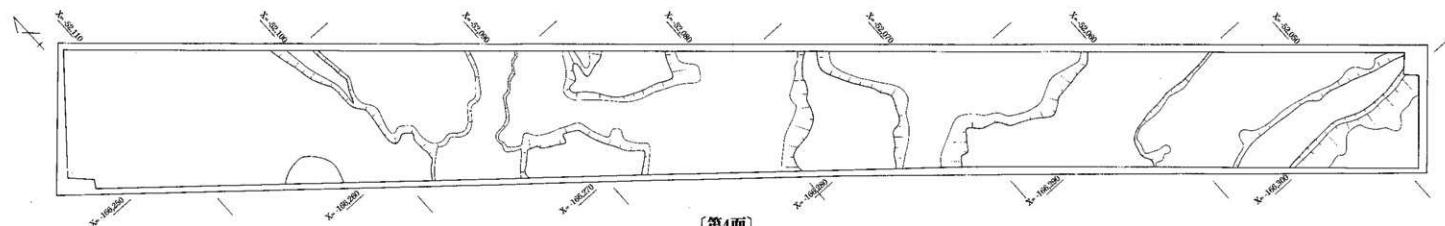
〔地区割図〕



〔第2面〕



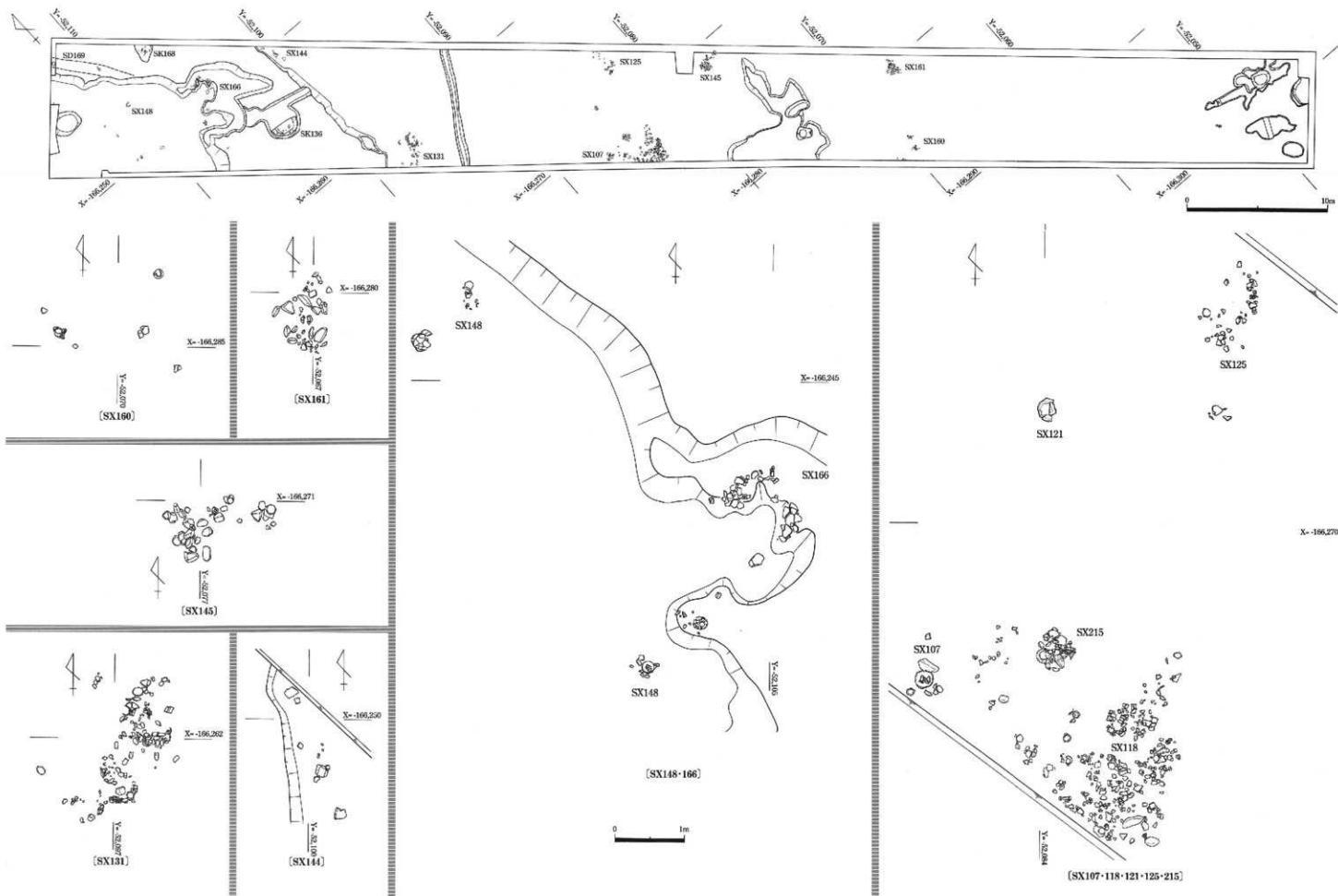
〔第3面〕



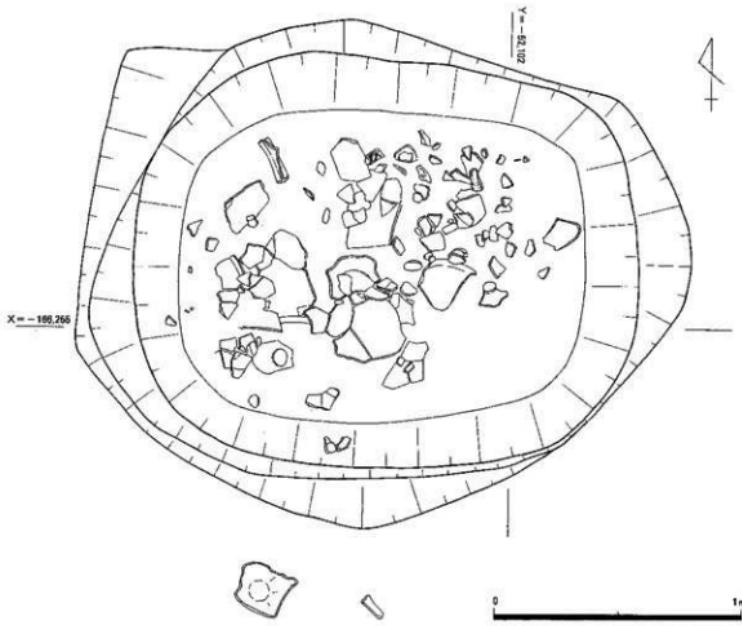
〔第4面〕

第54図 97-5区地区割図(S=1/500)・第2~4面平面図(S=1/250)





第55図 97-5区第5面平面図(S=1/250)・土器群出土状態(S=1/50)



第56図 SK136平面図 (S=1/20)

部(137、138)等が出土した。本遺構の時期は弥生時代中期後半である。なお(135)は生駒西麓産である。

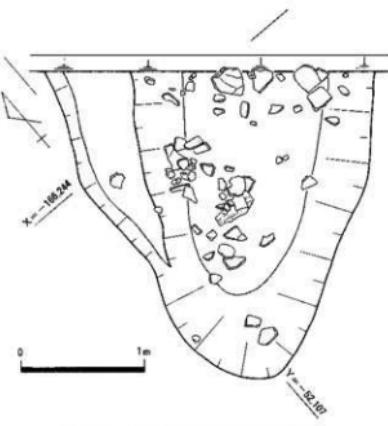
#### SK168(第57図)

EA-6-M2-e1-2で検出した十坑である。97-7区のSK199と同一の造構で、平面形は楕円形、規模は長径約2.9m、短径1.8m、深さは0.2mを測り、断面形は浅い皿状である。覆土は3層に大別でき、各層から多量の第IV様式の上器が出上した。本遺構の時期は弥生時代中期である。

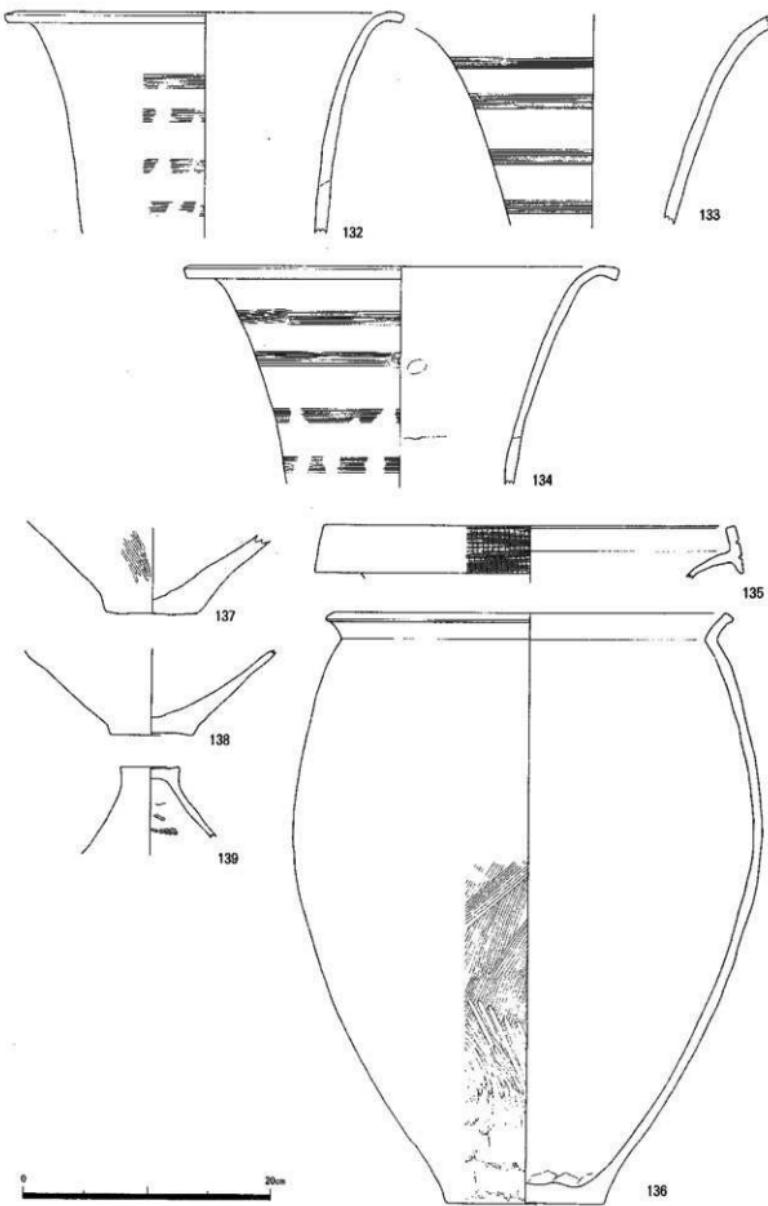
溝 SD169、SD147が検出された。

#### SD169(第59図、図版25・53)

EA-6-M2-e1-2、e2-1で検出した溝状の土器群であるが、溝としての掘り込みは明確でない。方向はN-40度-Eである。上器の集中する範囲は幅0.6m、長さ約4mである。第II様式の広口長頸壺(140)、第III様式と思われる段状口縁壺(141)等が出上した。本遺構の時期は弥生



第57図 SK168平面図 (S=1/40)

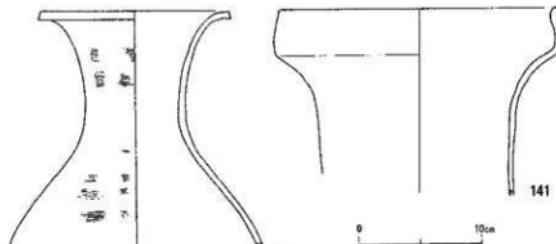


第58図 SK 136出土遺物 (S = 1/4)

時代中期である。

#### SD147

E4-6-M2-f1-1で検出した溝である。方向はN-80度-Eである。規模は、幅0.8~1.4m、深さ0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。検出長は5.0mである。覆上は1層で、少暈の弥生土器が出土し



第59図 SD169出土土器 (S=1/4)

た。本遺構の時期は弥生時代中期である。

土器群 SX160、SX161、SX145、SX125、SX118、SX107、SX215、SX121、SX131、SX144、SX166、SX148が検出された。これらの土器群は遺物の集中する度合いが異なる。土器が散在していて一見群を構成しないように見えるものもあるが、SX118・107・215・121は上層の連続性と散布状況から一連の群を構成するものと判断されるので、これらの土器群については、一括で報告することとした。

調査地の東側から記述する。

#### SX160(第55・60図、図版29・53)

E4-7-019-i7-4、i8-3で検出した土器群である。南側は調査区外であるが、土器群の範囲は3×2mを測る。灰褐色礫層中に集中的に土器が含まれる。弥生時代中期の甌の底部(142)と須恵器破片等が出士したが、須恵器は上層の灰褐色粘土層から出土したもので、混入と考えられる。本遺構の時期は弥生時代中期である。

#### SX161(第55・61図、図版30・53)

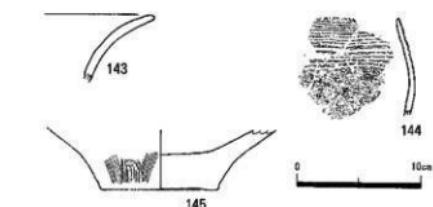
E4-6-M1-h7-4、i7-2で検出した土器群で、97-7区のSX207と同一の遺構である。土器群の範囲は4×2mを測る。弥生時代前期の鉢(144)、第II様式の広口長頸甌(143)、土器の底部(145~147)等が出士した。本遺構の時期は弥生時代中期である。

#### SX145(第55・62図、図版28・51)

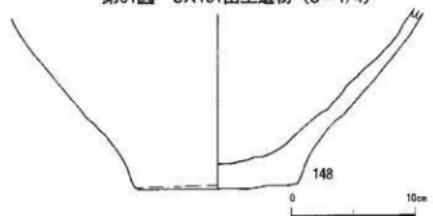
E4-6-M1-h8-2で検出した土器群で、土器群の範囲は2.1×0.7mを測る。弥生時代中期の底部(148)等が出士した。本遺構の時期は弥生時代中期である。



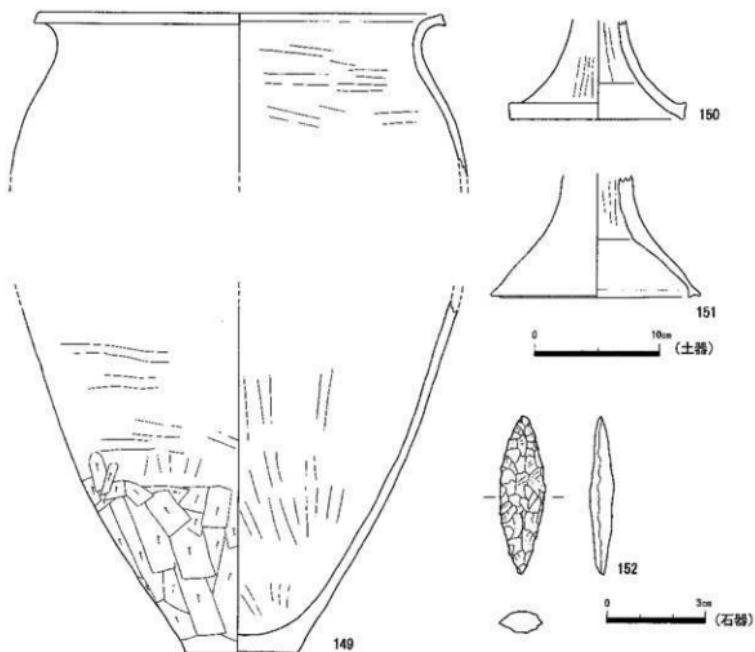
第60図 SX160出土遺物 (S=1/4)



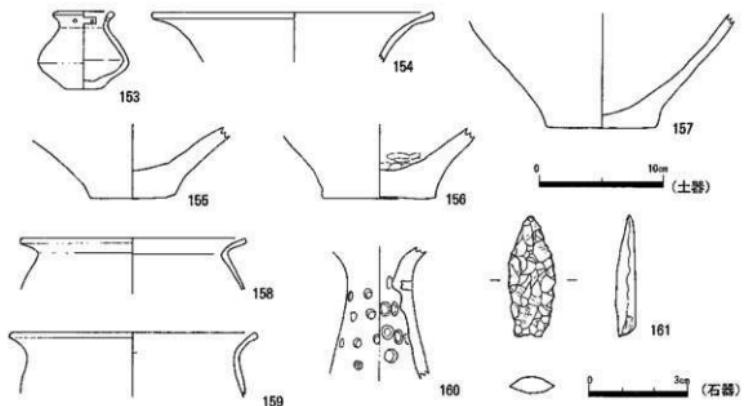
第61図 SX161出土遺物 (S=1/4)



第62図 SX145出土遺物 (S=1/4)



第63図 SX125出土遺物（土器S=1/4、石器S=2/3）



第64図 SX118出土遺物（土器S=1/4、石器S=2/3）

SX125(第55・63図、図版26・49・68)

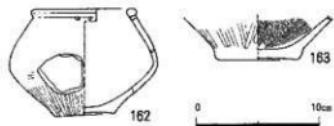
E4-6-M1-g9-3で検出した土器群であるが、97-7区で検査したSX204となつなり、溝状の遺構になる。土器群の範囲は $10.5 \times 1.6\text{m}$ を測る。第IV様式の甕(149)、高杯の脚部(150、151)、弥生時代の石鐵(152)等が出土した。本遺構の時期は弥生時代中期である。

SX118・107・215・121(第55・64~66図、図版26・27・48・49・53・68)

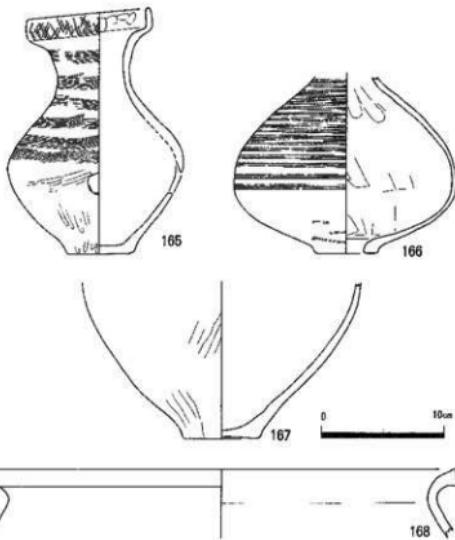
E4-6-M1-g9-3・4、h9-1-2で検出した土器群である。SX125・204と一緒に遺構になる可能性が高い。土器群の範囲は $4.2 \times 6.5\text{m}$ を測る。弥生時代前期から中期の土器が出土した。SX118からは、第II様式の広口長頸壺(154)、甕(159)、第IV様式の台付鉢(160)、甕(158)、弥生時代中期のミニチュア壺(153)、土器の底部(155~157)、弥生時代の石鐵(161)等が、SX107からは第IV様式の壺(164)、無頸壺(162)、弥生時代中期の土器の底部(163)等が、SX121からは、第III様式の甕(168)、第IV様式の広口短頸壺(166)、弥生時代中期の段状口縁甕(165)、壺(167)等が出土した。(166、168)は牛駒西麓産である。本遺構の時期は弥生時代中期である。

SX131(第55・67・68図、図版27・49・50・66)

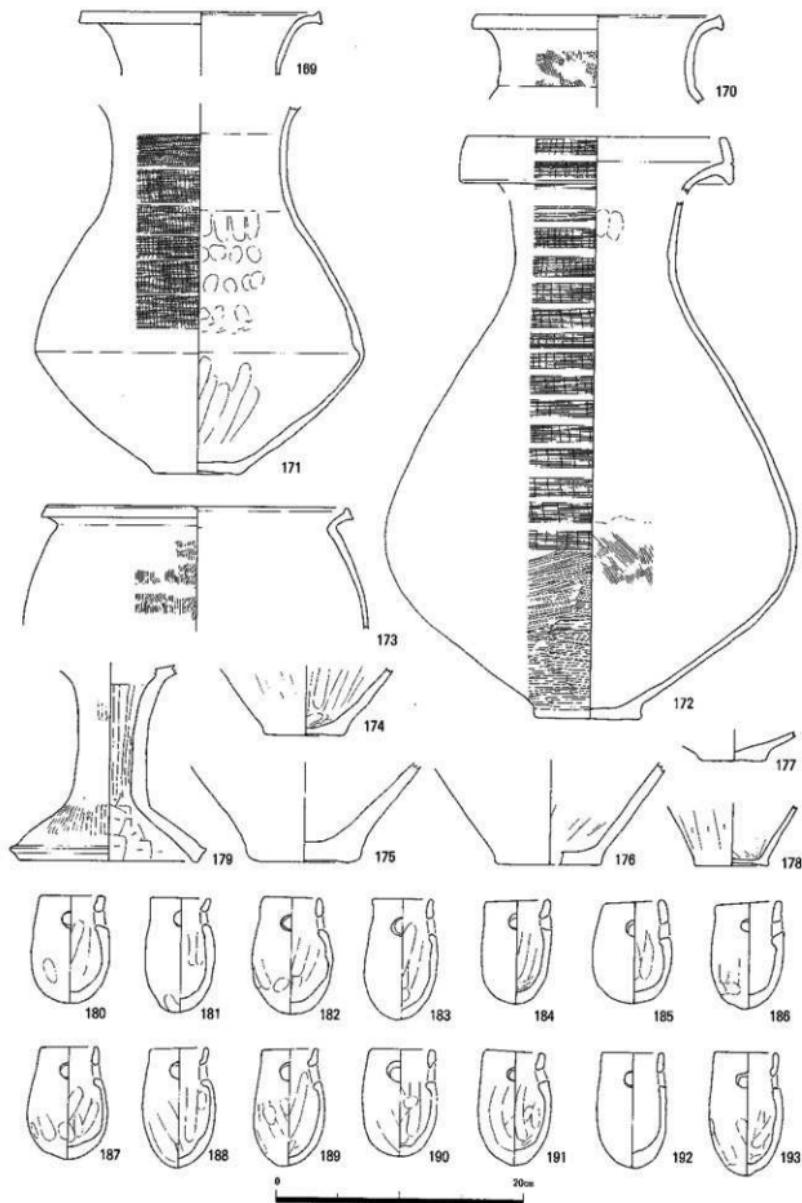
E4-6-M1-g10-2で検出した土器群である。南側は調査区外であるが、土器群の範囲は $1.9 \times 2.6\text{m}$ を測る。第IV様式の広口短頸壺(169~171)、段状口縁甕(172)、壺(177)、甕(173)、高杯(179)、弥生時代中期の甕(174~176、178)、飯蛸壺(180~193)、石包丁(195)、石包丁の木製品(194)等が出土した。(195)は上面に幅約6mmの摩擦痕が2ヶ所確認された。特殊な用途の砥石として転用された痕跡かもしれない。(172、177)は牛駒西麓産である。本遺構の時期は弥生時代中期である。



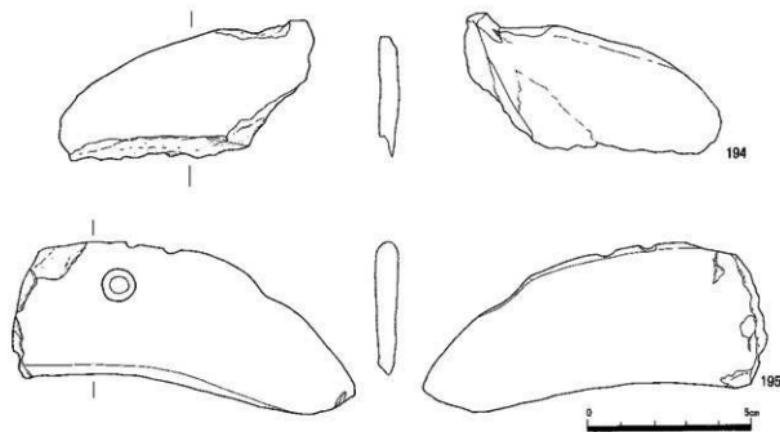
第65図 SX107出土遺物 (S=1/4)



第66図 SX121出土遺物 (S=1/4)



第67図 SX131出土遺物・1 (S=1/4)



第68図 SX131出土遺物・2 (S=2/3)

SX144(第55・69図、図版28・51)

E4-6-M1-f 10-2で検出した土器群である。土器群の範囲はほぼ円形で2.5×2.1mを測る。第II様式の壺(196)等が出土した。本遺構の時期は弥生時代中期である。

SX166(第55・70図、図版53)

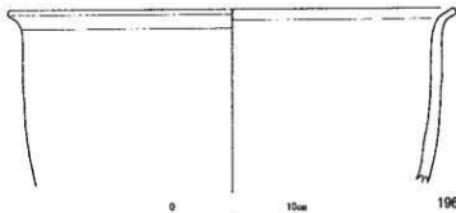
E4-6-M1-e1-3・4、f1-1で検出した土器群で、南側はSX148に切られている。土器群の範囲は6.0×2.1mを測る。第II様式の壺の底部(197)、第IV様式の高杯(198)が出土した。(197)は紀伊産である。本遺構の時期は弥生時代中期である。

SX148(第55・71図、図版29・30・52・66)

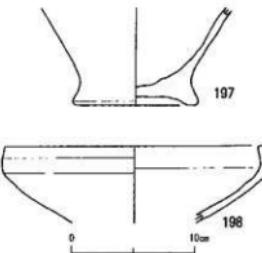
E4-6-M1-e1-4、e2-1・3、f1-1・2、f2-1で検出した土器群である。自然河川上面の窪みに土器が散在した状態で、範囲は、明瞭ではない。第IV様式の広口短頸壺(205)、無頸壺(199)、壺(204)、弥生時代中期の土器の底部(206～215)、弥生時代後期の広口短頸壺(200、201)、高杯(202、203)、石包丁(216)等が出土した。(201、205、212)は牛駒西麓産である。本遺構の時期は弥生時代中期から後期である。

包含層出土遺物(第72・73図、図版54・65～69)

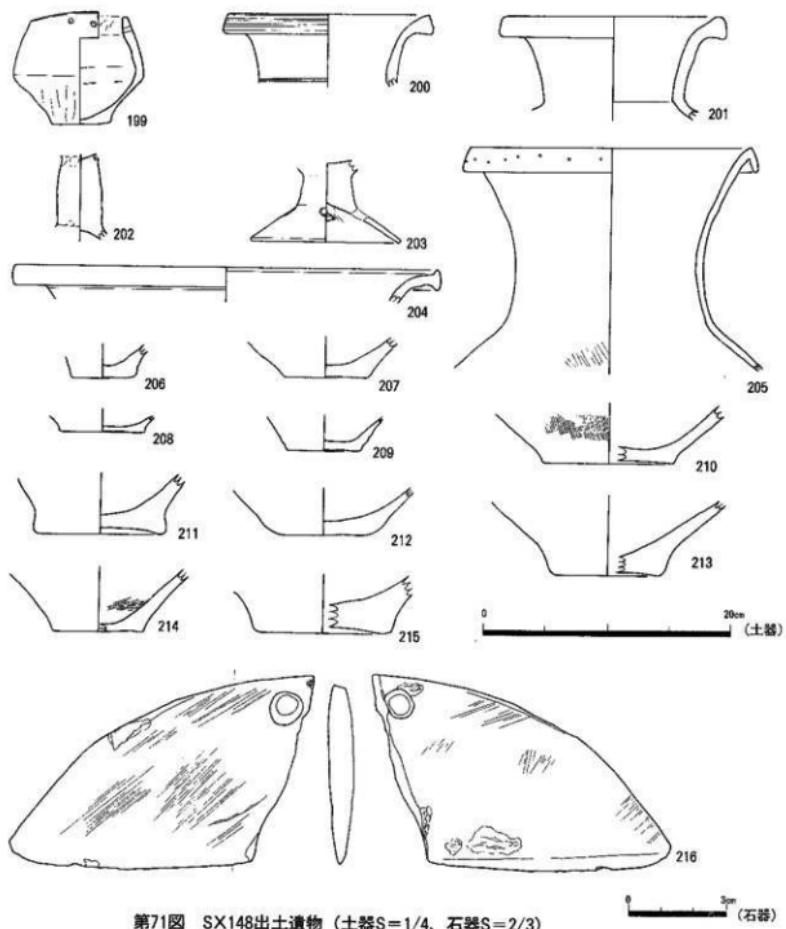
第3階からは縄文時代の石鏃(239)、弥生時代のスクレイ



第69図 SX144出土遺物 (S=1/4)



第70図 SX166出土遺物 (S=1/4)



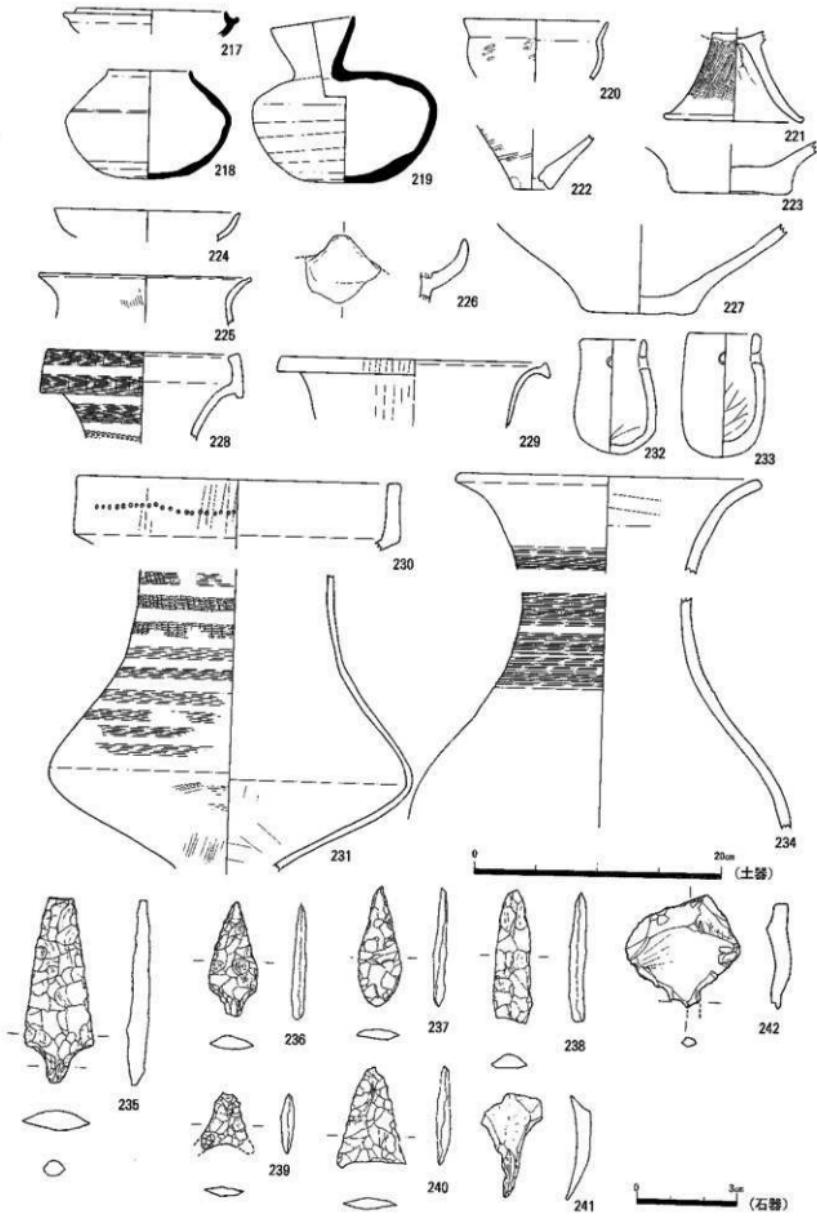
第71図 SX148出土遺物（土器S=1/4、石器S=2/3）

バー(243)、石鎌(245)、石錐(242)等が出土した。第5層からは 飛鳥時代の土師器の杯(224)、壺(225)、奈良時代の把手付壺(226)、弥生時代の石錐(241)、石槍未製品(247)等が出土した。

Ⅲ型式の須恵器の平瓶(219)、Ⅱ型式の杯身(217)、短頸壺(218)は灰褐色土(第4面下層)から出土した。調査区の東側にのみ堆積していた層である。

縄紋時代の石鎌(240)は、灰褐色土(第5面上層)から出土した。第5面のSX148上層に堆積していた土屑である。第IV様式の段状口縁壺(228)、弥生時代の石鎌(236~238)は、黒褐色疊混じり土から出土した。第5面のSX131の上層に堆積していた屑である。(228)は生駒西麓産である。

弥生時代前期の広口長頸壺(234)は、灰褐色疊混じり土から出土した。調査区の中央部分から東側



第72圖 97-5區包含層出土遺物・1 (土器S=1/4、石器S=2/3)

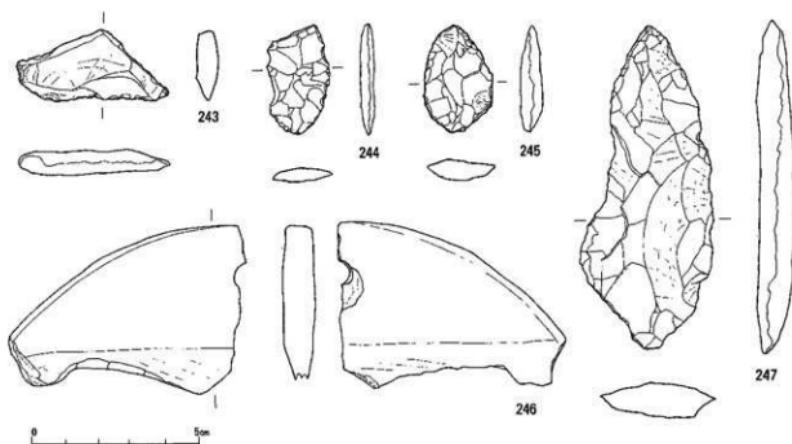
に堆積していた層である。

第IV様式の広口短頸壺(229)、段状口縁壺(230)、弥生時代後期の高杯(221)、瓶(222)、古墳時代前期の小型壺(220)は、灰色砂から出土した。第5面のSX148上層に堆積していた層である。

石包丁(246)、石小刀(244)は灰褐色粘土から出土した。第5面のSX131上層に堆積していた層である。

旧石器時代の有舌尖頭器(235)は黄灰褐色粘土から出土した。

第III様式の広口長頸壺(231)、弥生時代中期の壺(227)、土器の底部(223)、飯蛸壺(232、233)は北側溝から出土した。第5面上層に堆積する黒褐色疊混じり土出土遺物の可能性がある。(231)は紀伊系である。



第72図 97-5区包含層出土遺物・2 (S=2/3)

## 小結

本調査区は97-7区と接しており、若干、土層の堆積の違いはあるが、様相はほぼ同じである。97-7区同様、最終面でSXの構造番号を付した土器群が検出された。これらの遺構は、必ずしも人為的な投棄によるものとは断定できない。自然河川の埋没後の窪みに密集して、あるいは散在して弥生土器が堆積している状態であり、その多くは一時的な出水によるショートバーの中に含まれるものと理解される。ただ、本調査区で検出したSX131や97-7区で検出されたSX204、SX206等は接合資料も多いことから、人為的な廃棄と考えて良いと思われる。土器群は特に調査区東側に多く、完形品が目に付くことから何らかの祭祀を考えることも可能である。SK136も口明山式の広口長頸壺の口縁部および完形の壺などが出土している。出土状況から土器棺とは考えられないが、祭祀土坑の可能性はある。

(広瀬)

## (6) 97-6区の調査結果

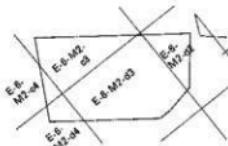
第1面(図版31) 近世の遺構面である。

明確な遺構は検出されなかった。

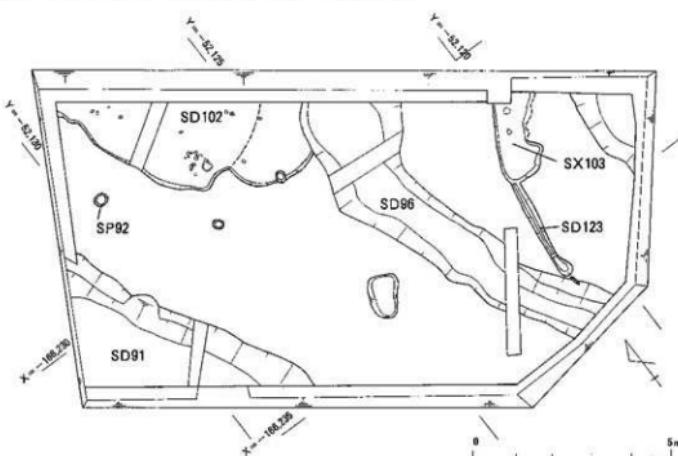
第2面(図版31) 近世の遺構面である

明確な違構は検出されなかった

第3面(第75図、図版31) 春生時代後期の遺構面である



第74図 97-4区地区割図 (S=1/500)



第75図 97-6区第3面平面図 ( $S=1/125$ )

小穴 SP92を輸出した。

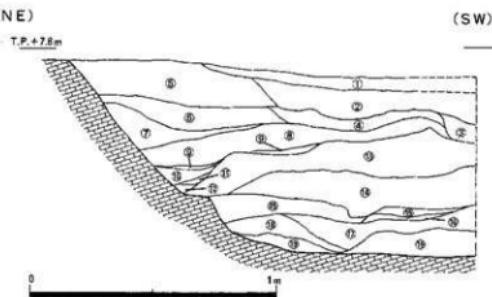
SP92

E4-6-M2-c3-4で検出した小穴である。平面形は円形、規模は径0.34m、深さは0.055mを測り、断面は浅い皿状である。覆土は1層で、遺物は出土しなかった。

自然河川 SD91を検出した。

SD91 (第76・77図、図版32・34)

調査区の西隅、E4-6-M2-c4-3、d3-2、d4-1で検出した自然河川で、一部攪乱を受けていた。方向はN-40度-Wであり、南東から北西に向かって流れているようであるが、西側は調査区外である。規模は、検出長



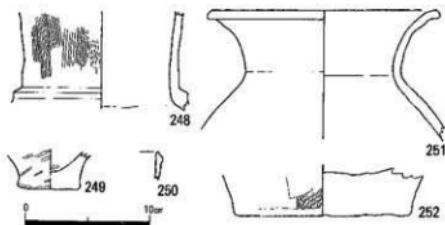
第76図 SD91断面図 (S=1/20)

6.9m、幅2.1m以上、深さは0.95mを測る。断面形は逆台形を呈し、肩からの斜面には部分的に水流により削られた平坦面が認められる。本来の流路の幅は3~4m以上になると考えられる。覆土は19層に細分できる。遺物は⑧から縄紋上器の深鉢、⑩、⑪、⑫からは弥生時代中期に相当する土器片が1点のみ出土し、⑬からは遺物は出土しなかった。⑭・⑮からは、前期から後期の遺物が多量に出土した。図化した遺物としては、弥生時代後期の広口短頸壺(251)、中期の壺(252)の他、弥生時代後期の壺(248)、壺(249)、縄紋時代晚期の深鉢(250)がある。(248)は牛駒西麓産である。

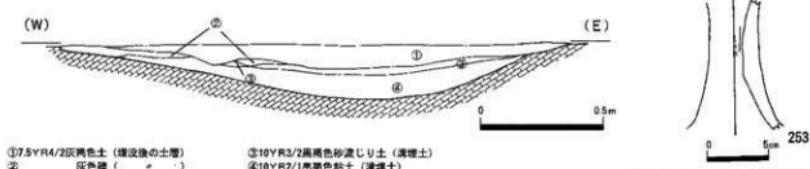
溝 SD96、SD123を検出した。

SD96(第78・79図、図版32・55)

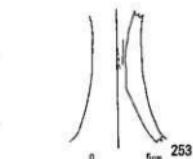
E4-6-M2-c3-3、d3-1-3で検出した溝である。溝の方向はN-20度-Wである。規模は検出長16.4m、幅2.3m、深さは0.15~0.23mで、南側が浅くなっている。断面形は浅い皿状である。覆土は2層で、弥生時代中期の高杯の脚部(253)が出土した。弥生時代中期の遺物しか出土していないが、SD91及び直下から検出された第4面SD109出土遺物には、後期の土器があり、本遺構の時期も弥生時代後期であると考えられる。



第77図 SD91出土遺物 (S=1/4)



第78図 SD96断面図 (S=1/20)



第79図 SD96出土遺物 (S=1/4)

SD123 (第80図)

E4-6-M2-d3-1-3で検出した溝である。溝の方向はN-10度-Eである。

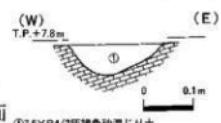
規模は幅0.2~0.35m、深さは0.06mを測り、検出長は2.75mである。断面形は浅い皿状である。覆土は1層で、遺物は出土しなかった。

落ち込み SX102、SX103を検出した。

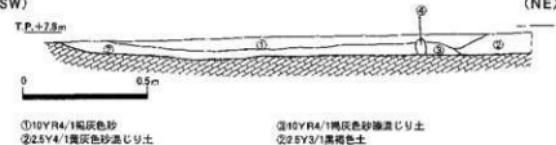
SX102 (第81・82図、図版 SW)

32・55)

E4-6-M2-c3-3-4で検出し  
た落ち込みである。北側は  
調査区外であり、一部肩が  
不明瞭な部分があるため、  
全体の形状は不明である。



第80図 SD123断面図 (S=1/10)

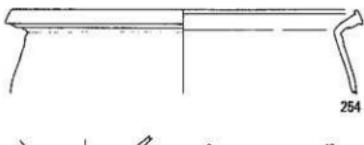


第81図 SX102断面図 (S=1/20)

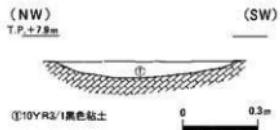
規模は長軸約5.1m、短軸約2.2m、深さ0.085mを測る。断面形は浅い皿状である。覆土は3層で、底部に接して第IV様式の壺(254)、弥生時代中期の壺(255)が出土している。本遺構からは中期の遺物しか出土していないが、遺構の時期はSD91同様弥生時代後期に下がる可能性が高い。

SX103(第83図)

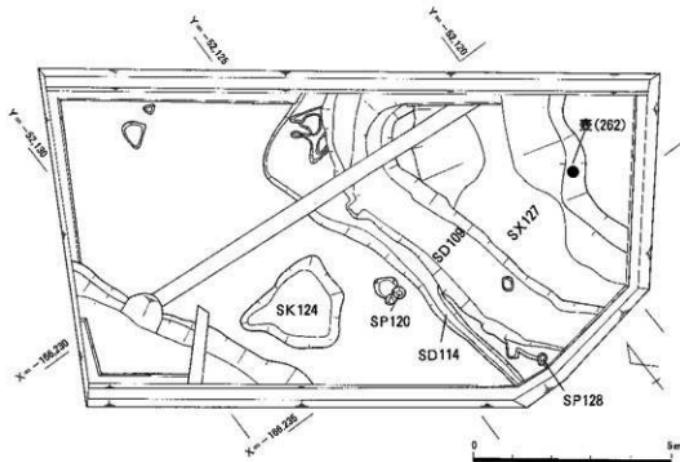
E4-6-M2-d2-2、d3-1で検出した落ち込みである。調査区の北側の壁によって切られていて全体の形状は不明だが、規模は長軸2.15m以上、短軸は0.85m～1.18m、深さ0.065mを測り、断面は浅い皿状である。埋土は1層で、弥生時代中期の破片、第III様式の壺の破片が出土した。本遺構からは中期の遺物しか出土していないが、遺構の時期はSD91同様弥生時代後期に下がる可能性が高い。



第82図 SX102出土遺物 (S=1/4)



第83図 SX103断面図 (S=1/20)



第4面(第84図、図版34) 弥生時代中期から後期の遺構面である。

上坑 SK124を検出した。

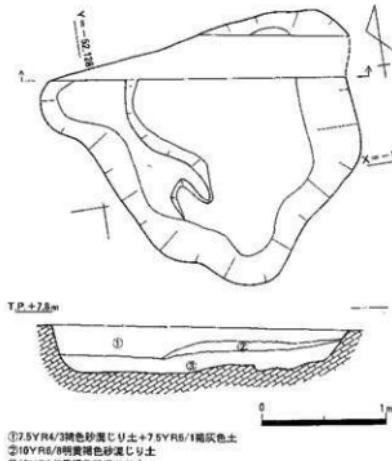
SK124 (第85図)

E4-6-M2-d3-2で検出した上坑である。平面形は不整形、長径2.38m、短径2.15m、深さは0.38mを測り、断面形は逆台形である。埋土は3層で、遺物は出土しなかった。

小穴 SP120、SP128を検出した。

SP120

E4-6-M2-d3-1で検出した小穴である。平面形は円形、規模は直径0.33m、深さは0.1mを測り、断面



第85図 SK124平面・断面図 (S=1/40)

形は半円形である。埋土は2層で、遺物は出土しなかった。

溝 SD109、SD114、SX127が検出された。

**SD109** (第87・90図、図版33・34・55・69)

E4-6-M2-c3-3、d3-1で検出した溝である。溝の方向はN-20度-Wで、d3-1・2で東側に直角に屈曲する。規模は、検出長9.5m、幅2.85m、深さは0.5mを測る。断面形は不整形である。東側にあるSX127が埋まつた後、掘り直されたものである。溝の底近くの斜面には粘土が貼り付けられており(⑤、⑥)、本遺構の特異な性格を示している。埋土は7層に入別できる。第IV様式の甕(256)、弥生時代中期の甕(257)、飯蛸壺(258、259)、純紋時代の石錐(260)、IH石器時代の尖頭器(261)等が出土した。

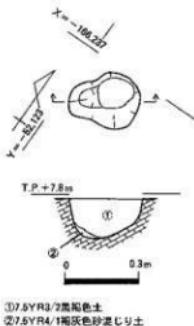
**SD114** (第88図)

E4-6-M2-d3-1・3で検出した溝である。溝の方向はN-10~20度-Wである。規模は検出長6.6m、幅0.46m、深さは0.15mを測り、断面形は半円形である。本遺構はSD109の埋土を切っている。埋土は2層で、弥生中期の飯蛸壺のかた器破片が

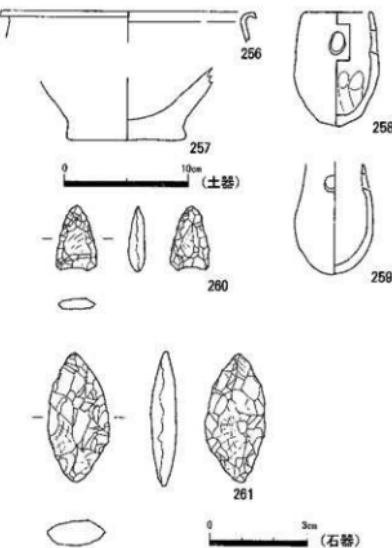
形は半円形である。埋土は3層で、遺物は出土しなかった。

**SP128(第86図)**

E4-6-M2-d3-3で検出した小穴で、SD109の埋土に掘り込まれたものである。平面形は不整形、長径0.29m、短径0.23m、深さは0.16mを測り、断面



第86図 SP128平面・断面図 (S=1/20)



第87図 SD109出土遺物 (土器S=1/4、石器S=2/3)

数点出土した。本遺構の時期は、S (E) T.P.  
D109に後出することは間違いない  
が、さほど時期差はないと考えられ  
る。

SX127(第89~91)、図版33・34・55・

66)

第88図 SD114断面図

E4-6-M2-d2-2・4、d3-1・3で検出し (S=1/10)  
 た溝である。溝の方向はN-5~10度-Wで、d3-1で北東へ屈曲する。西側の刃をSD109に切られている。規模は検出長6.0m、幅3.2m以上、深さは0.48mを測り、断面形は浅い皿状である。覆土は4層に大別できる。この溝の東側には、黄色砂が約0.2m堆積しており、この土層は、地山の黄橙色粘土上のブロックを含んでいることから、盛土である可能性がある。本遺構の時期は弥生時代中期後半である。溝の肩から穿孔された壺が出土しており、これを供獻土器と考えると、この溝は方形周溝墓の周溝である可能性が高い。第IV様式の広口短頸壺(262)、甕(263)、鉢(264)、石包丁(265)等が出土した。(262)は紀伊系であると考えられる。

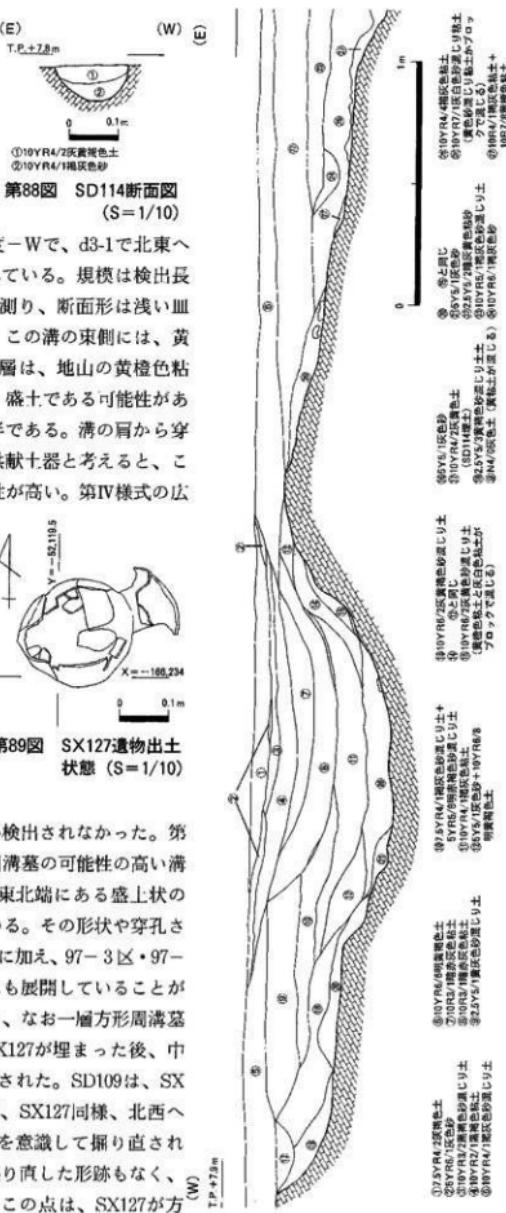
### 包含層出土遺物(第92図、図版55)

第3層から鎌倉時代の瓦器碗(266～269)、瓦器小皿(270)、土師器小皿(271)、繩紋時代の石鏃(272)等が出土した。

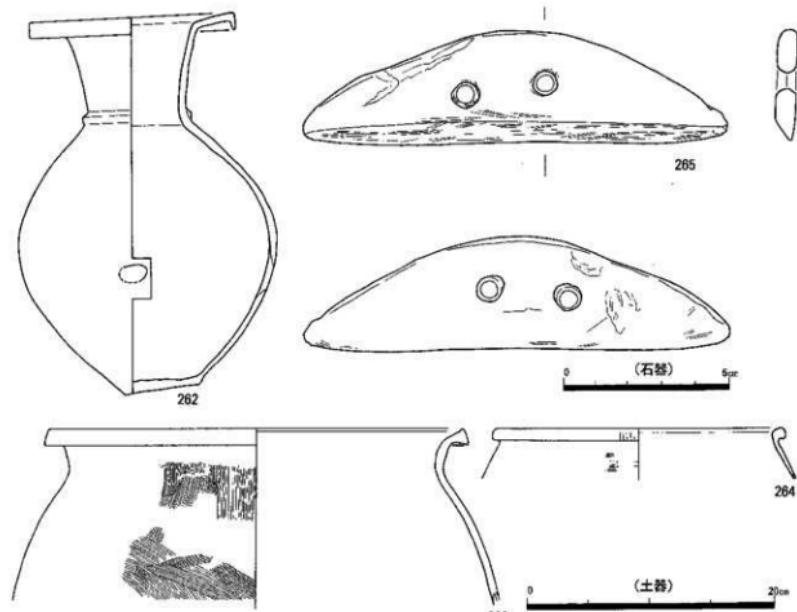
第89図 SX127遺物出土  
状態 (S=1/10)

小結

97-6区では、弥生時代の遺構しか検出されなかった。第4面では、弥生時代中期後半の方形周溝墓の可能性の高い溝SX127を検出した。この溝は、調査区東北端にある盛上状の高まりの周りを囲むように屈曲している。その形状や穿孔された完形に近い壺が出土したという点に加え、97-3区・97-4区の調査で、墓域が集落の北東側にも展開していることが明らかになったことを考え合わせると、なお一層方形周溝墓である蓋然性は高いと言える。このSX127が埋まつた後、中期未葉に、溝の外側に溝SD109が掘削された。SD109は、SX127の直上に掘削されたのではないが、SX127同様、北西へ向かって屈曲している。SX127の形状を意識して掘り直されたことは確実であるが、東側の上を盛り直した形跡もなく、なぜ掘り直されたのかは不明である。この点は、SX127が方

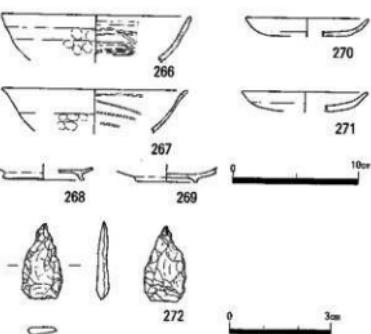


第90図 SD109・SX127断面図 (S=1/20)



第91図 SX127出土遺物（土器S=1/4、石器S=2/3）

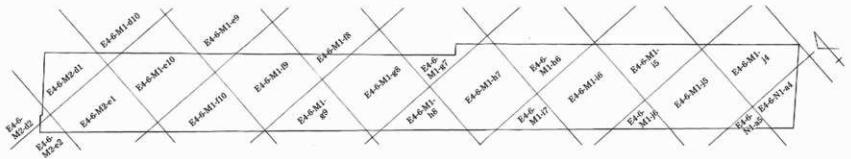
形周溝基の周溝であるか否かという問題に直接関わることであり、隣接地の調査で明らかになることを期待したい。第3面では、調査区の西端で自然河川SD91を検出した。この河川は、その位置からみて、池上小学校建設に伴う調査で堤と杭列が検出された溝<sup>(1)</sup>からつながり、第二阪和国道の建設に伴う調査の最北端で検出されたN.A・N.B溝に至る弥生時代から古墳時代初頭の土器を含む河川の一部である可能性がある。



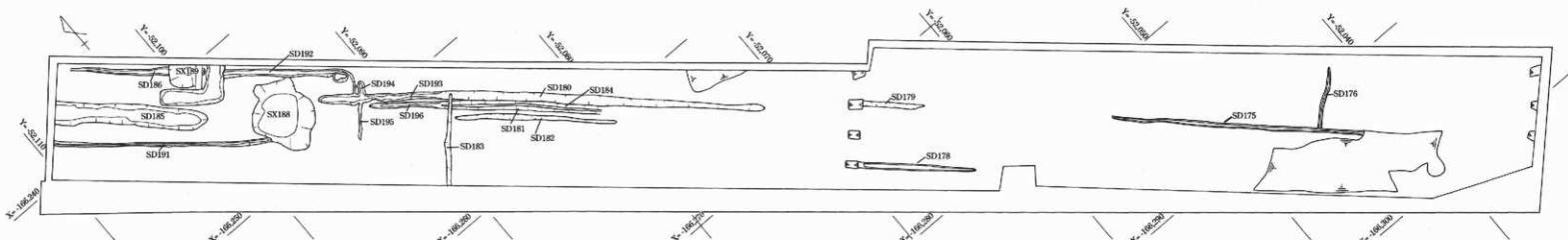
第92図 97-6区包含層出土遺物  
(土器S=1/4、石器S=2/3)

(註)

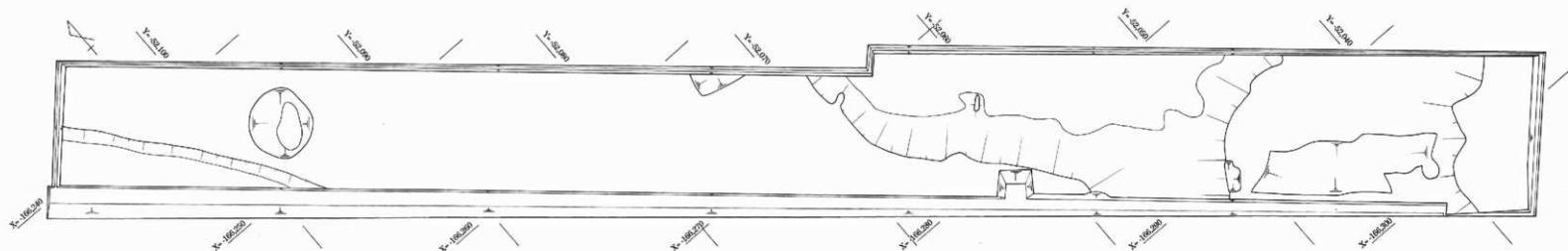
- (1)仮称池上小学校予定地内遺跡調査会『池上・遺跡』 1980
- (2)第二阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池遺跡』14 1970  
第二阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池遺跡』16 1971



〔地区割図〕



[第2面]



[第3面]

第93図 97-7区地区割図(S=1/500)・第2・3面平面図(S=1/250)

## (7) 97-7区の調査結果

第1面(図版35) 近世の造構面である。

顕著な造構は検出されなかった。

第2面(第93図、図版35・36) 中世の造構面である。

井戸 SX188、SX189が検出された。

SX188(第94図)

E4-6-M1-e10-1~4で検

出した井戸である。平面形は不整形、規模は長径4.5m、短径4.1m、深さは2m以上あるが湧水が激しく完掘できなかった。

断面形は、深さ約0.7mまでは浅い皿状を呈し、

それ以下はほぼ垂直に下がる。覆土は11層に分層

できる。覆土から13世紀後半の瓦器碗のほか、白磁碗、青磁碗等が出土したが、いずれも破片である。検出面から深さ約1mの砂礫層中から木杭が出土した。本造構の時期は鎌倉時代である。

SX189

E4-6-M2-e1-1、d1-3、E4-6-M1-d10-4、e10-2で検出した井戸である。平面形は方形、長径1.8m、短径1.4m、深さは2m以上あるが、湧水が激しく完掘できなかった。断面形は逆台形である。覆土は4層に大別できる。青磁碗、土師質火鉢のほか、古墳時代後期の須恵器破片が出土した。本造構の時期は室町時代である。

第3面(第93図、図版36) 古墳時代から中世の造構面である。

整地の痕や地形の凹凸を確認したが、顕著な造構は検出されなかった。

第4面(第96図、図版37) 弥生時代後期から古墳時代の造構面である。

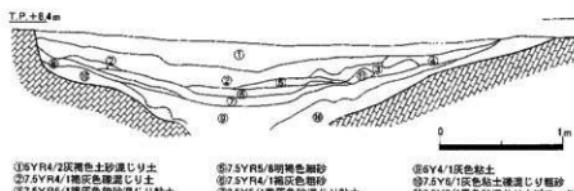
自然の落ち込みなどを確認したのみで、造構は検出されなかった。

第5面(第96図、図版37) 弥生時代中期から後期の造構面である。

上坑 SK199を検出した。

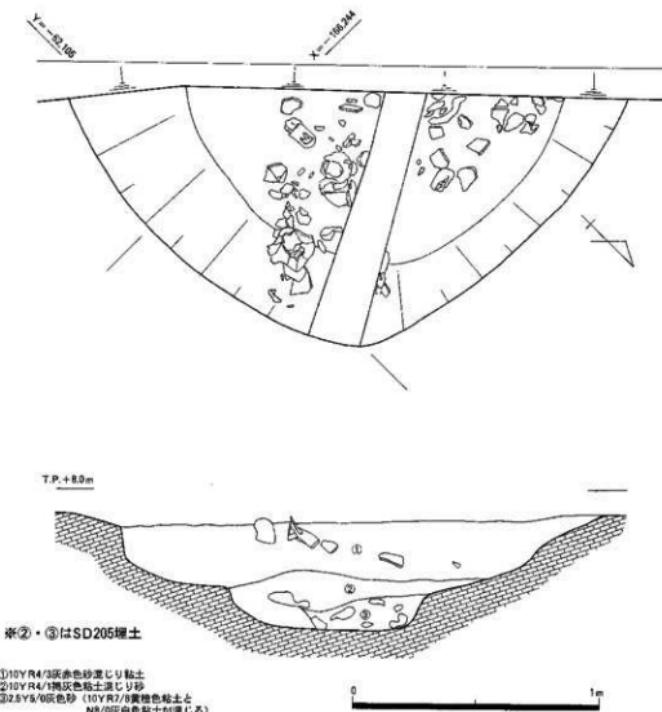
SK199(第95・97図、図版39・41・56)

E4-6-M2-c1-2で検出した土坑である。97-5区で検出されたSK168と同一の造構である。SK199は流路SD205の覆土上層に部分的にかぶった黄色砂と黒褐色砂の上から掘り込まれたものである。平面形は梢円形で、規模は長軸4.5m(97-7区検出長は1.6m)、短軸1.8m、深さは0.45mを測り、断面形は不整形である。覆土は1層で、弥生時代前期から第IV様式の土器が出土したが、大半は第IV様式である。図化した土器には、第IV様式の広口短頸壺(273、274)、広口長頸壺(276)、甕(277~279)、弥生時代中期の壺(275)、甕(280)、飯蛸壺(281、282)がある。本造構の時期は弥生時代中期である。



第94図 SX188断面図 (S=1/40)

</



第95図 SK199平面・断面図 (S=1/20)

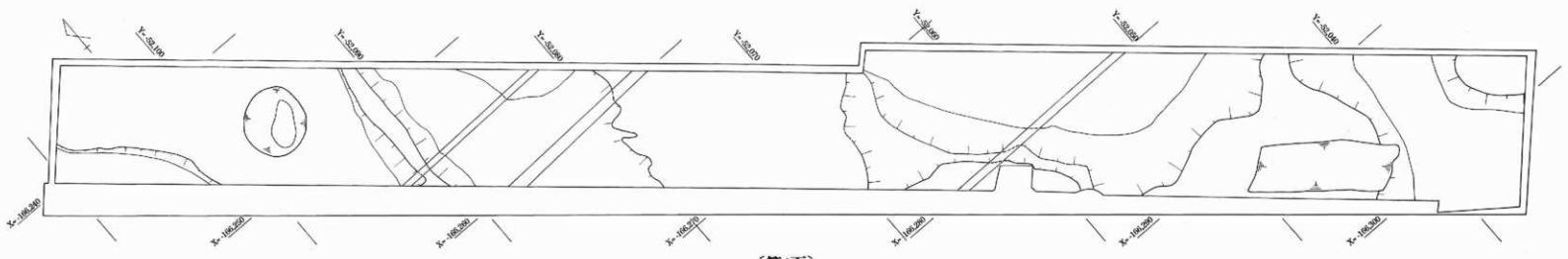
自然河川 NR216、NR217、SX197、SD198、SD202、SD205、SX208を検出した。

#### NR216(第96図)

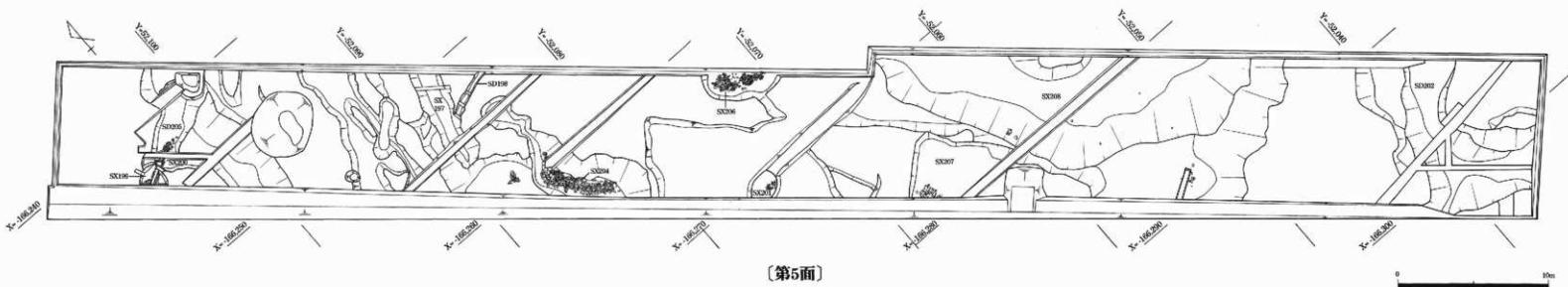
E4-6-M1-g9、f9、f10で検出した弥生時代の自然河川である。南東から北西に向かって流れる。覆土は7.5YR3/1黒褐色疊混じり土である。層厚は最大で約0.6mである。遺物はほとんどが弥生土器であり、弥生時代前期から後期の土器が山上した。古墳時代後期の須恵器片も出土したが、これは、黒褐色疊混じり土の上層に堆積した暗褐色砂混じり土の遺物が混入したものと思われる。g9で上器群SX204を検出したが、これは土器群の項で述べる。本遺構の時期は弥生時代中期から後期である。

#### NR217(第96図)

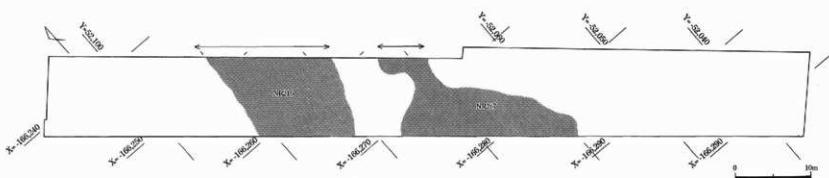
E4-6-M1-h6、h7、i7で検出した弥生時代の自然河川である。断面観察から、南南西から北北東へ流れたと考えられ、弥生時代以前に形成された自然堤防を切り込みながら流れた河川であることが確認された。層厚は最大で約0.6m、覆土は5YR1.7/1黑色疊混じり土で、下層には部分的に黒褐色疊混じり粘土がある。河川内で土器群SX201、SX206、SX207を検出したが、これらは土器群の項で述べる。



[第4面]

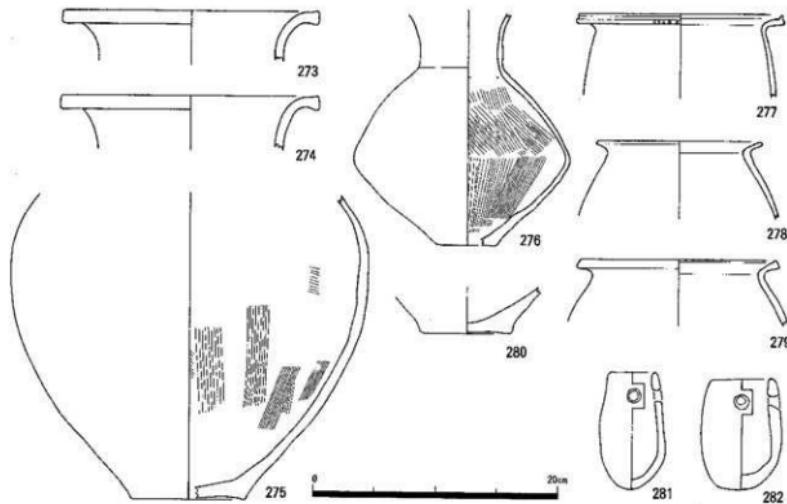


〔第5面〕



[NR216・217位置図]

第96図 97-7区第4・5面平面図(S=1/250)・第5面NR216・217位置図(S=1/500)



第97図 SK199出土遺物 (S=1/4)

本遺構の時期は弥生時代中期から後期である。

SX197(第98・99図、図版37・39・41・56)

F4-6-M1-f9-4、f9-2-4で検出

した自然河川である。方向はN—

20度—E、規模は、検山長7.1  
m、幅2.3m、深さは0.5mを測  
る。断面形は浅い皿状である。

NR216が埋まつた後、再びこれ  
を切り込んで流れたものである。

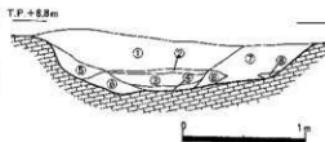
覆土は5層で、第1・3・5層  
から第III～IV様式の弥生土器と  
弥生時代中期の真鉄盃(283)等  
が出土した。本遺構の時期は弥  
生時代中期である。

SD198(第100図、図版37・39)

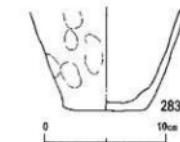
F4-6-M1-f9-1-2で検出した自然河川である。方向はN—75度—Eである。

規模は、検出長3.1m、幅0.4～0.6m、深さは0.26mを測る。断面形は半円  
形に近い不整形である。F4-6-M1-f9-2の中央付近でSD197から分かれる。

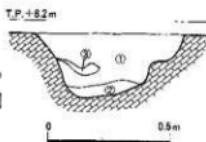
覆土は3層で、第III～IV様式の弥生土器が出土した。本遺構の時期は弥生  
時代中期である。



第98図 SX197断面図 (S=1/40)



第99図 SX197出土遺物  
(S=1/4)



第100図 SD198断面図  
(S=1/20)

SD202(第101図、図版41・57)

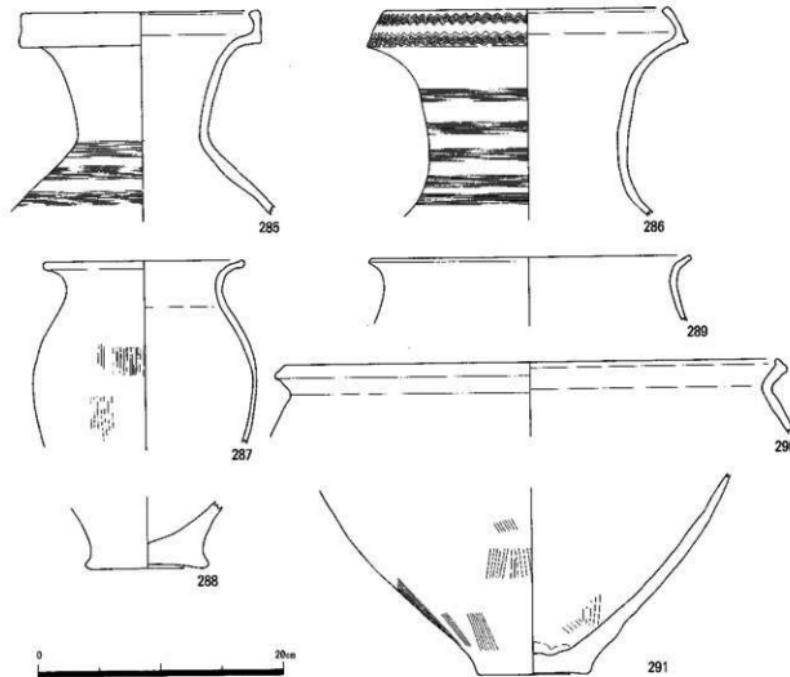
E4-6-M1-i5-3・4、E47-N20-j4-2・4、j5-1～4、E4-6-N1-a4-2、a5-1で検出した自然河川である。調査区の東壁からN-50度-Eの方向で流れ、j5-3、j4-4で2方向に分かれて、一方は北へ湾曲し、もう一方はほぼ直角に南側へ曲がる。自然河川NR216・217のオーバーフローによって形成されたもので、堆積しているのが主に粘土であることから、常に滞水していた状況が想定される。規模は幅3.5～6m、深さは0.5mを測り、断面形は浅い皿状である。覆土は7層で、第Ⅱ様式と第Ⅳ様式の土器を含む。図示したのは第Ⅳ様式の広口短頸壺(284)である。本遺構の時期は弥生時代中期である。

SD205(第102図、図版39・42・61)

E4-6-M2-d1-3、e1-1で、SK199の下層から検出した自然河川である。方向はN-65度-Eである。規模は、検出長5.5m、幅1.75m、深さは0.52mを測り、断面形は半円形である。覆土は4層で、弥生時代前期から中期の土器が出土した。図化した土器は、第Ⅱ様式の壺(288、289)、第Ⅲ様式の段状口縁壺(286)、第Ⅳ様式の広口短頸壺(287)、段状口縁壺(285)、壺(290)、弥生時代中期の壺(291)である。(288)は紀伊産である。本遺構の時期は弥生時代中期である。



第101図 SD202出土遺物 (S=1/4)



第102図 SD205出土遺物 (S=1/4)

SX208(第103図、図版40・63)

E4-6-M1-g7-3、h6-2・3・4、h7-1・3、i5-2、i6-1・2・3で検出した自然河川である。調査区北壁から北西へ向かい、h7-3・4の北壁沿いにある地山の高まりを中心に円弧を描くように北へ向かって調査区外にのびる。規模は、検出長約8m、最大幅約7m、深さは0.2mを測り、断面形は浅い皿状である。覆上は3層に大別できる。第II様式の壺(296)、第IV様式の広口短頸壺(293)、弥生時代中期の壺(292)、甕(294)、土器の底部(295、297)等が出土した。本遺構の時期は弥生時代中期である。

上器群 SX200、SX204、SX206、SX207が検出された。

SX200(第104・105図、図版39・57)

E4-6-M2-e1-1で検出した土器群である。黒褐色砂中で検出し、範囲は $2.1 \times 0.9$ mを測る。本土器群は、SK199の北側に接しており、同一の遺構である可能性があったが、土層観察の結果、黒褐色砂はSK199の覆上とは異なると判断して土器群単独の遺構名を与えた。弥生時代前期から第IV様式の上器が出土したが、大半は第III・IV様式である。第III様式の広口長頸壺(298)、第IV様式の広口短頸壺(299)、細頸壺(300)、無頸壺(301)、甕(302、303)等が出土した。本遺構の時期は弥生時代中期である。

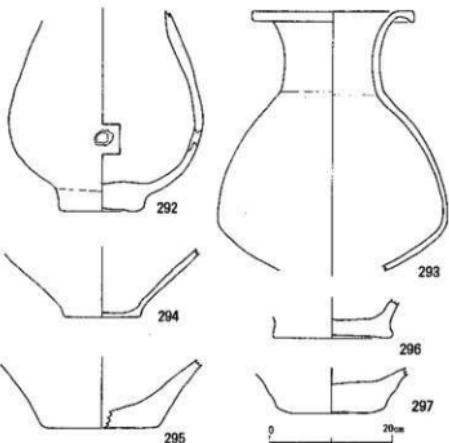
SX201

E4-6-M1-h8-2の自然河川NR217内で検出した土器群である。土器群の範囲は0.6

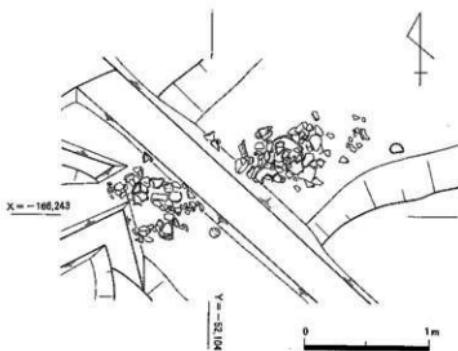
$\times 0.6$ mを測る。上器はすべて小破片であるが、弥生時代中期の飯蛸壺が主体であり、弥生時代前期の上器片も少量含む。本遺構の時期は弥生時代中期である。

SX204(第106~111図、図版37・38・57~61)

E4-6-M1-f9-1~4、g9-1・2の自然河川NR216内で検出した土器群である。上器群は、E4-6-M1-g9-1・2で検出した大規模なものと、その北東側、f9-4にある小規模なもの2カ所にまとまりを見せる。土器群の範囲は、前者が $6.4 \times 1$ m、後者が $0.5 \times 0.5$ mである。弥生時代前期から第IV様式の土器が出土したが、弥生時代前期はわずかで、第II~IV様式が多くを占めている。土器群の検出された範囲は河川の底が窪んでいたこと、これらの土器は磨耗も比較的少なく、接合可能なものも含まれていたこ

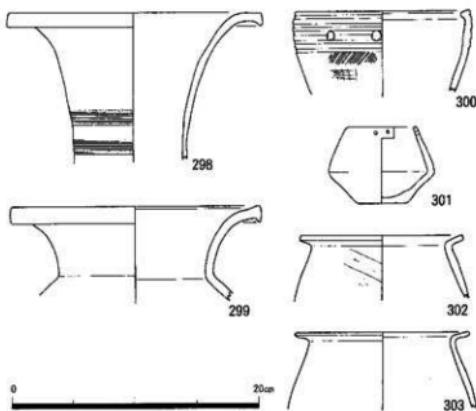


第103図 SX208出土遺物 (S=1/4)

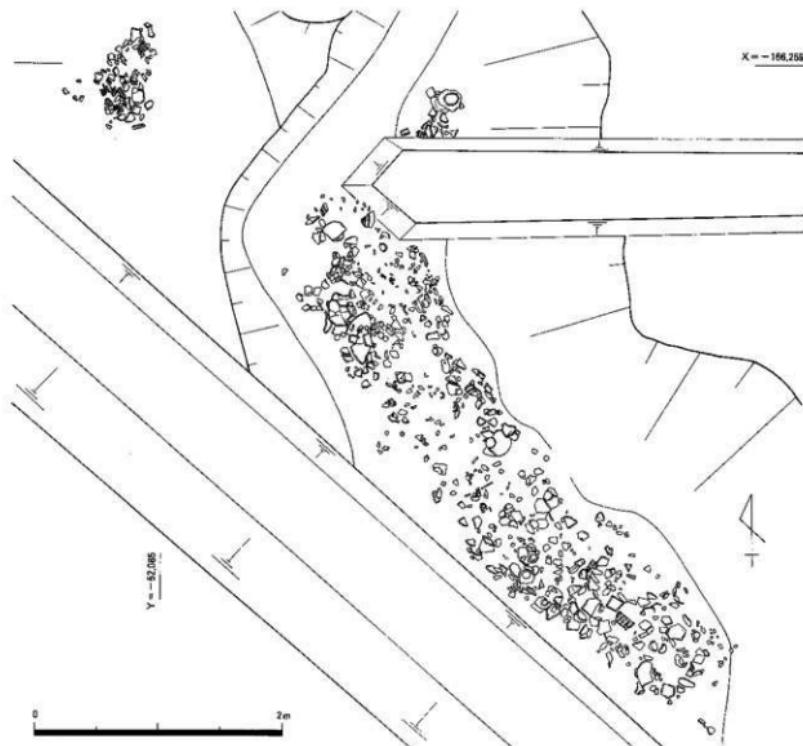


第104図 SX200遺物出土状態 (S=1/40)

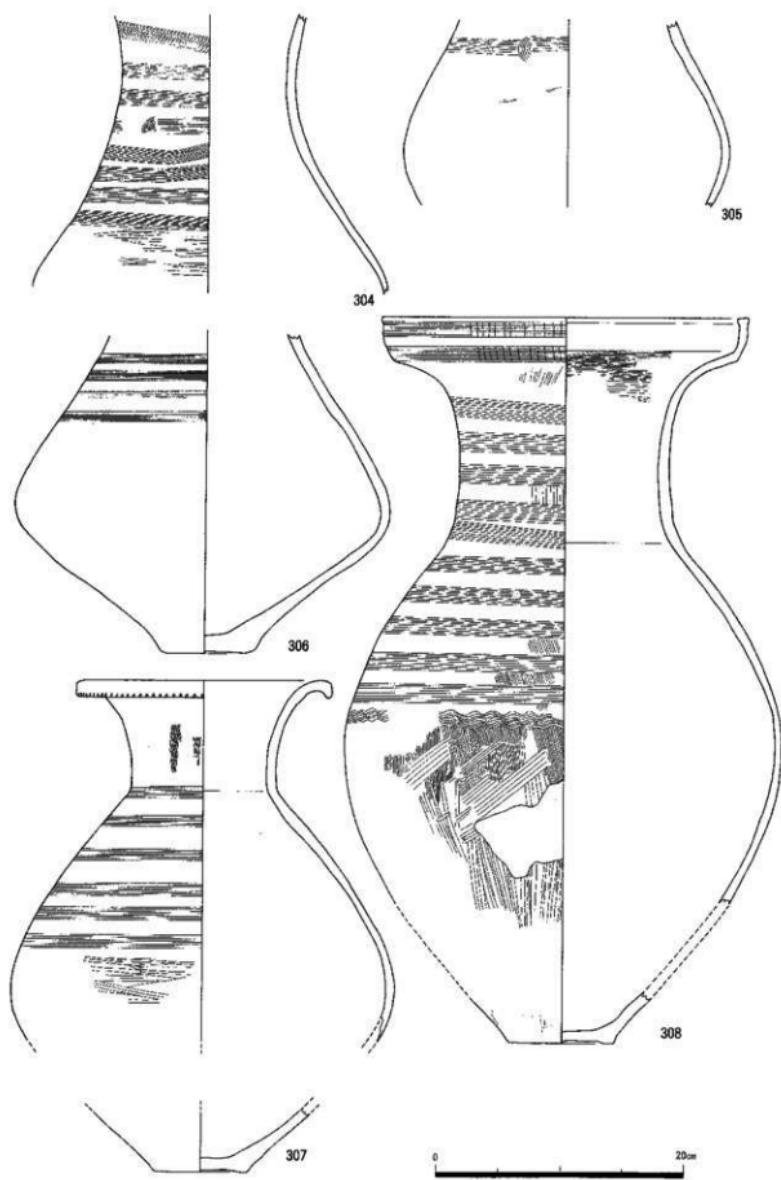
とから、河川内の底みに土器が投棄されたものと考えられる。第Ⅱ様式の広口長頸壺(305、313)、甕(321~340、342)、第Ⅲ様式の広口短頸壺(307、309)、段状口縁甕(320)、甕(343)、鉢(351)、第Ⅳ様式の広口短頸壺(310)、広口長頸壺(304、306)、段状口縁甕(308)、甕(341、346~350)、弥生時代中期の甕(311、312、314~319)、甕(344、345)、鉢(352)、貞蛸甕(353~362)、飯蛸甕(363、364)等が出土した。(320、348)は生駒西麓産である。(334~340)は紀伊産である。本遺構の時期は弥生時代中期である。



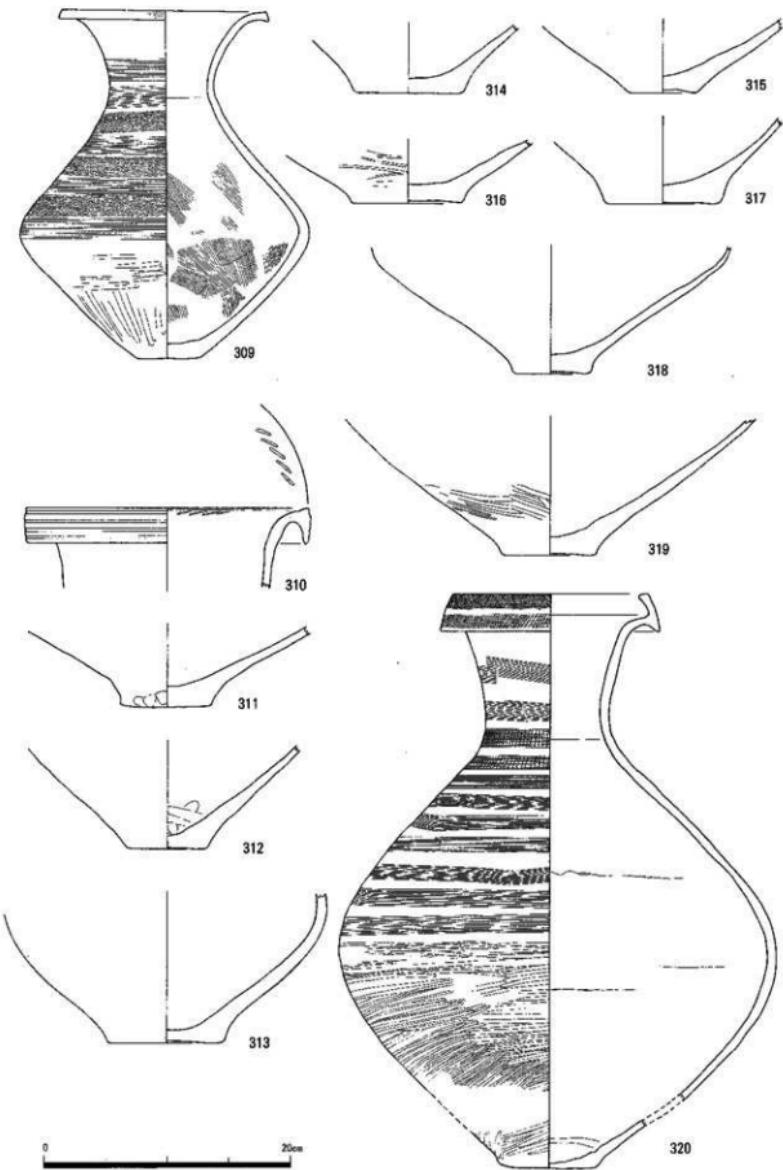
第105図 SX200出土遺物 (S=1/4)



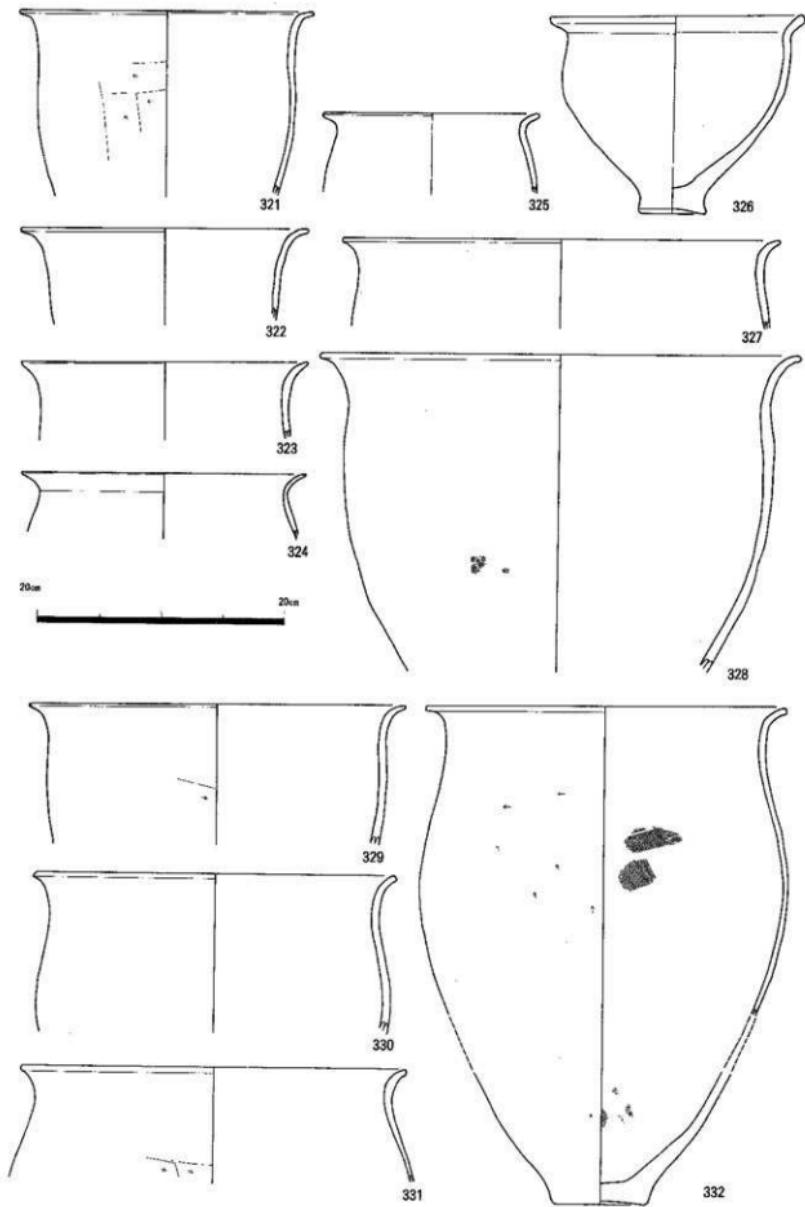
第106図 SX204遺物出土状態 (S=1/40)



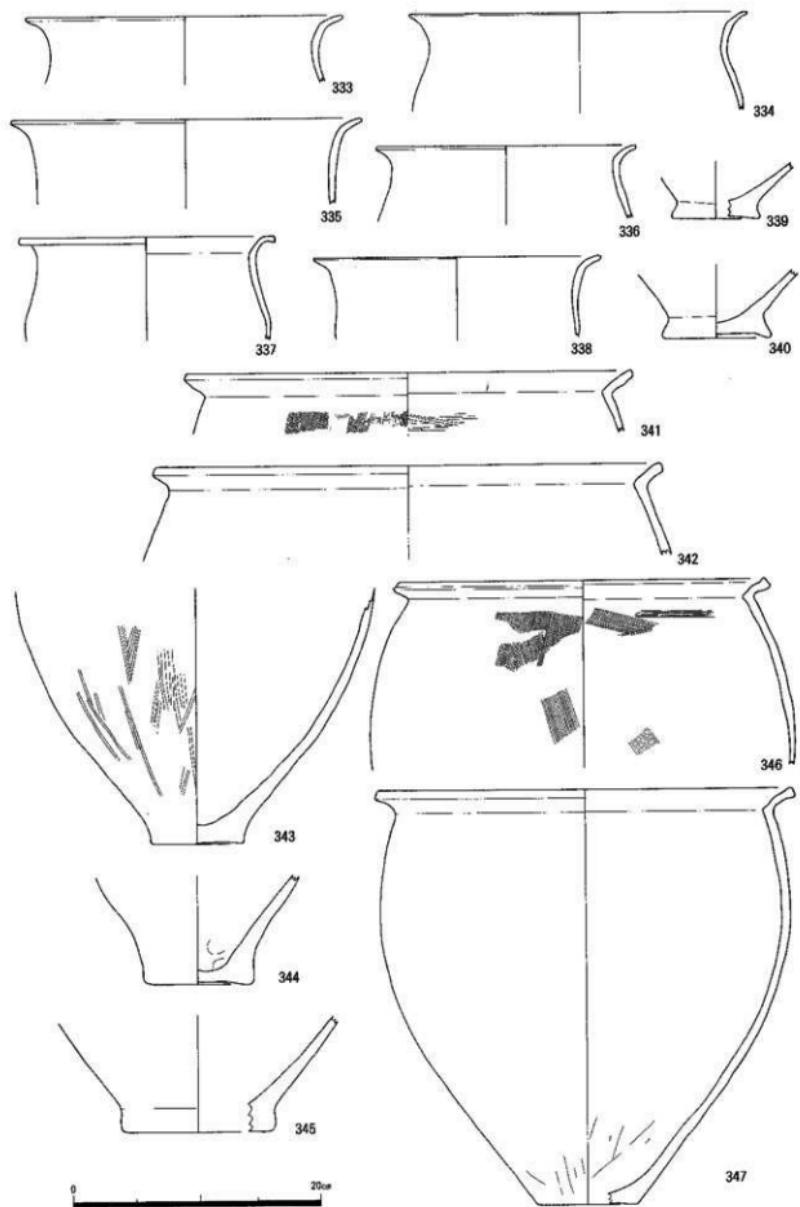
第107図 SX204出土遺物・1 (S=1/4)



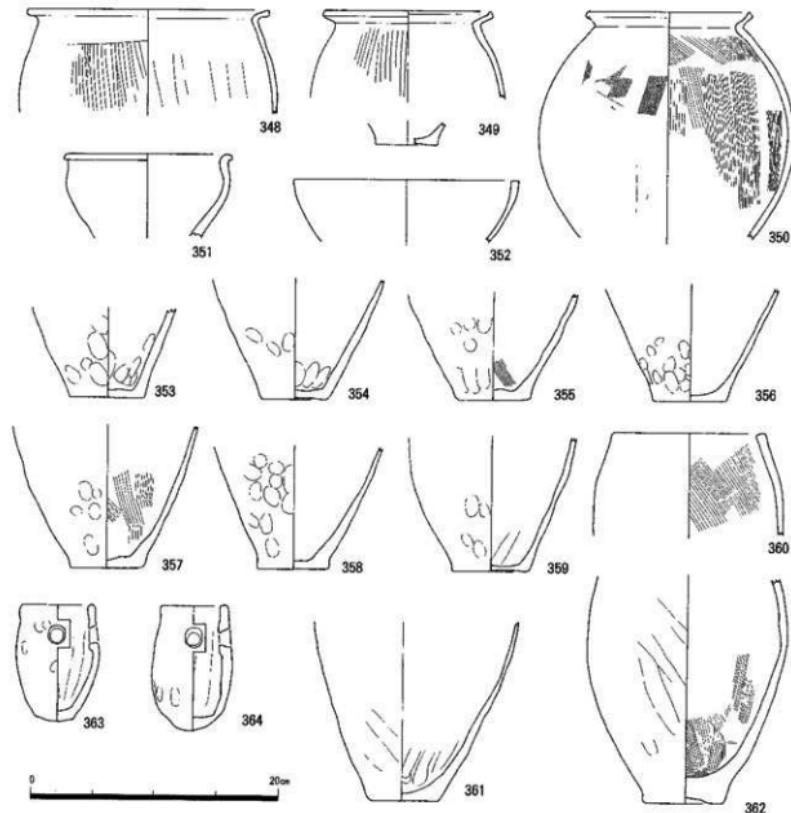
第108図 SX204出土遺物・2 (S=1/4)



第109圖 SX204出土遺物・3 ( $S=1/4$ )



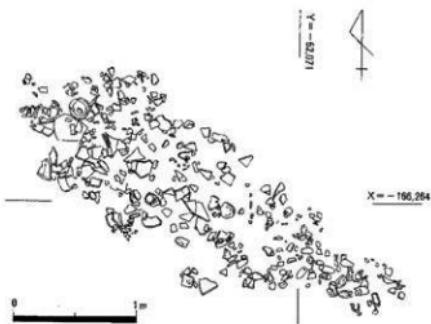
第110図 SX204出土遺物・4 (S=1/4)



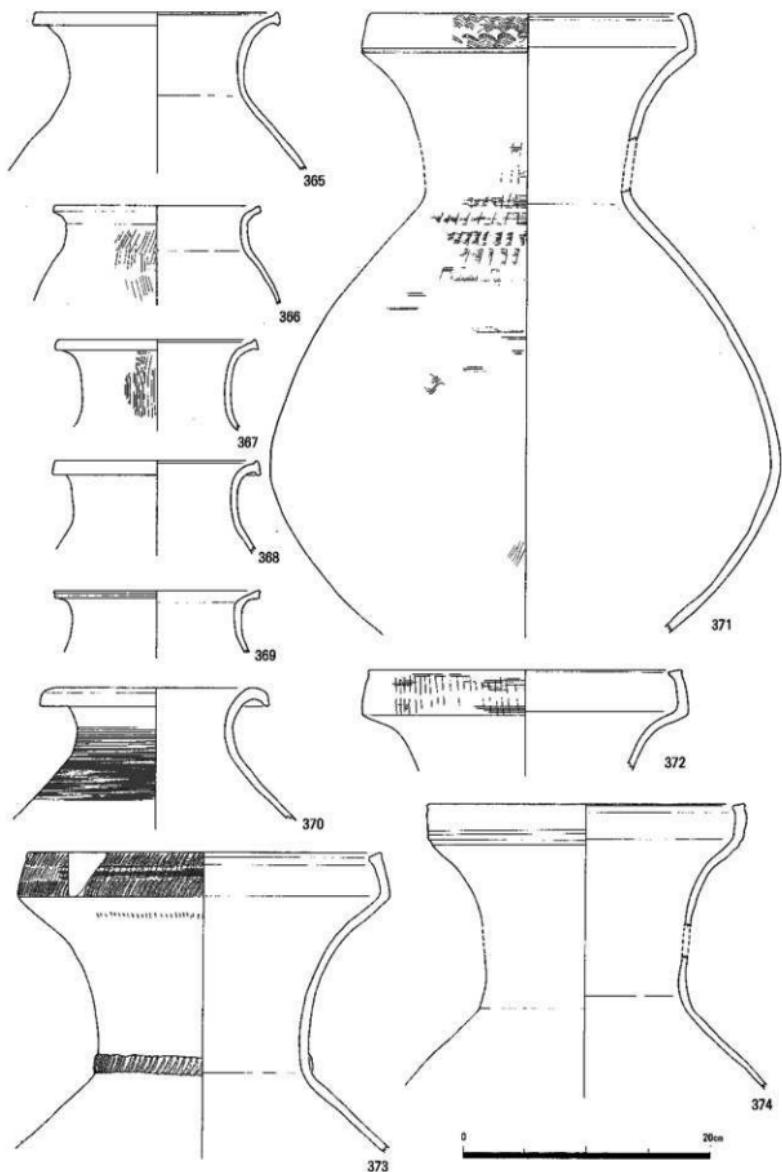
第111図 SX204出土遺物・5 (S=1/4)

SX206(第112~114図、図版40・62)

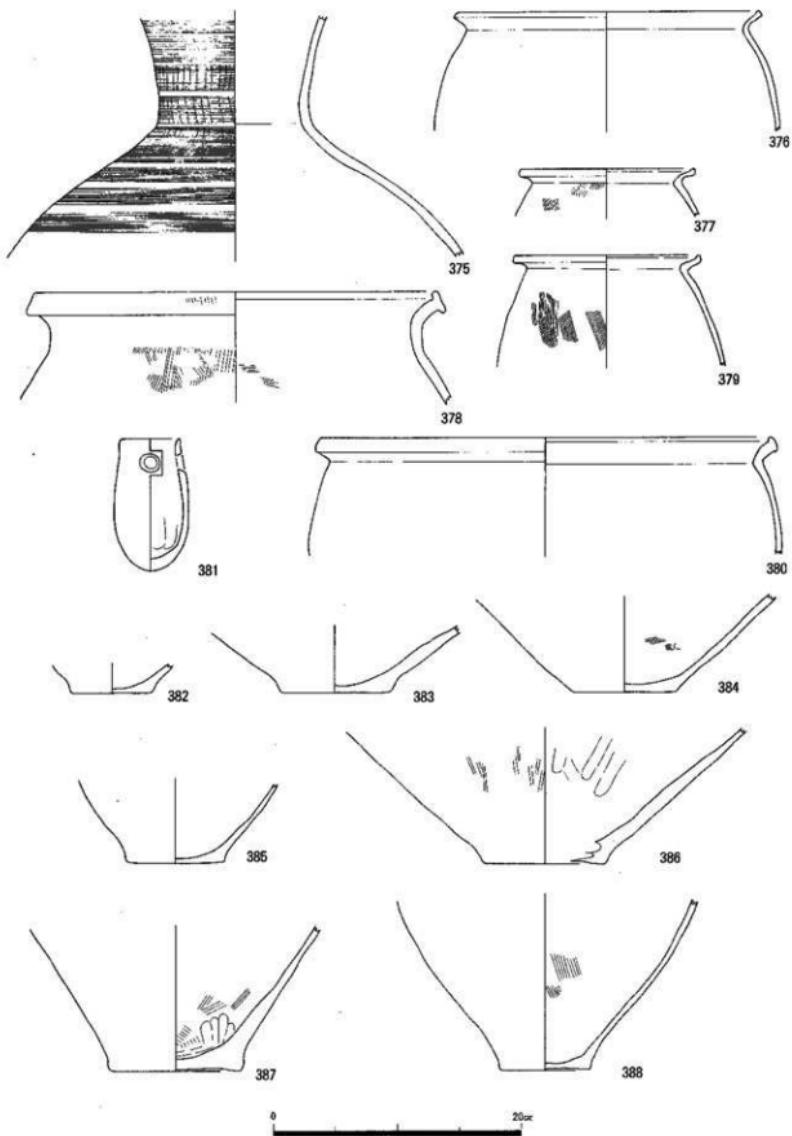
E4-6-M1-g7-4、g 8-1・2で検出した上器群である。自然河川INR217内で検出した。土器群の範囲は3.6×1.2mを測る。土器群の底は約0.3m深んでいて、砂礫混じりの黒色粘土が堆積する。第III・IV様式の上器が多量に山上した。この土器群もSX204同様、川底の窪みに土器が投棄されたものであると考えられる。第IV様式の広口短頸壺(365~370)、段状口縁壺(371~374)、甕(376~380)、弥生時代中期の壺(375、382~384、386)、甕(385、387、



第112図 SX206遺物出土状態 (S=1/40)



第113図 SX206出土遺物・1 (S=1/4)



第114図 SX206出土遺物・2 (S=1/4)

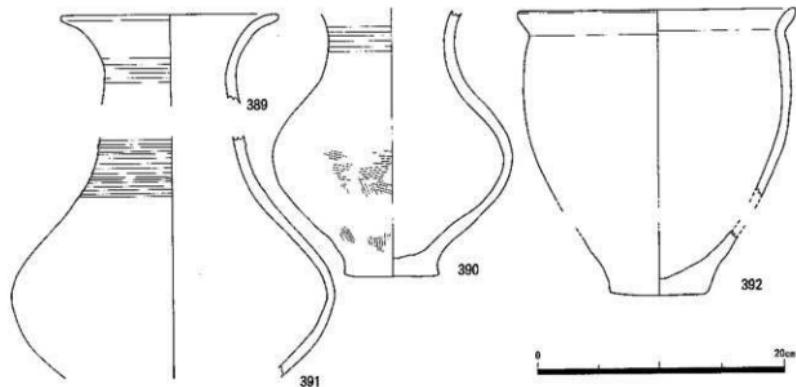
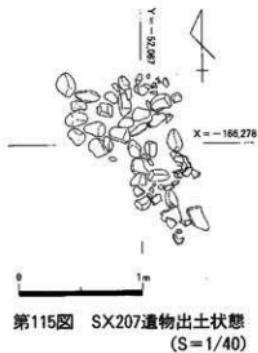
388)、飯蛸壺(381)等が出土した。本遺構の時期は弥生時代中期である。

#### SX207(第115・116図、図版40・63)

F4-6-M1-h7-4の自然河川NR217内で検出した土器群である。土器群の範囲は1.4×0.8mを測る。20cm程度の礫と土器片が集中して出土した。土器群のあった範囲内に窪みはなかったが、山上状況から自然に堆積したものではなく、集積されたものであると考えられる。土器は大半は第I～II様式であるが、第III様式の土器片も少量含まれていた。図示したのは第II様式の広口長頸壺(389～391)、甕(392)等である。(389)と(390)は同一個体と思われる。本遺構の時期は弥生時代中期である。

#### 包含層出土遺物 (第117～119図、図版64)

第2層からは、縄紋時代の石鎌(419)等が出土した。第3層からは、弥生時代の石鎌(424)等が出土した。第5層(灰黄褐色土)からは、II型式5段階の須恵器の杯身(393)、古墳時代後期の短頸壺(394)、弥生時代の石鎌(428)等が出土した。第6層(暗褐色砂混じり土)からは、弥生時代の石槍(432)、石鎌(426)、縄紋時



第116図 SX207出土遺物 (S=1/4)

代の石鎌(420)等が出土した。

石製紡錘車(416)、大型蛤刃石斧の破片(434)は灰黄褐色粘土から出土した。調査区東側、第4面で検出された自然地形の落ち込みの覆土である。(434)は破損した後、叩き石として使用していたと考えられる。

弥生時代の石鎌(427)は、暗褐色粘土から出土した。灰黄褐色粘土の下層に堆積する層である。

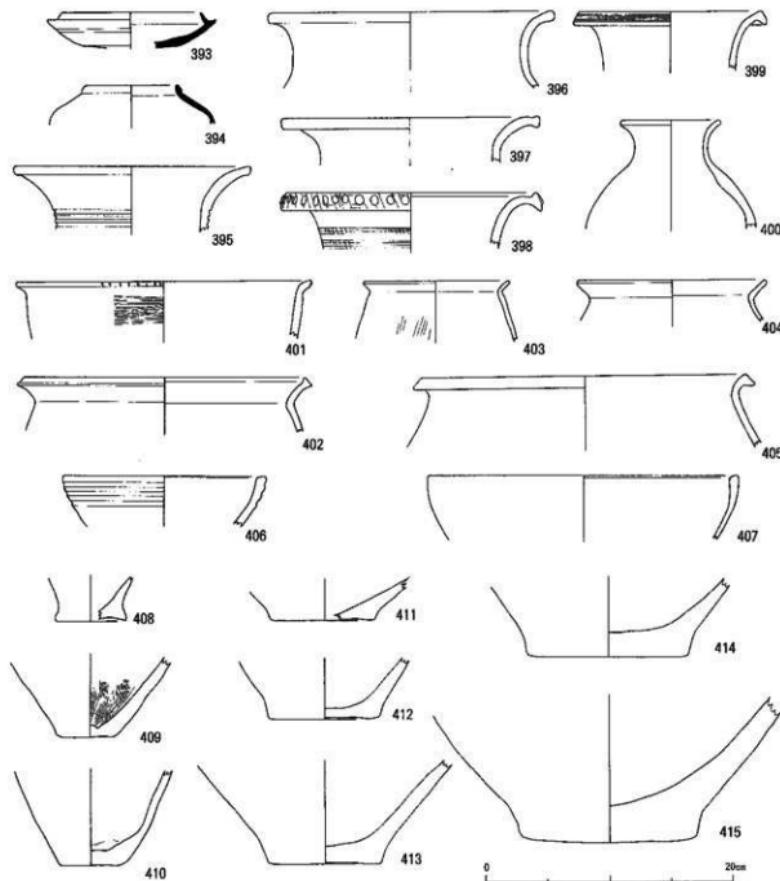
弥生時代前期の壺(395)、甕(401)、第III様式の甕(403)、第IV様式の広口短頸壺(396)、甕(405)、鉢(407)、中期の甕の底部(415)、器種不明の底部(414)、縄紋時代の石鎌(421、422)、弥生時代の磨製石剣(433)、石鎌(423、430)は、黒褐色礫混じり土から出土した。第5面で検出したNR216の堆積層であ

り、SX204上層部から出土した。SX204に伴う遺物である可能性が高い。

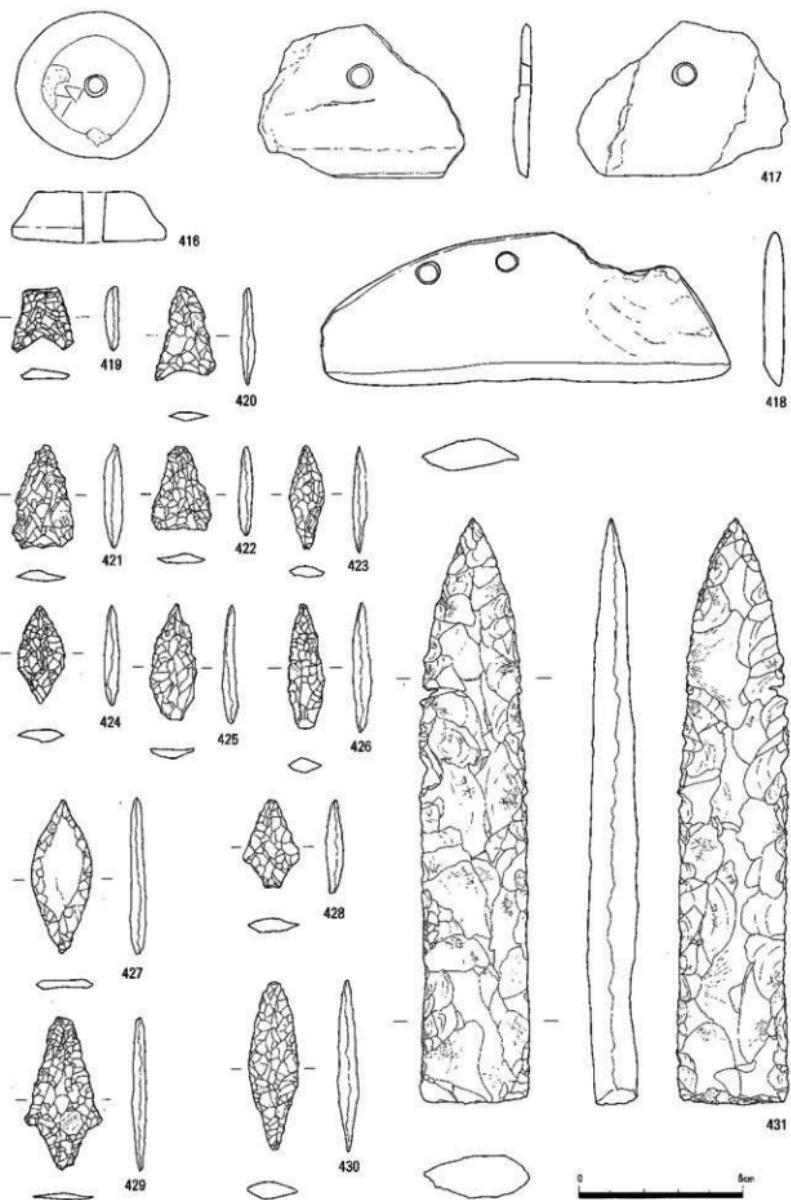
弥生時代中期の土器の底部(413)、弥生時代の打製石剣(431)、石鐵(425)、石包丁(417)は、黒色礫混じり土から出土した。第5面で検出したNR217の堆積層であり、SX206・207・201上層部から出土した。

第II様式の壺(408)、第III様式の広口短頸壺(397)、甕(402、404)、第IV様式の広口短頸壺(398、399)、鉢(406)、弥生時代中期の広口短頸壺(400)、真蛸壺(409、410)、土器の底部(411、412)は、黒灰色礫混じり土から出土した。調査区の西端、第6層と第7層の間に挟在する層である。

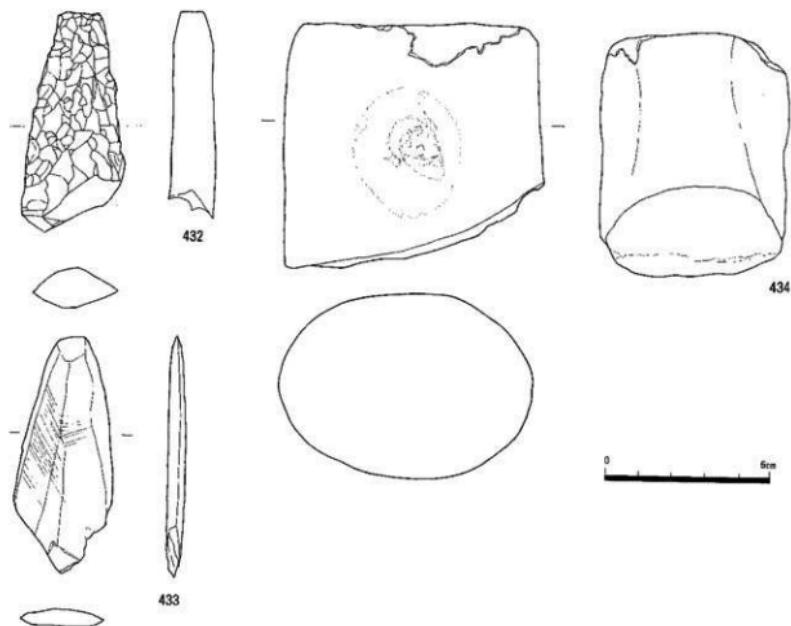
石包丁(418)は、灰褐色粘土から出土した。調査区東側、第5面SX208の上面で検出したもので、SX208に伴う可能性がある。



第117図 97-7区包含層出土遺物・1 (S=1/4)



第118図 97-7区包含層出土遺物・2 (S=2/3)



第117図 97-7区包含層出土遺物・3 (S=2/3)

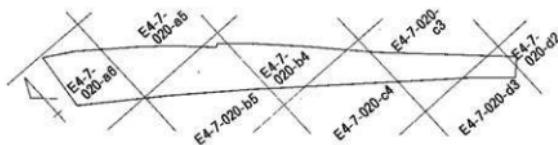
弥生時代の石鎌(429)は、褐灰色細砂混じり土から出土した。調査区の中央～西側、第6層と第7層の間に部分的に挟在する層である。

### 小結

当調査区は縄文時代以前から弥生時代中期まで継続する自然河川の河道にあたり、あまり大規模ではないが、自然堤防を形成している。弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけても短期的に河川が流れるが、本流ではなくなっている。礫混じりの自然堤防堆積土は、耕地、墓域といった有効な土地利用の妨げとなつたようで、弥生時代前期から後期まで流路跡に土器片等を廃棄するような場であつたらしい。古墳時代後期から古代にかけても流路跡に土器片を廃棄する行為は続く。中世以降によく耕作地として利用され始め現在に至つているようである。

(藤澤、大洞)

## (8) 97-8区の調査結果



第120図 97-8区地区割図 (S=1/500)

第1面(第122図、図版42) 近世の遺構面である。

井戸 SK209を検出した。

SK209

E4-7-020-c4・b4-4で検出した井戸である。平面形はややいびつな円形、規模は長径1.45m、短径1.1m、深さは0.8mを測り、断面形は方形である。覆土は5層に大別できる。土層断面の形状から井戸枠が抜き取られたものと考えられ、1～3層は井戸枠抜き取り後の覆土上、4層は掘形埋土、5層は掘形掘削時の落ち込み土あるいは前身井戸の掘形埋土と考えられる。

溝 SD213を検出した。

SD213

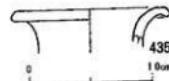
調査区北壁に平行して検出した溝である。溝の方向はほぼ東西で、3ないし4条の溝が同方向で錯綜している。現代まで続く水路の前身遺構と考えられる。本遺構の時期は近世である。

第2面(第122図) 弥生時代中期の遺構面である。

溝 SD214を検出した。

SD214(第121・123図、図版42)

E4-7-020-b5-3～a5-6で検出した溝である。溝の方向はほぼ南北であるが、西側の肩は湾曲している。規模は幅約4m、深さは0.5mを測り、検出長は2.5mである。断面形は浅い皿状を呈する。覆土の状況が3区で検出した方形周溝墓の覆土に酷似しており、西側にわずかに残る高まりが方形周溝墓の墳丘である可能性がきわめて高い。第IV様式の広口短頸壺(435)等が出土した。

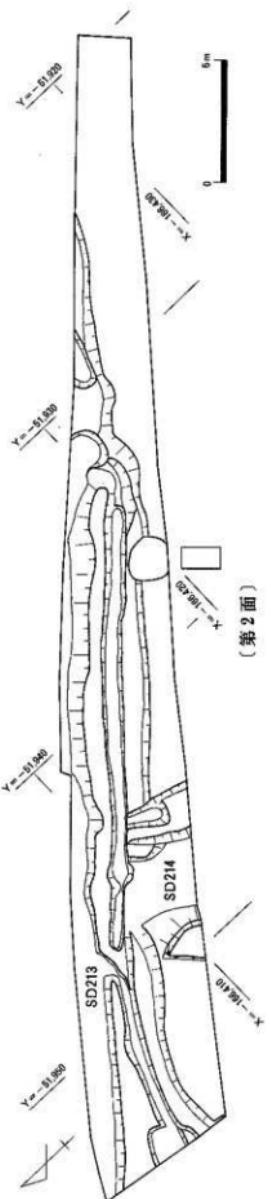
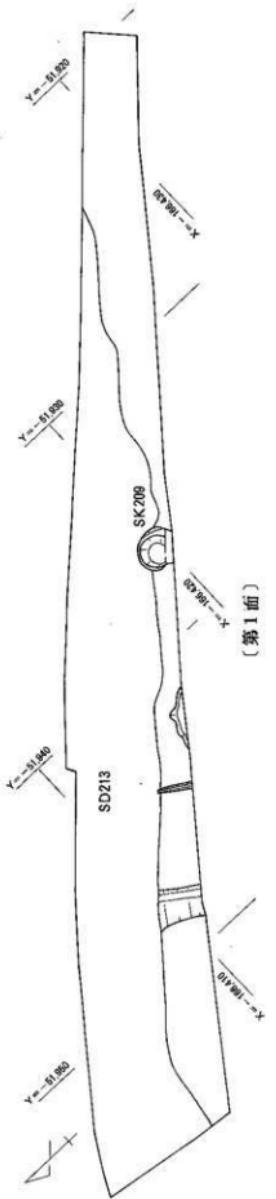


第121図 SD214  
出土遺物 (S=1/4)  
(広口)

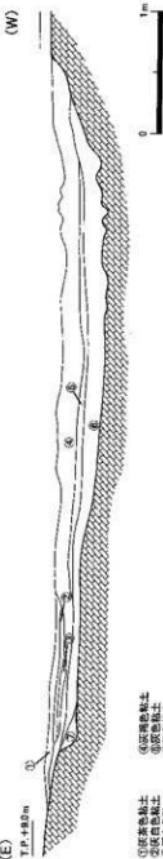
## 小結

本調査区は97-3区の南側に位置し、水路部分の調査である。調査面積は狭く、遺構の遺存状態も良くなかったが、97-3区で検出した方形周溝墓群がさらに南側にも広がっていることが確認されたことの意義は大きい。

(広瀬)



第122図 97-8区第1・2面平面図 ( $S = 1/200$ )



第123図 SD214断面図 ( $S = 1/40$ )

## 考察 1

### 和泉地域第III・IV様式の編年

—97年度調査出土土器の検討—

地村 邦夫

#### 1. はじめに

本稿は今回の調査で出土した土器の編年的な位置づけを行うことを目的とする。その前提となる和泉における弥生土器編年は近年の樋口吉文氏の研究によって大きく前進していると評価することができよう。本稿に最も関係する中期に限っても、第IV様式を「櫛描文土器の退潮と、それに反比例する凹線文土器及び、無文土器の盛行」と定義され、型式学的に抽出する形をとることによって、その内容を示されたことは重要な成果の一つである。しかし現状では問題点も残されている。特に資料的制約が大きいため第IV様式の様式内容が不十分であり、氏の設定されたIII-3様式からIV様式に至る中期後半の器種の消長やそれぞれの属性の変遷が現段階では十分明らかにされていないと考えている。また、この問題点は他地域との併行関係を探る上でも障害となっているように思われる。

このように和泉地域の中期の編年については現在も不確定要素が多く残されている上、今回の調査で出土した土器の大半は当該期に属することもあって、整理にあたっては改めて編年作業を試みることにした。ただ弥生時代を通しての編年はここでは到底不可能であるので、時期を第III・IV様式に限定して編年を試み、その内容に基づいて本調査出土土器の位置づけを試みることにする。

#### 2. 和泉地域の第III・IV様式の編年

##### (1) 編年の指標

編年においては、本来ならば各形式の組列を明らかにした上で、良好な一括遺物を用いて各形式および型式の関係を把握していくことが必要であり、そのための資料は十分ではないにしても、かなり蓄積されている。しかし実際の土器の様相は複雑で、筆者の力では短期間では整理しきれないのが現実であった。そこで特定の形式を選択し、その変化の過程を段階的に捉えることで、編年の指標とする方法をとる。

編年の指標とする形式は、対象となる第III・IV様式を通じて組列を把握できるものである必要がある。広口長頸壺や広口短頸壺は出土量も多いが、当該期を通じて器種の分化が進み、指標とするには様相が複雑すぎた。こうした問題点ができるだけ少ないものとしては水平口縁の高杯を擧げることができる。水平口縁の高杯は第II様式の古い段階から出現し、中期を通じて存在するが、その変化は口縁部、内面突帯、脚部にそれぞれ明瞭な形で現れる。本稿では水平口縁の高杯の変化を編年の指標とすることにしたい。

##### (2) 段階区分の設定

###### (a) 水平口縁の高杯の段階区分

指標となる水平口縁の高杯の段階区分を設定する。

第1段階 杯部は深く、水平に伸びる口縁は全く垂下しない段階である。内面の突帯は低く、内傾している。全形を窺える良好な資料がないため脚部は不明であるが、第II様式の形態を色濃く残している。

第2段階 水平に伸びる口縁の端部が肥厚し、わずかながら垂下が認められるようになる段階である。内面の突帯は依然低く内傾している。これも全形を窺える資料がなく、脚部は不明である。

- 第3段階 水平に伸びる口縁の端部は明確に屈曲し、垂下するようになる段階である。垂下の度合いはまだ小さい。内面の突帯は高くなり、上方に突出するものがある。胸部は緩やかに広がる。
- 第4段階 口縁端部が第3段階よりも更に垂下するようになる段階である。垂下長は水平部分の長さの6～7割程度となる。内面の突帯は第3段階と同じくらい高い。全形を窺える資料がないが、筒状の脚柱部から明瞭に屈曲して裾部が広がる。脚裾部の端面が広くとられる。
- 第5段階 口縁端部が更に垂下し、垂下長が水平部分の長さとほぼ同等になる段階である。内面の突帯は依然高い。脚部は筒状の脚柱部から裾部への屈曲が一層明瞭となり、裾部の広がりは直線的である。脚裾部の端面がさらに広くなる。
- 第6段階 水平口縁の高杯が衰退すると考えられる段階である。資料は現状では皆無で、周辺地域の知見から本段階を設定する。

最も変化の大きい水平口縁部を形式学的に分類し、6段階を設定した。ここではっきりさせておかなければならぬことは、各段階の水平口縁の高杯を含む一括資料が現状では非常に少ないという事実である。各段階の様相が明らかにできるのは第1、3(確実な例ではない)、5段階に限られている。しかし残る第2、4、6段階をそれぞれの前後の段階の中間的な様相として探るのは問題が大きすぎる。水平口縁の高杯による段階区分との対応関係が明快な別の指標を用いて、これを補うことが現実には必要であると考える。補助的な指標として有効と考えるのは段状口縁壺である。段状口縁壺は第Ⅲ様式から出現し、第Ⅳ様式末で姿を消す。その変化は段状口縁部分に特に顕著に現れ、全体としてその変化は把握しやすい。ただ凹線文を採用する段階の口縁部の形態は一様ではなく、胸部の変化も資料的制約から十分明らかでないので注意が必要である。次に段状口縁壺の段階区分を示すこととする。

#### (b) 段状口縁壺の段階区分

- 第1段階 段状口縁壺出現期の段階である。出現期であることから、形態にばらつきが認められるが段状口縁の屈曲部が弱いか、あるいはゆるやかなカーブを描くものが多い。全形を窺える資料は皆無あるため、胴部についてはよくわからない。
- 第2段階 段状口縁部の屈曲が明確になる段階である。また胴部最大径は胴部中位より上に位置し、肩が大きく張った器形となる。
- 第3段階 段状口縁部の屈曲が更に明確になる段階である。口縁部は内傾するものとほぼ垂直に立ち上がるものがある。段状口縁部の長さは口径に比して短い。
- 第4段階 第3段階に比べて段状口縁部が長くなり、なおかつ最も口径が大きくなる段階である。口縁部はやはり内傾するものとほぼ垂直に立ち上がるものがある。
- 第5段階 段状口縁部の屈曲が明確で、垂直に立ち上がる。胴部最大径は中位にあり、肩の張りは弱くなる。前段階と比べると口径は縮小するようである。
- 第6段階 段状口縁壺が衰退する段階である。現状では全形を窺える資料がなく、口縁部以外の詳細は不明である。本段階で口径が急速に縮小する。また段状口縁部の屈曲は再び不明瞭となるものが多く、屈曲の明瞭なものも口縁部の立ち上がりが短くなる。

#### (c) 段階区分の対応関係

以上のように段状口縁壺も6段階を設定することができた。しかしこれは偶然であって水平口縁の高杯の各段階とそれぞれ対応するかどうかを確認しなければならない。一括資料中に水平口縁の高杯と段状口縁壺を含む資料を用いて、対応関係を探ることにする。

第1段階の水平口縁の高杯を含む良好な資料に池上遺跡SF077山上土器がある(後述)。一括資料ではないが本資料に含まれる段状口縁壺は第1段階が多く、それぞれが対応する可能性は高い。

第2段階の水平口縁の高杯を含む良好な一括資料ではなく、段状口縁壺も良好な一括資料中に見いだすことはできない。とともに形式学的に設定したもので対応関係を直接論じることはできない。

第3段階の水平口縁の高杯を含む一括資料に池田下遺跡方形周溝壺3出土土器がある(後述)。段状口縁壺の第3段階が併存していることから、それぞれが対応する可能性が高い。ただ本例は供獻土器として水平口縁の高杯の口縁部が打ち欠かれており、脚部の特徴で決めているので確実性は落ちる。

第4段階の水平口縁の高杯を含む良好な一括資料はない。しかし先述の通り確実性は落ちるが第3段階は対応することと、それぞれの第5段階が確実に対応するので、第4段階も両者が対応する可能性は高いと考える。

第5段階の水平口縁の高杯を含む良好な一括資料に下田遺跡SD1305第5・6層出土土器がある(後述)。段状口縁壺第5段階が併存しており対応関係は確実である。

第6段階の水平口縁の高杯は資料がないので段状口縁壺との対応関係を論じることはできない。

この様に、水平口縁の高杯と段状口縁壺のそれぞれの段階の対応関係については第2、6段階を除いてほぼ認めて良いと思われる。残る第2、6段階のうち、第6段階は現状では段状口縁壺のみの段階区分だが、中期末の様相を明らかにするために設定する。また第2段階はともに形式学的な設定にすぎないが、各形式の消長をたどる上で本段階の設定は不可欠であると考えている。そこで指標そのものに不確定要素を含むことになるものの、第2段階はそれぞれ対応するものと仮定して論を進めたいと思う。

### (3) 各段階の上器組成

各段階の上器組成を一括遺物を中心に据えて明らかにしたい。ただ良好な資料は限られており、器種の偏りもどうしても生じることから、形式学的にみて妥当と判断されるものを加えている。

#### 第1段階

本段階を構成する主要な器種には広口長頸壺、広口短頸壺、段状口縁壺、細頸壺、無頸壺、甕、鉢、高杯などがある。文様は直線文、波状文が中心である。簾状文は和泉では第II様式に確認されているが、資料が不十分なこともあるのか本段階の土器には見いだせなかった。本段階の基準的な資料には池上遺跡SF077山上土器がある。本遺構出土土器は全体としては凹線文出現以前のまとまった資料として評価されるが、詳細に検討すると第2段階～第5段階の土器も含んでいる。従ってここから形式学的に新しいものを除き、他遺構・他遺跡の資料で本段階と判断されるものを加えている。

広口長頸壺(501・502)には2種ある。ひとつは球形の胴部と胴部高を大きく凌駕する長大な口頸部を持つもので、501はその好例である。和泉地域では類例はほとんど無く、本段階にしか確認されない。河内の影響を受けて成立したと考えられる。もう一つは第II様式の広口長頸壺から発展した502である。口縁端部は上下に肥厚し、ほぼ垂直の端面をつくる。端面には波状文を、頸部には直線文を施す。

広口短頸壺(503・504)は本段階と断定できる資料は限られている。図示した資料はいずれも細頸の広口短頸壺で人類のものが存在するかは不明である。503は広口長頸壺と共に特徴を有している。504は小型品で第II様式に比して胴部の張りが強くなり、算盤玉に近い形態をとる。口縁も第II様式に比して大きく聞くようになる。

段状口縁壺(505～507)は本段階に出現する。口縁部は無文のものもあるが波状文、扇状文を施すのが一般的である。頸部には直線文を施すものがある。

細頸壺(508)は類例が少ないが、算盤玉に近い特徴的な器形で、文様は直線文を施す。

無頸壺には良好な資料がない。

甕(509・510)は人・中・小型品に分類できるが、大・中型品を図示しておく。第Ⅱ様式に比して頸部の屈曲が明瞭になるが、肩部の張りは小さく、口縁端部もほとんど肥厚しない。

鉢(511～514)もまた大型、中型、小型にわけることができる。大型の鉢には第Ⅰ様式以来の古朴を残す513がある。口縁付近に凸帯を巡らし、本段階では依然無文である。中型の鉢は図示した511が本段階以降の通有の鉢となる。胴部の屈曲が丸みを帯びており、口縁端部も未発達である。通常、直線文と波状文で飾られる。小型の鉢は器形のバリエーションが豊富である。例として512、514を挙げておくが、本段階では文様の施されるものは少ないようである。

高杯には水平口縁の高杯(515)と皿状の坏部を持つ高杯がある。皿状の坏部を持つ高杯は良好な資料がないが、本段階にも確実に存在する。

## 第2段階

第2段階では器種構成に変化はない。文様では格子文・円形浮文が現れる。格子文は壺および鉢に散見され、円形浮文は壺の口縁部に施すものがあるが、本段階では主要な文様とはなりえていない。簾状文は壺の頸部に一部認められる程度である。本段階の基準的な資料としては四ツ池遺跡YOB90地区B・SI001弥生土器溜まり出土土器<sup>(4)</sup>がある。この他、形式的に本段階と考えられるものを池上遺跡SI074・077、栄の池遺跡SX001・002出土土器<sup>(5)</sup>を中心抽出し構成している。

広口長頸壺(520)は良好な資料が少ない。520は第1段階と比較して頸部が締まり、口縁部の開きが大きい。文様は口縁端部に波状文を頸部に直線文を施し、変化はない。

広口短頸壺(521～523)は前段階と同じく細頸のものしか図示できない。521は頸部に次帯を巡らし、胴部の張りも大きいなど浜津地域と共通する特徴を備えている。口縁端部は肥厚し、垂下が認められる。522、523は521同様胴部の張りが大きいが、胴部最大径部分の屈曲が丸みを帯びている。

段状口縁壺(524～526)は段状部の屈曲が明確になり始める。口縁部の文様は波状文が多いが、前段階で1段しか描かなかった波状文は上下2段に描くのが一般的になる。

細頸壺は良好な資料が不足している。

壺(527、528)は1段階に比べて肩部の張りが大きくなる。また口縁端部が上方につまみ上げるように肥厚する例が認められる。

鉢(529～531)はやはり多様である。加えて本段階から鉢の加飾が進むと考えられる。通有の鉢530は大きな変化は認められないものの、体部の屈曲が明瞭になる。また次第に浅くなるようだ。大型で口縁付近に凸帯を巡らす531は本段階を最後に姿を消す。本段階では椭描文で加飾されるようになるが、531は直線文、波状文、格子文を施しており、広口短頸壺521と共に共通する文様構成である。

高杯は水平口縁の高杯(532、533)と皿状の坏部を持つ高杯がある。皿状の坏部を持つ高杯は本段階でも良好な資料が少ない。

日明山式の広口長頸壺(534)は頸部が太く、胴部から頸部へのカーブも緩やかである。本形式は大きな変遷はたどれるものの、段階区分できる資料は少ない。おおまかに第1、2段階付近に位置づけておくのがいいと思われる。

### 第3段階

第3段階では新たに直口壺、水差し、無文の広口短頸壺、垂下口縁を持つ広口短頸壺が出現する。また太頸の広口短頸壺の良好な資料が急増するのも本段階からである。文様では四線文の出現が特筆されよう。しかし四線文は本段階では垂下口縁を持つ広口短頸壺、段状口縁壺、鉢の一部に採用されるのみで、主要な文様とはなりえていない。櫛描文では簾状文の割合が急増するが、直線文、波状文を凌ぐわけではない。本段階の基準的な資料としては四ツ池遺跡<sup>(1)</sup>地図袋状部をもつ造溝、池田下遺跡溝<sup>(2)</sup>向遺跡方形周溝墓<sup>(3)</sup>、などがある。

広口長頸壺(535、536)は頸部が更に短くなり、肩部高に匹敵するものは完全に姿を消す。535は第2段階に比して頸部の縮まりがきつく、口縁部が大きく開く。また口縁端部は広口短頸壺と同じく上方につまみ上げるように肥厚するのみである。536は本段階の広口長頸壺としては珍しく簾状文を多用している。円形浮文は口縁部、肩部に貼り付けているが、まだ数は少ない。

広口短頸壺(537～542)は細頸のものと太頸のものがある。細頸の537、538は頸部に凸帯を巡らすが、前段階に比べて胴部の張りが弱く丸みを帯びる。また538は垂下口縁の初例である。太頸の539、540は球形に近い張りのある胴部に直線的に伸びる口縁部を持つ。文様は本段階では波状文、直線文为主で、簾状文は肩部と頸部の屈曲部に施すものがある程度である。口縁端部は539が上下に肥厚させ重直の端面をつくっているのに対し、540は上方につまみ上げるように肥厚させるのみで、差が生じている。第1、2段階の広口長頸壺、広口短頸壺の口縁と共に通する特徴を持つ539が古相を残していると考えられる。無文の広口短頸壺(541、542)は胴部最大径が胴部中位にあって肩部の張りが目立たない。肩部から頸部へのラインが緩やかなカーブを描くものが多い。口縁端部は上方にわずかに肥厚する程度である。

段状口縁壺(543～545)は段状部の屈曲がより明確になる。段状口縁部の文様は前段階同様2段に描くものもあるが、多くは3段に描く。波状文が激減し、簾状紋と櫛齒刺突文の組み合わせが主となる。また四線文も積極的に採用している。頸部から胴部の文様は口縁部に簾状文を施すものは胴部も簾状文、口縁部に四線文を施すものは胴部は直線文を主とし、波状文を併用する。

細頸壺は次第に大型化する。第1段階以来の細く長い頸部を持つものに加え、やや太めの短い頸部を持つ546が現れる。文様は直線文を主とし、口縁端部に簾状文、櫛齒刺突文を、肩部から頸部への屈曲部に簾状文を施すものが多い。

無頸壺は段状の口縁を有するものが多くなるようだが、短く外反する口縁を持つ547も存在する。

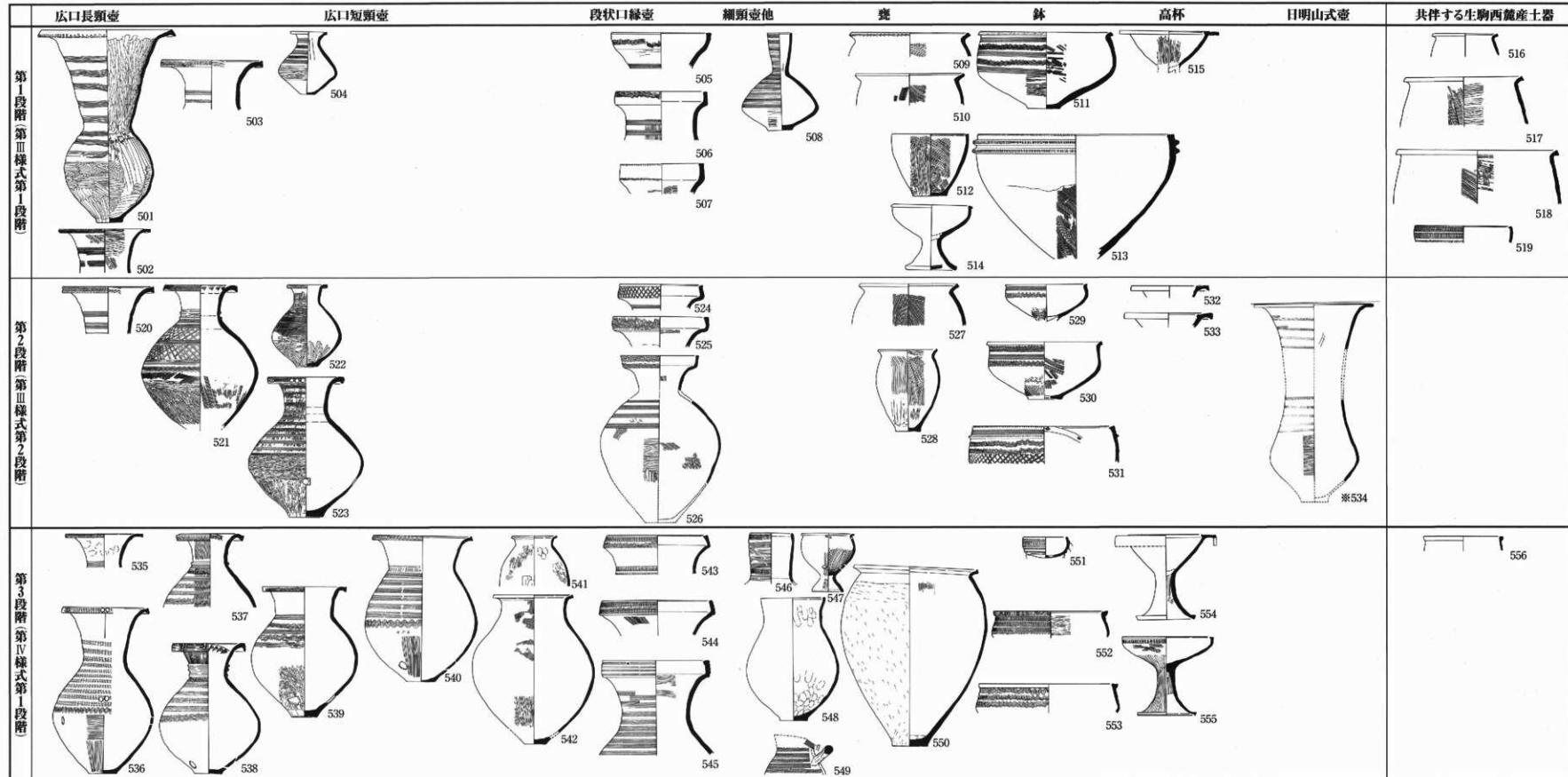
直口壺(548)は本段階に出現する。やや開き気味に立ち上がる口縁を有する。無文である。

水差し(549)も本段階で出現する。把手は頸部直下に付けられる。把手の断面は凸形でしっかりしている。文様は櫛描文が主で、本段階では四線文はほとんど施されないようである。

甕(550)は胴部最大径が胴部中位よりかなり上にあり、肩部の張りが大きくなる。口縁端部は上方につまみ上げられるように肥厚するものが増加する。

鉢(551～553)はやはり器形のバリエーションが多い。通常の鉢552、553は口縁部がいわゆる有段口縁のものが大半を占め、胴部の屈曲が明瞭になる。文様も簾状文を施すものが圧倒的に多くなる。小型の鉢には551のように四線文を施すものも現れる。

高杯(554、555)は水平口縁の高杯と皿状の杯部を持つ高杯の他に555のように口縁端部が屈曲し直立する高杯が現れる。直立した端部には波状文、簾状文を施すものが多い。



第124図 編年試案・1 (S=1/6 ただし※印のものは1/12)

実測図は各報告書から再トレスしたが、断面は黒塗りで統一した。

## 第4段階

第4段階では器種構成に変化はないが、文様では凹線文の採用が進む他、櫛描文では簾状文の割合が更に増加する。本段階の基礎的な資料としては池上遺跡SD05灰茶褐色土出土土器、四ツ池遺跡F地区G溝出土器、池田下遺跡窓穴住居<sup>5</sup>、同遺跡溝7出土土器などがある。

広口長頸壺(557・558)は頸部が更に短くなる一方、口縁の先が水平に近く開くものが見られる。口縁端部の形状は前段階同様上方に肥厚して端面が広くとられる。

広口短頸壺(559～565)は細頸のものと太頸のものがある。細頸のうち559・560は垂下口縁を有する壺で、前段階に比べると大型化し、垂下の度合いが更に大きくなる。口縁部には凹線文、もしくは簾状文を施し、円形浮文も多用している。通有の口縁部を持つ広口短頸壺561は第2段階の521に系譜をたどれるもので、変遷がよく分かる好例である。563は本段階以降に増加するもので、口縁端部は上下方ともに肥厚して垂直な面をつくり、そこに簾状文および円形浮文を貼り付ける。全形を窺える良好な資料が少ないが、頸部・胴部ともに簾状文を施すのが一般的なようである。564は太頸の広口短頸壺で、口縁端部はヒドに肥厚し、垂直の端面を有する。胴部最大径は胴部中位にあり、前段階に比べて胴部の張りが大きくなる。無文の広口短頸壺565も有文のものと同様に口縁端部が屈曲して大きく開く。また端部は上方に肥厚する。

段状口縁壺(566、567)は口縁の立ち上がりが長くなる。口縁部の文様は前段階同様に簾状文と櫛齒刺突文を組み合わせ3段に描く566と凹線文を施す567が主である。凹線文を施すものには頸部に刻みを施した幅広の低平な凸帯を巡らすものがあるが、全体に無文化が進行する。

細頸壺は良好な資料が少ない。頸部に凸帯を巡らし、全面を簾状文と櫛齒刺突文で飾る568を挙げておくが、これはあるいは前段階に含めるべきかもしれない。

無頸壺は良好な資料に恵まれない。

直口壺(569)は大きな変化は認められないものの、口頸部がやや短くなるようだ。

水差し(570)は把手の断面が長方形に近くなり、前段階に比べて薄くなる。口縁部も注ぎ口のように開くものが増加する。文様は口縁部に凹線文を施し胴部には直線文、あるいは直線文と波状文を施すものと、櫛描文だけを施すものがある。櫛描文のみを施すものは算盤玉に近い胴部をもつものがある。資料は少ないが文様と器形に一定の相関関係が認められる。

甕(571～573)には頸部が「く」の字状に屈曲する571、573と頸部が一旦垂直気味に立ち上がったのち外反するもの572がある。ともに胴部最大径の位置が前段階に比べて低い位置に下がるとともに、頸部の締まりがなくなり、肩の張りが弱まる。口縁端部は上方に肥厚するが、本段階では下方への肥厚は顕著ではない。

鉢(574～576)のうち通有の鉢(574、575)の文様は簾状文もしくは櫛齒刺突文が主体となる。一方、凹線文を施す鉢は576のように単純に口縁が開くものが多い。

高杯(577～579)は水平口縁を持つ577と皿状の杯部を持つ578、579がある。前段階で見られた口縁端部が直立する高杯には良好な資料がない。

## 第5段階

第5段階では器台が確認されようになる。また文様では凹線文を採用する器種が増加し、櫛描文では簾状文の比率が更に高まり、文字通り隙間なく簾状文で埋めたものも認められる。しかし文様の多様さという点では明らかに後退し、全体としては無文化の傾向も目に付き始める。また簾状文の原体

幅は前段階では1~2cm程度のものが多かったが、本段階では3~4cmと急に幅広のものが増加する。この現象は生駒西麓土器とほぼ軌を一にした変化である。両地域の上器の併行関係については後述するが、生駒西麓土器の強い影響を受けている可能性が高いことが指摘できる。本段階の基準的な資料としては四ツ池遺跡第81地区SD005・006・008山土器<sup>597</sup>、同遺跡I地区土坑山土器<sup>598</sup>、下田遺跡SD1305第5・6層山上土器などがある。

広口長頸壺(586、587)は口縁端部が水平に近く開くようになり、端部は前段階に比べて上方への肥厚が更に発達し、端面は傾斜し幅広である。

広口短頸壺(588~592)は細頸のものと太頸のものがある。細頸のもののうち588は垂ド口縁を有する壺で、垂下の度合いが更に大きくなる。本段階では最も多様に加飾される。格子文は本段階を最後に姿を消す。589は頸部の締まりが強くなり、胴部最大径が胴部中位より下方に下がっている。太頸の広口短頸壺(590、591)はいずれも口縁部の反りがきつく、端部は上・下方に肥厚する本段階に特徴的な形態をなす。無文の広口短頸壺(592)は前段階に比べ胴部最大径の位置が胴部中位に下がり、肩部の張りが弱くなる。

段状口縁壺(593、594)は前段階に比べ口径が縮小する。口縁部に櫛描文を施すものと凹線文のみを施すもの、両者を組み合わせて施すものがある。このうち凹線文のみを口縁部に施すものは、体部には文様をほとんど施さない。

細頸壺は本段階にはほとんど認められない。

無頸壺は有段口縁を持つ595が代表的である。胴部最大径は胴部高の1/4程度の所とかなり低い位置にあるものが多い。

直口壺(596)は前段階に比べ口頸部が短くなり、端部に凹線文を施すのが通例となる。

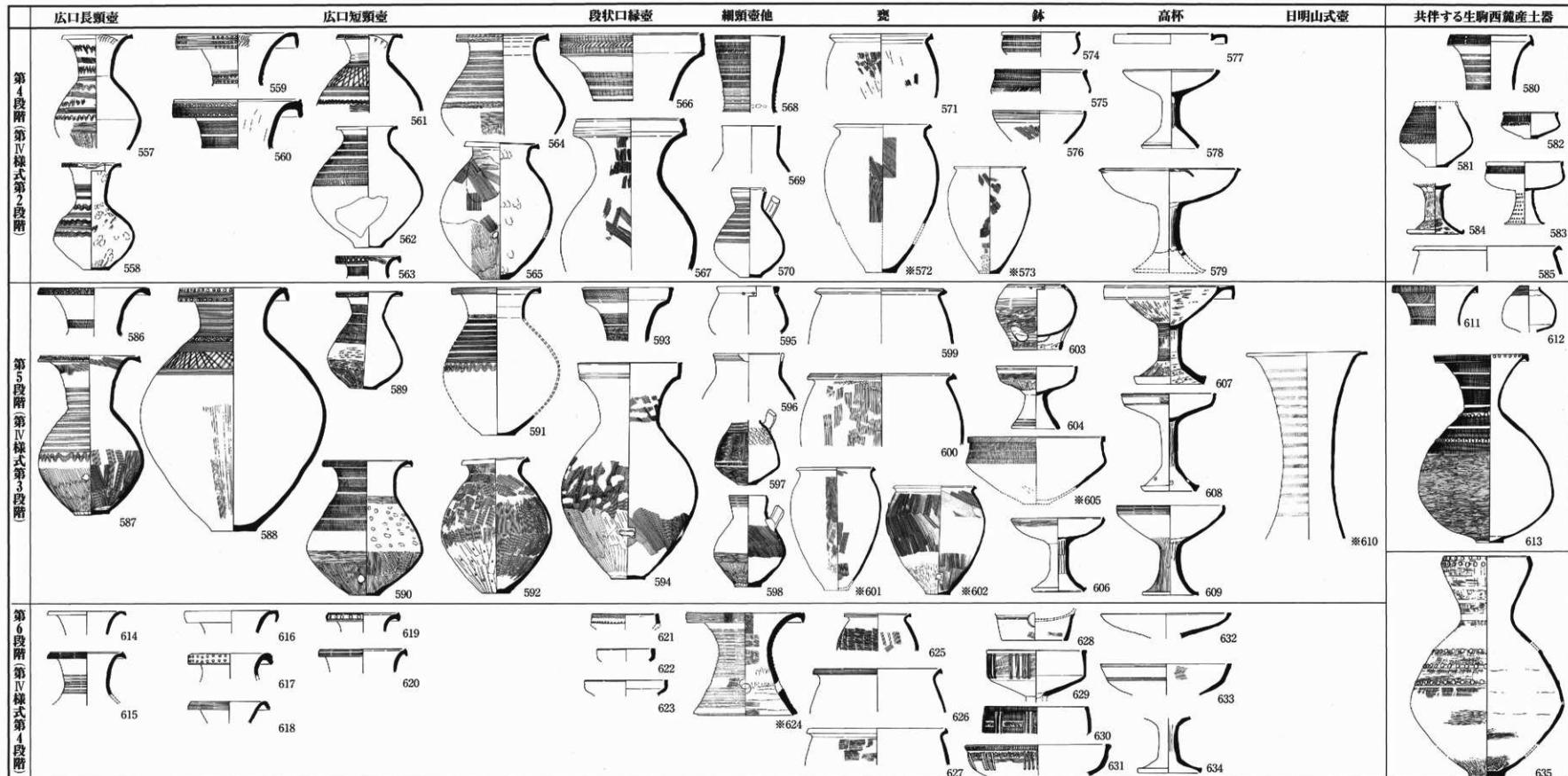
水差し(597、598)は598のように口縁部に凹線文を施し、胴部は無文のものが多い。極端に矮小化したものもある。また櫛描文を多用するものも残っており、597はその好例である。櫛描文を多用するものは胴部最大径がかなり低い位置にあり、生駒西麓の水差しとの共通点を指摘することができる。

甕(599~602)は前段階同様に頸部が「く」の字状に屈曲するもの(599、600、602)と頸部が一旦垂直気味に立ち上がったのち外反するもの(601)がある。前者には602のように器高が低く、ずんぐりした器形のものが増加する。両者ともに前段階に比して頸部の締まりが一層弱くなり、口径が胴部最大径に近いものが多くなる。口縁端部は上・下方ともに突出するように肥厚するものが一般的になり、上方にのみ肥厚するものも前段階よりその度合いは大きい。広くとられた端面に凹線文を施すもの(600)も日に付く。

鉢(603~605)のうち通有の鉢605は胴部の屈曲が明瞭で、直線的である。球形の胴部に大きなスカシを有する台部を取り付けた603は本段階を中心に散見される。

高杯(606~609)には水平口縁の高杯607以外に皿状の杯部を持つ606、段状口縁壺の口縁部に似た杯部を持つ608、口縁端部が屈曲し垂直に立ち上がる609がある。609は第3段階の555から続くものだが、本段階に至っても脚部は緩やかに開き、脚裾部も広い端面を持たない。その他は程度の差はあるものの脚柱部から屈曲して脚部が直線的に広がり、端部も広い面を有する。

器台は類例は少ないものの本段階には確実に出現している。ただ本段階で見られる器台は脚部がしっかり開いたもので、他地域、特に河内などと比較すると形式学的には新しいことが指摘できる。本段階以前に器台は出現していた可能性が高いと思うが、現段階では明らかにできない。



第125図 繪年試案・2 (S=1/6 ただし※印のものは1/12)

実測図は各報告書から再トレスしたが、断面は黒塗りで統一した。

## 第6段階

第6段階は器種が人幅に減少している。十分様相が明らかになっているとは言えないが、細頸壺、水差し等は本段階では全く認められない。直口壺も確実に本段階のものと言える資料はないようである。また全体としては無文化の傾向が著しい。壺、甕などは口縁部に凹線文を施すものが増加し、櫛描文は完全に衰退した。唯一本段階において加飾性が高い鉢も前段階までの精緻な櫛描文とは比較すべくもない。中期的様相が薄れ、後期への胎動を感じさせる内容である。本段階の基準的な資料としては池田下遺跡溝3出土土器、石才南遺跡401-OD出十土器がある。

広口長頸壺(614、615)は無文化の傾向が著しい。櫛描文を施すものはほとんど姿を消す。615のように口縁端部を上下方向に大きく肥厚させて端面をつくり、凹線文を施すものが増加する。

広口短頸壺(616~620)も広口長頸壺と同様無文化が著しい。特に垂下口縁を持つ壺(616~618)は前段階までは大型化の一途を辿ってきたが、本段階では全体として小型化に転じる。もっとも大型のものも完全に姿を消すわけではないようである。文様も617のように円形浮文を付して飾るものもあるが、やはり前段階とは比較できるものではない。

段状口縁壺(621~623)も小型化し、再び段状部の屈曲が丸みを帯びる。

直口壺は類例が認められない。

甕(625~627)は口径が胴部最大径にさらに近づき、ほぼ等しいものもある。口縁端部は肥厚して広い端面を有し、凹線文を施すものが少なくなった。体部にタタキを残すものも増加する。

鉢(628~631)は本段階においても加飾されるものが多い。特に中・人型品は櫛描文が施されるものがあり、通有の鉢630は前段階までと同様に簾状文が密に施される。棒状浮文を多用するのも本段階の特徴である。ただ全体としては有段の口縁部は低く、明瞭な段をなさない例が増加し、629や631に見られるように文様の簡略化も著しい。

高杯(632~634)には皿状の坏部を持つ632、段状口縁壺の口縁部に似た杯部を持つ633がある。632は坏部が浅くなり、口縁端部には水平の面を持つ。633は屈曲部および口縁端部に凹線文が施され前段階の608に続くものと考えられるが口縁部が開き気味で、後期の高杯への移行が感じられる。

### (4)大別様式の設定

次に6段階に分けた中期の十器群について大別様式を設定する。もっとも本稿においては第III・IV様式に該当する段階のみを扱うという前提があるため、第IV様式の設定が可能であるか、可能であるとすればどこにその画期を置くべきかということが問題になる。ここまで検討で各段階の様相を一定明らかにでき、各形式の組列についても不十分ながら見通しが立ってきた現状では、器種構成とそれに付随する属性の変遷に大別様式の画期を求めることが可能である。そして結論的に言えば、その画期は第3段階に求められると考えている。第3段階では新たに直口壺、無文の広口短頸壺、垂下口縁を持つ広口短頸壺、水差し等が出現する。器台の出現時期が押さえられていないのがネックだが、第3段階において器種構成最も大きな変化が生じていることは間違いない。また本段階には凹線文が採用され、櫛描文も簾状文の頻度が増え更に多様さを増す。もうひとつ重要な変化が生じているのは第6段階であるが、それは中期的な土器様相が終焉を迎え、後期への胎動が始まる過渡的な段階としてはとらえられても、決して画期としてとらえられる様相ではない。<sup>(20)</sup>したがって本稿では第3段階を大別様式の画期とみなし、第1・2段階を第III様式に、第3~6段階を第IV様式とする。そして以下の記述では第1・2段階はそれぞれ第III様式第1・2段階に、第3~6段階はそれぞれ第IV様式

第1～4段階と置き換えて表記する。

### 3. 生駒西麓産土器との併行関係

次に他地域との併行関係を考える。他地域との併行関係を考える上で最も有効であるのは供伴して出土する生駒西麓産土器の分析であると考えられる。その理由は先行研究による指摘を繰り返すことになるが、第1に製作地が限定して考えられていること、第2にその胎土の特徴から識別が容易であること、第3に器形・文様の変遷が明瞭で、細片でも時期を判断しやすいこと、第4に本遺跡では各時期を通じて一定量含まれていること、の4つを挙げることができる。本稿でも設定した第Ⅲ・Ⅳ様式について生駒西麓産土器との対応関係を明らかにすることで他地域との併行関係を考える手がかりを探りたい。生駒西麓産の土器については代表的な研究をいくつか挙げることができるが、本稿では三好孝一氏の編年<sup>(21)</sup>を使用することにした。その最も人気な理由は近年、(財)大阪府文化財調査研究センターによって近畿自動車道建設に伴う発掘調査関係の報告書が刊行されているが、当該期の資料については三好氏の編年に基づいて報告されており、膨大な上器の情報を把握することが可能になったことにある。

この作業に最も必要なのは生駒西麓産土器を含む一括遺物だが、そうした資料は非常に限られている。若干の時期軸を含むにしても比較検討に耐えうる資料もあわせて併行関係を探らざるをえない。以下に各段階の基準資料に供伴する生駒西麓産土器の概要を説明する。

#### 第Ⅲ様式第1段階

池上遺跡SF077出土土器に生駒西麓産の壺(516～518)と鉢(519)がある。壺にはいずれも口縁端部の垂下が認められず、鉢も簾状文の単位が1.2cm程度と小さい。いずれも三好編年Ⅲ-a段階の特徴を備えている。既に述べたように本遺構山上土器には第Ⅳ様式の土器も含まれるため注意が必要であるが、参考にすることは許されよう。

#### 第Ⅲ様式第2段階

本段階には良好な資料がない。

#### 第Ⅳ様式第1段階

池田下遺跡方形周溝墓3出土土器に河内系とされている鉢(556)がある。報告によれば摩滅が著しいが胸部には簾状文を施す。有段口縁の段は高く屈曲も直角に近い。三好編年Ⅲ-c～Ⅳ-a段階に比定される。

#### 第Ⅳ様式第2段階

①池上遺跡SD05灰茶褐色土層出土土器に生駒西麓産の段状口縁壺(580)がある。口縁部の簾状文は2段構成となっており、3個1組の円形浮文を周囲に貼り付けている。その特徴から三好編年Ⅳ-a段階に比定される。

②池上遺跡SH120出土土器に生駒西麓産の無頸壺(581)、鉢(582)、台付鉢(583)がある。無頸壺は口縁部を欠損しているが胸部上半に簾状文を施す。鉢は有段口縁であり口縁部には櫛齒刺文、胸部には簾状紋、櫛齒刺文を施す。また簾状文を切るように2条1組の綫方向のミガキを施している。台付鉢は台部に円孔を多数あけた特徴的なものである。いずれも三好編年Ⅳ-a段階に比定される。

③池田下遺跡竪穴住居5出土土器に河内系として報告されている壺(585)と高杯(584)がある。壺は口縁端部の反りがきつくなり下方に伸びつつある段階である。高杯は胸部のみだが、屈曲して裾が広がるもので、端部は上方に折り返され面をなしている。壺はやや古い様相を有しているが、いずれも三

好編年IV-a段階に比定して大過ないと考える

#### 第IV様式第3段階

①下田遺跡SD1305出土上器に生駒西麓産の広口短頸壺(611)と水差し(612)がある。広口短頸壺は口縁部が大きく開き、口縁端部および頸部を簾状文で飾る。簾状文の原体の幅は3cm弱である。水差しは胴部最大径が胴部中位よりかなり下がった所にあり、頸部を簾状文で飾る。広口長頸壺は口縁部の特徴や簾状紋の原体の幅からIV-a段階と考えられる。しかし頸部の簾状紋はほとんど間隔をあけずに施されており、IV-a段階でも新しい様相であると言える。水差しはIV-b段階に比定される。

②四ツ池遺跡81地区SD005出土上器に生駒西麓産の広口短頸壺(613)がある。口縁部は大きく開き、端部は垂直に垂下する。胴部最大径は胴部中位よりかなり下がった所にある。口縁端部から胴部上半部までを簾状文で飾り、口縁部内面と胴部に円形浮文を貼り付けている。簾状文の原体の幅は約4cmである。その特徴から一好編年IV-b段階に比定される。

#### 第IV様式第4段階

池田下遺跡溝3山上上器に生駒西麓産の細頸壺(635)がある。復原高55.3cmの大型の壺である。口縁部は太頸化している。口縁部から胴部上半までを簾状紋で飾り、円形浮文を多数貼り付けている。その特徴から三好編年IV-c段階に比定できる。なお本遺構出土土器には第IV様式前半の上器も混じっており、生駒西麓產上器にも三好編年IV-a段階に比定される広口短頸壺の口縁部が報告されているが、混同の恐れはないと考えている。

以上の事例によって本稿で試みた和泉の土器編年と三好氏による生駒西麓產の土器編年の対応関係はほぼ明らかであると言ってよいだろう。第III様式第2段階は直接比定しうる資料がないが、前後の関係からほぼ限定することができる。第1表に結果をまとめておく。またここで詳細を述べることはできないが、近年の池上曾根遺跡に関する一連の調査成果および研究との比較のために、樋口氏による和泉の編年<sup>(2)</sup>、濱田延充氏による生駒西麓產土器の編年<sup>(3)</sup>、寺沢薰・森井貞雄氏による河内の編年<sup>(4)</sup>との対比も大まかであるが整理し、併記しておく。

和泉	河内(生駒)	和泉	河内(生駒)	河内
本稿	三好1993	樋口1990	濱田1993	寺沢・森井 1989
第III様式第1段階	III-a段階	和泉III-1様式		
第III様式第2段階	III-b段階	和泉III-2様式	第III様式古段階	河内III-1・2様式
第IV様式第1段階	III-c段階		第III様式中段階	河内IV-1様式
第IV様式第2段階	IV-a段階	和泉III-3様式	第III様式新段階	河内IV-2様式
第IV様式第3段階	IV-b段階	和泉III-4様式	第IV様式古段階	河内IV-3様式
第IV様式第4段階	IV-c段階	和泉IV様式	第IV様式新段階	河内IV-4様式

第1表 各編年対応表

#### 4. 97年度調査出土上器の検討

最後に本稿の目的である97年度調査出土十器の編年上の位置を検討することにしたい。本文で報告した弥生時代の遺構については全て取り上げるが、順序については利便性を考え(1)方形周溝墓およびその可能性のある遺構、(2)祭祀に関係する可能性のある遺構、(3)土坑、(4)溝、(5)十器群、(6)その他とする。各項目の中での順序は本文における報告順である。

##### (1)方形周溝墓およびその可能性のある遺構

###### 97-3 区方形周溝墓SI164出土土器(第25図)

広口短頸壺、底部片などがある。いずれも小片である上、摩滅が著しく不明な点が多い。広口短頸壺(77~79)のうち77・79は口縁部の反りが小さく、端部は上方に肥厚するのみで第IV様式第1段階の特徴を有している。一方78は77・79に比べると口縁部の反りがやや大きくなり、下方にもわずかだが肥厚している。第IV様式第2段階に比定される。確実に供献土器と判断できる遺物は全くないためSI164の時期を決めるのは困難であるが、これらの土器を見る限り第IV様式第2段階が築造時期の上限と考える。

###### 97-3 区方形周溝墓SI165出土土器(第32図)

広口長頸壺、広口短頸壺、段状口縁壺、甕、高杯などがある。SI164出土土器同様、遺存状況は悪い。広口長頸壺(86)は口縁部が大きく開き、端面は広い第IV様式第3段階に比定される。広口短頸壺(82~85)のうち83・84は口縁端部のは上方にのみ肥厚し第IV様式第1段階に、82は口縁端部の反りが大きく第IV様式第2段階に比定される。85は口縁部が大きく反り、端面は広い。頸部から胴部には簾状文を施し、第IV様式第3段階に比定される。段状口縁壺(87)はほぼ垂直に立ち上がる口縁部を持ち、段状部に川線文を2条施す。第IV様式第2段階に比定されよう。甕はいずれも頸部の締まりが弱いが口縁端部の肥厚は顯著ではないことから第IV様式第1~2段階に比定される。高杯(91)は生駒西麓産であるが、小片であり摩滅も著しく時期の判断は困難である。出土土器の大半は破片だが、ある程度遺存状況が良く、供献土器の可能性が高いと判断された85の時期をもってSI165の時期と見なすのが妥当である。

###### 97-4 区SX99出土土器(第50・51図)

完形品を含む上器群が検出された。広口短頸壺には垂下口縁を持つもの(115)、細頸のもの(111・112・118)、太頸のもの(116)がある。細頸壺(119)は極端に張った胴部に太く短い頸部が付くもので、頸部には凸帯を3条巡らす。甕(120・121)の口縁部端部はほとんど肥厚しない。高杯(125・126)は口縁部が明瞭な肩曲をもって立ち上がるもので、脚部は緩やかに広がる。これらの特徴から本遺構出土土器の大半は第IV様式第1段階に比定される。共伴する生駒西麓産の壺(117)は口頸部を欠損しているものの、器形の特徴、胴部に簾状文が施されている点、簾状文の原体幅が1.2cm程度と幅狭な点から考えて一般編年III-c段階の広口短頸壺と考えられ、既述の編年觀に完全に一致することも重要である。わずかに第V様式の111、第IV様式第3段階の112、114など後出する遺物も含まれているが、111は本遺構埋土の上層から出土しており、112、114も上層遺物の混入である可能性が高い。本遺構出土土器は上層遺物の若干の混入はあるものの第IV様式第1段階の良好な一括資料と評価できる。

###### 97-6 区SX127出土土器(第91図)

山上遺物はごく少量である。広口短頸壺(262)は摩滅が著しいがほぼ完形で出土した。頸部には凸帯を巡らし、口縁端部は水平近く折れて端部も鋭く垂下する。その特徴から紀伊系の十器である可能性を考えているが、胎土に結晶片岩は含まれていない。当地では類例が少なく正確に時期を決定できない。他に甕(263)、鉢(264)が出土しているが、263は頸部が垂直に近く立ち上がる。口縁部端部は下

方に肥厚する。264は遺存状態が悪いが簾状文の痕跡が認められる。とともに第IV様式2段階に比定される。

#### 97-8区SD214出土土器(第121図)

図示できたのは広口短頸壺(435)の小片1点のみである。口縁端部の特徴から第IV様式第3段階に比定される。

#### (2)祭祀に関係する可能性のある遺構

##### 97-5区SK136出土土器(第58図)

日明山式の広口長頸壺、甕、蓋、段状口縁壺等が出土した。このうち日明山式の広口長頸壺(132~134)はいずれも口縁部付近の破片である。同一個体の可能性もある。頸部は細く、第IV様式に比定される。時期を特定することは難しいが、第IV様式第3段階の基準資料である四ツ池遺跡81地区SD006出土資料に比べると口縁部から頸部にかけての縮まりがそれほどきつくないように思われ、やや遅るものと考えられる。甕(136)は胴部中位が張った全体に丸みのある壺形で、口縁端部はほとんど肥厚せず、第IV様式第2段階に比定される。生駒西麓産の段状口縁壺(135)は口縁部の簾状文が2段構成になっており、三好編年のIV-a段階と考えられ、壺の編年と合致する。日明山式の広口長頸壺の編年観もこれに矛盾しないことから、本遺構出土上器は第IV様式第2段階の一括資料と考えられる。

#### (3)土坑

##### 97-7区SK199山上遺物(第97図)

97-5区SK168と同一の遺構である。広口長頸壺、広口短頸壺、甕、飯蛸壺などが出土した。広口長頸壺(276)は口縁部が欠損しており時期の特定は困難だが、算盤玉形の胴部であり、胴部最大径が胴部中位にあることなどは第IV様式第2段階に比定できる可能性が高いと考えられる。広口短頸壺(273、274)は口縁端部が肥厚するが顯著ではなく第IV様式第1段階に比定される。壺の胴部(275)はその特徴から段状口縁壺の可能性がある。胴部最大径が胴部中位にあり、全体に球形に近い器形であることから第IV様式前半と思われるが断定はできない。甕(277~279)はいずれも第IV様式に比定される。本遺構からは比較的多くの遺物が出土しており、第I~II様式の破片も含まれているが、中心になるのは第IV様式前半期であり、確実に第IV様式第3段階に下がるものはない。これは本遺構が切り合い関係を有するSD205の時期とも矛盾しない。

#### (4)溝

##### 97-5区SD169出土遺物(第59図)

出土した上器は少量である。広口長頸壺(140)は頸部が細く緩やかに口縁部が広がる。口縁端部は端面を有するが、ほとんど肥厚は認められない。第II様式に比定される。段状口縁壺(141)は口径が22.1cmと小さい。頸部はほぼ直立する。口縁部の屈曲があまりはっきりしないことから第III様式第2段階かと思われるが、摩滅が著しく詳細は不明である。

##### 97-6区SD91出土遺物(第77図)

多数の土器が出土したが、図示したのは出土遺物のごく一部である。壺(248)は生駒西麓産で、直立した頸部を有し、肩部から頸部の屈曲部に凸帯を巡らす。広口短頸壺(251)、甕(249)とともに第V様式に比定される。縦文土器深鉢(250)は小片のため詳細は不明だが、時期は晩期と考えられる。その他、第I様式~第V様式の土器が多数出土している。

##### 97-6区SD96出土遺物(第79図)

出土した土器は少量である。図示したのは高杯(253)1点のみである。遺存状態は悪いが第IV様式に比定される。他に同時期の段状口縁壺、蛸壺などが出土している。

#### 97-6 区SD109出土遺物(第87図)

多数の土器が出土したが、接合できるものは少なく図示したのはごく一部である。出土遺物は第I様式～第V様式に渡るが、大半を占めるのは中期の土器である。

#### 97-7 区SD202出土遺物(第101図)

ごく少量の土器しか出土していない。図示できたのは広口短頸壺(284)1点である。摩滅が著しいが口縁端部は上方にわずかにつまみ上げるように肥厚するのみで、下方には肥厚しない。第IV様式第1段階に比定される。

#### 97-7 区SD205出土遺物(第102図)

まとまった量の土器が出た。段状口縁壺(285、286)は285が口縁部は無文で肩部以下に直線文を施す。肩部の張りは弱い。第IV様式第1段階に比定されるが、口径が19cmと小さく、口縁部が無文であることから第III様式第2段階に通る可能性もある。286は口縁部が大きく内側に傾き、2段の波状文を施す。頸部には直線文を施し、わずかに残る部分から推測する限り肩部の張りは285に比べて強いようである。第III様式第2段階に比定される。甕(287～290)には各時期のものがある。288、289は第II様式に比定される。このうち288は胎土に結晶片岩を含む紀伊産の甕である。287、290は第IV様式に比定される。290は口縁部の特徴から第IV様式第1段階に比定されるが、頸部の縫まりが弱くやや新しい様相を見せている。本遺構出土土器には第I様式～第IV様式まで時間幅のある遺物を含んでいるが、中心になるのは第III様式第2段階～第IV様式第1段階であり、下限は第IV様式第1段階である。本遺構はSK199に切られているが、遺物の時期には矛盾はない。SK199の時期が限定されることから、本遺構の埋没時期は第IV様式第1段階に限定して考えることができる。

#### (5) 土器群

##### 97-5 区SX160出土遺物(第60図)

第I様式～第IV様式までの土器が出土している。図示したのは遺存状態の比較的良好底部(142)であるが、時期の特定は難しい。

##### 97-5 区SX161出土遺物(第61図)

広口長頸壺、鉢などが出土した。広口長頸壺(143)は遺存状況が悪いが、鉢(144)は口縁部直下に沈線を13条施す。ともに第I様式新段階に比定される。他には図示していないが、第II様式に比定される広口長頸壺などが出土している。

##### 97-5 区SX145出土遺物(第62図)

少量の土器が出土した。第I様式の広口壺破片、第II様式の紀伊産の甕などがあるが、遺物は少量で遺存状態も悪い。図示した底部(148)も時期の特定は難しい。

##### 97-5 区SX125出土遺物(第63図)

まとまった量の土器が出た。甕(149)は復元高52cmと大型で、口縁端部は上方に肥厚する。頭部のしまりは弱くなり、屈曲も緩やかである。その特徴から第IV様式第2段階に比定される。高杯(150、151)はいずれも破片だが、150は脚柱部から脚裾部への屈曲が顕著でないが、端部は垂直で広い。151は端面が下方を向いており、あまり類例をみない形態である。いずれも第IV様式であり、そのなかでも前半に比定される。他に少量ではあるが第I様式の広口長頸壺や第II様式の壺、甕などが出土しており、長期間に渡り投棄されたものと見られる。

##### 97-5 区SX118出土遺物(第64図)

本遺構からは多数の土器が出土したにも関わらず、接合できるものは少ない。小型壺、広口長頸壺、

甕、台付鉢などがある。小型壺(153)は胴部最大径が胴部中位より下に位置し、短く外反する口縁部を有す。時期は第IV様式かと思われるが特定できない。広口長頸壺(154)は口縁端部の肥厚が認められず第II様式に比定される。壺(158、159)は158が第IV様式、159が第II様式に比定される。台付鉢(160)は台部の破片であるが、多数の円孔を施した特徴的なものである。円孔はいずれも器壁を貫通していない。第IV様式第2段階に比定される。他に第I様式から第IV様式までの土器片が出士しており、長期に渡って投棄されたものと見られる。

#### 97-5区SX107出土遺物(第65図)

少量の土器が出土した。無頸壺(162)は段状の口縁を有し、胴部最大径は胴部中位にある。時期の特定は難しいが第IV様式でも前半に比定されよう。壺(164)は球形の胴部を有し、残存部の観察によれば無文の壺と見られる。第IV様式に比定される。

#### 97-5区SX121出土遺物(第66図)

本土器群は遺物が少なく、図示したものでは主な遺物は網羅している。段状口縁壺(165)は器高20.1cmの小型品である。胎土、焼成などを見る限り和泉の土器にしては違和感がある。時期は特定が難しいが、頸部と口縁部のバランスや口縁部の格子文などを見る限り、第IV様式第1段階前後かと思われる。壺(166)と壺(168)は生駒西麓産である。166は広口短頸壺あるいは細頸壺と考えられる。胴部最大径は胴部中位より下方にあって、重心の低い丸みを帯びた器形である。文様は直線文であり、三好編年Ⅲ-c段階前後かと思われる。168は口縁端部はほとんど肥厚せず第III様式第1段階に比定される。168を除くと大半の上器は第IV様式1~2段階と考えられる。

#### 97-5区SX131出土土器(第67・68図)

本土器群で特筆されるのは飯蛸壺である。完形もしくはそれに近いものがまとまって出土した。これと共に共存する土器には広口短頸壺、段状口縁壺、甕、高杯などがある。広口短頸壺(169~171)のうち169・170は口縁端部の肥厚があり顕著でなく第IV様式第2段階に比定される。171は太頭で胴部上半から頸部に簾状文を施す。簾状文の原体の幅は2.6cm程度で幅広化が進んだ段階のものである。口縁部が欠損して不明であるが、第IV様式第3段階に比定して誤りないとと思われる。甕(173)は頸部の口縁端部の肥厚が認められ、頸部の綿まりが弱く肩が丸みを帯びている。高杯(179)も脚柱部から裾部への屈曲が明瞭で、端面を広く取る。173、179ともに第IV様式第2段階に比定できる。生駒西麓土器には段状口縁壺(172)がある。岡上復元したもので、復元には不安もあるが、胴部最大径が下がっていること、口縁部の文様が2带構成になっていること、簾状文の原体幅が1.6cm程度と幅広化が顕著でないことから三好編年IV-a段階に比定できる。SX131山上土器は第IV様式第2段階の土器が大半を占めており、短期間のうちに投棄されたものと考えられる。

#### 97-5区SX144出土遺物(第69図)

遺物は非常に少なく、すべて甕の破片であった。甕(196)は肩部が張らず、スムーズに底部に向かってすぼまる倒錐形である。口縁端部、頸部には沈線、刻みなどを全く入れない。第II様式でも占い段階に位置づけられる。

#### 97-5区SX166出土遺物(第70図)

遺物は少なく、接合できるものはほとんどなかった。広口短頸壺、甕、高杯などが出土したが、図示できたのは2点である。甕(197)は結晶片岩を胎土に含む紀伊産の土器である。第II様式に比定される。高杯(198)は口縁部が屈曲して直立するものである。第IV様式第2~3段階に比定される。

### 97-5 区SX148出土遺物(第71図)

多数の土器が出土したが、接合できたものは少ない。図示した遺物は出土遺物の中でも新しい段階のものが多い。無頸壺(199)は胴部最大径が胴部中位より下にあり、屈曲の明瞭なもので、第IV様式でも後半に比定される。広口短頸壺(200、201、205)はいずれも口縁部付近の破片で全形を窺えるものはない。200は肥厚した口縁に凹線文を施す。口縁部の断面は三角形に近い。第V様式初頭に比定される。201、205は生駒西麓産の土器である。205は点状の刺突文を施以外は全く無文で、三好編年IV-c段階でも後半に比定される。201は口縁端部が肥厚し、全く無文である。第V様式初頭に比定される。壺(204)はあるいは壺の可能性もあるが、口径が34cmと大きく壺としている。口縁端部は上下に肥厚し垂直の端面を有する。第IV様式第3段階に比定される。高杯(202、203)はいずれも第V様式に比定される。本遺構出土土器は他の土器群同様に第I様式～第IV様式の土器が大半を占めているが、本調査区では唯一第IV様式第4段階～第V様式初頭の土器が一定量含まれている点が注目される。

### 97-7 区SX200出土遺物(第105図)

まとまった量の土器が出土した。図示したのは広口長頸壺、広口短頸壺、細頸壺、無頸壺、甕である。広口長頸壺(298)は口頸部が長く緩やかに開き、口縁端部は上下に肥厚し垂直に近い端面を有す。頸部の文様は直線文である。第III様式第2段階と考えられる広口短頸壺(299)は口縁端部の特徴から第IV様式第1段階に比定される。細頸壺(300)は口縁端部に凹線文を施し、円形浮文を貼り付ける。頸部は櫛刺突文および簾状文を施している。頸部は細い様だが、口縁部付近は太くなり、やや新しい要素を見せる。第IV様式第2段階に比定しておく。無頸壺(301)は算盤玉形の形態で、胴部の屈曲は明瞭でラインも直線的である。第IV様式に比定されるが、中でも後半期であろう。甕(302、303)はとともに口縁部が水平に近く開き、第IV様式に比定される。この他にも第I様式の広口壺や中期の鉢、高杯、蛸壺などが出土している。遺物は少量しか出土していないが、時期にはまとまりがない。

### 97-7 区SX204出土土器(第107～111図)

多数の土器が出土した。上なものには広口長頸壺、広口短頸壺、段状口縁壺(308)、甕(321～350)、鉢(351、352)、真蛸壺(353～362)、飯蛸壺(363、364)などがある。

広口長頸壺(304～306)はいずれも日明山式の胴部片だが、304・306は胴部の張りが強く、頸部が締まるもので、第IV様式に下がると考えられる。一方305は胴部が肩部から頸部へのカーブはなだらかでやや遡ると考えられる。広口短頸壺(307、309、310)はそれぞれ時期が異なる。309は算盤玉形の胴部に大きく開く口頸部を有し、第III様式第1段階に比定される。307は胴部中位に最大径を持ち、胴部高は胴部最大径とほぼ同じである。口縁部は端部がやや垂下しており、第III様式第2段階の好例である。310は直立する頸部に凹線文を施した垂下口縁を有し、第IV様式第4段階に比定される。段状口縁壺(308)は口縁部の立ち上がりの長さに対して口径が大きい。胴部最大径は胴部中位にまで下がっており、肩はなだらかである。第IV様式第2段階に比定される。甕(321～350)には第II様式(321～340)、第III様式(341～343)、第IV様式(346～350)と各期が揃っている。胎土に結晶片岩を含む紀伊麻の甕(333～340)は第II様式のみ認められる。他に図示していないが第I様式新段階の広口壺も少量出土している。本遺構出土土器は第I様式新段階から第IV様式第4段階まである。接合可能な遺物がまとまりをもって出土しており、長期にわたって投棄されたものと考えられる。

### 97-7 区SX206出土土器(第113・114図)

多数の土器が出土した。主なものには広口短頸壺、段状口縁壺、甕などがある。広口短頸壺(365～370)は370を除き、いずれも無文である。365～367、369は口縁端部は上方にわずかにつまみ上げるの

みで、下方には肥厚しないことから第IV様式第1段階に、上下方向に肥厚する368は第IV様式第2段階に比定される。段状口縁壺(371~374)は口縁部の特徴と施文から371・372が第IV様式第1段階、373・374が第IV様式第2段階に比定される。壺(376~380)は小型の377・379は口縁が水平に近く開くことから第IV様式に比定される。中・大型のうち376・380は口縁端部に違いがあるが、胴部はともに肩の張った特徴的な器形で、ともに第IV様式第2段階に比定される。378は口縁端部を上下方向に肥厚しており、第IV様式第3段階に比定される。本遺構出土土器は第IV様式第1~3段階があり、SX204ほどではないものの比較的長期に渡って投棄されたものと考えられる。

#### 97-7 区SX207山上遺物(第116図)

出土遺物は少量である。第I様式~第IV様式の土器を含んでいるが、遺存状態の良好な第II様式の広口長頸壺(389~391)、壺(392)を図示した。いずれも第II様式前半と考えられる。

#### (6)その他

#### 97-2 区NR108山上遺物(第19図)

出土遺物は少量である。弥生土器は1点で、広口短頸壺(65)が出土した。垂下口縁は発達し、凹線文を施す。円形浮文は貼り付けていない。頸部以下には簾状文を施す。肩が大きく張った器形で、第IV様式第4段階に比定される。

#### 97-6 区SX102出土遺物(第82図)

少量の土器が出土したが、遺存状態は非常に悪く、接合できる遺物はほとんどなかった。壺(254)は頸部の締まりが弱く、口縁端部は上下方向に肥厚するもので第IV様式第2段階に比定される。他の遺物の時期もほぼ同じであると考えられる。

#### 97-7 区SX197出土遺物(第99図)

第I様式~第IV様式までの遺物が少量出土したが、いずれも小片であった。図示した遺物は真蛸壺(283)1点である。

#### 97-7 区SX208出土遺物(第103図)

まとまった量の土器が出土した。壺(292)は口縁部が欠損している上、器壁の摩滅が著しく詳細は不明である。胴部最大径は胴部下方にあり、全体に丸みを帯びた器形である。あるいは無頸壺かと思われるが、時期の特定は難しい。広口短頸壺(293)は口縁端部が水平に開き端部は下方に肥厚する。胴部最大径は胴部中位より下方にあり、胴部の屈曲は明瞭である。第IV様式第3段階に比定される。壺(296)は第II様式に比定される。この他、第I様式~第IV様式までの遺物が出土しており、時期にはまとまりがない。

#### おわりに

以上、和泉の弥生時代中期土器編年試案を提示し、それに基づいて97年度調査で出土した当該期の土器について基礎的な考察を試みた。今回示した編年試案は決して当地の弥生土器編年の抱える問題点を改善できたわけではないが、遺物整理を実施する上の編年観とその根拠とした資料を示すことによって、本報告書の内容について批判的な検討を行えるだけの基礎データは揃えることができたと思う。ご批判、ご教示をお願いしたい。

註

- (1)橋口吉文「和泉地域」(『弥生上器の様式と編年-近畿編II-』木耳社 1990年)
- (2)鶴大阪文化財センター『池上遺跡』第2分冊 土器編1978年
- (3)和泉丘陵内遺跡調査会『和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書I 池田下遺跡』1991年
- (4)鶴大阪府文化財調査研究センター『下田遺跡』1996年
- (5)註(2)と同じ
- (6)堺市教育委員会『1. 四ツ池遺跡発掘調査報告一堺市鳳北町8丁431-1 YOB90地区-』(『堺市文化財発掘調査報告31集』1986年)
- (7)註(2)と同じ
- (8)岸和田遺跡調査会『栄の池遺跡』1979年
- (9)第2阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池遺跡』15 1970年
- (10)註(3)と同じ
- (11)註(3)と同じ
- (12)大阪府教育委員会『史跡池上曾根遺跡発掘調査概要-松ノ浜曾根線建設に伴う発掘調査-』1990年
- (13)註(9)と同じ
- (14)註(3)と同じ
- (15)註(3)と同じ
- (16)堺市教育委員会『昭和55年度国庫補助事業発掘調査報告書 向井神社跡遺跡-反正陵古墳・二重掘- 四ツ池遺跡- 第80地区・第81地区-』1981年
- (17)註(9)と同じ
- (18)註(4)と同じ
- (19)註(3)と同じ
- (20)鶴大阪府埋蔵文化財協会『鶴大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第26輯 都市計画道路・貝塚中央線建設に伴う石才南遺跡発掘調査報告書』1988年
- (21)本稿で設定した第6段階に統くものとしては、泉南市滑瀬遺跡でまとまって出土した土器群を挙げることができる。滑瀬遺跡の上器群は①長頸壺が出現していること、②壺の大型品が姿を消し、口径15cm程度の小型品がその大半を占めていること、③壺の外面にタタキを残すものの比率が高くなっていること、④広口壺の形態の変化および円形浮文で飾るものが残る程度で無文化が著しいこと、⑤水平口縁の高杯は皆無であり、口縁部が直立もしくは外反気味に立ち上がるものが大半を占め、脚柱部も棒状になっていること、など中期の様相は残しつつも完全に後期の土器としての器種構成および特徴を有している。第6段階の土器群は中期末の土器群として後期への過渡的な性格は認められるが、この段階を大別様式の両期とみなすことはできない。
- 大阪府教育委員会・鶴大阪府埋蔵文化財協会『鶴大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第10輯 近畿自動車道和歌山線建設に伴う滑瀬遺跡発掘調査報告書』1987年
- (22)三好孝 - 「河内における弥生中期土器様相-亀井遺跡を中心にして-」(『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』1993年)
- (23)大阪府教育委員会・鶴大阪府文化財調査研究センター『河内平野遺跡群の動態VI 近畿自動車道天理吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -南遺跡群 弥生時代中期編-』1993年
- (24)ここでは主要なものを挙げておく。

秋山浩三「B.C.52年の弥生土器・池上曾根遺跡の大形建物－井戸出土資料と年輪年代－」(『大阪文化財研究』第11号 1996年)

秋山浩三「池上曾根遺跡中柵部における大形建物－井戸の変遷」(『みづほ』28・29 人和弥生文化の会 1999年)

秋山浩三「近畿における弥生「神殿」「都市」論の行方」(『ヒストリア』163 1999年)

乾哲也「池上・曾根遺跡の変遷」(『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3 勘大阪府埋蔵文化財協会 1995年)

乾哲也「弥生中期における池上曾根遺跡の集落構造」(『ヒストリア』152)1996年

池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会編『弥生の環濠都市と巨大神殿』1996年

史跡池上曾根遺跡整備委員会『史跡池上曾根遺跡95』1996年

史跡池上曾根遺跡整備委員会『史跡池上曾根遺跡96』1998年

(25)註(1)文献

(26)濱田延充「生駒西麓第III・IV様式の編年」(『弥生文化博物館研究報告』第2集 弥生文化博物館 1993年)

(27)寺沢薰・森井貞雄「河内地域」(『弥生土器の様式と編年－近畿編I－』木瓦社 1989年)

(28)表中では各編年は横並びになっているが、作業としては本稿の編年試案と図口編年とはその内容を直接対応させ、河内地域との対応関係については、本稿で検討した三好編年を媒介に寺沢・森井編年と濱田編年を個別に対応させている。従って各編年を全体で整理できているわけではない。子細に検討すればかなり問題があることは承知しており、さらに検討を加える必要性を痛感している。

#### 第124・125図掲載土器引用文献一覧(副題の一部は省略したものがある)

564…四ツ池遺跡F地区G溝：第2阪和国道内遺跡調査会『池上－四ツ池遺跡』15 1970年

536、538、540、547…四ツ池遺跡F地区袋状部をもつ道構：同上

588、591…四ツ池遺跡F地区土壤：同上

562、565、579…四ツ池遺跡52地区1号方形周溝墓：堺市埋蔵文化財研究会『昭和51年度四ツ池遺跡調査概要－方形周溝墓の調査－』1977年

545…池上遺跡Pit第5上器群：勘大阪文化財センター『池上遺跡』第2分冊 土器編1978年

506、530、531、566、568、615…池上遺跡SF074：同上

503、507、554…池上遺跡SF075：同上

502、505、509、510～520、524、525、527～529、549…池上遺跡SF077：同上

596…池上遺跡SF078：同上

508…池上遺跡SF080：同上

553…池上遺跡SF083：同上

575…池上遺跡SG109：同上

559、581～583…池上遺跡SF120：同上

608…池上遺跡SH122：同上

526…池上遺跡SI130：同上

534…池上遺跡SI133：同上

601…池上遺跡SI134：同上

573…池上遺跡SI137：同上

605…池上遺跡SK243：同上

- 543…池上遺跡SK285：同上
- 537、569…池上遺跡SL321：同上
- 552…池上遺跡第3—黑色砂質土層：同上
- 624、572…池上遺跡不明：同上
- 555…池上遺跡土器群I-D：大阪府教育委員会『池上遺跡発掘調査概要-VI』1979
- 609…栄の池遺跡SF034：岸和田遺跡調査会『栄の池遺跡』1979年
- 532…栄の池遺跡SX001：同上
- 533、544、618、625…栄の池遺跡SX002：同上
- 504、577…栄の池遺跡包含層：同上
- 587、594、598、602、604、606、610、613…四ツ池遺跡81地区SD005-006-008：堺市教育委員会『昭和55年度  
国庫補助事業発掘調査報告書 向井神社跡遺跡一反正陵古墳・二重掘一 四ツ池遺跡第一第80地区・第81地区一』  
1981年
- 521～523…四ツ池遺跡YOB90B-SR001：堺市教育委員会「1. 四ツ池遺跡発掘調査報告一堺市鳳北町8丁431-1  
YOB90地区-」(『堺市文化財発掘調査報告31集』) 1986年)
- 619、620…石才南遺跡401-OD：微大阪府埋蔵文化財協会『微大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第26輯 石才南遺跡  
発掘調査報告書』1988年
- 501…四ツ池遺跡第45地区A溝：土山健史「12 四ツ池遺跡」(『第23回埋蔵文化財研究会・第4回東海埋蔵文化財研  
究会「先生時代の環濠集落をめぐる諸問題』) 1988年)
- 557、561、567、570、571、578、580…池上曾根遺跡SD05：大阪府教育委員会『史跡池上曾根遺跡発掘調査概要  
—松ノ浜曾根線建設に伴う発掘調査—』1990年
- 560、563…池上曾根遺跡SD10下層：同上
- 584、585…池田下遺跡堅穴住居5：和泉丘陵内遺跡調査会『和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書 I 池田下遺跡』1991年
- 550…池田下遺跡上器棺3：同上
- 548…池田下遺跡方形周溝墓2：同上
- 541、542、551、556…池田下遺跡方形周溝墓3：同上
- 614、616、621～623、626～628、630～635…池田下遺跡溝3：同上
- 535、539…池田下遺跡溝6：同上
- 558、574、576…池田下遺跡溝7：同上
- 590…万町北遺跡T002：同上
- 617、629…野々井西遺跡谷底：大阪府教育委員会・微大阪府埋蔵文化財協会『微大阪府埋蔵文化財協会調査報  
告書第86輯 野々井西遺跡-ON231号窓跡』1994年
- 546…野々井西遺跡溝7：同上
- 586、589、592、593、595、597、599、600、603、607、611、612…下田遺跡SD1305 5-6層：微大阪府文化財  
調査研究センター『下田遺跡』1996年

## 考察 2

### 方形周溝墓から見た池上曾根遺跡

大洞真白

#### 1. はじめに

近畿を代表する弥生時代の環濠集落である池上曾根遺跡については、現在まで様々な角度から研究が進められている。近年は史跡整備に伴う調査の成果によって、集落中心部で検出された大型建物に関わる問題や、弥生「都市論」の問題について活発な論議が行われている。このような動向のなか、池上曾根遺跡の方形周溝墓については集落の構成要素の一つとして触れられることがあるが、資料上の制約が大きいため、これまで集落論の一環として直接的に取り上げられることはほとんどなかった。今回の調査で検出された方形周溝墓群では、本遺跡で初めて主体部から木棺の痕跡が検出されるなど、墓制の問題に新たな知見を加えた。そこで、現在まで本遺跡で得られた方形周溝墓の資料を検討することにより、墓域の変遷や集落の消長との関係について考えてみたい。

#### 2. 既往の調査

第126図は、方形周溝墓とその他の主な遺構を図示したものである。池上曾根遺跡では、方形周溝墓及びその可能性があるものが計26基報告されている。各方形周溝墓の詳細について第2表にまとめ、今回調査以外の平面図を第127図にあげた。以下、調査年度順に各方形周溝墓について説明を加える。なお、規模については墳丘裾の長さを示し、周溝の形態については、A型：陸橋部がなく四方を周溝が巡るもの、B型：陸橋部のあるもの、C型：周溝の一辺を欠きコの字型を呈するもの、と分類して記述した。また土器の実測図が公表されているものと土器を実見したものは改めて時期について検討を加えた。特に第Ⅲ・Ⅳ様式については考察1の編年に基づいて表記している。実測図が公開されておらず、実見もできなかった分は報告書に記載された時期を表記するに留めた。

##### (1) 1969年度調査(E地区)

SH120～123(註(3)～①文献)の4基が検出されている。信太山丘陵から北西に延びる微高地の南斜面にあたり、洪積層である疊層上に立地している。

SH120 墳丘規模は $12.5 \times 8.5\text{m}$ 、墳丘面積は $106.3\text{m}^2$ である。平面形は長方形で、上軸方位はN-24度-Wである。周溝形態はB型である。埋葬施設として、その可能性のある土坑が1基検出されている。周溝からは鉢と、生駒西麓産の鉢-台付鉢-無頸壺が出土している。<sup>(3)</sup>いずれも完形に近い第Ⅳ様式第2段階の土器であり、この時期に築造されたと考えられる。

SH121 墳丘規模は $16.7 \times 11\text{m}$ 、墳丘面積は $226.5\text{m}^2$ である。平面形については南東側の長辺に突出部がある。報告書では「規模の異なる二つの方形周溝墓が隣接していたものとも思われるが、原形が削られているので断定できない」とされているが、特異な形態の方形周溝墓の可能性もある。上軸方位はN-26度-Wである。周溝形態は不明で、埋葬施設は検出されていない。周溝から第Ⅲ～Ⅳ様式の土器が出土したと報告されているが、築造時期の詳細は判定できない。

SH122 墳丘規模は $19 \times 12.4\text{m}$ 、面積は $235.6\text{m}^2$ である。平面形は長方形であり、上軸方位はN-22度-Wである。周溝形態はB型である。埋葬施設は検出されていない。出土土器として第Ⅳ様式第3段階の高杯が報告されているが、他の遺物を実見した結果、第Ⅳ様式第2段階の生駒西麓産の壺も含まれていることが判明した。検討した土器の点数が少ないので断定できないが、第Ⅳ様式第2段階に築造

調査区	名称(旧称)	規模(填丘縦)	填丘面積	主軸の方位	平面形	周溝の形態	周溝共有	周溝幅	主体部	時期	典拠
D地区	SII120 (A号)	12.5×8.5	106.3	N 24度-W	長方形	B型	○	2.4	土坑1基	IV 2	註(3)・①
F地区	SII121 (B号)	16.7×11 (突出部あり)	183.7	N-26度-W	前方後方形	不明	○	2	検出されず	Ⅲ~IV	註(3)・①
F地区	SII122 (C号)	19×12.4	235.6	N-22度-W	長方形	B型	×	4	検出されず	IV-2~3	註(3)・①
F地区	SII123 (D号)	10.8×8.8	95	N 21度-W	隅丸長方形	不明	○	不明	検山されず	Ⅲ~IV	註(3)・①
H地区	SII124	約10×10	100	不明	正方形	B型	×	0.5	検出されず	II	註(3)・②③
I地区	SII125 (I-1号)	7.6×5.4	41	N-30度-E	長方形	C型	×	0.8	不明	I	註(3)・③④
I地区	SII126	5.3×5.3	28.1	N-35度-E	正方形	B型	×	1	不明	V	註(3)・③④
J地区	SII127	不明	不明	北東-南西	不明	C型	×	不明	検山されず	IV 3	註(3)・③
J地区	SII128 (J-1号)	6×4.5	27	N-30度-W	長方形	C型	×	不明	検山されず	IV -4	註(3)・②
47-3区	E号	10.5以上×8	84以上	N-75度-W	長方形	不明	○	4	上坑5基	IV-2~3	註(3)・⑤
47-3区	F号	10.5以1×9	95以上	N-20度-E	長方形	A型	○	2.6	上坑1基	IV-2~3	註(3)・⑤
47-3区	G号	不明	不明	不明	不明	不明	○	1.8	検出されず	IV-2	註(3)・⑤
47-4区	4号	不明	不明	* N-70度-W	不明	不明	○	不明	検出されず	Ⅲ~IV	註(3)・⑥
47-4区	5号	不明	不明	* N-65度-W	不明	不明	○	不明	検出されず	Ⅲ~IV	註(3)・⑥
47-4区	6号	不明	不明	* N-35度-W	不明	不明	○	不明	検出されず	Ⅲ~IV	註(3)・⑥
47-4区	7号	不明	不明	不明	不明	不明	○	不明	検出されず	Ⅲ~IV	註(3)・⑥
49-2区	1号	不明	不明	N-40度-E	不明	不明	○	5	土坑1基	IV-3	註(3)・⑥
49-2区	2号	不明	不明	* N-42度-E	不明	不明	○	5	検出されず	IV-3	註(3)・⑥
49-2区	3号	12.5×6.2±1	73.0±1	N-40度-E	長方形	不明	○	5	上坑2基	IV-2~3	註(3)・⑥
96-1区	周溝幕1-1	8.8以上×7.2	63.4以上	N-85度-E	隅丸長方形	C型	×	2.8	検出されず	IV-1	註(3)・⑦
96-1区	周溝幕1-2	12.4×6以上	62.0±1	N-75度-W	隅丸長方形	C型	×	2	検山されず	IV 2	註(3)・⑦
97-3区	SII164	17以上×12	204以上	N-65度-W	長方形	不明	×	5	木棺5基	IV-2	木棺5基
97-3区	SII165	14以上×12	168以上	N-50度-W	長方形	A型	×	5	木棺5基	IV-3	木棺報告書
97-8区	FD214	不明	不明	* 東-西	不明	不明	×	5.5	検出されず	IV-3	本報告書
97-4区	SX99	不明	不明	* N-58度-W	不明	不明	×	4	検出されず	IV 1	木棺報告書
97-6区	SX127	不明	不明	* N-40度-E	不明	不明	×	3.2以上	検出されず	IV-2	木棺報告書

凡例 1 計測値の単位は、規模がm<sup>2</sup>、填丘面積がm<sup>2</sup>である。

2 方位に\*を付したものは、長、短軸が区別できないものである。検出長の長い方の方位を取り、周溝の方向から判断して計測した。

3 周溝の形態は次のよう分解して示した。A型：四方を周溝巡る。B型：隣構部を有す。C型：一辺を欠く。

4 周溝幅は最大幅である。

v 主体部に不明であるものは、土坑が検出されているが、その性格について報告書に記載のないものである。

vi 時期のうちⅢ~IVとあるものは、十器の実見ができるなかったため、報告されている時期を用いている。

第2表 池上曾根遺跡における方形周溝墓一覧

され、第3段階にかけて複数回の埋葬が行われた可能性がある。

SII123 填丘規模は10.8×8.8 m、面積は95m<sup>2</sup>である。平面形は隅丸長方形であり、主軸方位はN-21度-Wである。周溝形態はA型と見られる。埋葬施設は検出されていない。周溝から中期の土器片が出土したと報告されている。

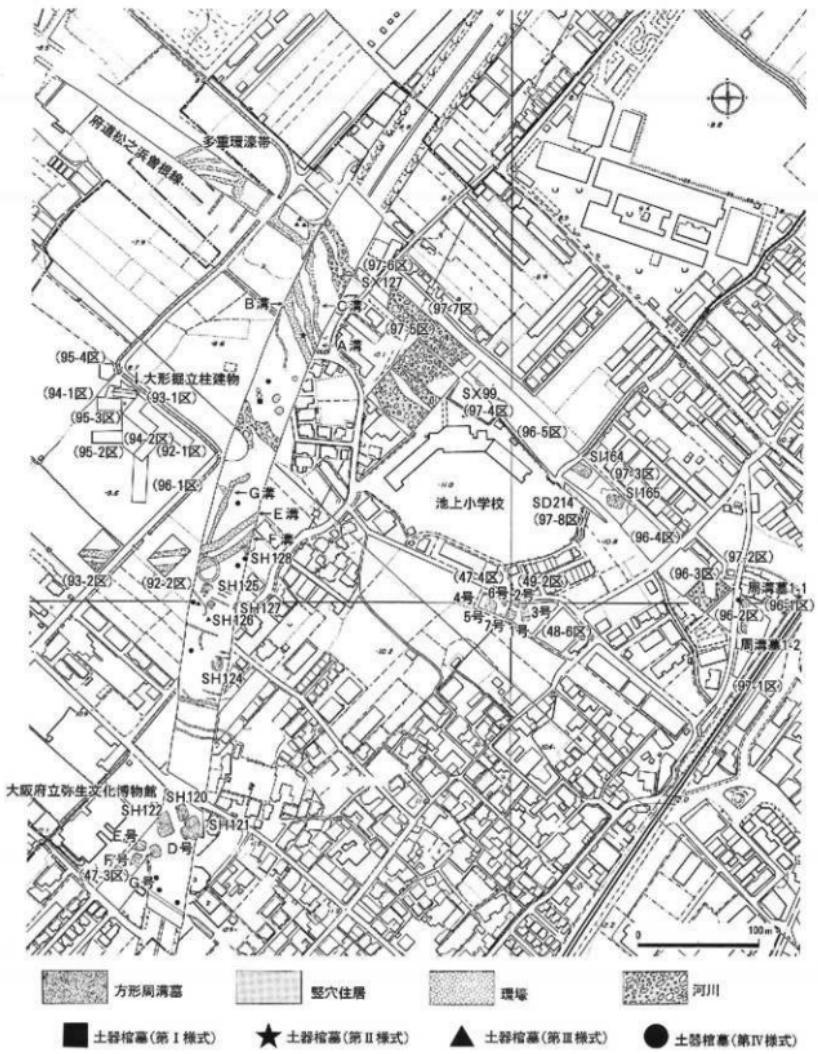
### (2) 1969年度調査(H~J地区)

SII124 ~128 (註(3)・②③④文献)の5基が検出されている。低位段丘上にあり、標高が集落内よりやや高い場所に位置する。

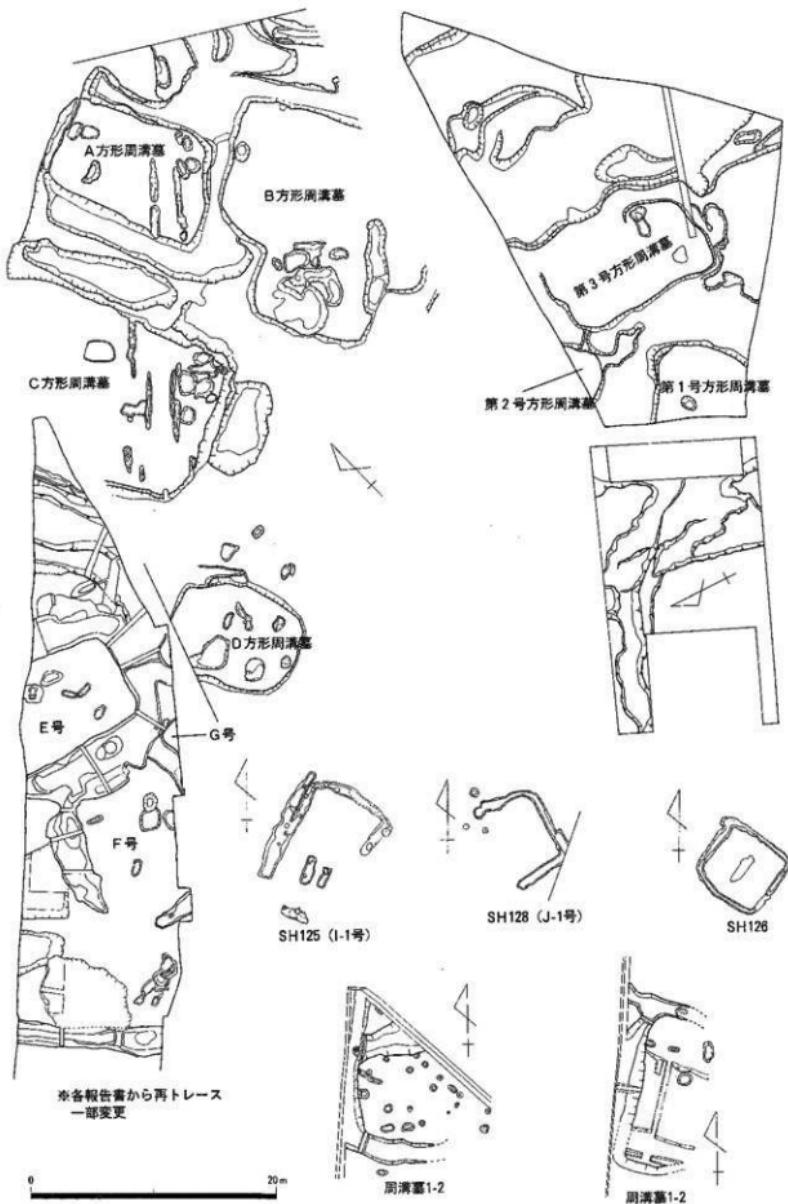
SII124 填丘規模は約10×10m、面積は約100m<sup>2</sup>である。平面形は正方形で、上軸方位は不明である。周溝形態はB型である。埋葬施設は検山されていない。築造時期は第Ⅱ様式とされている。

SII125 填丘規模は7.6×5.4m、面積は41m<sup>2</sup>である。平面形は長方形であり、上軸方位はN-30度-Eである。周溝形態はC型である。<sup>(4)</sup>埋葬施設は検出されていない。築造時期は第Ⅰ様式新段階とされている。

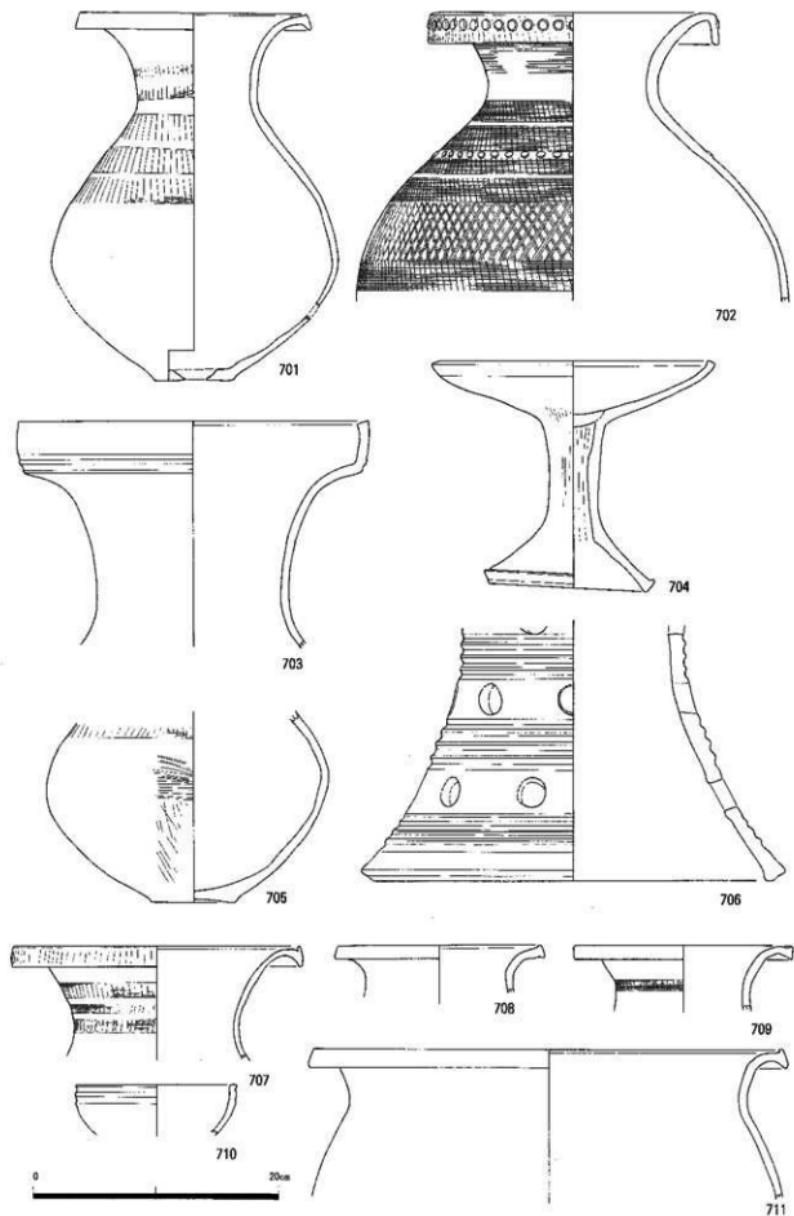
SII126 填丘規模は5.3×5.3m、面積は28.1m<sup>2</sup>である。平面形は正方形で、主軸方位はN-35度-Eである。周溝形態はB型である。埋葬施設は、填丘中央に土坑が1基検出されているが、その性格は不明である。<sup>(5)</sup>第V様式の段丘口縁壇の口縁部が出土しており、これが築造時期の上限と考えられる。



第126図 主要遺構図 (S=1/4,000)



第127図 方形周溝基平面図 (S=1/400)



第128図 出土土器実測図 ( $S = 1/4$ )

SH127 大半が調査区外であるが、西側周溝が約6m検出されていることから、墳丘面積は30m<sup>2</sup>前後となる可能性が高い。平面形は不明で、主軸方位はN-45度-Lである。周溝形態はC型である。埋葬施設は検出されていない。第IV様式第3段階の鉢及び無頸壺の口縁部が出土しており、これが築造時期の上限と考えられる。

SH128 墳丘規模は6×4.5m、面積は27m<sup>2</sup>である。平面形は長方形で、主軸方位はN-30度-Wである。周溝形態はC型である。埋葬施設は検出されていない。第IV様式の広口壺が出土しているが、中期の環濠F溝(SI-F080)の埋没後に築造されている。F溝が廃絶するのが第IV様式木塙とされており、これが築造時期の上限である。

### (3) 1972年度の調査

E-F-G号(註(3)-⑤文献)の3基が検出されている。SH120~123の南側に隣接し、立地場所も同様である。なお、今回出土遺物を実見することができたので、それらを含めて検討した。時間の制約から全てを整理することはできなかったが、代表的なものは第128図に示し、それ以外は必要に応じて説明を加えた。また周溝を共有するものについては、いずれかの墳丘に明らかに近接するもので検討した。

E号 墳丘規模は10.5以上×8m、面積84m<sup>2</sup>以上である。平面形は長方形で、主軸方位はN-75度-Wである。周溝形態は不明である。埋葬施設は、その可能性のある5基の土坑が墳丘上に検出されており、最も西側の土坑には木棺の痕跡らしき窪みが確認されている。遺物を実見した結果、周溝からほぼ円形の第IV様式第2段階の高杯(704)、無文の広口短頸壺の他、第IV様式第3段階の広口短頸壺(701、702)、段状口縁壺(703)、器台(706)、口縁に紐穴を有する無文の広口短頸壺などが出土していることが判明した。これらはいずれも供獻土器と考えられ、E号は第IV様式第2段階に築造され第IV様式第3段階まで複数回の埋葬が行われた可能性がある。

F号 墳丘規模は10.5以上×9m、面積は95m<sup>2</sup>以上である。平面形は長方形で、主軸方位はN-20度-Eである。周溝が削平され南西部で途切れているが、周溝形態はA型と推測されている。埋葬施設は、その可能性のある土坑が墳丘上に検出されているが、詳細は不明である。遺物を実見した結果、周溝から第IV様式第3段階の上器が出土していることが判明した。口縁部に綾杉状の刺突文を施し、円形浮文を張り付けた生駒西麓産の細頸壺、口縁端面に刺突文、頸部以下に廉状文-円形浮文を施す広口短頸壺が完形に近い状態で出土している。これらは供獻土器と考えられるものである。そのほか口縁部に凹線を2条施す段状口縁壺、垂下した口縁部に凹線6条、円形浮文を施す広口短頸壺、口縁端面に2条の凹線を施す壺などを確認したが、いずれも第IV様式第3段階の上器と考えられることから、F号はSH122及びE号より1段階遅れて築造されたと考えられる。

G号 墳丘コーナーの一部を検出したのみで、詳細は不明である。周溝幅は約1.8mで、主軸方位はF号に近いと思われる。遺物を実見した結果、第IV様式第2段階の高杯、口縁端面に2条の浅い凹線を施した短頸壺、生駒西麓産の段状口縁の小形鉢等が出土していることが判明した。この他第IV様式の小形壺を確認した。G号のはほとんどは調査区外であるが、出土資料を見る限り、第IV様式第2段階にはすでに築造されていたと考えられる。

### (4) 1972年度調査

4~7号(註(3)-⑤文献)が池上小学校(IH-千草池)の南側で検出されている。千草池の地には弥生時代中期以前に大きな河川があったと考えられ、その河川が形成した自然堤防上に立地する。なお、周溝から第III~IV様式の上器が出土したと報告されている。

4号 墳丘規模、面積、平面形は不明であるが、主軸方位はN-70度-Wである。周溝形態は不明である。埋葬施設は検出されていない。

5号 墳丘規模、面積、平面形は不明であるが、上軸方位はN-65度-Wである。周溝形態は不明である。埋葬施設は検出されていない。

6号 墳丘規模、面積、平面形は不明であるが、主軸方位はN-35度-Wである。周溝形態は不明である。埋葬施設は検出されていない。

7号 墳丘規模、面積、形態、主軸方位すべて不明である。周溝形態も不明である。埋葬施設は検出されていない。

#### (4) 1974年度調査

1～3号(註(3)～(6)文献)の3基が検出されている。4～7号の東側に隣接し、立地場所も同様である。この3基についても遺物を実見することができたので第128図に示し検討する。

1号 調査区外に延びるため墳丘規模、面積、平面形は不明であるが、主軸方位はN-40度-Eである。周溝形態は不明である。埋葬施設として墳丘上で楕円形の土坑が検出されている。この土坑には木棺使用の痕跡はなく、土壤墓と推測されている。<sup>(10)</sup>周溝から第IV様式第3段階の広口短頸壺の口縁部が出土しており(707)、これが築造時期の上限である。

2号 調査区外に延びるため墳丘規模、面積、平面形は不明であるが、主軸方位はN-42度-Eである。周溝形態は不明である。埋葬施設は検出されていない。周溝から第IV様式第3段階の甕(711)が出土している。これが築造時期の上限である。

3号 東側を古墳時代の河川に削平されている。墳丘規模は12.5×6m以上、面積は75m<sup>2</sup>以上である。平面形は長方形であり、主軸方位はN-40度-Eである。周溝形態は不明である。埋葬施設として重複する2基の上坑が検出されている。周溝から第IV様式第2段階の壺の体部(705)、無文の広口短頸壺(708)、鉢(710)等が出土している他、第IV様式第3段階の広口短頸壺(709)が出土している。供献十器と断定できるものはないが、3号は第IV様式第2段階から第3段階にかけて複数回の埋葬が行われた可能性があると考えられる。

#### (6) 1996年度調査

周溝墓1-1、周溝墓1-2(註(3)～(7)文献)の2基が検出されている。信太山丘陵の縁辺に立地する。

周溝墓1-1 墳丘規模は8.8以上×7.2m、面積は63.4m<sup>2</sup>以上である。平面形は長方形と考えられ、主軸方位はN-85度-Eである。周溝形態はC型であるが、削平を受けた結果と考えられる。埋葬施設として墳丘上の主体部は検出されていないが、周溝内で上器棺墓が検出されている。周溝墓1-1の上器棺の身は第IV様式第1段階の無文の広口短頸壺である。この土器がそのまま方形周溝墓の築造時期を示すとは言えないが、第IV様式第1段階以前に築造されたことは確実である。

周溝墓1-2 墳丘規模は12.4×5m以上、面積は62m<sup>2</sup>以上である。平面形は長方形と考えられ、主軸方位はN-75度-Wである。周溝形態はC型であるが、これは削平を受けている可能性がある。埋葬施設は墳丘上の主体部は検出されていないが、周溝内で上器棺墓が検出されている。周溝墓1-2の上器棺の身は生駒西麓産の大形の甕で、第IV様式第2段階のものである。この上器がそのまま方形周溝墓の築造時期を示すとは言えないが、第IV様式第2段階以前に築造されたことは確実である。

(7) 1997年度の調査(本報告書)で、SI164、SI165、SD214、SX99、SX127の5基を検出した。SX127は集落北側の多重環濠に近接して位置し、東西両側を河川に挟まれている。これ以外は下層に弥生時代以前の自然河川が確認されており、その河川の形成した自然堤防上に位置する。

SI164 墳丘規模は17以上×12m、面積は204m<sup>2</sup>以上である。平面形は長方形で、主軸方位はN-65度-Wである。周溝形態は不明である。墳丘上で5基の主体部が検出され、いずれからも組合式木棺の痕跡が確認された。周溝から第IV様式第2段階の上器が出土しており、これが築造時期の上限である。

SI165 墳丘規模は14以上×12m、面積は168m<sup>2</sup>以上である。平面形は長方形で、主軸方位はN-80度-Wである。周溝形態は△型である。墳丘上で5基の主体部が検出され、いずれからも組合式木棺の痕跡が確認された。また東周溝SX142内で十墳墓SK174が検出された。周溝内から供獻土器と推定される第IV様式第3段階の十器が出土しており、この時期に築造されたと考えられる。

ここで、SI164-165の埋葬施設について若干の検討を行っておきたい。

	名称	主軸方位	墓坑規模(m)	墓坑面積	棺内法(m)	底板面積	墓坑面積+裏込粘土	裏込粘土	墓壙底面	墓壙底面
			(長さ×幅×深さ)	(m <sup>2</sup> )	(長さ×幅×深さ)	(m <sup>2</sup> )	底板面積			
SI164	SK153	N-48度-W	2.16×1.15×0.09	2.48	1.26×0.37×0.03	0.72	3.4	○	○	平坦
	SK154	N-48度-W	1.95×1.24×0.1	2.52	1.68×0.49×0.07	1.01	2.5	○	○	平坦
	SK163	N-51度-W	1.73×0.93×0.05	1.61	1.36×0.46×0.03	0.78	2.1	×	×	平坦
	SK162	N-41度-E	1.9×0.67×0.07	1.27	1.46×0.45×0.03	0.75	1.7	×	○	平坦
	SK167	N-45度-E	1.7×1.0×0.07	1.7	1.11×0.04×0.03	0.57	3	×	×	平坦
SI165	SK155	N-2度-W	1.95×0.83×0.08	?	?	?	?	×	○	凹凸
	SK156	N-30度-W	1.95×0.74×0.05	1.45	1.42×0.54×0.01	0.7	2.1	×	?	凹凸
	SK157	N-43度-E	1.59×0.74×0.08	1.18	1.20×0.44×0.02	0.71	1.6	×	○	凹凸
	SK158	N-120度-W	1.71×0.76×0.08	1.3	1.36×0.28×0.03	0.49	2.7	×	○	凹凸
	SK159	N-70度-E	2.7×1.15×0.15	3.05	1.21×0.44×0.03	0.64	4.8	○	○	凹凸

第3表 SI164・165主体部一覧

① 配置 SI164では墳丘中央に主軸方位をほぼ北東-南西にとる墓壙SK153・154・163がある。北側にSK163があり、その南側にSK153・154が一直線上に並ぶ。この3基を挟むように、東端にSK162、西端にSK167がある。この2基は前の3基と主軸方位が直交する。一方SI165では、墳丘中央北側に主軸方位を北東-南西にとるSK156・157が横に並び、その南側に主軸方位をほぼ東西にとるSK158・159が縦に並んでいる。西端には主軸方位をほぼ南北にとるSK155がある。

このように上軸方位を同じくするもの、直交するものが目につき、埋葬の際に主軸の方位が意識されていたことがわかる。先後関係はいずれの墓壙にも重複がないため不明である。

② 墓壙 第129図は、第3表の墓壙の面積を底板面積で割った指標をグラフ化したものである。これから墓壙と木棺の大きさに規則性はないと言える。底板面積に対して墓壙面積が大きいものからは後述する裏込め土が検出されている。

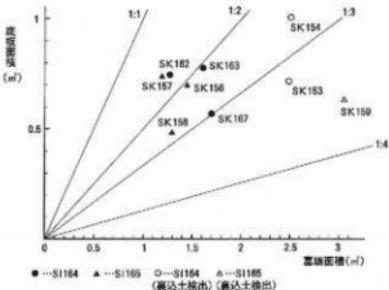
次に墓壙の底面の状況を取り上げる。一部の墓壙には底面に掘削時の凹凸があったが、これはSI164ではなくSI165のみの特徴である。底面に凹凸のあるものには、粘土や砂を充填する整形がおおむね行われているが、予め平坦に掘削されているものには行われない場合もある。

③ 棺材の組み合わせ 木棺の構造は9基についてある程度判明した。いずれも小口板、側板とともに底板の上に立て、小口板を側板で挟むものである。SK157は側板の小口板と組み合う部分に溝状の掘

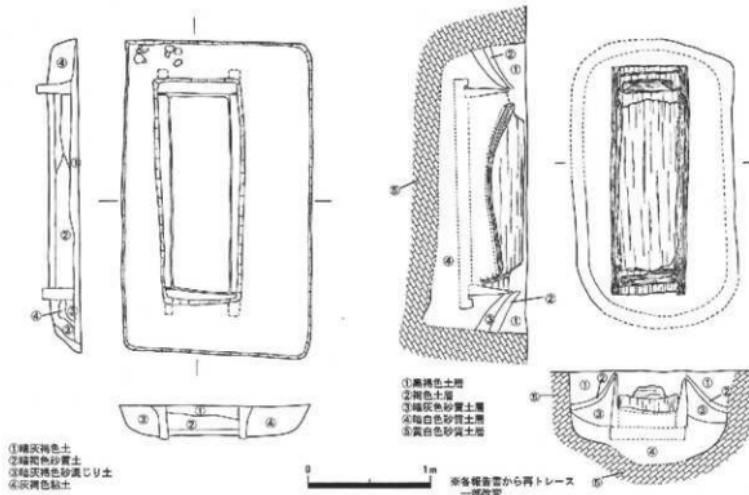
り込みを施した可能性のあるもので、その他には棺材の加工痕跡は確認されていない。

④ 裏込め土 加工痕跡のないもののうち、3基から裏込め土が検出されている。SK153では側板と小口板を帯状にとりまいており、SK154-159では側板背面の中央や小口板背面に土頭頭のように置かれた状態であった。木棺を組み立てる際、墓壙内に土を入れるまでに倒れるのを防ぐため、各部材を仮に支えるためのものである。一方、側板に加工があったと思われるSK157では裏込め土は確認されていない。棺材に加工がないもの、木棺に比べて墓壙の大きいものは当然倒れやすく、このような場合に裏込め土が多く用いられていることが判明した。

裏込め土の類例は、管見の限りでは堺市四ツ池遺跡に弥生時代前期の可能性が指摘されている木棺直葬墓が一例あるのみである(第130図)。棺材は朽ちているが、底板の短辺の外側を深く掘って小口板を立てる形式で、小口板の外側に灰褐色粘土を入れ仮止めとしていることが報告されている。また豊中市勝部遺跡の第6号木棺は、小口板一側板とも底板に載る構造である(第130図)。底板に小口板を置くための溝状の加工があるので、墓壙埋め戻しの過程で土を突き固めている。この例も裏込め土の一例であるが、土塊を使用しない点で本遺跡例とは異なる。弥生時代の木棺墓については、棺の構造に関する研究は進展している。しかし、木棺と墓壙埋土の関係を検討できる資料は少ない。今回検出した木棺の裏込めに土塊を置くという手法は、埋葬過程を復元する上で一つの有力な手がかりとなるものと思われ、今後調査を実施する上でも注意する必要があると思われる。



第129図 墓壙・底板面積比較図



第130図 四ッ池遺跡第45地区土塚墓(左)・勝部遺跡第6号墓(右) (S=1/40)

SD214 大半が調査区外で墳丘規模・面積、平面形は不明だが、墳丘の検出長は8mで、周溝の方位はN-65度-Wである。周溝形態は不明である。埋葬施設は検出されていない。周溝から第IV様式第3段階の広口短頭窓が出土しており、これが築造時期の上限である。

SX99 大半が調査区外で墳丘規模、面積、形態は不明だが、周溝幅は約2.2~4mを測り、主軸方位はN-58度-Wである。周溝形態は不明である。南側の周溝は自然地形の落ち込みを利用している。埋葬施設は検出されていない。周溝から第IV様式第1段階の供獻十器の一括資料が出土しており、築造時期を明確に示している。

SX127 方形周溝墓である可能性が高いので考察の対象とする。大半が調査区外で墳丘規模・面積、平面形は不明であるが、周溝の幅は約3.2m以上あり、主軸方位はN-40度-Eである。周溝形態は不明である。埋葬施設は検出されていない。周溝から供獻土器と推定される第IV様式第2段階の土器が出土しており、この時期に築造されたものと考えられる。

### 3. 方形周溝墓の様相

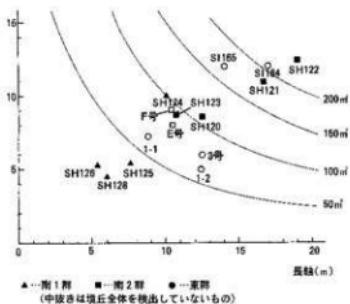
#### (1) 方形周溝墓群の構成

以上の方形周溝墓は、集落との位置関係により南1群、南2群、東群に大きく分けることができる。以下、それぞれの群についてまとめる。

南1群 第I様式のG溝(SF081)及び中期のE溝(SF079)、F溝(SF080)のすぐ南に近接して位置する一群である。SH124~128で構成される。第I・II・IV・V様式のものを含む。それぞれが単独で築造されている。また本遺跡で検出されている方形周溝墓のうち墳丘面積が50m<sup>2</sup>以下の小規模なものは全て本群に属している(第131図)。墳丘の平面形は長方形のものと正方形のものがあるが、他の群には正方形のものはないのでひとつの特徴と言えるかもしれない。周辺には上器棺墓が多く分布する。

南2群 南1群のさらに南に位置する一群である。南1群のうち最も南にあるSH121と南2群との距離は約100mあり、両者は異なる墓域として明確に区分できる。SH120~123、E・F・G号で構成される。全て第IV様式のものである。南1群と異なり近接して築造されており、周溝を共有するものも多い。なお北側のSH120~123と南側のE・F・G号とでは、主軸の方位が異なっている。墳丘規模も北側に墳丘面積150m<sup>2</sup>以上の人規模なものが2基存在し、南側は60~100m<sup>2</sup>のもので構成される。こうしたことから南2群はさらに二つの小群に分けて考えることができる。ただD号は位置からは南側の小群に含まれるが主軸方位は北側の一群に近く特異な存在である。

東群 集落の東側に位置する一群である。1~7号、SX99・127、SH164・165、SD214、周溝墓 1-1・1-2で構成される。全て第IV様式のものである。数基が近接して築造されているのが一般的であるが、周溝は共有するものとしないものがある。集落東側の未調査地には方形周溝墓が存在する可能性が十分考えられ、その広がりを想定して現段階では東側全体を1群としているが、集落の東側は河川や谷が存在し、四つの小群に分けることができる。最も西側に位置するのがSX127である。河川を挟んで東群の中央に位置するのがS



第131図 墳丘規模の比較

X99、SI164・165、SD214、1～7号である。これらは谷(千草池)をはさんで北に位置するSX99、SI164・165、SD214と南に位置する1～7号に細分される可能性が高い。ここから再び河川を挟んで最も東に位置するのが周溝墓1-1・1-2である。最も西の小群ではSX127しか検出されていないが、これを除いてはいずれの小群でも方形周溝墓は近接して築造されている。しかし中央南側の小群(1～7号)が周溝を共有しているものの、他の小群では周溝を共有していない。規模については中央北側の小群のうち規模の判明しているSI164・165が面積150m<sup>2</sup>以上と大きい。しかしその他の小群は60～100m<sup>2</sup>とやや小さく、小群内での顕著な差もまた認められない。

## (2) 墓域の変遷

第4表は群ごとの方形周溝墓の築造時期を示したものである。池上曾根遺跡における方形周溝墓の築造は第I様式新段階に南1群から始まる。集落の南に接した場所が最初の墓域とされたようである。第II様式の方形周溝墓は第I様式の時期の方形周溝墓より約50m南に築造されており、墓域がだいに南に拡大している様子が伺える。第III様式の方形周溝墓は現段階では検出されていないが、前後の時期の方形周溝墓の立地から考えると墓域は更に広がっていたと考えられる。おそらく南東側の未調査地にこの時期の方形周溝墓は存在すると推測される。第IV様式に入ると墓域は更に南側へ拡大する他、東側へも拡大し、方形周溝墓の数も急激に増加する。東群から南2群には下層に礫層が広がり、耕作には利用できない土地であったため、墓域として利用するようになったものと考えられる。第IV様式第4段階には南1群でのみ方形周溝墓が確認されている。詳細は現段階では不明だが、南2群、東群では方形周溝墓の築造が減少あるいは築造されなくなり、集落に近接した場所での築造が増加するようである。第V様式になると南1群およびその周囲が墓域となつたと考えられる。<sup>(2)</sup>

時期	南1群	南2群	東群
I	SH125		
II	SH124		
III			
IV-1			SX99
IV-2		SH120 SH122	E号 G号 SH124 SI164 3号
IV-3	SH127		SX99 SH165 SD214 2号 1号
IV-4	SH128		
V	SH126		

第4表 方形周溝墓築造時期一覧

以上のように、集落に近接した南1群から墓域の形成が始まり、第IV様式の時期には集落南方から東方の広範囲に拡大し、第IV様式末には再び集落に近い場所に戻るというのが墓域の変遷のおおまかな流れである。このうち第IV様式第1～3段階の築造の動向について、注目される点がある。東群と南2群は小群に細分することができるが、それぞれの小群単位で築造が進んでいる。集落に近い方から遠い方へ向かって順次築造していくような状況は認められない。小群内ではおよそ北に位置するものが占く、南および東に向かって築造が進められていることは明らかである。小群単位での築造が認められるという事実は、方形周溝墓を築造した主体が同時期に複数存在しており、造営主体ごとの墓域が決まっていた可能性を示していると言えるだろう。

#### 4. 集落と墓域の消長

以上、池上曾根遺跡の方形周溝墓について基本的な問題を論じた。不明な点もいまだ少くないが、論じた問題点を整理しながら、集落の動向と絡めた場合どのように理解できるのかを明らかにすることとまとめにかえることとした。

池上曾根遺跡の集落が成立する以前、この地には大規模な河川が流れていた。今回の97-5・7区最下層で検出した砂疊層がそれに当たる。しかし弥生時代に入ると、この河川は埋積して小規模な河川に変わった。

池上曾根遺跡の集落が成立したのは第Ⅰ様式新段階の時期である。集落は河川左岸の微高地(自然堤防上)に営まれた。この時期、環境の可能性も指摘されるG溝(SF081)が集落東側に開削された。最近の調査では集落の西側にも大規模な溝が開削されていたことが明らかになっているが、実際に環濠が成立していたかどうかはまだ検討の余地が残されている。集落成立期の墓域はこのG溝のすぐ南側、本稿で設定した南1群およびその周辺であると考えられる。この時期の方形周溝墓はSH125の1基しか検出されていない。墳丘面積は41m<sup>2</sup>と規模が小さい上、単独で築造されている。墓域の全体は不明だが、第Ⅱ様式以降の墓域の広がりを勘案すると、この時期の墓域は集落に近接した場所に限られ、南1群の周辺に同時期の方形周溝墓が散在する程度であると推測される。また水田は全く不明である。集落の周辺に存在したとすれば集落の南西から北側にかけて広がっていたと考えざるをえない。

第Ⅱ様式の時期は集落発展の一つの画期であった。B溝(SF075)、E溝(SF079)が開削され、環濠が成立したのである。集落の南は墓域であるために、集落は北側に大きく広がる形になったと考えられる。墓域は第Ⅰ様式に引き続き集落の南側であったが、変化も見受けられる。資料が限られているため同じ南1群という形で括っているものの、この時期には墓域は南へ広がり始めている。一方97-5-7区の調査で第Ⅱ様式の土器が河川に投棄されていたことから、集落東方へも往来は盛んに行われていたと推測されるが、当該期の方形周溝墓はまったく検出されていない。したがって集落東側に墓域が広がっていた可能性はまずないと考えられる。この時期の方形周溝墓はSH124の1基が検出されているだけである。墳丘面積は100m<sup>2</sup>と大きくなるが、現状の資料数では墳丘規模の評価は難しい。しかし第Ⅰ様式のSH125同様に単独で築造されている点は、第Ⅳ様式以降の方形周溝墓と区別される特徴であるとは言えるだろう。

第Ⅲ様式(集落中央部)の調査で用いられた時期区分でいう「Ⅲ期前半」には、A溝(SF074)、F溝(SF080)が開削され、環濠の規模はさらに大きくなかった。埋没した第Ⅱ様式の環濠E溝上にも竪穴住居群が形成されるようになり、集落では相当な人口増加が起こったものと考えられる。一方、集落東側の河川からは、この時期の土器は全くと言って良いほど検出されていない。河川の勢いが増し不安定な状態にあったのだろう。この時期の方形周溝墓は検出されておらず、墓域は明らかではない。しかし南1群における墓域の様相を考えると、墓域は第Ⅱ様式より更に拡大したものと考えられる。集落東側が不安定な状況にあったこと、および南2群で当該期の方形周溝墓が検出されていない事実を考えあわせれば、集落南東部の未調査地に存在する可能性が高い。また集落の動向を考えると、その数も大きく増加したものと推測される。

第Ⅳ様式の時期にも人口の増加は依然続いている。この段階では人口の増加に対応して南側に新たな環境は開削していない。93-2・3区において当該期の竪穴住居が環濠より南側で検出されており、環濠の外側にも居住するようになったことが窺える。しかし集落の北～北西部にかけては多重環濠を新たに開削している。この多重環濠は87年度調査で検出されたが、環濠から北に向かって直線的に溝

SD05・08が伸びており、排水の用途を強く感じさせるものである。集落東側の河川には再び土器が投棄され、土器溜まりが形成された。調査の結果、小規模な流れや一時的な出水はあったが、顯著な流水の痕跡は認められなかった。この事実と多重環壕の調査結果を考えあわせれば、河川の本流は集落の西側に回り込むようになったと推測される。また第IV様式第1～2段階(集落中枢部の調査で用いられた時期区分でいう「Ⅲ期後半」)には集落中心部に大形建物が出現した。この大形建物は、第IV様式第3段階(集落中枢部の調査で用いられた時期区分でいう「Ⅳ期前半」)にかけて3ないし4回の建て替えが行われた。その最終段階が最大の規模を持つ「人形建物1」である。この大形建物が「神殿」としての性格を有していたとする推測が正しいなら、「神殿」の存在は集落における精神活動を端的に示すものであろう。しかし集落の規模が最大になり、環濠の外にまで居住域が広がる時期に築造されたことは、「神殿」が集落を束ねるイデオロギー的侧面も有していたことを示唆している。

この時期の方形周溝墓は、集落の南側および東側で検出されている。南2群および東群である。南2群は、南1群よりかなり南に位置し、墓域の拡大は更に進んだ。一方、東群の造営は河川がその本流を集落の西側に変えたために可能になったと推測される。既往の調査も併せて考えると、環濠外の南から東側一帯が墓域となった可能性が高いと言えるだろう。この時期の方形周溝墓は周溝を共有したり、隣接するものがほとんどであり、第I～II様式の時期のものが墓域内に単独で散在するのとは対照的である。そして南2群、東群における方形周溝墓の築造順を明らかにし、主軸方位をはじめとする属性および微細な地形の分析も加えることによって方形周溝墓の小群単位を読みとることが現段階でもある程度可能であり、墓域全体の動向についても推測することができるとの見通しが得られている。すでに述べたように南2群は二つの、東群は四つの小群に細分することが可能である。東群では第IV様式第1段階に二つの小群で最初の方形周溝墓が築造され、その後四つの小群すべてで築造が進んでいる。南2群でも二つの小群で並行して築造が進む。南2群は現在の資料からは東群より1段階遅れた第IV様式第2段階から築造が始まるが、第III様式の墓域が近接して存在すると推測されることから考えても実際はこれに連続して第IV様式第1段階から築造が始まっていたんだろう。それぞれの小群の造営主体は血縁関係を基本とした家族共同体であると推測されるが、こうした小群の動向は、それぞれの家族共同体の占有する墓域がすでに決まっていた可能性を強く示唆する。また注目されるのは小群間に認められる格差である。南2群のうち北半部の小群と南半部の小群の間、東群のうち中央北側の小群と中央南側小群および河川を隔てて東方に位置する小群の間には規模の上で大きな格差が存在するのである。この原因を小群の造営主体の差に帰することができるならば、集落内におけるそれぞれの家族共同体間には第IV様式の時期にはやはり相当の格差が生じていたと考えざるをえない。しかも第IV様式第3段階には南2群、東群のすべての小群で方形周溝墓が築造される一方、再び南1群にSH127が築造され、拡大の一途を辿ってきた墓域がここに転機を迎え、次の段階での急速な収縮の始まりを暗示している。このことはすなわち和泉の拠点集落たる池上曾根遺跡の集落そのものが大きな転機を迎えたことを示していると言えよう。集団関係にもこの時期になんらかの変化は当然起こったはずである。こうした集団関係を具体的に解明するためには集落内の調査の一層の進展を待たなければならない。しかし墓域の分析から読みとることができた集団関係が、集落内の調査結果などのように関わり、この時期の集落域の急速な膨張、環濠の開削、大形建物の築造という象徴的な事例にどのように結びつくのかを明らかにし、中期後半の本遺跡の繁栄から急速な衰退への道程を貫いた視点で説明することが今求められている。

第IV様式第4段階(集落中枢部の調査の「Ⅳ期後半」に対応)には、大形建物1が廃絶すると同時に、

環濠も埋没し再び開削されることはなかった。人形建物や環濠の廃絶後にも集落が放棄されることはなかったが、規模は大幅に縮小し、和泉における拠点集落としての地位を完全に失ったと考えられる。この時期には南2群および東群ともに新たな方形周溝墓の築造は行われなくなり、南1群の墓域だけが存続している。第IV様式第4段階と第V式の方形周溝墓はそれぞれ1基ずつしか検出されていないが、第I・II様式の墓域である南1群に再び戻ってきており、その規模が小さくなっていることや、単独で立地する点が注目される。第IV様式第1~3段階に見られた様相が完全に姿を潜め、むしろ墓域の位置同様、第I・II様式と共に見られる様相を見せていている。前述の第IV様式第1~3段階に見られた様相が集団関係に起因するものであるなら、環濠集落の解体とは単なる集落形態の変化や規模の縮小にとどまらず、中期を通じて培われてきた集団関係そのものの解体であったことを窺い知ることができる。

環濠集落の成立、発展、解体の過程は、方形周溝墓の消長によく現れているといえよう。

## 5. おわりに

以上、本遺跡の方形周溝墓について資料を集成・整理し、さらに97年度の調査で検出された主体部の構造について、若干の検討を行った。冒頭でも述べたが、現在池上曾根遺跡では大形建物に関わる問題や、弥生「都市論」といった論議が活発に行われている段階である。本考察はそれらの議論に方形周溝墓からアプローチを試みたものであるが、方形周溝墓は部分的にしか検出されていないため、検討が不十分な点については今後の調査事例の増加を待ちたいと思う。

また今回の調査では、注目すべき新たな資料として主体部に組み合わせ木棺の痕跡が確認された。今後資料が増加すれば、池上曾根遺跡におけるより詳細な分析や、他遺跡との比較検討などが可能になると思われる。今後の課題としたい。

本稿をまとめるにあたっては、秋山浩三氏、石神怡氏、泉本知秀氏、井藤徹氏、井藤曉子氏、乾哲也氏をはじめとする多くの方々にご教示を受けた。末筆ながら深く感謝致します。

## 註

(1) 池上曾根遺跡については、石神怡氏が初めて総合的な視点から集落のあり方を論じられた。近年では史跡整備に伴う発掘調査の成果に基づき、主として秋山浩三氏と乾哲也氏によってこれらの問題が論じられている。

石神「池上弥生ムラの変遷」(『考古学研究』23~4、1977年)

秋山「B.C.52年の弥生土器」(『大阪文化財研究』11、鰐大阪府文化財調査研究センター、1996年)

「池上曾根遺跡中枢部における大形建物・井戸の変遷」(『みづほ』28・29、大和弥生文化の会、1999年)

「近畿における弥生「神殿」「都市」論の行方」(『ヒストリア』163号、1999年)

乾 「池上一曾根遺跡の変遷」(『研究紀要』一、鰐大阪府埋蔵文化財協会、1995年)

「弥生中期における池上曾根遺跡の集落構造」(『ヒストリア』152、1996年)

(2) 池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会『弥生の環濠都市と巨大神殿』1996年、56頁図版Ⅰを一部改変し、今回の調査区を加筆した。なお土器棺墓については、近年の史跡整備に伴う調査のなかで、底部を欠く上器が埋設されていた例について井戸状の機能が考えられている(同上、34頁)。ここでは「土器棺墓」と報告されており底部が遺存するもの、すなわち土器棺墓である蓋然性の高いもののみを示した。

(3) 以下の各方形周溝墓のうち、今回調査以外の典拠は以下の通りである(番号は表2中の典拠の項に対応する)。

- ①第2版和田道内遺跡調査会『池上・四ッ池』1970年
- ②第2版和田道内遺跡調査会『池上・四ッ池遺跡』16 1971年
- ③第2版和田道内遺跡調査会『池上・四ッ池遺跡』17 1971年
- ④第2版和田道内遺跡調査会『第2版和田道内遺跡発掘調査報告書』4 1971年
- ⑤大阪府教育委員会『池上遺跡発掘調査概要II』1973年
- ⑥大阪府教育委員会『池上遺跡発掘調査概要IV』1975年
- ⑦大阪府教育委員会『池上曾根遺跡発掘調査に伴う調査I-』1997年
- (4)側大阪文化財センター『池上遺跡』第2分冊 十器編 1979年、P.L. 80-22、82-13、83-2・3、84-11。
- (5)前掲註(4)-①、28頁。
- (6)前掲註(4)、P.L. 84-14。
- (7)前掲註(2)56頁図版I、前掲註(3)-③④参照。
- (8)SH125について鈴木敏弘氏が考察を加えられたなかで、主体部が検出されたとしているが、報告書では周溝墓構内の土坑の性格には触れておらず、主体部とは断定できないだろう(「近畿地方における方形周溝墓の展開」『原始古代社会研究』2 1974年 所収)。
- (9)前掲註(4)、P.L. 63-17。
- (10)前掲註(4)、P.L. 89-13。
- (11)前掲註(4)、P.L. 82-19、84-1。
- (12)前掲註(4)、P.L. 81-20。
- (13)前掲註(2)、43頁。
- (14)前掲註(3)-⑤、8頁。
- (15)E号出土土器は、前掲註(3)-⑤ 9頁及び図版第三に出土状況が報告されている。以下、本文の引用順に対応する報告書の土器番号を記しておく。高杯(704)-土器番号35、無文の広口短頸壺-土器番号14(以上第IV様式第2段階)。広口短頸壺(701)-土器番号15、広口短頸壺(702)-土器番号3、段状口縁壺(703)-土器番号38、無文の広口短頸壺-土器番号2(以上第IV様式第3段階)。
- (16)前掲註(3)-⑤、9頁。
- (17)F号出土土器は、前掲註(3)-⑤ 9頁及び図版第三に出土状況が報告されており、広口短頸壺は報告書の土器番号17と対応する。
- (18)4~7号は、報告時に遺構名が付されていないので、本考察の中で仮に称するものである。
- (19)前掲註(3)-⑥、4~5頁。
- (20)四ッ池遺跡調査会『四ッ池遺跡 第45地区発掘調査中間報告その4』1978年
- (21)豊中市教育委員会『藤部遺跡』1972年
- (22)福永伸成『弥生時代の木棺墓と社会』(『考古学研究』125号、1985年)が代表的なものとしてあげられる。
- (23)以下の集落中枢部の展開については主に、史跡池上曾根遺跡整備委員会「史跡池上曾根95」(1996年)及び和泉市教育委員会「史跡池上曾根96」(1998年)によった。集落中枢部の施設の変遷については後者の26頁を参照されたい。秋山氏の用いられた「期」と、他の編年との対応は、同書137頁図102にまとめられている。
- (24)大阪府教育委員会『史跡池上曾根遺跡発掘調査概要 松ノ浜曾根線建設に伴う発掘調査』1990年

\* 本稿は全文を大洞が執筆したが、「4.集落と墓域の消長」については地村が一部加筆した。

## まとめ

### —素描池上曾根遺跡—

#### はじめに

今回の池上下宮線建設に伴う調査では、弥生時代における和泉の拠点集落である池上曾根遺跡の中枢部を形成する環濠集落の北東隅から信太山丘陵の縁辺部にかけて、東西に長いトレンチを掘りぬいたことになる。従来の調査では集落東側の様相はきわめて部分的にしか明らかになっていなかったといえる。また、弥生時代の前後の時代、あるいは近代に至る地域の歴史について考古学的な事象が積み上げられたものはほとんどないと言つていい状況である。これらのことどもの一端に光をあてることが可能になったものと考え、この調査を簡略に総括したうえで、池上曾根遺跡を中心とした地域の過去から現在に至る土地利用を駆け足で概観してみる。ただ、情報量の差により弥生時代に関する記述が大半を占めることをあらかじめ断っておきたい。

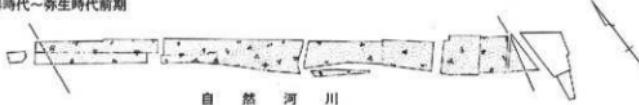
#### 1. 97年度調査各調査区の概要

まず、第4章で報告した各調査区の概略と、遺構面の対応関係などを簡単にまとめてみたい。遺構面の対応表と各時代の遺構配置の略図を提示してみた。各調査区によって遺構面数に差違が見られるが、基本層序で示したように大きく東から西へ、調査区によってはさらに北へ地形が下がっており、十層の堆積が連続しないことと、同一時期の遺構面も必ずしも連続するわけではないことによる。

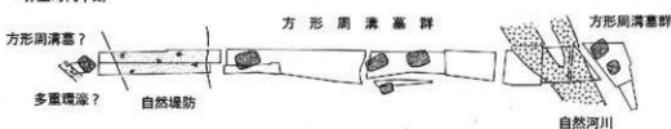
97-2区では7面の遺構面を確認した。第7面以下は、自然河川の堆積で、縄文時代から弥生時代中期ごろまでに埋没したものと考えられるが、この面を下刻する弥生時代後期の自然河川NR108の時期までは上流部においても人間の生活を示すような痕跡はきわめて希薄である。第6面は調査区北半部のみ堆積する第9層上面で認識された面で、溝を検出したがその時期は明確ではない。上下の土層と遺構面の時期からは弥生時代後期から古墳時代後期ごろまでの時期幅でとらえることができる。第5面の自然河川NR100は、下層からは多量の古墳時代中-後期の須恵器、土師器が、上層からは奈良時代の上器が出土したことから埋没時期は奈良時代に求められる。第4面では溝と掘立柱柱穴を、第3面では掘立柱建物や区画溝などを検出したが、遺物から判断して第4面は平安時代、第3面は中世に位置づけられる。第3面の溝は条里に合致するものであるが、第4面の溝はそうではない。自然河川の河道がやや東に移動することによってこの調査区の地盤が一定程度安定し、開墾されるのは平安時代のことであり、条里の施行はもう一時期遅れることの証左となろう。第1面と第2面は近世の遺構面で、耕作に伴う鋤溝や性格不明の土坑などを検出したにとどまる。

97-3区では4面の遺構面を確認した。方形周溝墓群を検出した第4面の下層は、縄文時代以前の河川によって形成された埋没自然堤防である。方形周溝墓に伴う土器が第IV様式を主体とすることから、この区域における墓域としての利用は弥生時代中期後半のこととわかる。方形周溝墓の墳丘は削平されているものの、墳頂部は近世の床土直下で検出しており、かなり後世まで残っていたものと思われる。第3面は97-2区の第4面に対応する平安時代の遺構面で、耕作に伴う鋤溝が検出された。条里の方向と合致する溝は上層遺構の残れと思われる。第1、2面は97-2区の第3面に対応する中世の遺構面で、上下の時期差はさほどないものと見て差し支えない。耕作に伴う鋤溝が検出されたがいずれも条里と合致する。第3面と第4面の間には遺構面は形成されない。方形周溝墓の周溝の落ち

旧石器時代～弥生時代前期



弥生時代中期



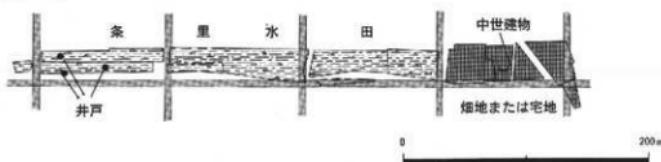
弥生時代後期～奈良時代



平安時代～鎌倉時代



鎌倉時代～近代



第132図 調査地における土地利用の変遷概念図 (S=1/4,000)

込みは相当長期間堆みとして残っていたようで、大半が滯水の繰り返しを示す粘土・シルトのレンズ状堆積により埋没している。この調査区の開墾の時期は97-2区と同様平安時代であるが、それ以前、古墳時代まで人間の利用した痕跡は希薄である。

97-4区では6面の遺構面を確認した。第6面を形成する黄色粘土層の下層で黒色粘土層、黄灰色礫層を介在して幅20m以上、深さ2m以上の川を確認した。96年度調査でも同様の河川を確認している。直径1cm前後の細礫で埋まっており、長さ4m、最大直徑0.5mの柳の木が出土した。根や枝が一部残っておりこの河川と同時期に付近の立ち木が落ち込んだものであると考えられる。C14年代測定の結果はB.P.10,025年±55年となっており、時代的には旧石器時代末から縄文時代草創期であるが人間の生活の痕跡はない。しかし、このことから黒色粘土層や黄色粘土層の形成時期は旧石器時代末から弥生時代前期以前に限定され、黒色粘土層は縄文海進による形成層の可能性も考えられる。第6面は時期に幅があるが、97-2区の第6-7面と97-3区の第4面に対応する弥生時代から古墳時代前期の遺構面である。SX99は南西にある和泉市立池上小学校用地内に及ぶ大きき開拓谷の落ち込みと推定されるが、1975年の池上小学校建設時に埋め立てられた千草池という溜め池の起源をこの落ち込みに求めることができると考えられる。隣接する96年度調査区では確認できていないが、この落ち込みの北側の肩に接して弥生時代中期後半の方形周溝墓が構築されていた可能性が高い。SX99出土遺物として報告した上器のほとんどは供獻十器と考えられるものである。これが方形周溝墓ならば、埋没自然河川が形成した谷地形によって環濠集落と隔てられた東側に展開する方形周溝墓の一群の西端に位置するものである可能性を指摘しておく。これは、97-6区で方形周溝墓の可能性のある遺構として報告したSX127の評価にも関わるが、環濠集落をめぐる墓域の形成過程や群別、時期別の今後の研究の課題になるであろう。この調査区が墓域として利用された期間はそう長くではなく、古墳時代前期には自然河川SD97が流れしており、SD97下層のSD119は無遺物であるが、弥生時代後期までに流入している可能性がある。第5面は平安時代の遺構面で、条里に合致する溝、畦畔、土坑などを検出した。特に、調査区西北辺に沿って検出した畦畔SA89は、その後第4面のSA77、第3面のSD18、第2面のSA13、そして現代に至るまでほぼ同じ位置で累重する条里坪境の畦畔として存続しており、この区域の条里施行が平安時代後期ごろまで遡ることを示している。これは97-2区における条里の施行が鎌倉時代以降であるという所見と異なっており、信太山丘陵縁辺部に向かっての開発の流れを示す事象として興味深い。

97-5・7区では5面の遺構面を検出した。道路建設用地の南側が97-5区、北側が97-7区であり、両調査区は接している。

両調査区では中央部に古い自然河川が形成したほぼ南北方向で幅45~50mの自然堤防が入るため東半と西半で遺構面の高さが大きく異なり、南北でも堆積土の質、色調にかなりの差はあるが、同時期の面を追跡することは可能である。第5面は弥生時代前期までに河川の埋没により形成された自然堤防上面と、一部河川の下刻作用によって露出した黄褐色粘土およびその下層の黒色粘土の地山面で、著しい凹凸がある。自然堤防上面が弥生時代中期から後期の遺構面となっており、溝、土坑、土器溜り、一時的なシートバーである自然河川を検出したが、生产的目的意識をもって構築された遺構は認められない。弥生時代中期の段階でもしばしば自然河川が流入する条件があり、97-3・4区のように安定することがなかったため、墓域としての利用もされなかった。こういった状況はその後も長く続いたようで、弥生時代後期に一時期安定するかに見える第4面にも顕著な遺構は認められない。第3面を形成する土層には古墳時代後期の須恵器などが多く含まれているが、調査区中央部に礫層が

大きく盛り上がった自然堤防面はなかなか開墾の鐵を寄せ付けなかつたようで、調査区東側第3面で中世の井戸が検出されたことから、ようやくこの時期に耕地としての利用が始まったことがわかる。第1面と第2面は近世の耕作溝や畔の痕跡がわずかに検出されたにとどまる。

97-6区では4面の遺構面を確認した。

第4面は弥生時代中期の遺構面で、溝SX127を検出した。松之浜曾根線調査では環濠集落の入り口施設とも考えられる多重環濠が検出されており、単純に墓域とだけ考えていいものかどうかは今後検討を要する課題である。八尾市龜井遺跡の集落北側を周囲する多重条溝の集落側の肩から、穿孔や朱彩を施した土器が出土した例などを考え合わせると、穿孔土器が境界装置の一種であるとの考え方も否定しきれないが、現状では方形周溝墓の周溝と考えるほうがよいと思われる。集落北東部に展開する墓域の範囲がこの調査区まで及んでいたことを示している。第二阪和国道西側の府道松之浜曾根線建設に先立つ調査でも、壺棺墓などが検出されており、墓域はさらに集落北側にも展開していた可能性がある。第3面、第4面では他に土坑、溝、小穴など弥生時代中期以降の遺構を検出しており、集落に近いこともある。97-5・7区以東の生活臭のない状況とは印象が若干異なる。第3面で検出されたSD91は弥生時代後期の段階でもこの付近が自然河川が流入する環境であったことを示している。平野部における環濠集落の環濠の第一の機能が軍事的防御施設ではなく、集落の防水・排水施設にあつたことは疑いない。平野部における洪水のあり方から考えると、河川上流側よりも下流側に多くの環濠を必要としたと見るのが妥当であり、集落北側の多重環濠の意味も入り口施設とは別の理解が可能であるかもしれない。第2面、第1面は顯著な遺構はない。中世以降近・現代に至る耕地である。

97-8区では、2面の遺構面を確認した。

本調査区は水路の付け替えに伴い第3調査区の南側に接して設定した東西に細長い調査区で、層序、遺構面の状況は97-3区と同様である。水路工事に必要な範囲で調査を終了したため、第2面まで検出したにとどまるが、ごく一部ではあるものの、弥生時代の方形周溝墓と考えられるSD214を検出した。埴輪部と考えられる高まりは97-3区と同様、中-近世の遺構面の直下で露出していたが、その面が97-3区の第4面に当たると考えられる。ただ、調査区の大半が現水路の前身水路と考えられる溝による攪乱を被っていたため、97-3区の第2・3面と対応する面は確認できなかった。

	97-6区	97-7区	97-5区	97-4区	97-8区	97-3区	97-2区
近世	第1面 第2面	第1面	第1面 第2面	第1面 第2面	第1面		第1面 第2面
中世		第2面		第3面	第3面 第4面	第1面 第2面	第3面
平安					第5面	第3面	第4面
奈良							第5面
飛鳥							
古墳後期							
古墳中期							
古墳前期							
弥生後期	第3面	第4面		第6面			第6面 第7面
弥生前期	第4面	第5面	第5面		第2面	第4面	

第5表 各調査区遺構面对応表

## 2. 池上曾根遺跡の興亡

以上が今回の調査結果の概略である。近年、集落中心部の様相が少しづつ明らかになってきたことにより、池上曾根遺跡をめぐる情勢はめまぐるしい展開を見せている。弥生都市の可能性といったことも含め、地域を越えた総合的な検討も精力的に行われ始めた。今回の調査は集落東方の墓域の調査が中心となったが、池上曾根遺跡の研究に重要な資料を提供することができたものと信じる。

今回の整理作業を通じて過去の調査結果の報告および総括が不十分であることも痛感した。基礎的なデータの整理が急務であるとともに、これまでの調査で何がわかり、何がわからないのか、「叙述」することも歴史学たる考古学徒の責任であろう。池上曾根遺跡の全貌を明快に語ることができる段階ではないことは百も承知しているが、以下はあえて過去の断片的なデータを紡いで、池上曾根遺跡周辺を漫歩してみようと思う。

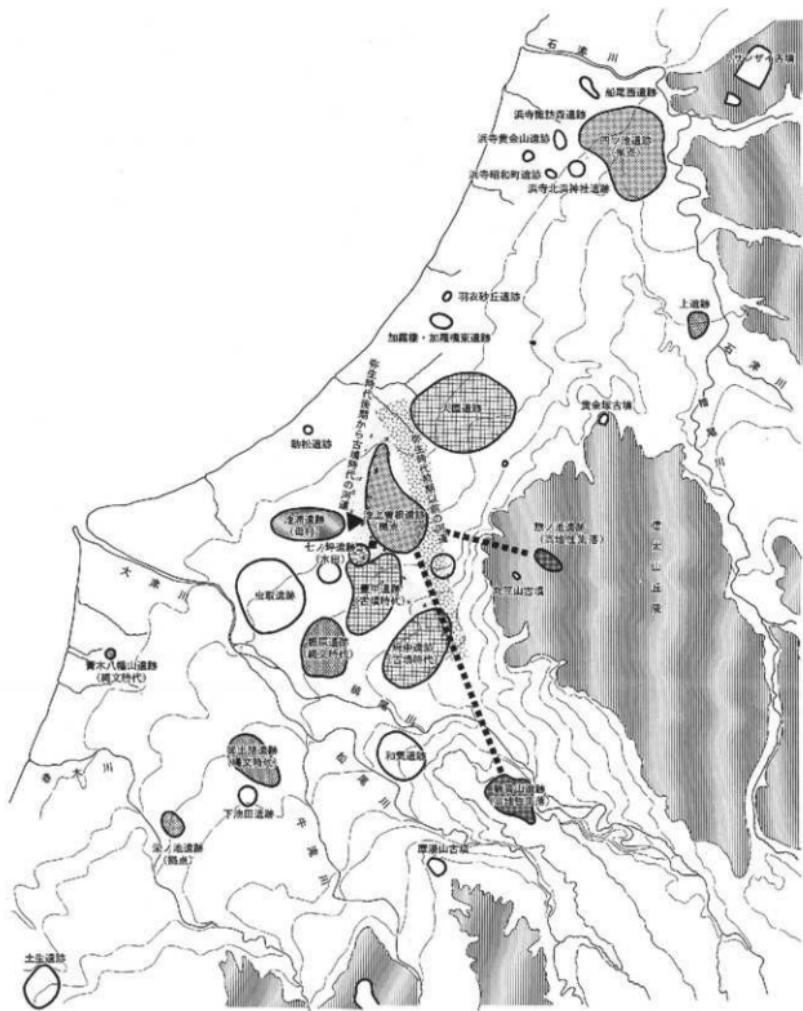
### ・縄紋時代以前の池上曾根遺跡

池上曾根遺跡は弥生時代前期に始まる泉州地域では最大級の集落跡である。居住域の中心である環濠部分はこの数年整備のために発掘調査が行われ、「神殿」と考えられている大型建物等を確認し、多大な成果をあげている。しかし、冒頭にも述べたように、弥生時代を挟む前後の時代については必ずしもその変遷が明らかにされているとは言い難い状況である。池上曾根遺跡がどのような変遷をたどったかを考える上で、今回の調査は多大な成果をもたらしたと思われる。そこで、大津川右岸下流域を中心に簡単に池上曾根遺跡の変化をたどってみることにしよう。

大津川下流域における旧石器時代から縄紋時代の居住域ははっきりしない。縄紋土器は海岸近くの砂堆上の遺跡でも採集されているが、集落として確実なものはない。旧石器時代の遺跡は基本的に丘陵あるいは台地上に立地する。今回の調査でもナイフ形石器や有舌尖頭器と縄紋時代中期から後期の十器や石鏃は出土しているが、いずれも牛活に関連した遺構に伴つものではない。信太山丘陵の縁辺部と後に弥生時代の集落が営まれる場所の間は、旧石器時代以降の古大津川の支流と考えられる自然河川が形成した埋没自然堤防の存在が確認され、弥生時代前期から中期初頭ごろまではかなり河川が暴れている環境であったことが分かった。

### ・弥生時代拠点集落の形成

池上曾根遺跡に集落が形成されるのは弥生時代前期中葉のことである。それ以前から集落を営んでいた池浦遺跡からの移住と考えたい。池浦の集落はその後も存続するが、より安定した埋没自然堤防上に拠点を移したのではないか。池上曾根遺跡では中期に環濠集落の中心になる部分にムラを作り、環濠の形態はとっていないものの、その東西に溝を掘っている。従来知られていたのは第二阪和国道の調査区で検出されたG溝のみである。この頃は川が集落の東側を流れしており、東側に微地形に沿った南北溝を掘れば一応は集落の防水機能は果たせたと漠然と考えられていたのだが、最近の史跡整備に伴う調査で、前期の集落の西側にも南北溝が確認され、その西側や居住域の南側に隣接する湿地に水田の存在を想定できる自然科学的数据もあることから、東側の溝は集落の防水、西側の溝は灌漑といった機能区分を考えることも可能になった。そのころの墓域は居住域より高いところ、すなわち南東に造られ始めたのである。生産域は前期の頃は一部居住域西側や北側の低湿地で稲作を始めたかもしれないが、そのあたりは浅い谷地形が永く残っており冠水しやすい条件であったと考えられ、安定した水田適地となったかは疑問である。縄紋時代晚期から弥生時代早期にかけて北部九州に上陸した水田稲作は、水路灌漑を伴う一定程度完成した技術体系を持っており、池上曾根遺跡においてもよ



第133図 弥生時代を中心とした泉州地域の遺跡の動向（陸測仮製地形図から作成）  
 (S=1/62,500) 等高線 5尺

り安定した水田として居住域南西側の七ノ坪遺跡周辺が選ばれたのではないかと考えられる。確証はないが、この頃に東側の川の上流から西へ水を引くようなことも行われたかもしれない。

環濠集落の形態がある程度整う弥生時代前期末から中期初頭の集落域の微地形を見ると、南側の環濠E溝周辺が中心部よりも高いことがわかる。E溝は北側の環濠B溝と連続して集落の東と南を囲繞するもので、東側の河川の氾濫から集落を守る防水機能を果たしていたと考えられる。

#### ・興隆と終末

しかし、その後中期中頃から後半にかけて河川の本流が生産域である水田地域に移動し次第に居住域より低い部分に自然堤防を形成するようになると、川からあふれた水は下流へ行かず上流に逆流することになった。集落中心部にはこの時期に形成されたシートバーと考えられる礫層が確認されているが、この礫層は集落南西側から流入したと考えられている。存在が確認できているわけではないが、南西側の水田の灌漑水路が洪水時にはバイパスとなり、集落に被害を及ぼす弱点となっていたのではないか。西・北側に多重の環濠を巡らすのは下流の排水機能を強化することによって洪水から集落を防御することが主要な目的だったのではないかと考えられる。また、河道の変更により居住域と生産域は分断されたと思われる。

地形図や航空写真からは西側の河川の痕跡を読み取ることができる。この川は中期末から飛鳥時代まで何度も氾濫したと考えられる。本流は現在の泉大津市曾根から森の集落がのっている部分であり、森付近は大規模な埋没自然堤防である。東側の河川は古い地形図からは谷地形として読み取ることができるが、現在では千草池や条里地割りの変形として痕跡を止めているだけである。

集落東側は河川の埋没により往来が楽にできるようになったであろうが、自然堤防付近は多量の礫が地表面に露出した状態であったと推定され、耕地としては不適であった。結果、河川跡を超えて墓域が拡大されていく。97-2区では方形周溝墓は検出していないが、96年度調査の1区でも方形周溝墓が検出されていることから、信太山丘陵の裾近くまで墓域が拡大していたことは明らかである。中期の方形周溝墓は他の地区でも検出されている。環濠の外側については小規模な調査による断片的なデータしかないが、現時点で想定できる墓城は、集落の南側から東側を通って北西側まで幅200~300m以上の帯状に展開しているのではないかと考えられる。時期的には中期後半から末のものが多いようであるが、同時期のものが一定の場所で群をなすということではなく、分散しているようであり、どちらかというと家族あるいは家系単位の群構成を考えたほうがよさそうである。墓域の動向の詳細については第5章を参照されたい。

この節の冒頭に紹介した「神殿」と考えられる巨大な掘立柱建物は、池上曾根遺跡が発展拡大しきった弥生時代中期中頃に初代建物の建造が行われ、その後またかも式年遷宮のようにきわめて短いサイクルで、規模を拡大しながら4ないし5|m|の建て替えが行われている。そして、中期末に最後の大「神殿」が建設されたときは環濠が埋没しきった時期と一致するようである。環濠は再び掘り直されることになかった。まさに和泉の拠点集落としての爛熟期から終焉にかけてのできごとである。

定説化していると言つていいだろうが、弥生時代の拠点集落は自分たちの発展を第一義的目的に集落規模や生産域の拡大を図ったばかりに、歯止めのない河川上流域の森林の乱伐を招き、人災と言つてもいい洪水をまともに受けることになったのである。このことは肥大化した人口を支えるための食料生産域の荒廃をもたらし、手工業生産や流通などあらゆる機能と権能が拠点集落に集中していたこととあいまって、拠点集落の「拠点」としての機能を著しく低下させたのではないか。極端に言えば拠点集落のスラム化を招いたのではないかとさえ思える。そういう危機的状況に対して、かつての求

心力を誇示し、和泉の盟主としての地位の延命のために「神殿」は造られたのではないだろうか。もっとも、現実に対処するためには「神殿」よりも必要性の高かった環濠の再整備という大規模な土木工事を実施するだけの労働力を結集することはもうできなかった。確実に新しい時代への息吹が追い風となつて弥生時代の終末を待たずして池上曾根は拠点集落としての命脈を終え、集落の移動一分散を余儀なくされたのであろう。防水・排水という環濠の第一義的な目的をあきらめた上、政治的にも環濠の必要性がなくなったと考えることが可能であろう。観音寺山、惣ノ池という2つの高地性集落がその後のあつれきを物語っている。

近畿の拠点集落で後期まで環濠を備えていたのは、唐古・鍵遺跡と龜井遺跡くらいなものであろう。弥生時代後期の池上曾根遺跡は群小の集落遺跡と様相を異にするところはなく、とても拠点集落と呼べるようなものではない。古墳時代まで集落を存続させた四ツ池遺跡とは対照的である。

#### ・その後

古墳時代前期には和泉黄金塚がこの地域の盟主墳であるが、規模、内容ともに近畿の中で傑出しているとは言い難い。しかし、池上曾根遺跡が衰退したとはいえ、大津川流域の生産性は決して低くなつたわけではなく、第1章に述べたように多くの遺跡が存在する。どの遺跡がこの地域の中心であるとは言いきれないだろうが、後に和泉国府が置かれる豊中遺跡、府中遺跡付近にひとつの中規模なターミナルがあつたと見ることはできる。和泉国府跡とされている遺跡の地割は現在の条里と合致するが、これをもってこの地域の条里の施行を奈良時代まで遡らせることはできない。和泉の条里は南北の地割ではなく、海岸線と平行した地形の規制を反映した地割である。前節で総括したごとく、この地域で遡りうる条里の初現は平安時代でも後期に下るであろう。池上曾根遺跡を見ると、集落東側の埋没自然堤防面に開墾が及ぶのは鎌倉時代になってからである。それ以降近世に至るまではきわめて遺構・遺物が希薄であり、耕作地としてのみ利用されてきたことがわかる。

#### おわりに

本稿は、現地における調査と遺構の報文作成に携わった各担当者(藤澤、井西、大洞)が作成した概要、小結、覚え書き等の原稿及びメモを集成・加筆し、まとめとしたもので、ややもするとそれぞれの担当者の意図するところが欠落したり、過剰に表現したりしたところがあるかもしれない。また、本稿を草するに当たって根拠となるデータを示すことや、事実関係の出典等についていちいち触ることをしていないのは筆者の怠慢である。本稿の文責はすべて筆者にあり、各担当者に責の及ばぬことを願うのみである。

最後に、史跡整備に伴う発掘調査の最新の所見について格別のご教示をいただいた秋山浩三氏に厚くお礼を申し述べたい。

(広瀬)

現地での発掘調査と遺物整理には、下記の諸君の参加があった。

東英美子、大野猛、池上悦子、伊藤文彦、宇澤ヒデ子、河本美穂、岸田啓子、田中秀明、長尾美代子、納谷有香子、西村香織、藤丸裕子、占川涼子、増川順子、松谷文江、八柄あさ代、吉川和成、李斌

探査番号	Pno.	種類	品種	口径	底高	底性	その他	色調	粒土	地成	浅井	標考	時期
第7回	1 14	須恵器	杯身		底1.95	高 台 地 (9.0)	(内)7/0灰白 (外)N7/0灰白 (断)N7/0灰白	密(直径0.5mm程度の白、黒色砂粒を含む)	良好	高台部 12%		高邑 II	
第7回	2 15	須恵器	杯蓋	(10.4)	3.0		(内)N7/0灰白 (外)10Y6/1灰 (断)17.5Y6/1赤灰 (内)N5/0灰 (外)N7/0灰白 (断)N7/0灰白	密(底径1cm以下の白色砂粒を含む)	良好 30%		陶邑 II - 6		
第7回	3 15	須恵器	杯蓋	(14.4)	残3.8		(内)N7/0灰白 (外)N6/0灰 (断)N6/0灰	密(底径2cm以下の砂粒を多量に含む)	良好 20%		陶邑 II - 3		
第7回	4 162	須恵器	杯蓋	14.0	4.05		(内)N7/0灰白 (外)N6/0灰 (断)N6/0灰	密(底径2cm以下の砂粒を多量に含む)	良好 90%		陶邑 II - 4		
第7回	5 10	須恵器	杯身	(11.4)	底2.9		(内)5PB7/1明青灰 (外)5PB7/1明青灰 (断)5PB7/1明青灰 (内)N7/0灰白 (外)N6/0灰 (断)N6/0灰	密(直径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	良好 15%		陶邑 II - 5		
第7回	6 13	須恵器	盖	11.0	13.1	鉢底最大径 9.5	(内)N7/0灰白 (外)N6/0灰 (断)N7/0灰白 (内)2.5Y6/8灰 (外)2.5Y6/8灰 (断)2.5Y6/8灰 (内)5YR7/8灰 (外)2.5Y7/8灰 (断)7.5Y7/8灰	密(直径1cm以下の白色砂粒を含む)	良好 100% (口縁欠損)		陶邑 II - 4		
第7回	7 12	土師器	杯C	(11.7)	底3.6		(内)2.5Y6/8灰 (外)2.5Y6/8灰 (断)2.5Y6/8灰	密(底径2cm以下の砂粒を含む)	良好 20%		陶邑 II		
第7回	8 11	土師器	長柄蓋	(24.2)	残9.8		(内)5YR7/8灰 (外)2.5Y7/8灰 (断)7.5Y7/8灰	密(底径1cm以下の長石、石英、チャート、クサ 灰片 25%、リビアンを含む)	口縁灰 初期後期				
第16回	9 165	須恵器	杯蓋	(11.8)	4.0		(内)N7/0灰 (外)5Y7/1灰 (断)N7/0灰	密(底径2cm以下の白、黒色砂粒を含む)	良好 40%		高邑 I - 6		
第16回	10 108	須恵器	杯蓋	14.5	5.0		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰	密(底径1cm以下の白色小石等を含む)	良好 100%		陶邑 II - 1		
第16回	11 182	須恵器	杯蓋	14.0	4.15		(内)1BB6/1青灰 (外)5BB3/1暗青灰 (断)5BB3/1暗青灰 (内)N7/0灰白 (外)N6/0灰 (断)N7/0灰白	粗	良好 100%		陶邑 II - 2		
第16回	12 99	須恵器	杯蓋	13.5	4.4		(内)5PB6/1青灰 (外)5PB6/1青灰 (断)5PB6/1青灰 (内)10BG6/1青灰 (外)6BG5/1暗青灰 (断)5BG5/1暗青灰	密(底径3~4mmの灰色砂粒、長石と白色砂粒を含む)	100%		陶邑 II - 2		
第16回	13 192	須恵器	杯蓋	14.4	4.6		(内)10BG6/1青灰 (外)6BG5/1暗青灰 (断)5BG5/1暗青灰	密(底径1cm以下の白色砂粒を多量に含む)	良好 100%		陶邑 II - 2		
第16回	14 150	須恵器	杯底	14.7	4.55		(内)N7/0灰白 (外)N6/0灰 (断)N5/0灰	密(底径2cm以下の白色砂粒を多量に含む)	良好 90%		陶邑 II - 3		
第16回	15 174	須恵器	杯蓋	15.2	4.4		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (断)N6/0灰	密(底径1cm以下の白、黒色砂粒を含む)	良好 60%		陶邑 II - 3		
第16回	16 29	須恵器	杯蓋	(14.2)	4.8		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (断)5YR6/5褐灰	密(底径1~2cmの白、黒色砂粒、4の確1点を含む)	良好 85%		陶邑 II - 3		
第16回	17 175	須恵器	杯蓋	14.5	4.2		(内)5Y6/1灰 (外)5Y6/1灰 (断)5Y6/1灰	密(底径2cm以下の白色砂粒を含む)	良好 80%		陶邑 II - 4		
第16回	18 87	須恵器	杯蓋	(12.7)	底3.6		(内)N7/0灰白 (外)17.5Y7/1灰白 (断)N7/0灰白	密(底径1cm以下の白、黒色砂粒を多量に含む)	良好 20%		陶邑 II - 5		
第16回	19 111	須恵器	杯蓋	13.8	4.1		(内)N6/0灰 (外)N5/0灰	密(底径4~5cm以下の白色小石等を含む)	良好 100%		陶邑 II - 4		
第16回	20 114	須恵器	杯蓋	14.0	3.9		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (断)N6/0灰	密(底径3cm以下の白色小石等を含む)	良好 98%		陶邑 II - 4		
第16回	21 27	須恵器	杯蓋	(13.4)	4.35		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (断)N6/0灰	密(底径4~5cm以下の白色砂粒等を含む)	良好 50%		陶邑 II - 4		
第16回	22 104	須恵器	杯底	(13.5)	4.15		(内)2.5Y7/1明青灰 (外)12.5YR6/2灰 (断)17.5YR6/1暗灰 (内)5PB7/1明青灰 (外)N6/0灰 (断)N6/0灰	密(底径3cm以下の白色小石等を含む)	良好 70%		陶邑 II - 4		
第16回	23 95	須恵器	杯身	(10.0)	4.85		(内)5PB7/1明青灰 (外)N6/0灰 (断)N6/0灰	密(底径1cm以下の白、黒色砂粒を含む)	良好 25%		陶邑 I - 4		
第16回	24 183	須恵器	杯身	12.4	4.6		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (断)N6/0灰	密(底径2cm以下の白色砂粒を含む)	良好 90%		陶邑 II - 2		
第16回	25 135	須恵器	杯身	14.2	5.15		(内)2.5Y7/1明青灰 (外)6Y5/2灰 (断)5Y3/2灰 (内)2.5Y6/3浅黄 (外)6Y5/2灰 (断)5Y3/2灰	密(底径3cm以下の白、黒色砂粒を含む)	やや 不良 100% (口縁欠損)		陶邑 II - 3		
第16回	26 184	須恵器	杯身	(13.1)	4.6		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (断)N6/0灰	密(底径2cm以下の白、黒色砂粒を含む)	良好 60%		陶邑 II - 3		
第16回	27 190	須恵器	杯身	13.0	4.3		(内)5PB7/1明青灰 (外)5PB7/1暗青灰 (断)5PB7/1暗青灰	密(底径1cm以下の白、黒色砂粒を含む)	良好 100%		陶邑 II - 4		
第16回	28 178	須恵器	杯身	(13.0)	底4.1		(内)2.5Y7/4浅黄 (外)2.5Y6/4浅黄 (断)2.5Y7/4浅黄	密(底径2cm以下の白、黒色砂粒を含む)	やや 口縁部 不良 35%		陶邑 II - 4		

遺物観察表 1

傳説番号	品名	種類	基盤	口径	基高	底径	その他	色調	地土	純度	保存	備考	時期
第16回	29	152	須恵器	环身	12.2	4.0		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (底)N6/0灰白	青(直径3cm以下の長石 等を含む)	良好	99%		陶器 II - 4
第16回	30	142	須恵器	环身	13.0	3.8		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰	青(直径2mm以下の白、 黑色砂粒を含む)	良好	99%		陶器 II - 4
第16回	31	94	須恵器	环身	12.4	4.4		(内)N7/0灰白 (外)563/1青灰 (底)N7/0灰白	青(直径1mm前後の白色 砂粒を含む)	良好	99%		陶器 II - 4
第16回	32	109	須恵器	环身	12.3	4.4		(内)N6/0灰白 (外)56Y/1灰白 (底)N7/0灰白	青(直径3mm以下の白、 黑色砂粒を含む)	やや 不良	100%		陶器 II - 4
第16回	33	191	須恵器	环身	12.0	3.9		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (底)N6/0灰	青(直径1mm以下の黒、 白色砂粒を含む)	良好	100%		陶器 II - 4
第16回	34	112	須恵器	环身	12.3	4.55		(内)5Y7/1灰白 (外)N7/0灰	青(直径4mm以下の白色 小石等を含む)	良好	100%		陶器 II - 4
第16回	35	137	須恵器	环身	11.9	残3.3		(内)N6/0灰 (外)10YR5/1他灰	青(直径2~4mmの白色 砂粒を含む)	良好	100%	朱通り	陶器 II - 5
第16回	36	95	須恵器	环身	12.2	3.8		(内)N6/0灰 (外)5Y7/1灰	青(直径5mmの長石、ク サリ種を含む)	良好	99%		陶器 II - 5
第16回	37	107	須恵器	环身	11.6	3.65		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (底)N6/0灰	青(直径2mm以下の黒色 砂粒等を含む)	良好	99%		陶器 II - 5
第16回	38	351	須恵器	有蓋高杯	10.3	9.0	8.8	(内)N7/0灰白 (外)N3/2暗青 (底)N7/0灰白	青(直径3~4mmの長石、 繊維状の白色砂粒を多量 に含む)	初期100% 口縁部8%			陶器 I - 4
第16回	39	170	須恵器	有蓋高杯		残4.9	8.0	(内)N7/0灰 (外)N7/0灰 (底)N7/0灰	青(直径5mm以下の白 色砂粒を含む)	良好	50%		陶器 I - 4
第16回	40	151	須恵器	高杯		残5.40	8.42	(内)N7/0灰白 (外)5Y7/1灰白 (底)N7/0灰白	青(直径1mm以下の白、 黑色砂粒を含む)	初期100%			陶器 I - 3 - 5
第16回	41	155	須恵器	高杯		残4.9	(5.0)	(内)5Y7/1灰白 (外)5Y7/1灰白 (底)5Y7/1灰白	青(直径2mm以下の白色 砂粒を含む)	良好	初期80%		古墳後期
第16回	42	144	須恵器	台付壺		残3.9	9.5	(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (底)N6/0灰	青(直径0.6mm以下の白 色砂粒を含む)	良好	初期75%		古墳後期
第16回	43	139	須恵器	高杯無	(16.4)	6.15	2.38	(内)5P6/1青灰 (外)N6/0灰 (底)10R5/1他灰	青(直径1~3mmの白色 砂粒を含む)	良好	30%		陶器 II - 4
第16回	44	110	須恵器	高杯茎	14.9	4.85	3.1	(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (底)N6/0灰	青(直径5mm以下の小石、 黑色砂粒等を多量に含 む)	良好	100%		陶器 II - 5
第16回	45	171	須恵器	有蓋高杯	13.5	残5.0		(内)N6/0灰 (外)N7/0灰白 (底)N7/0灰白	青(直径1mm以下の白、 黑色砂粒を含む)	良好	50%		陶器 II - 3
第16回	46	173	須恵器	無蓋高杯	(16.4)	6.15		(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (底)N6/0灰	青(直径0.6mm以下の白 色砂粒を含む)	良好	40%		陶器 II - 4
第16回	47	134	須恵器	把手付鉢	(13.1)	残8.7		(内)N6/0灰 (外)N7/0灰 (底)N7/0灰	青(直径1mm以下の白、 灰色砂粒を含む)	良好	20%		古墳後期
第16回	48	164	須恵器	台付瓦頭壺		残13.2	(11.2)	(内)N5/0灰 (外)N5/0灰 (底)7.5Y4/2灰赤	青(直径1mm以下の白色 砂粒を含む)	良好	0%		古墳後期
第17回	49	140	須恵器	壺	(24.2)	残8.15		(内)N6/0灰 (外)5Y4/4/1灰 (底)5P9/1灰紫	青(直径1mm以下の白色 砂粒を含む)	良好	30%		古墳後期
第17回	50	143	須恵器	壺		19.4	残8.8	(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (底)5Y4/4/1灰紫	青(直径2mm以下の白色 砂粒を含む)	良好	口縁部99%		古墳後期
第17回	51	146	須恵器	壺		(25.4)	残7.8	(内)N6/0灰 (外)N6/0灰 (底)7.5Y4/1灰紫	青(直径3mm以下の白色 砂粒を含む)	良好	口縁部12%		古墳後期
第17回	52	169	須恵器	壺		(18.2)	残6.0	(内)N6/0灰 (外)5Y7/1灰白 (底)5Y7/1灰白	青(直径2mm以下の白色 砂粒を含む)	良好	口縁部50%		古墳後期
第17回	53	147	須恵器	壺		(17.6)	残5.7	(内)N6/0灰 (外)N7/0灰 (底)N6/0灰	青(直径2mm以下の白色 砂粒を含む)	良好	口縁部40%		古墳後期
第17回	54	148	須恵器	小型壺	(7.8)	残5.8	(4.0)	(内)2.5Y7/2灰黄 (外)2.5Y7/2灰黄 (底)5Y7/1灰白	青(直径2mm以下の白、 黑色砂粒を含む)	良好	45%		古墳後期
第17回	55	80	須恵器	壺	3.5	10.0		(内)N6/0灰白 (外)N6/0灰白	青(直径5mmの縫を多量 に含む)	良好	100%		古墳時代
第17回	56	145	土師器	壺	(25.0)	残7.0		(内)10YR8/2灰白 (外)10YR7/3灰白 (底)10YR8/2灰白	青(直径1mm以下の長石、 チャート、クサリ種を 含む)	良好	口縁部15%		古墳後期

遺物観察表 2

探査番号	品名	種類	器種	口径	高さ	底径	その他	色調	土性	焼成	焼成	備考	時期
第17回	57	168	土師器	甕	(28.2)	残10.4		(内)7.5YR7/4に近い黄 (外)7.5YR6/3に近い黄 (底)10YR4/3浅黄	密(底径1m以下)の砂粒 を含む)	良好	口縁部 15%		古墳後期
第17回	58	113	土師器	高杯	(20.2)	残10.4		(内)10YR7/7灰白 (外)10YR7/7灰白 (底)10YR7/7灰白	密(底径3mm以下の長石、 石英等を含む)	良好	口縁部 30%	底地不明	古墳前期
第17回	59	96	弥生土器	底部		残3.0	4.6	(内)10YR7/2灰 (外)10YR7/2灰 (底)10YR4/1灰	密(底径3mm以下の長石、 石英、チャートを含む)	良好	底部100%		弥生中期
第17回	60	138	弥生土器	底部		残3.65	8.6	(内)10YR7/4灰白 (外)10YR7/4灰白 (底)10YR4/4浅黄	密(底径3mm以下の長石、 石英、チャート、クサ リ根等を含む)	やや不良	底部40%		弥生中期
第17回	61	158	弥生土器	甕		残4.5	3.5	(内)10YR6/2灰白 (外)10YR6/2灰白 (底)10YR6/2灰白	やや密(底径3mm以下の長石、 石英、チャート、クサ リ根等を含む)	良好	底部100%	V	
第17回	62	157	弥生土器	瓶		残4.3	2.2	(内)10YR7/6浅黄 (外)10YR7/6浅黄 (底)10YR7/3灰白	密(底径2mm以下の長石、 石英等を含む)	良好	底部100%	V	
第17回	63	154	織紋土器	深鉢		残4.55		(内)10YR7/3灰 (外)10YR5/2灰黄 (底)10YR4/1褐灰	やや粗(底径5mm以下の 長石、石英、黑色小石 を含む)	良好	不明	中津式	織紋後期
第17回	64	58	木製品	劍把木製品				全長:10.7 幅:2.1 厚み:0.6	密(底径1m以下)の砂粒 を含む)				時期不明
第18回	65	554	弥生土器	広口短頸甕	(25.5)	残18.0		(内)7.5YR6/6暗 (外)7.5YR6/6暗 (底)7.5YR6/6暗	密(底径1~3mmの長石、 チャート、その他砂粒 を含む)	不良	口縁部 60%		IV-4
第18回	66	600	織紋土器	深鉢	(14.5)	残11.2		(内)10YR6/7灰白 (外)10YR6/7灰白 (底)10YR6/7灰白	密(底径1~3mmの長石、 チャート、その他砂粒 を含む)	良好	口縁部 25%	東木式 元式	織紋中期
第20回	67	24	須恵器	壺	(10.6)	残1.3		(内)10YR5/5赤褐色 (外)10YR5/5赤褐色	密(底径1mm以下)の白色 砂粒を含む)	良好	40%		古墳後期
第20回	68	25	須恵器	高杯		残9.9		(内)NB7.0灰 (外)NB7.0灰 (底)NB7.0灰	密(底径3mm以下の白色 砂粒を含む)	良好	70%		陶器II-4
第20回	69	26	須恵器	甕	(20.0)	残7.2		(内)6YR7/1灰白 (外)6YR7/1灰白 (底)6YR7/1灰白	密(底径3mm以下の黒色 砂粒等を含む)	良好	20%		古墳後期
第20回	70	103	弥生土器	広口長颈甕	(16.0)	残6.8		(内)10YR7/1灰白 (外)10YR7/4浅黄 (底)7.5YR7/2灰白	やや粗(底径1.5cm以下 の長石、石英、クサリ 根等を含む)	口縁部 15%			IV-1
第20回	71	105	弥生土器	広口短頸甕	(17.0)	残2.2		(内)10YR6/6暗 (外)10YR6/6暗 (底)10YR6/1灰	密(底径1mm以下)の長石、 石英、クサリ根等を含む)	良好	25%		IV-3
第20回	72	106	弥生土器	広口短頸甕	(19.0)	残2.0		(内)7.5YR6/4浅黄 (外)7.5YR6/4浅黄 (底)10YR6/1灰	密(底径1mm以下)の長石、 クサリ根等を含む)	良好	15%		IV-3
第20回	73	632	弥生土器	広口長颈甕	(27.0)	残2.15		(内)10YR6/1灰 (外)2.5YR7/2灰 (底)10YR5/1灰	密(底径1mm以下)の砂粒 を含む)	不良	18%		IV-3
第20回	74	102	弥生土器	底部		残3.6	5.9	(内)2.5YR7/8灰白 (外)7.5YR7/8灰白 (底)2.5YR7/8灰白	やや粗(底径2mm以下の 長石、石英、チャート、 クサリ根等を含む)	良好	底部100%		弥生中期
第20回	75	101	弥生土器	底部		残2.0	7.7	(内)5YR7/1灰 (外)7.5YR8/3浅白 (底)7.5YR8/3浅白	やや粗(底径1mm以下) の長石、石英、クサリ 根等を含む)	良好	底部100%		弥生中期
第20回	76	293	石器	石錐				長:2.5 幅:1.95 厚:0.3			100%	サスカイト、 重量: 1.5g	弥生時代
第25回	77	241	弥生土器	広口短頸甕	(23.0)	残6.9		(内)2.5YR7/8灰白 (外)2.5YR7/8灰白 (底)10YR6/6黄褐色	密(底径1m以下)の長石、 石英、チャート、クサ リ根等を含む)	口縁部 12%			IV-1
第25回	78	242	弥生土器	広口短頸甕	(24.0)	残5.2		(内)2.5YR7/8灰白 (外)2.5YR7/8灰白 (底)10YR6/6黄褐色	密(底径1mm以下)の長石、 石英、チャート、クサ リ根等を含む)	口縁部 10%			IV-2
第25回	79	255	弥生土器	広口短頸甕	(14.0)	残4.6		(内)10YR7/7灰白 (外)10YR7/7灰白 (底)10YR8/2灰白	密(底径1m以下)の長石、 石英、チャート、クサ リ根等を含む)	口縁部 13%			IV-1
第25回	80	238	弥生土器	底部		残3.3	9.8	(内)10YR7/7灰白 (外)10YR7/7灰白 (底)10YR7/7灰白	密(底径1mm以下)の長石、 石英、チャート、クサ リ根等を含む)	良好	底部50%		弥生中期
第25回	81	244	石器	石錐				長:2.95 幅:1.8 厚:0.35			100%	サスカイト、 重量: 1.1g	弥生時代
第32回	82	239	弥生土器	広口短頸甕	(16.0)	残6.6		(内)10YR8/2灰白 (外)7.5YR6/2灰白 (底)10YR6/6黄褐色	やや粗(底径2mm以下の 長石、クサリ根等を含む)	口縁部 30%			IV-2
第32回	83	271	弥生土器	広口短頸甕	(14.2)	残3.6		(内)10YR6/6灰白 (外)10YR6/6灰白 (底)10YR6/4に近い黄	密(底径1~2mmの砂粒 を含む)	良好	15%		IV-1
第32回	84	219	弥生土器	広口短頸甕	(18.0)	残4.4		(内)7.5YR6/6暗 (外)10YR6/6灰白 (底)10YR6/6黄褐色	密(底径1mm以下の長石、 石英、チャート、クサ リ根等を含む)	良好	27%	92と同一個 体	IV-1

遺物観察表3

地図番号	P.no.	種類	器種	口径	基高	底径	その他	色調	施土	焼成	残存	備考	時期
第32図	85	弥生土器	広口短縦轍	(23.0)	残(18.5)			(内)2.5YR/2灰黄 (外)2.5YR/2灰黄 (底)2.5YR/2灰黄	施(直徑1cm)のチー ト、白、黒色砂粒を含む	良好	頸~腹部 30%、 口部60%		IV-3
第32図	86	弥生土器	広口長縦轍	(23.0)	残1.9			(内)10YR/7.3/黄褐色 (外)10YR/6.4/黄褐色 (底)10YR/7.3/黄褐色	施(直徑1cm)のチー ト、白、黑色砂粒を含む	良好	口部12% 底部88%		IV-3
第32図	87	弥生土器	段状口縁轍	(25.6)	残5.7			(内)7.5YR/8.2/黄褐色 (外)7.5YR/8.2/黄褐色 (底)10YR/6.4/黄褐色	やや斜(直徑2~3cm 高石等多量に含む)	良好	口部12% 底部88%		IV-2
第32図	88	弥生土器	甕	(22.0)	残3.8			(内)2.5YR/7.4/浅黄 (外)2.5YR/7.4/浅黄 (底)2.5YR/7.4/浅黄	施(直徑1cm以下)の白、 黒色砂粒を含む)	良好	口部2% 底と同一個体		IV-1
第32図	89	弥生土器	甕	(30.4)	残4.6			(内)10YR/8.2/浅黄褐色 (外)7.5YR/8.2/浅黄褐色 (底)10YR/6.4/浅黄褐色	施(直徑2~3cmの長石、 石英、チャート、クサリ 灰岩を含む)	良好	口部板 20%		IV-1
第32図	90	弥生土器	甕	(33.2)	残4.2			(内)10YR/8.2/浅黄褐色 (外)7.5YR/8.2/浅黄褐色 (底)10YR/6.4/浅黄褐色	施(直徑2~3cmの長石、 石英、チャート、クサリ 灰岩を含む)	良好	口部板 25%		IV-1
第32図	91	弥生土器	高杯			残2.1		(内)10YR/4.2/灰白色 (外)10YR/4.2/灰白色 (底)10YR/6.2/灰白色	施(直徑2~3cmの長石、 石英、角閃石等多量に 含む)	良好	不明	生駒西越成	弥生中期
第32図	92	弥生土器	広口短縦轍		残5.3	7.4		(内)10YR/4.2/灰白色 (外)10YR/4.2/灰白色 (底)10YR/6.2/灰白色	施(直徑1cm以下の長石、 石英、チャート、クサリ 灰岩を含む)	良好	底部100% と同一個体		IV-1
第32図	93	弥生土器	底鉢			残3.1	(7.8)	(内)10YR/8.0/明黄色 (外)10YR/8.0/明黄色 (底)10YR/6.0/明黄色	施(直徑1~2cmの長石、 石英、チャート、その 他の砂粒を含む)	良好	底部49% 和歌山49%		弥生中期
第32図	94	弥生土器	甕		残4.15	8.2		(内)2.5YR/7.2/黄 (外)10YR/8.0/明黄色 (底)10YR/6.0/明黄色	施(直徑1~2cmの長石、 石英を含む)	良好	底部100%		弥生中期
第32図	95	弥生土器	底鉢			残1.8	(8.8)	(内)10YR/8.2/灰白色 (外)2.5YR/8.2/浅黄 (底)10YR/8.2/灰白色	施(直徑1~2cmの長石、 石英、クサリ等多量 を含む)	良好	底部25% 和歌山25%		弥生中期
第32図	96	弥生土器	底鉢			残4.3	(8.4)	(内)7.5YR/4.1/灰 (外)10YR/8.0/灰 (底)7.5YR/4.1/灰	施(直徑1~2cmの長石、 石英、チャート等を含む)	良好	底部25%		弥生中期
第32図	97	弥生土器	底鉢			残2.45	(8.8)	(内)5Y3/1リブ裏黑 (外)5Y3/1リブ裏黑 (底)6Y3/1リブ裏黒	施(直徑1cm以下の長石、 石英、その他の砂粒を 含む)	良好	底部25%		弥生中期
第32図	98	弥生土器	甕			残2.9	7.8	(内)2.5YR/7.4/浅黄 (外)2.5YR/7.4/浅黄 (底)2.5YR/7.4/浅黄	施(直徑1cm以下の白、 黒色砂粒を含む)	良好	底部100% と同一個体		IV-1
第32図	99	21	土器部	小豆	(7.2)	1.15		(内)10YR/7.3/黄褐色 (外)2.5YR/8.1/灰 (底)7.5YR/8.0/浅黄褐色	施(直徑2cm以下の長石、 石英、チャート、クサリ 等を含む)	良好	45%		近世時代
第32図	100	207	土器部	小豆	(8.4)	1.55		(内)7.5YR/6.0/灰 (外)10YR/8.0/灰褐色 (底)7.5YR/6.0/灰褐色	施(直徑1cm以下の砂粒 を含む)	良好	口部64%		魏晉時代
第38図	101	211	黒色土器	被(A端)	残1.95	高台復 (7.1)		(内)N2/0/黑 (外)7.5YR/8.0/にぼ (底)7.5YR/8.0/浅黄褐色	施(直徑1cm以下の細砂 を含む)	良好	高台部 15%		平安後期
第38図	102	210	黒色土器	被(A端)	残1.4	高台復 (7.0)		(内)2.5YR/7.3/黑 (外)2.5YR/8.0/黑 (底)2.5YR/8.0/灰褐色	施(直徑2cm以下のチー ト、雲母を含む)	良好	高台部 13%		平安後期
第38図	103	964	石器	石核		2.10灰 厚1.8 厚0.2					100%	サヌカイト、 重量: 10g	弥生時代
第40図	104	176	土器部	小型丸底壺	(9.2)	残6.4		(内)10YR/8.2/灰黃 (外)10YR/8.3/灰 (底)10YR/8.3/灰	施(直徑0.5cm以下の砂 粒を含む)	良好	口部17%		古墳前期
第48図	105	165	土器部	甕	(15.2)	残3.8		(内)10YR/8.2/灰黃 (外)10YR/8.4/灰黃 (底)10YR/7.3/灰黃	施(直徑2.5cm以下の長 石、石英、チャート、良 好)	良好	口部板 25%		庄内
第48図	106	82	土器部	直口壺	18.8	残11.2		(内)10YR/7.3/黄褐色 (外)10YR/8.0/黄褐色 (底)10YR/7.3/黄褐色	施(直徑2cm以下の長石、 石英、チャート、當好 良好)	良好	口部~底 20%		布留
第48図	107	160	土器部	二重口縁壺	(27.8)	残9.4		(内)2.5YR/8.0/灰 (外)2.5YR/8.0/灰 (底)2.5YR/7.3/灰	施(直徑1cm以下の長 石を含む)	良好	口部板 50%		布留
第48図	108	158	土器部	高杯		残7.3 (12.0)		(内)2.5YR/8.0/灰 (外)2.5YR/8.0/灰 (底)10YR/8.0/灰褐色	施(直徑1.5cm以下の灰 石等を含む)	良好	脚部65%		吉備前期
第48図	109	159	弥生土器	甕		残3.2 (6.3)		(内)10YR/8.0/灰 (外)10YR/8.0/灰 (底)10YR/8.0/灰褐色	施(直徑3cm以下の長石、 石英を含む)	良好	底部60%		弥生中期
第48図	110	167	弥生土器	底鉢		残2.9 5.45		(内)2.5YR/1灰 (外)10YR/7.3/灰 (底)2.5YR/1灰	施(直徑2cm以下の長石、 チャートを含む)	良好	底部100%		弥生中期
第50図	111	421	弥生土器	広口短縦轍	(12.8)	残4.0		(内)7.5YR/8.4/灰 (外)10YR/8.4/灰 (底)7.5YR/8.4/灰	施(直徑1cm以下の細砂 を含む)	良好	口部板 80%		V
第50図	112	128	弥生土器	広口短縦轍	13.9	残7.8		(内)2.5YR/8.1/白 (外)2.5YR/8.1/白 (底)2.5YR/8.1/白	施(直徑1cm以下の白、 黒色砂粒を含む)	不良	口部板 80%		IV-3

遺物觀察表 4

地図番号	Pno.	種類	器種	口径	基高	底径	その他	色調	胎土	焼成:	残存	備考	時期	
第50回	113	477	弥生土器	台付水差し	縦14.5			(内)2.5YR7/2灰黄 (外)2.5YR7/2灰黄 (底)2.5YR1/1黄灰	やや粗(直径2~3mmの長石、石英、雲母を含む)	やや不良	50%		IV-1	
第50回	114	566	弥生土器	広口長頸壺	(22.6)	残1.6		(内)2.5YR7/2灰黄 (外)2.5YR5/8灰赤褐 (底)2.5YR7/2灰黄	直径1~2mmの長石、石英、チャートを含む	良好	口端部8%		IV-3	
第50回	115	127	弥生土器	広口短頸壺	(23.3)	(18.2)		(内)10YR5/4C灰赤褐 (外)10YR5/4C灰赤褐 (底)2.5YR5/1灰	直径1~2mmの長石、チャートを含む	やや不良(破片多量あり)			IV-1	
第50回	116	128	弥生土器	広口短頸壺	(20.7)	34.0	(5.4)	(内)10YR5/4C灰赤褐 (外)10YR5/4C灰赤褐 (底)10YR7/2C灰黒	直径1~2mmの長石、石英、チャートを含む	やや不良	口端部25% (破片多量あり)		IV-1	
南50回	117	119	弥生土器	広口短頸壺	縦14.0	5.2		(内)10YR5/4C灰赤褐 (外)2.5YR1/1灰	直径2mm以下の長石、石英、角閃石を含む	良好	底部45%、 底部100%生物顕微鏡		IV-1	
第50回	118	120	弥生土器	広口短頸壺	16.5	28.5	8.0	腹部最大径 24.4	直径2mm以下の長石、石英、チャートを含む	良好	80%		IV-1	
第50回	119	118	弥生土器	細頸壺	13.6		(8.0)	(内)2.5YR7/2灰黄 (外)2.5YR7/2灰黄 (底)2.5YR1/1黄灰	直径3mm以下の長石、石英を含む	やや不良	25%、底 50%	推定最高:	IV-1	
第51回	120	124	弥生土器	甕	(15.6)	(23.8)	4.5	(内)10YR7/2C灰黒 (外)10YR7/2C灰黒 (底)10YR6/1灰灰	直径1~2mmの長石、石英、チャートを含む	良好	口端部10% 底部50%		IV-1	
第51回	121	129	弥生土器	甕	(36.0)	残7.6		(内)2.5YR7/2灰白 (外)10YR6/2B白 (底)2.5YR7/2灰白	直径8mm以下の長石、石英、チャートを含む	良好	口端部15% 底部5%		IV-1	
第51回	122	133	弥生土器	底部	残2.8	4.9		(内)10YR4/2B灰黃 (外)10YR6/9灰青 (底)10YR4/2B灰黃	直径1~2mmの長石、石英を含む	良好	底部100%	弥生中期		
第51回	123	121	弥生土器	底部	残2.6	5.5		(内)10YR6/2B灰黃 (外)10YR5/4C灰青 (底)10YR6/2B灰黃	直径1~2mmの長石、石英を含む	良好	底部100%	生駒西面	弥生中期	
第51回	124	567	弥生土器	甕	縦4.85	(8.0)		(内)5YR7/1灰白 (外)2.5YR5/8B灰褐 (底)10YR4/1灰灰	直径1~2mmの長石、石英、チャートを含む	良好	底部38%		弥生中期	
第51回	125	118	弥生土器	高杯	(21.2)	21.0	14.4	(内)2.5YR7/1灰白 (外)2.5YR7/1灰白 (底)2.5YR7/1灰白	直径1~2mmの長石、白、黑色砂粒を含む	やや不良	100%		IV-1	
第51回	126	115	弥生土器	高杯	21.7	20.0	12.8	(内)2.5YR7/1灰白 (外)2.5YR7/1灰白 (底)2.5YR7/1灰白	直径1~2mmの長石、白、黑色砂粒を含む	やや不良	80%		IV-1	
第51回	127	83	石器	柱状片刃石 斧	縦3.5					不明	緑色片割、 重量: 32g	弥生時代		
第51回	128	20	石器	スクレーバー	縦4.0						100%	サスカイト、 重量: 13g	弥生時代	
第51回	129	87	石器	大型刮刃石 斧	縦4.5			縦長:11.3 横幅:4.5 厚さ:4.2		40%	緑色泥岩石、 重量: 560g	弥生時代		
第53回	130	92	瓦器	碗	(12.8)	3.2	高台盤 3.3	(内)2.5YR5/1灰赤 (外)2.5YR5/1灰白 (底)2.5YR5/1灰白	直径1~2mmの砂粒を少 量含む	やや不良	50%	尾上: IV-2		
第63回	131	93	瓦器	碗	(12.4)	残3.95		(内)2.5YR7/2灰白 (外)2.5YR7/1灰白 (底)2.5YR7/1灰白	直径1~2mm以下の砂粒 を含む	不良	20%	尾上: IV-1		
第58回	132	383	弥生土器	広口長頸壺	(32.0)	残15.1		(内)2.5YR7/2灰白 (外)2.5YR7/2灰白 (底)2.5YR7/2灰白	直径2mm以下の長石、 石英、チャートを含む	やや不良	20%	口端部ペンガラ遺 址、日明山	IV-2	
第56回	133	558	弥生土器	広口長頸壺	縦17.8			(内)10YR7/2C灰黒 (外)10YR7/2C灰黒 (底)7.5YR5/1暗灰	直径2mm程度の長石、 石英、その他の粘土を含む	不良	底部10%	日明山	IV-2	
第56回	134	282	弥生土器	広口短頸壺	(36.0)	残27.9		(内)2.5YR7/2灰白 (外)2.5YR7/2灰白 (底)2.5YR7/2灰白	直径1~2mm以下の石英、 石英、角閃石を多量に含 む	不良	頭部25%	日明山	IV-2	
第56回	135	284	弥生土器	段状口唇壺	(33.0)	残4.3		(内)2.5YR7/2灰白 (外)10YR5/4C灰赤褐 (底)10YR6/2B灰青	直径1~2mm以下の石英、 石英、角閃石を多量に含 む	良好	5%	生駒西面	IV-2	
第58回	136	387	弥生土器	甕	31.5	48.5	12.8	高台盤最大径 37.0	(内)17.5YR7/3C灰黒 (外)6YR7/8灰黒 (底)7.5YR7/4暗灰	直径3mm以下の長石、 石英、チャート、カツラ液 を含む	不良	50%	IV-2	
第56回	137	367	弥生土器	底部	残6.5	9.2		(内)10YR7/2黑 (外)10YR5/4C灰赤褐 (底)10YR6/4C灰赤褐	直径1~4mmの白、 白、黑色砂を多量に含 む	良好	底部100%	内面炭化物 付帯	弥生中期	
第58回	138	559	弥生土器	底部	残7.0	6.2		(内)2.5YR7/2灰白 つまみ怪 4.7	直径1~2mm以下の長石、 石英、チャートを含む	やや不良	底 100%		弥生中期	
第58回	139	463	弥生土器	蓋	縦7.2			(内)10YR7/2灰白 (外)10YR7/8灰青 (底)10YR6/4C灰赤褐	直径1~2mm以下の長石、 石英、チャートを含む	不良	20%		II	
第56回	140	364	弥生土器	広口長頸壺	(16.2)	残19.7		(内)2.5YR7/2灰白 (外)2.5YR7/2灰白 (底)2.5YR7/1灰白	直径1~2mm以下の長石、 石英、チャートを含む	不良	20%			

遺物観察表 5

sondage no.	Pno.	種類	岩種	口径	鉱高	鉱底	その性	色調	粘土	焼成	残存	備考	時期
第69回	141	716	砂生土器	縫状口縫透	22.1	残15.5	(内)2.5YR 6/6暗 (外)2.6YR 6/6黄 (透)10YR 4/6灰白	良(直徑1~6cm長石、 石英、チャートを含む)	不良 口縫部100%	%		IV-2	
第70回	142	291	砂生土器	壺	残5.3	9.4	(内)N3/6暗灰 (外)10YR 5/6赤 (透)N3/6暗灰	密(直徑2~7cm長石、 石英、チャートを多量に含む)	不良 底部100%		砂生中期		
第71回	143	573	砂生土器	広口長縫透		残8.0	(内)10YR 7/4にじる青 (外)10YR 7/4にじる青 (透)10YR 7/4にじる青	密(直徑2~3cmの長石、 石英、チャートを含む)	良好 口縫部5%		I		
第72回	144	574	砂生土器	壺		残8.1	(内)10YR 7/3にじる青 (外)10YR 7/3にじる青 (透)10YR 7/3にじる青	密(直徑3~4cmの長石、 石英、チャートを含む)	良好 口縫部5%		I		
第73回	145	577	砂生土器	壺部	残5.0	9.2	(内)5YR 7/6暗 (外)5YR 7/6暗 (透)10YR 7/4にじる青	密(直徑3cm以下の長石、 石英、チャート、クサ、良好、底部100%)	良好 底部100%		砂生中期		
第74回	146	575	砂生土器	底部	残4.5	(7.6)	(内)10YR 8/6暗 (外)10YR 8/6暗 (透)10YR 8/6暗	密(直徑2~5cmの長石、 石英、チャート、クサ、良好、底部100%)	良好 底部100%		砂生中期		
第75回	147	576	砂生土器	底部	残5.7	8.6	(内)7.5YR 8/6暗 (外)7.5YR 8/6暗 (透)10YR 8/4浅灰透	密(直徑2~3cmの長石、 石英、チャート、クサ、良好、底部100%)	良好 底部100%		砂生中期		
第76回	148	283	砂生土器	壺部	残14.8	13	(内)7.5YR 8/6暗 (外)7.5YR 8/6暗 (透)10YR 8/4浅灰透	密(直徑2~3cmの長石、 石英、チャート、クサ、良好、底部100%)	良好 底部100%		砂生中期		
第77回	149	366	砂生土器	壺	(32.6)	(52.0)	(透)10YR 6/25赤 (透)7.5YR 7/25暗紅 (透)8.6	密(直徑3~5cmの長石、 石英、チャートを多量に含む)	良好 40%		IV-2		
第78回	150	288	砂生土器	高杯		残8.1	(内)10YR 6/25赤 (透)10YR 6/25赤 (透)10YR 7/25暗紅	密(直徑3~5cmの白、 黄、灰色透、クサり透、良好)	良好 底部40%		IV		
第79回	151	289	砂生土器	高杯		残8.0	(内)10YR 8/1灰白 (外)7.5YR 8/1灰白 (透)12.5YR 8/1灰白	密(直徑2~5cmの長石、 石英、チャート、クサ、良好)	良好 底部12%		IV		
第80回	152	260	石器	石盤		厚1.4 厚0.95	(内)10YR 6/8赤 (外)5YR 7/8赤 (透)12.5YR 6/8	密(直徑2~3cmの砂透) 石英、チャートを多量に含む	良好 40%	サヌカイト、 重量: 4.1g	砂生時代		
第81回	153	301	砂生土器	ミニチュア	(4.2)	6.3	2.6	(内)10YR 5/6赤 (外)5YR 7/6赤 (透)12.5YR 6/6	密(直徑1~2cmの砂透) 石英、チャートを含む	良好 内面にヘン ガラ塗装		砂生中期	
第82回	154	471	砂生土器	広口長縫透	(22.4)	残4.1	(内)10YR 7/3にじる青 (外)10YR 6/6明赤透 (透)7.5YR 7/4にじる青	密(直徑3cm以下の長石、 石英、チャートを含む)	良好 口縫部 12%		II		
第83回	155	310	砂生土器	壺部	残8.25	7.0	(内)7.5YR 7/4にじる青 (外)5.5YR 7/4にじる青 (透)12.5YR 7/4にじる青	密(直徑3cm以下の長石、 石英、チャート、クサ、良好、底部100%)	良好 底部100%		砂生中期		
第84回	156	363	砂生土器	壺部	残5.7	9.2	(内)10YR 8/3にじる青 (外)7.5YR 8/4にじる青 (透)10YR 8/4にじる青	密(直徑2cm以下の砂透) 石英、チャートを含む	良好 底部100%		砂生中期		
第85回	157	359	砂生土器	底部	残8.25	8.6	(内)7.5YR 7/4にじる青 (外)10YR 8/32黄透 (透)10YR 8/32黄透	密(直徑2~5cmの長石、 石英、チャート、クサ、良好、底部100%)	良好 底部100%		砂生中期		
第86回	158	302	砂生土器	壺	(18.0)	残4.3	(内)7.5YR 8/4にじる青 (外)7.5YR 8/4にじる青 (透)10YR 8/2灰白	密(直徑2cm以下の長石、 石英、チャートを含む)	良好 19%		IV		
第87回	159	470	砂生土器	壺	(18.4)	残5.3	(内)12.5YR 8/4にじる青 (外)10YR 8/4にじる青 (透)7.5YR 8/4にじる青	密(直徑1~2cmの長石、 石英、チャートを含む)	良好 口縫部4%		II		
第88回	160	277	砂生土器	台付鋤		残16.5	(内)10YR 6/4にじる青 (外)10YR 6/4にじる青 (透)10YR 6/4にじる青	密(直徑2~3cm以下の長石、 石英、チャート、クサ、良好)	良好 不明		IV-2		
第89回	161	294	石器	石盤		厚3.75 厚1.5 厚0.95	(内)10YR 6/4にじる青 (外)10YR 6/4にじる青 (透)10YR 6/4にじる青	密(直徑1cm以下の長石、 石英、チャートを含む)	良好 80%	サヌカイト、 重量: 3.0g	砂生時代		
第90回	162	226	砂生土器	無縫透	(7.8)	8.8	4.8	(内)5YR 6/6赤 (外)7.5YR 6/6赤 (透)5YR 1/1灰	密(直徑1cm以下の長石、 石英を含む)	良好 80%		IV	
第91回	163	226	砂生土器	壺部	残3.4	6.5	(内)10YR 5/2灰青透 (外)10YR 6/4にじる青 (透)10YR 7/9灰	やわら(直徑1~2cmの 長石、石英、チャート、クサ、良好)	良好 底部100%		砂生中期		
第92回	164	230	砂生土器	壺	残23.3	7.3	厚3.75 厚1.5 厚0.95	(内)10YR 6/4にじる青 (外)10YR 7/4にじる青 (透)10YR 7/4にじる青	やわら(直徑1~2cmの 長石、石英、チャートを多量に含む)	良好 50%	砂生中期		
第93回	165	326	砂生土器	縫状口縫透	19.0	26.1							
第94回	166	590	砂生土器	広口短縫透	残14.4	(5.2)	厚3.75 厚1.5 厚0.95	(内)10YR 4/1開透 (外)10YR 5/4にじる青 (透)10YR 4/4にじる青	やわら(直徑2cm以下の長石、 石英閃石を含む)	良好 50%	生耕西面		
第95回	167	591	砂生土器	壺	残12.7	6.2							
第96回	168	589	砂生土器	壺	(37.4)	残5.0	(内)10YR 7/3にじる青 (外)10YR 7/3にじる青 (透)10YR 7/3にじる青	密(直徑2cm以下の長石、 石英、チャートを含む)	良好 底部100%		砂生中期		
第97回	169	588	砂生土器	壺			(内)10YR 5/4にじる青 (外)10YR 6/4にじる青 (透)10YR 4/2灰青透	密(直徑3~6cm程度の 長石、石英、開閃石を多量に含む)	良好 12%	(株)1個	生物西面		

遺物観察表 6

地図番号	Pno.	種類	器種	口径	基点	底径	その他	色調	地土	状況	灰分	機場	時期
第67回	169	358	弥生土器	広口短頸壺	(19.0)	残6.2		(内)7.5YR6/4に赤 (外)7.5YR7/4に赤 (底)10YR7/4に赤	密(直径1~2mmの長石、 石英、クサリ礫を含む) 良好	口縁部 25%		IV-2	
第67回	170	419	弥生土器	広口短頸壺	(20.0)	残7.3		(内)7.5YR7/3に赤 (外)5YR6/6赤 (底)7.5YR7/3に赤	密(直径1mm以下の長 石、石英、チャート、不良 クリソロードを含む)	口縁部 25%		IV-2	
第67回	171	571	弥生土器	広口短頸壺		残30.0	8.8 26.7	(内)2.5YR7/1赤反 (外)7.5YR7/2赤黄 (底)2.5YR7/2赤黄	密(長石、クサリ礫等 を含む)	良好 50%	ベンガラ塗布	IV-3	
第67回	172	572	弥生土器	段状口縁壺	(21.0)	48.5	8.7	崩壊最大径 33.0	(内)10YR5/4Cに青黄 (外)10YR5/4Cに青黄 (底)10YR5/4Cに青黄	密(直径3mm以下の長 石、角閃石を含む) 良好	40%	生駒西産	IV-2
第67回	173	279	弥生土器	壺	(26.0)	残9.9		(内)5YR8/4赤透 (外)5YR6/8透 (底)7.5YR7/2灰透	密(直径1~2mm以下の長 石、石英、チャート、不良 トを含む)	口縁部 12%		IV-2	
第67回	174	436	弥生土器	壺		残5.6	6.6	(内)10YR7/4Cに青黄 (外)10YR7/2灰白 (底)10YR7/2灰白	密(直径1mm以下のク サリ礫を多量に含む) 良好	更期100%		弥生中期	
第67回	175	268	弥生土器	壺		残8.2	9.0	(内)7.5YR7/1白透 (外)10YR5/4灰透 (底)10YR5/4灰透	密(直径1~3mmの砂粒 を多量に含む) 良好	更期70%		弥生中期	
第67回	176	562	弥生土器	壺		残8.4	(8.8)	(内)10YR5/4Cに青黄 (外)10YR7/4Cに青黄 (底)10YR5/3灰透透	密(直径3mm以下の長 石、石英、チャート良好 クリソロードを含む)	更期40%		弥生中期	
第67回	177	560	弥生土器	壺		残2.45	5.2	(内)10YR5/2灰透透 (外)10YR5/4Cに青黄 (底)10YR5/2灰透透	密(直径1mm以下の長 石、石英、クサリ礫、良好 トを含む)	更期100%	生駒西産	弥生中期	
第67回	178	561	弥生土器	壺		残4.90	(8.8)	(内)7.5YR5/4Cに青黄 (外)5YR6/8透 (底)5YR5/3灰透透	密(直径1mm以下の長 石、石英、その他の砂 リ礫を含む)	更期78%		弥生中期	
第67回	179	325	弥生土器	高杯		残16.1	14.4	(内)7.5YR5/2灰透透 (外)7.5YR7/1白透 (底)10YR7/1白透	密(直径1~3mmの砂粒 を多量に含む) 良好	更期100%		IV-2	
第67回	180	330	弥生土器	瓶壺型		5.4	8.6	(内)10YR7/4灰透 (外)7.5YR7/4Cに青黄 (底)10YR7/3Cに青黄	密(直径1~3mmの白、 灰、黒色砂礫を多量に含む)	100%		弥生中期	
第67回	181	331	弥生土器	瓶壺型		4.9	9.3	(内)5YR6/4Cに青黄 (外)5YR7/3透	密(直径1~2mmの白色 砂礫を多量に含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	182	332	弥生土器	瓶壺型		4.8	9.4	(内)7.5YR7/8透 (外)5YR7/8透	密(直径1~2mmの白色 砂礫を多量に含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	183	333	弥生土器	瓶壺型		(4.8)	9.5	(内)5YR6/4Cに青黄 (外)5YR7/8透	密(直径1~2mmの白色 砂礫を多量に含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	184	334	弥生土器	瓶壺型		(5.4)	8.5	(内)5YR7/8透 (外)10YR2/2灰白 (底)10YR7/2灰白	密(直径1~2mmの白、 灰、黒色砂礫を多量に含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	185	336	弥生土器	瓶壺型		4.9	8.4	(内)7.5YR7/2Cに青黄 (外)7.5YR7/3Cに青黄	密(直径1~2mmの白、 灰、黒色砂礫、クサリ 礫を含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	186	337	弥生土器	瓶壺型		5.3	8.65	(内)2.5YR6/5透 (外)7.5YR5/5透	密(直径1mm以下のク サリ礫等を少量含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	187	338	弥生土器	瓶壺型		4.8	8.1	(内)10YR7/3Cに青黄 (外)7.5YR5/5透	密(直径1mm以下のク サリ礫等を少量含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	188	339	弥生土器	瓶壺型		4.6	9.7	(内)6YR7/8透 (外)6YR7/8透	密(直径1~2mmの長石、 石英、クサリ礫を含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	189	340	弥生土器	瓶壺型		4.8	9.9	(内)2.5YR7/9透 (外)10YR6/3灰透	密(直径1mm以下の砂 利、黒色砂礫を含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	190	341	弥生土器	瓶壺型		5.2	8.7	(内)7.5YR7/4Cに青黄 (外)10YR5/4灰透	密(直径1~2mmの白、 灰、黒色砂礫、クサリ 礫を含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	191	342	弥生土器	瓶壺型		5.0	9.3	(内)7.5YR7/8透 (外)10YR5/4灰透	密(直径1mm程度の長 石、クサリ礫を含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	192	343	弥生土器	瓶壺型		5.6	9.4	(内)5YR6/6透 (外)5YR6/8透	密(直径1mm以下の砂 利、石英、クサリ礫を含む)	良好 100%		弥生中期	
第67回	193	344	弥生土器	瓶壺型		5.0	10.0	(内)5YR6/6透 (外)10YR6/8透	密(直径1mm程度の長 石、石英、クサリ礫を含む)	良好 100%		弥生中期	
第68回	194	297	石器	石包丁未製品				残存長7.7 幅4.4	緑灰 岩		40%	緑色片岩、 重量: 33g	弥生時代
第68回	195	313	石器	石包丁				残長10.6 幅5.4 厚0.7	灰白 岩		50%	緑色片岩、 重量: 54.3g	弥生時代
第69回	196	360	弥生土器	壺	(36.0)	残14.4		(内)10YR7/3Cに青黄 (外)10YR7/3Cに青黄 (底)10YR7/3Cに青黄	密(直径1mm以下の長 石、クサリ礫等を多量に含む)			II	

遺物観察表7

施設番号	Pno.	種類	器種	口径	縦高	横径	その他	色調	胎土	焼成	残存	備考	時期
第70回	187	362	弥生土器	壺		縦8.0	10.2	(内)10YR7.3/C3.1:黄 (外)10YR7.3/C3.1:黄 (部)10YR7.2/C3.1:黄	密(直径2mm以下の孔 リ痕、砂粒片断、砂粒) 多量に含む)	密 表面100% 紀伊庵		II	
第70回	188	464	弥生土器	高杯	21.2	残6.3		(内)10YR8.6:黄 (外)10YR8.6:黄 (部)10YR8.6:黄	密(直径1~2mmの黄石、 石英、チャートを含む)	良好 体部10%		IV	
第71回	199	478	弥生土器	無縁壺	7.9	9.1	4.7	(内)12.5YR7.1:灰黄 (外)12.5YR7.1:灰黄 (部)10YR6.2/C3.1:黄	密(直径1mm以下の白、 黄褐色砂粒を含む)	良好	100%		IV
第71回	200	667	弥生土器	広口短縁壺	(16.0)	残5.7		(内)10YR8.6:黄 (外)10YR7.4/C3.1:黄 (部)10YR5.4/C3.1:黄	密(直径2mm以下の黄石、 石英、チャート、クサ リ種を含む)	良好 口縁部 22%		V	
第71回	201	282	弥生土器	広口短縁壺	19.3	残8.5		(内)10YR8.6:黄 (外)10YR5.3/C3.1:黄 (部)10YR5.3/C3.1:黄	密(直径2mm以下の黄石、 石英、角閃石を含む)	良好 口縁部 100%	生剥西蔵庵	V	
第71回	202	335	弥生土器	高杯				(内)7.5YR8.0/C4.3:黄 (外)10YR8.6:2/C3.1:黄 (部)10YR8.6:2/C3.1:黄	密(直径1~2mmの黄石、 石英、チャートを含む)	良好 脚柱部 100%		V	
第71回	203	436	弥生土器	高杯		残6.7	(12.4)	(内)8YR5.0/明赤褐 (外)12.5YR8.6/明赤褐 (部)8YR5.0/褐	密(直径2~3mmの黄石、 石英、チャート、クサ リ種を含む)	良好 底部16%		V	
第71回	204	443	弥生土器	壺	(34.0)	残2.85		(内)10YR8.6/C3.1:黄 (外)7.5YR5.3/C3.1:黄 (部)10YR5.1/灰	密(直径1mm以下の黄石、 石英、石英を含む)	良好 口縁部7%		IV-3	
第71回	206	304	弥生土器	広口短縁壺	(22.6)	残18.1		(内)10YR8.3/1:黄 (外)10YR7.1/1:黄 (部)10YR7.1/1:黄	密(直径2mm以下の黄石、 角閃石を含む)	良好 口縁部 25%	生剥西蔵庵	IV-4	
第71回	208	566	弥生土器	底部		残2.85	0.0	(内)10YR8.6/C4.3:黄 (外)10YR7.4/C4.3:黄 (部)10YR7.4/C4.3:黄	密(直径5mm以下の黄石、 石英、チャートを含む)	良好 底部100%		弥生中期	
第71回	207	563	弥生土器	底部		残3.4	6.6	(内)7.5YR8.0/C4.3:黄 (外)10YR8.6/C4.3:黄 (部)7.5YR8.0/C4.3:黄	密(直径3mm以下の黄石、 石英、チャートを含む)	良好 底部100%		弥生中期	
第71回	208	568	弥生土器	底部		残1.5	(7.0)	(内)10YR7.3/C3.3:黄 (外)10YR7.4/C3.3:黄 (部)10YR7.3/C3.3:黄	密(直径1~2mmの砂粒 を含む)	良好 底部60%		弥生中期	
第71回	209	569	弥生土器	底部		残2.95	5.8	(内)8YR6.5/C4.3:黄 (外)10YR7.3/C3.3:黄 (部)10YR7.3/C3.3:黄	密(直径1~2mmの黄石、 石英、チャートを含む)	良好 底部80%		弥生中期	
第71回	210	441	弥生土器	底部		残4.9	(10.0)	(内)10YR7.3/C3.3:黄 (外)10YR7.3/C3.3:黄 (部)10YR7.3/C3.3:黄	密(直径1~2mmの黄石、 石英、チャートを含む)	良好 底部44%		弥生中期	
第71回	211	564	弥生土器	底部		残5.0	(9.0)	(内)10YR7.4/C4.3:黄 (外)8YR8.0/C4.3:黄 (部)10YR7.3/C3.3:黄	密(直径3mm以下の黄石、 石英、チャートを含む)	良好 底部35%		弥生中期	
第71回	212	439	弥生土器	底部		残4.0	(8.8)	(内)10YR8.6/C3.3:黄 (外)8YR5.1/1:黄 (部)10YR5.1/1:黄	密(直径1~4mmの黄石、 角閃石、米粒な砂粒を含む)	良好 底部47%	生剥西蔵庵	弥生中期	
第71回	213	570	弥生土器	底部		残6.2	(8.2)	(内)10YR7.3/C3.3:黄 (外)10YR7.3/C3.3:黄 (部)10YR7.3/C3.3:黄	密(直径2~4mmの黄石、 石英、チャート、クサ リ種を含む)	良好 底部40%		弥生中期	
第71回	214	440	弥生土器	底部		残5.3	(7.4)	(内)2.5YR7.1:灰 (外)10YR7.2/C3.1:黄 (部)2.5YR7.1:灰	密(直径1~2mmの黄石、 石英、チャート、モザイク 片を含む)	良好 底部45%		弥生中期	
第71回	215	565	弥生土器	底部		残4.8	(9.0)	(内)17.5YR7.4/C4.3:黄 (外)10YR7.4/C4.3:黄 (部)10YR7.4/C4.3:黄	密(直径2~3mm以下の黄石、 石英、チャート、クサ リ種を含む)	良好 底部50%		弥生中期	
第71回	216	312	石器	石包丁				残存長9.1 幅6.1 厚0.35			40%	褐色片岩、 重量：55.8g	弥生時代
第72回	217	153	須恵器	杯身	(12.0)	残2.05		(内)10N/0/灰 (外)6.5YR5.0/灰 (部)10N/0/灰	密(直径1.5mm以下の砂 粒を含む)	良好 口縁部 15%		雨島II-5	
第72回	218	163	須恵器	短束頭	(6.5)	8.85	最大径13.2	(内)10N/0/灰 (外)10N/0/灰 (部)10N/0/灰	密(直径4mm以下の長石 等を含む)	良好 95%		古墳後周	
第72回	219	138	須恵器	平瓶	(6.8)	13.56	最大径7.75	(内)2.5YR7.2/灰 (外)2.5YR7.2/灰 (部)2.5YR7.2/灰	密(直径1~2mmの白、 石英、米粒の砂粒を多 量に含む)	100%		雨島II-1	
第72回	220	346	土師器	小型壺	(11.0)	残4.7		(内)10YR8.6/4:黄 (外)10YR8.6/4:黄 (部)10YR8.6/4:黄	密(直径1mm以下の砂粒、 チャートを含む)	良好 脚部 15%		古墳前期	
第72回	221	350	弥生土器	台付鉢		残7.2	(10.0)	(内)10YR7.2/C3.1:黄 (外)10YR7.2/C3.1:黄 (部)10YR7.2/C3.1:黄	密(直径3mm以下の長石、 石英、チャートを含む)	良好 脚部89%		V	
第72回	222	254	土器器	壺		残5.16	3.0	(内)10YR7.3/C3.1:黄 (外)10YR7.3/C3.1:黄 (部)10YR7.3/C3.1:黄	密(直径1mm以下の砂粒、 チャートを含む)	良好 不焼		V	
第72回	223	206	弥生土器	底部		残4.4	9.0	(内)10YR8.6/4:黄 (外)10YR8.6/4:黄 (部)10YR8.6/4:黄	密(直径2mm以下の長石、 石英、チャートを含む)	良好 底部100%		弥生中期	
第72回	224	65	土器器	杯	(18.0)	残2.3		(内)7.5YR8.6/6 (外)10YR8.6/4:黄 (部)10YR8.6/4:黄	密(直径1mmの砂粒を含む、 クサリ種を含む)	良好 口縁部 10%		雨島時代	

遺物観察表 8

検出番号	Ph.	種類	器種	口径	管高	底深	その性	色調	地土	焼成	保存	備考	時期
第72回 225	66	土師器	壺	(17.0)	残4.0		(内)10YR7/8明黄 (外)10YR7/6淡黄 (底)10YR7/6	密(直径2mm以下の板石 チャートを含む)	良好 口縁部 10%			古墳後期	
第72回 226	64	土師器	把手付壺				(内)10YR7/8明黄 (外)10YR7/6淡黄 (底)10YR7/6	密(直徑1~2mmの板石、 クサリ縫を含む)	良好 把手のみ 100%			奈良時代	
第72回 227	198	弥生土器	壺		残7.5	(8.2)	(内)10YR7/8明黄 (外)10YR7/6淡黄 (底)10YR7/6	密(直径3mm以下の板石、 石灰、チャートを含む)	良好 底部100%			弥生中期	
第72回 228	221	弥生土器	段状口縁壺	(16.0)	残7.2		(内)10YR7/8明黄 (外)10YR7/6淡黄 (底)10YR7/6	密(直徑1~2mmの板石、 石灰、角閃石を含む)	良好 口縁部 10%			弥生中期	
第72回 229	253	弥生土器	広口短頸壺	(21.0)	残5.4		(内)10YR7/8明黄 (外)10YR7/6淡黄 (底)10YR7/6	密(直徑1~2mmの板石、 石灰、角閃石を含む)	良好 口縁部 10%			IV-3	
第72回 230	346	弥生土器	段状口縁壺	(27.0)	残5.5		(内)10YR7/8明黄 (外)10YR7/6淡黄 (底)10YR7/6	密(直徑2~4mmのチャー ト、白、灰色、クサ リ縫を含む)	良好 口縁部 10%			IV-4	
第72回 231	370	弥生土器	広口長頸壺		残(24.5)		(内)10YR7/8明黄 (外)10YR7/6淡黄 (底)10YR7/6	密(直徑1mm以下の白、 真砂粒を多量に含む)	中好 口縁部 不良 10%				
第72回 232	186	弥生土器	新納壺		4.7	9.5	(内)10YR7/8明黄 (外)10YR7/6淡黄	密(直徑3mm以下の板石、 石灰、チャート、クサ リ縫を含む)	良好 底部40%			弥生中期	
第72回 233	187	弥生土器	新納壺		8.0	10.1	(内)10YR7/8明黄 (外)10YR7/6淡黄 (底)7.5YR7/6	密(直徑2~4mmの板石、 石灰、チャートを含む)	良好 底部40%			弥生中期	
第72回 234	424	弥生土器	広口長頸壺	(12.0)	(31.7)		(内)10YR7/8明黄 (外)10YR7/6淡黄 (底)10YR7/6	密(直徑3mm以下の板石、 石灰、チャートを多量 に含む)	良好 底部40%				
第72回 235	352	石器	有茎実頭器				残存高:3.7 最大幅:1.5 最大厚:0.6 体に白っぽい	灰(灰やや黄みがかった もの)灰、黒化して全 体に白っぽい)		90%	サヌカイト 重量: 6.2g 年末	石器時代 重量: 6.2g 年末	
第72回 236	243	石器	有茎石錐				長:2.55 幅:0.5 基盤幅:0.6			100%	サヌカイト 重量: 1.8g	弥生時代	
第72回 237	5	石器	石錐				長:3.7 幅:1.3 厚:0.3			100%	サヌカイト 重量: 1.4g	弥生時代	
第72回 238	295	石器	石錐				長:4.1 幅:1.2 厚:0.45			90%	サヌカイト 重量: 2.3g	弥生時代	
第72回 239	666	石器	石錐				長:4.6 幅:1.5 厚:0.3			80%	サヌカイト 重量: 0.8g	弥生時代	
第72回 240	669	石器	石錐				長:3.15 幅:2.0 厚:0.35			100%	サヌカイト 重量: 2.1g	弥生時代	
第72回 241	68	石器	石錐				長:3.2 幅:1.8 厚:0.5			100%	サヌカイト 重量: 7.4g	弥生時代	
第72回 242	16	石器	石錐				残存高:3.5 幅:3.5 厚:0.5			100%	サヌカイト 重量: 7.4g	弥生時代	
第72回 243	17	石器	スクレイバー				長:4.0 幅:2.2 厚:0.7			100%	サヌカイト 重量: 7.2g 弥生時代?	弥生時代?	
第72回 244	347	石器	スクレイバー				残長:3.35 幅:1.9 厚:0.4	灰(灰やや黄みがかった もの)灰			万先のみ サヌカイト 重量: 2.8g	弥生時代	
第72回 245	19	石器	石錐?				長:3.3 幅:1.1 厚:0.7			100%	サヌカイト 重量: 4.7g	弥生時代	
第72回 246	296	石器	石包丁				残存高:3.2 幅:5.2 厚:1.0	灰(灰やや黄みがかった もの)灰		30%	緑色石岩 重量: 49.4g	弥生時代	
第72回 247	63	石器	石椎形製品				長:10.0 幅:4.1 厚:1.1			100%	サヌカイト 重量: 43.4g	弥生時代	
第72回 248	721	弥生土器	壺		残7.5		(内)2.5YR7/3黄褐 (外)2.5YR7/3黄褐 (底)2.5YR7/3黄褐	密(直徑1~2mmの閃 石を多量に、直径6~7 mmの板石を含む)	良好 底部30%			V	
第72回 249	720	弥生土器	壺		残3.1	5.1	(内)2.5YR4/1灰灰 (外)10YR7/2C3.3U青 (底)N2.0暗灰	密(直徑1mm以下の砂粒 を少量に含む)	良好 底部100%			V	
第72回 250	657	織紋土器	深鉢				(内)10YR4/3C3.3U青 (外)10YR4/3C3.3U青 (底)10YR4/3C3.3U青	良好 底部100%				織紋器期	
第72回 251	296	弥生土器	広口短頸壺	(16.0)	残10.8		(内)10YR7/6	密(直徑3mm以下の板石、 石灰、チャート、クサ リ縫を含む)	良好 口縁部 10%			V	
第72回 252	281	弥生土器	壺		残3.0	(14.4)	(内)10YR7/2灰白 (外)10YR7/2C3.3U青 (底)10YR7/2灰白	密(直徑4mm以下の板石、 石灰、チャート、クサ リ縫を含む)	良好 底部60%			弥生中期	

遺物観察表 9

検査番号	No.	種類	特徴	口径	鉢高	底径	その他	色調	胎土	焼成	残存	備考	時間
第79回	253	180	弥生土器	高杯		残11.2	(内)7.5YR6/6偏 (外)10YR6/6赤 (底)10YR4/1灰灰	青(底径1mm以下の白、 黒色砂粒を含む)	良好	口縁部40%		IV	
第82回	264	452	弥生土器	甕	(27.6)	残8.9	(内)7.5YR7/1灰灰 (外)10YR4/1灰灰 (底)N/A/1灰灰	青(底径2mm以下の白、 黒色を含む)	やや不良	口縁部8%		IV-2	
第82回	265	463	弥生土器	甕		残2.7	6.2	(内)2.6YR7/4灰白 (外)10YR6/6黄黄褐 (底)10YR5/6黄褐	青(底径2mm以下の長石、 石英、チャート、クサ リ種を含む)	良好	底部100%		弥生中期
第87回	256	228	弥生土器	甕	(20.5)	残2.3	(内)5YR7/1偏 (外)10YR7/2灰白 (底)5YR7/1偏	青(底径1~2mmの長石 等の砂粒を多量に含む)	良好	口縁部8%		弥生中期	
第87回	257	219	弥生土器	甕		残5.9	9.4	(内)2.5YR7/2灰白 (外)10YR5/1灰灰 (底)10YR6/1灰灰	青(底径2mm以下の長石、 石英、チャートを含む)	良好	底部100%		弥生中期
第87回	258	218	弥生土器	網底		5.1	残9.29	(内)2.5YR6/8偏 (外)2.5YR6/8偏 (底)2.5YR6/8偏	青(底径1mm以下の砂粒 を含む)	良好	72%		弥生中期
第87回	259	227	弥生土器	瓶状	(4.5)	9.6	(内)10YR6/2灰白 (外)10YR6/2灰白 (底)10YR6/2灰白	青(底径1mm以下の長石 等を多量に含む)	良好	70%		弥生中期	
第87回	260	250	石器	石鏡			幅2.0 幅1.25 厚0.35			100%	サヌカイト、 重量: 1.1g	弥生時代	
第97回	261	249	石器	石槍			幅4.0 幅1.95 厚3.8			100%	サヌカイト、 重量: 5.5g	旧石器時代	
第91回	262	251	弥生土器	広口短頸甕	(16.3)	31.2	6.0	(内)2.5YR7/2灰白 (外)2.5YR7/2灰白 (底)N/A/0灰	青(底径3mm以下の長石、 石英等、5mm以上の礫 を含む)	良好	80%	紀伊系	IV
第91回	263	245	弥生土器	甕	(33.0)	残14.0	(内)10YR8/3灰黃 (外)10YR8/2灰白 (底)10YR8/2灰白	青(底径2~3mmのチャー ト、1mmの長石、 石英等を含む)	良好	23%		IV-2	
第91回	264	246	弥生土器	甕	(2.26)	残4.3	(内)10YR8/3灰黃 (外)10YR8/3灰黃 (底)10YR8/3灰黃	青(底径2mm以下の長石、 石英、チャート、クサ リ種を含む)	良好	13%		IV-2	
第91回	265	209	石器	石包丁			幅12.8 幅3.5 厚0.8	青(底径3mmの青色の斑点あ る)		100%	緑色片岩、 重量: 43.5g	弥生時代	
第92回	266	214	瓦器	板	(15.2)	残3.8	(内)N5/0灰 (外)N4/0灰 (底)6Y8/1灰白	青(底径1mm以下の細砂 粒を含む)	良好	口縁部7%		尾上 II-3	
第92回	267	217	瓦器	板	(15.0)	残3.55	(内)10Y2/2灰 (外)6Y8/1灰白 (底)6Y8/1灰白	青(底径1mm以下の細砂 粒を含む)	良好	口縁部9%		尾上 II-3	
第92回	268	222	瓦器	板		残1.1	高台理 (8.0)	(内)N3/0暗灰 (外)N3/0暗灰 (底)N3/0暗灰	青(底径1mm程度の石粒 を含む)	良好	高台部 25%		尾上 II-3
第92回	269	216	瓦器	板		残1.25	高台理 (4.7)	(内)10Y2/2灰 (外)N2/0黒 (底)10YR5/6黄褐	青(底径1mm以下の細砂 粒を含む)	良好	高台部 52%		尾上 II-3
第92回	270	215	瓦器	小皿	(9.6)	残1.45	(内)6Y2/1黒 (外)2.5Y2/2黒 (底)2.5Y4/2リブ	青(底径1mm以下の細砂 粒を含む)	良好	口縁部 14%		縄文時代	
第92回	271	220	土師器	小皿	(10.0)	残1.55	(内)2.5YR7/4灰白短 (外)10YR8/0灰白短 (底)2.5Y7/4灰白短	青(底径1~2mmのクサ リ種、その他の砂粒を含 む)	良好	口縁部 20%		縄文時代	
第92回	272	665	石器	石鏡			幅2.3 幅1.25 厚0.4			100%	サヌカイト、 重量: 1.0g	弥生時代	
第97回	273	699	弥生土器	広口短頸甕	(20.6)	残4.2	(内)7.5YR8/4/3灰 (外)7.5YR8/4/3灰 (底)10YR8/1灰灰	青(底径2~3mm以下の 長石、石英、クサリ種 を含む)	やや不良	口縁部 20%	274と同一の 可能性あり	IV-1	
第97回	274	698	弥生土器	広口短頸甕	(20.6)	残4.4	(内)7.5YR8/4/3灰 (外)7.5YR8/4/3灰 (底)10YR8/1灰灰	青(底径2~3mm以下の 長石、石英、クサリ種 を含む)	やや不良	口縁部 20%	273と同一の 可能性あり	IV-1	
第97回	275	693	弥生土器	甕		残25.0	9.0	(内)5YR8/4/3灰 (外)8YR7/3灰 (底)10YR8/1灰灰	青(底径3mmの長石、 石英、クサリ種を含む)	良好	底部27%		IV
第97回	276	692	弥生土器	広口長頸甕		残18.0	5.0	(内)5YR8/4/3灰 (外)7.5YR8/6灰 (底)7.5YR8/6灰	青(底径1~3mmの石英、 白、灰、黒色等の粗砂 粒を含む)	良好	底部87%		IV
第97回	277	694	弥生土器	甕	(16.4)	残8.6	(内)7.5YR7/4/3灰 (外)7.5YR7/4/3灰 (底)2.5Y8/1灰白	青(底径1mm以下の石英、 白、灰、黒色等の粗砂 粒を含む)	良好	口縁部 11%		IV	
第97回	278	697	弥生土器	甕	(13.2)	残8.1	(内)10YR7/2/3/3灰 (外)10YR8/3/3灰 (底)10YR7/2/3/3灰	青(底径3mm以下の石英、 白、灰、黒色等の粗砂 粒を含む)	良好	口縁部 15%		IV	
第97回	279	696	弥生土器	甕	(15.8)	残5.1	(内)10YR8/4/3灰 (外)10YR8/4/3灰 (底)2.5Y7/3灰	青(底径1mm以下の白、 黒色砂粒を含む)	良好	口縁部 20%		IV	
第97回	280	696	弥生土器	甕		残3.8	7.0	(内)10YR8/4/3灰 (外)10YR8/4/3灰 (底)10YR8/4/3灰	青(底径0.5mm以下の白、 黒色等の粗砂粒を含む)	良好	底部100%		弥生中期

遺物観察表10

堆積番号	Ph.	種類	基盤	口径	高さ	底径	その他	色調	土質	地成	残存	備考	時期
第97回	261	701	弥生土器	船底型	3.6	9.15		(内)10YR7/3に赤い斑 (外)10YR7/3Cに黒い (底)10YR7/3Cに黒い	密(直徑1mm以下の砂粒 を含む)	良好(口縁部一 部欠損)	100%	弥生中期	
第97回	262	700	弥生土器	船底型	4.7	9.2		(内)10YR7/4Cに赤い斑 (外)10YR7/4Cに黒い (底)10YR7/4Cに黒い	密(直徑2mm以下の砂粒 を含む)	良好(口縫部85 %)	100%	弥生中期	
第99回	263	702	弥生土器	真輪器		残8.2	8.6	(内)10YR7/2灰白 (外)10YR7/2灰白 (底)10YR7/2灰白	密(直徑3mm以下の灰、 白色の砂、粗砂を含む)	良好(底部100%)	100%	弥生中期	
第101回	264	592	弥生土器	広口短縦轍	20.0	残7.6		(内)10YR7/2灰白 (外)10YR7/2灰白 (底)10YR7/2灰白	密(直徑3mm以下の白、 馬色砂粒を含む)	良好(口縫部 95%)	IV-1		
第102回	265	687	弥生土器	段状口縦轍	18.0	残16.65		(内)10YR7/2明褐色 (外)10YR7/2明褐色	密(直徑1~2mmの石英、 クサリ種を含む)	良好(口縫部 97%)	IV-1		
第102回	266	686	弥生土器	段状口縦轍	(23.0)	残17.0		(内)10YR7/2灰白 (外)10YR7/2灰白 (底)10YR7/2灰白	密(直徑1mm以下の石英、 チートを含む)	良好(口縫部94%)	IV-2		
第102回	267	888	弥生土器	広口短縦轍	(16.0)	残16.0		(内)10YR7/2灰白 (外)10YR7/2灰白 (底)10YR7/2灰白	密(直徑3mm以下のチャ ト。他の砂粒を含む)	良好(口縫部 27%)	IV-1		
第102回	268	689	弥生土器	壺		残5.6	(9.0)	(内)10YR7/3Cに黒い (外)7.5YR7/4に白い (底)10YR7/1褐色	密(直徑2~3mmの暗赤 片岩、粗砂、礫を多量 に含む)	良好(底部80%)	紀伊產	II	
第102回	269	690	弥生土器	壺		残5.3		(内)10YR7/1褐色 (外)7.5YR7/4に白い (底)10YR7/1褐色	密(直徑2mm以下の灰石、 石英、蓋面を含む)	良好(口縫部 15%)		II	
第102回	290	691	弥生土器	甕	(4.0)	残6.1		(内)7.5YR7/3Cに白い (外)7.5YR7/3Cに白い (底)7.5YR7/2灰白	密(直徑1~2mmのチャ ト、クサリ種を含む)	良好(口縫部 10%)	IV-1		
第102回	291	686	弥生土器	壺		残16.2	9.0	(内)10YR7/4 (外)7.5YR7/4に白い (底)10YR7/4Cに黒い	密(直徑1~2mmのチャ ト、白色砂粒を含む)	良好(底部100%)		弥生中期	
第103回	292	487	弥生土器	壺		残16.3	6.5	(内)2.5YR7/4灰白 (外)2.5YR7/4灰白 (底)2.5YR7/4灰白	密(直徑3mm以下の茶褐色、 白、黑色種、粗砂を多 量に含む)	良好(底部100%)		弥生中期	
第103回	293	582	弥生土器	広口短縦轍	11.8	残21.2		(内)10YR7/2Cに黒い (外)10YR7/2Cに黒い (底)10YR7/2Cに黒い	密(直徑2~3mmの白、 馬色砂粒を含む)	良好(100%、飼 糞50%)		IV-3	
第103回	294	581	弥生土器	壺		残5.7	8.0	(内)10YR7/2灰白 (外)10YR7/4Cに白い (底)10YR7/2灰白	密(直徑2mm以下の灰石、 石英、チャート、クサ リ種を含む)	良好(底部80%)		弥生中期	
第103回	295	579	弥生土器	延鄭		残5.65	(9.2)	(内)6YR7/8灰 (外)5YR7/8灰 (底)7.5YR8/2浅黃質	密(直徑2mm以下の灰石、 石英、チャート、クサ リ種を含む)	良好(底部39%)		弥生中期	
第103回	296	580	弥生土器	甕		残3.2	9.2	(内)6YR7/8灰 (外)5YR7/8明赤褐 (底)7.5YR8/2浅黃質	密(直徑2~4mmの白、 灰色礫を多量に含む)	良好(底部100%)		II	
第103回	297	576	弥生土器	成部		残3.65	(8.0)	(内)7.5YR7/4Cに白 (外)6YR7/8灰 (底)7.5YR8/2浅黃質	密(直徑2~3mmのクサ リ種を多量に含む)	良好(底部57%)		弥生中期	
第105回	298	677	弥生土器	広口長頸壺	20.3	残12.3		(内)7.5YR7/4Cに白 (外)7.5YR7/4Cに白 (底)7.5YR7/4Cに白	密(直徑2mm以下の白、 黑色砂粒、クサリ種を 多く含む)	良好(口縫部 70%)		III-2	
第105回	299	678	弥生土器	広口短縦轍	(20.0)	残7.7		(内)10YR7/3Cに白 (外)10YR7/3Cに白 (底)SY5/1灰	密(直徑2mm以下の灰石、 石英、チャート、クサ リ種を含む)	良好(40%)		IV-1	
第105回	300	681	弥生土器	短縦轍	(14.0)	残6.8		(内)2.5YR7/2灰質 (外)2.5YR7/2灰質 (底)2.5YR7/3灰質	密(直徑1mm以下の石英、 砂粒を多量に含む)	良好(10%)		IV-2	
第105回	301	684	弥生土器	黑縦轍	(5.5)	6.2	4.0	(内)2.5YR7/2灰質 (外)2.5YR7/2灰質 (底)2.5YR7/2灰質	密(カサリ種、雲母等 少量含む)	良好(60%)		IV	
第105回	302	678	弥生土器	壺	(13.0)	残5.1		(内)10YR7/2Cに白 (外)10YR7/2Cに白 (底)10YR7/2Cに白	密(直徑2mm以下の白色 砂粒を含む)	良好(口縫部 10%)		IV	
第105回	303	680	弥生土器	甕	(14.0)	残6.4		(内)10YR7/2灰白 (外)10YR7/2Cに白 (底)10YR7/2灰白	密(直徑3mm以下の灰石、 石英、チャートを含む)	良好(口縫部 5%)		IV	
第107回	304	479	弥生土器	広口長頸壺		残22.7		初期最大径 28.5	(内)5YR7/8灰 (外)2.5YR7/8明赤褐	密(直徑3mm前後の灰石、 石英、チャート、クサ リ種を含む)	難~難解 50%	日向山	IV
第107回	305	481	弥生土器	広口長頸壺		残15.2		初期最大径 (28.4)	(内)10YR7/3Cに白 (外)10YR7/3Cに白 (底)2.5YR7/8灰質	密(直徑2mm以下の白、 馬色砂粒、クサリ種を 多く含む)	初期10%, 底部100%	日向山	II~III
第107回	306	482	弥生土器	広口長頸壺		残20.1	8.0		(内)7.5YR7/4に白 (外)7.5YR7/4Cに白 (底)7.5YR7/4Cに白	密(直徑2mm以下の長石、 石英、チャート、クサ リ種を含む)	難解60%		IV
第107回	307	611	弥生土器	広口短縦轍	(19.0)	残(29.6) 底部6.5	7.2	(内)10YR7/3Cに白 (外)7.5YR7/3Cに白 (底)2.5YR7/8灰質	密(直徑2mm以下の長石、 石英、チャート、クサ リ種を多量に含む)	難解50%		IV-2	
第107回	308	612	弥生土器	段状口縦轍	(29.7)	(59.4)	8.5	(内)10YR7/4Cに白 (外)10YR7/4Cに白 (底)7.5YR7/2灰白	密(直徑2mm以下の長石、 石英、カシラ種を多 量に含む)	難解30%		IV-2	

遺物観察表11

標識番号	品種	種類	管理	口径	高さ	底径	その他	地土	地成	残存	備考	時期	
第108回 301 480	赤生土器	広口短縦蓋	(16.4)	28.3	6.1	23.3	(内)5YR7/6縦 (外)5YR8/6縦 (底)5YR8/6縦	密(直徑2cm以下の長石、 石英、チャート、クサ、良好 り縫を含む)	良好	70%		III-1	
第108回 310 487	赤生土器	広口短縦蓋	(22.8)	34.6			(内)10YR8/2灰白 (外)10YR8/2灰 (底)NA/0灰	密(直徑0.5~2cmの長 石、石英、チャート、良好 り縫を含む)	良好	46%		IV-4	
第108回 311 505	赤生土器	蓋		36.6	7.3		(内)5YR7/4C/よい (外)7.5YR7/4C/よい (底)10YR5/4C灰	密(直徑2~3cmの長石、 石英、チャート、クサ り縫を含む)	良好	無限100%		弥生中期	
第108回 312 508	赤生土器	蓋		38.7	7.4		(内)5YR7/4C/よい (外)7.5YR7/4C/よい (底)7.5YR5/3浅縦縫	密(直徑2~3cmの長石、 石英、チャート、クサ り縫を含む)	良好	無限100%		弥生中期	
第108回 312 616	赤生土器	広口長縦蓋		32.4	9.4		(内)10YR8/2灰白 (外)10YR8/2灰 (底)10YR8/2灰白	密(直徑2cm以下の長石、 石英、チャート、クサ り縫を含む)	良好	無限100%		II	
第108回 314 513	赤生土器	蓋		36.7	8.0		(内)10YR8/4浅縦縫 (外)10YR8/4浅縦縫 (底)10YR8/1灰	密(直徑2~3cmの長石、 石英、チャート、クサ り縫を含む)	良好	無限100%		弥生中期	
第108回 315 509	赤生土器	蓋		38.1	5.0		(内)2.5YR4/1灰白 (外)10YR8/6縦縫 (底)2.5YR7/1灰白	密(直徑2cm以下の長石、 石英、チャートを含む)	良好	無限100%		弥生中期	
第108回 316 510	赤生土器	蓋		35.2	8.6		(内)7.5YR7/3C/よい (外)7.5YR6/4C/よい (底)10YR8/2白	密(直徑2~3cmの長石、 石英、チャート、クサ り縫を含む)	良好	無限100%		弥生中期	
第108回 317 508	赤生土器	蓋		37.1	8.6		(内)7.5YR8/4浅縦縫 (外)7.5YR8/3浅縦縫 (底)7.5YR8/4浅縦縫	密(直徑2~3cmの長石、 石英、チャートを含む)	良好	無限100%		弥生中期	
第108回 318 511	赤生土器	蓋		38.0	5.6		(内)5YR7/3によい (外)10YR8/4黄質 (底)10YR8/4黄質	密(直徑3cm以下の長石、 石英、チャートを含む)	不良	無限100%		弥生中期	
第108回 319 488	赤生土器	蓋		31.2	7.1		(内)7.5YR7/1開窓 (外)7.5YR4/1灰白 (底)7.5YR7/1開窓	密(直徑2~5cmの長石、 石英、チャート、クサ り縫を含む)	良好	無限100%		弥生中期	
第108回 320 483	赤生土器	段状口縁蓋	15.6	圓筒形 (45.4)	8.1	35.4	開窓最大径 (36.4)	(内)2.5YR4/2灰質 (外)10YR8/2灰質 (底)2.5YR4/2灰質	密(直徑1~2cmの長石、 石英、角閃 雲母を多量に含む)	良好	70%	生糞西面	III-2
第108回 321 525	赤生土器	蓋	(23.4)	35.0			(内)10YR8/2灰質 (外)10YR8/2灰質 (底)10YR8/2灰質	密(直徑1~2cmの長石、 その他の砂粒を含む)	良好	口縫部7%		II	
第108回 322 597	赤生土器	蓋	(13.0)	37.6			(内)10YR8/3C/よい (外)7.5YR6/4C/よい (底)10YR8/3C/よい	密(直徑2cm以下の長石、 石英、チャート、クサ り縫を含む)	良好	15%		II	
第108回 323 595	赤生土器	蓋	(13.0)	38.3			(内)7.5YR7/4C/よい (外)7.5YR7/4C/よい (底)NA/0灰	密(直徑2cm以下の長石、 石英、チャート、クサ り縫を含む)	良好	口縫部	12%	II	
第108回 324 594	赤生土器	蓋	(23.0)	35.1			(内)10YR7/3C/よい (外)7.5YR6/6灰 (底)10YR7/3C/よい	密(直徑2~1cm以下の長石、 石英、石、石粉、 その他の砂粒を含む)	良好	18%		II	
第108回 326 515	赤生土器	蓋	(17.0)	34.0			(内)10YR7/3C/よい (外)10YR8/3C/よい (底)10YR7/3C/よい	密(直徑2cm以下の長石、 石英、チャートを含む)	良好	30%		II	
第108回 326 450	赤生土器	蓋	(16.9)	38.3	4.9		(内)10YR8/3C/よい (外)10YR8/3C/よい (底)10YR7/3C/よい	密(直徑1~2cmの長石、 石英、チャート等を含む)	良好	60%		II	
第108回 327 586	赤生土器	蓋	(36.0)	35.3			(内)10YR8/3C/よい (外)10YR8/3C/よい (底)5YI/4灰	密(直徑2cm以下の、ク サリ縫、波端等を少 量含む)	良好	口縫部5%		II	
第108回 328 610	赤生土器	蓋		28.0	36.6		(内)7.5YR8/4C/灰 (外)7.5YR8/4C/灰 (底)7.5YR8/4C/灰	密(直徑1~2cmの長石、 石英、チャート、クサ り縫)	良好	55%		II	
第108回 329 518	赤生土器	蓋	(29.8)	35.5			(内)10YR7/2C/よい (外)10YR7/2C/よい (底)7.5YR8/1黑縫	密(直徑2cm以下の長石、 チャートを含む)	良好	10%		II	
第108回 330 516	赤生土器	蓋	(28.8)	35.0			(内)7.5YR8/4C/灰 (外)7.5YR8/4C/灰 (底)7.5YR8/4C/灰	密(直徑2cm以下のクサ リ縫、その他の砂粒を含む)	良好	17%		II	
第108回 331 521	赤生土器	蓋	(30.8)	35.2			(内)10YR7/2C/よい (外)7.5YR8/4C/灰 (底)10YR8/1黑縫	密(直徑2cm以下のクサ リ縫、その他の砂粒を含む)	良好	15%		II	
第108回 332 593	赤生土器	蓋		28.9	(40.0)	7.3	開窓最大径 (26.8)	(内)5YR8/3浅縦縫 (外)5YR8/3浅縦縫 (底)10YR8/1灰白	密(直徑1~2cmの石英、 長石、チャートを多量 に含む)	良好	口縫部	40%	II
第110回 333 524	赤生土器	蓋	(25.2)	35.4			(内)10YR8/1灰白 (外)7.5YR8/4C/灰 (底)10YR8/1灰白	密(直徑2cm以下の結晶 片岩、白、黒、褐色砂、 良好)	良好	10%	紀伊産	II	
第110回 334 600	赤生土器	蓋	(27.0)	35.0			(内)5YI/1灰 (外)5YI/1灰 (底)5YI/1灰	密(直徑2cm以下の結晶 片岩、白、黒、褐色砂、 良好)	良好	18%	紀伊産	II	
第110回 335 603	赤生土器	蓋	(28.0)	35.0			(内)7.5YR8/4C/よい (外)7.5YR8/4C/よい (底)10YR7/2C/よい	密(直徑2cm以下の長石、 石英、結晶片岩を含む)	良好	12%	紀伊産	II	
第110回 336 602	赤生土器	蓋	(20.6)	35.1			(内)7.5YR8/4C/よい (外)7.5YR8/4C/よい (底)7.5YR8/4C/よい	密(直徑2cm以下の長石、 石英、結晶片岩を含む)	良好	20%	紀伊産	II	

遺物観察表12

探査号名	Pno.	種類	器種	口径	高さ	底径	その性	色調	土	焼成	残存	傷害	時期
第110回	337	弥生土器	甕	(20.4)	残8.4		(内)7.5YR7/4Cに濃 (外)7.5YR7/4Cに濃 (底)7.5YR6/4Cに濃	褐(濃度2~3mm以下の陶石、 石英、クリソリッド、結晶 片を含む)	砂質	良好	5%	口縁部 紀伊半島	日
第110回	338	弥生土器	甕	(23.0)	残6.7		(内)7.5YR7/3Cに濃 (外)7.5YR6/4Cに濃 (底)7.5YR6/4Cに濃	褐(濃度2~3mm以下の陶石、 石英、クリソリッド、結晶 片を含む)	砂質	良好	30%	口縁部 紀伊半島	日
第110回	339	弥生土器	甕		残4.7	6.9	(内)10YR5/3Cに濃 (外)10YR5/3Cに濃 (底)10YR5/3Cに濃	褐(濃度3mm以下の陶石、 白、黒、褐色斑、良好 片を含む)	砂質	良好	底部10% 紀伊半島	日	
第110回	340	弥生土器	甕		残8.5	8.4	(内)7.5YR6/9暗 (外)7.5YR6/9暗 (底)7.5YR6/9暗	褐(濃度2~3mm以下の陶石、 チャート、結晶片を含む) 火候	砂質	良好	底部100% 紀伊半島	日	
第110回	341	弥生土器	甕	(35.8)	残5.0		(内)10YR7/2Cに濃 (外)10YR7/2Cに濃 (底)10YR3/1黒混	褐(底径1~2cmの陶石、 長石、石英、クリソリッ ド等を含む)	砂質	良好	15%	口縁部 紀伊半島	日
第110回	342	弥生土器	甕	(40.6)	残7.6		(内)9YR7/7暗 (外)9YR7/7暗 (底)10YR5/2灰白	褐(底径3mm以下の陶石、 石英、チャート、クサ リ繊維を含む)	砂質	良好	12%	口縁部 紀伊半島	日
第110回	343	弥生土器	甕		残20.9	7.2	(内)10YR5/1灰白 (外)5YR8/8暗 (底)10YR5/1灰白	褐(底径1~2cmの陶石、 石英、チャートを含む) 火候	砂質	良好	底部100%	底部 紀伊半島	日
第110回	344	弥生土器	甕		残8.7	7.2	(内)2.5YR7/7灰白 (外)10YR2/2灰白	褐(底径3mm以下の陶石、 石英、チャート、クサ リ繊維を含む)	砂質	良好	底部90% 弥生中期	弥生中期	日
第110回	345	弥生土器	甕		残8.9	(12.0)	(内)10YR3/1灰白 (外)10YR3/2灰白 (底)10YR4/4暗	褐(底径1~2cmの陶石、 石英、チャートを含む) 火候	砂質	良好	底部15% 弥生中期	弥生中期	日
第110回	346	弥生土器	甕		29.2	残15.3	(内)8YR6/9暗 (外)5YR5/4Cに濃	褐(底径3mm以下の陶石、 石英、チャート、クサ リ繊維を含む)	砂質	良好	50%	口縁部 紀伊半島	IV-2
第110回	347	弥生土器	甕	(33.4)	(34.0)	(8.0)	(内)10YR7/4C-2C暗 (外)10YR7/4C-2C暗 (底)10YR7/4C-2C暗	褐(底径4~5mmの陶石、 石英、長石、砂色斑、クサ リ繊維を含む)	砂質	良好	20% 底部25%	口縁部 紀伊半島	IV
第111回	348	弥生土器	甕	(19.2)	残8.5		(内)10YR4/2灰白 (外)10YR4/2灰白 (底)10YR4/2灰白	褐(底径1~2cmの陶石、 その他の陶石を含む)	砂質	良好	底部15% 弥生中期	弥生中期	日
第111回	349	弥生土器	甕	(13.4)	7.2	(5.0)	(内)10YR7/3C-3C暗 (外)10YR7/3C-3C暗 (底)10YR7/3C-3C暗	褐(底径1~2cm以下の砂質、 石英、チャートを含む)	砂質	良好	底部45% 底部40%	口縁部 紀伊半島	IV
第111回	350	弥生土器	甕	(13.0)	残18.5		(内)2.5YR7/8暗 (外)2.5YR7/8暗 (底)2.5YR7/8暗	褐(底径6mmの大いな小石、 砂を多量に含む)	砂質	良好	30%	口縁部 紀伊半島	IV
第111回	351	弥生土器	甕	(13.6)	残7.0		(内)7.5YR7/14Cに濃 (外)2.5YR6/2灰白 (底)10YR4/4洗練後	褐(底径2~3mmの陶石、 石英、チャート、クサ リ繊維を含む)	砂質	良好	75%	口縁部 紀伊半島	III
第111回	352	弥生土器	鉢	(18.0)	残5.1		(内)10YR7/2Cに濃 (外)10YR7/2Cに濃 (底)10YR7/2Cに濃	褐(底径1~2cmの陶石、 石英、クリソリッドを含む) 火候	砂質	良好	10%	口縁部 紀伊半島	弥生中期
第111回	353	弥生土器	真鍋蓋		残7.3	6.0	(内)10YR7/4に濃 (外)5YR6/6暗 (底)7.5YR3洗練後	褐(底径4mm以下の陶石、 チャートを含む)	砂質	良好	底部100% 弥生中期	弥生中期	日
第111回	354	弥生土器	真鍋蓋		残9.8	5.2	(内)10YR6/9暗 (外)2.5YR6/6暗 (底)7.5YR7/7暗	褐(底径2~3mm以下の陶石、 石英、チャートを含む)	砂質	良好	底部100% 弥生中期	弥生中期	日
第111回	355	弥生土器	真鍋蓋		残8.7	6.0	(内)2.5YR6/6暗 (外)10YR6/6暗 (底)5YR6/6暗	褐(底径2~3mm以下の陶石、 石英、チャートを含む)	砂質	良好	底部100% 弥生中期	弥生中期	日
第111回	356	弥生土器	真鍋蓋		残9.4	5.8	(内)7.5YR6/6洗練後 (外)5YR6/6暗 (底)8YR7/7暗	褐(底径1cmの陶石、石 英、チャートを含む)	砂質	良好	底部100% 弥生中期	弥生中期	日
第111回	357	弥生土器	真鍋蓋		残11.5	6.0	(内)10YR6/6暗 (外)5YR6/6暗 (底)8YR7/7暗	褐(底径2~3mmの陶石、 石英、チャートを含む)	砂質	不良	底部100% 弥生中期	弥生中期	日
第111回	358	弥生土器	真鍋蓋		残10.1	5.8	(内)2.5YR7/6暗 (外)1.25YR6/6暗 (底)7.5YR6/3暗	褐(底径2~3mm以下の陶石、 石英、チャートを含む)	砂質	良好	底部100% 弥生中期	弥生中期	日
第111回	359	弥生土器	真鍋蓋		残11.0	5.8	(内)7.5YR7/6灰白 (外)2.5YR7/6灰白 (底)7.5YR7/6灰白	褐(底径2~3mm以下の陶石、 石英、チャートを含む)	砂質	良好	底部100% 弥生中期	弥生中期	日
第111回	360	弥生土器	真鍋蓋	(12.5)	残8.35		(内)7.5YR7/6暗 (外)10YR6/6暗 (底)7.5YR7/6暗	褐(底径1~2cm以下の陶石、 石英、チャートを含む)	砂質	良好	50%	口縁部 紀伊半島	日
第111回	361	弥生土器	真鍋蓋		残14.6	5.8	(内)10YR7/6灰白 (外)8YR7/6暗 (底)10YR6/2灰白	褐(底径2~3mmの陶石、 石英、チャートを含む)	砂質	良好	底部100% 弥生中期	弥生中期	日
第111回	362	弥生土器	真鍋蓋		残16.5	6.8	(内)10YR7/6灰白 (外)8YR7/6暗 (底)10YR6/1灰	褐(底径2~3mm以下の陶石、 石英、チャートを含む)	砂質	良好	底部100% 弥生中期	弥生中期	日
第111回	363	弥生土器	真鍋蓋		5.8	9.5	(内)12.5YR6/6暗 (外)12.5YR6/6暗 (底)12.5YR6/6暗	褐(底径1~2cm以下の陶石、 石英、チャートを含む)	砂質	良好	100%	弥生中期	日
第111回	364	弥生土器	真鍋蓋		5.4	10.2	(内)12.5YR7/5明赤 (外)12.5YR7/5明赤 (底)12.5YR7/5明赤	褐(底径2~3mmのカサ リ繊維を含む。底径2cm 良好)	砂質	良好	100%	弥生中期	日

遺物觀察表13

種別番号	Pho.	地質	岩種	口径	設高	底状	その他	色調	粒度	地成	残存	備考	時期
第113回	365 930	浮生土層	広口短縦巣	(19.3)	残12.0			(内)10YR8/1灰白 (外)10YR8/1灰白 (断)10YR8/1灰白	赤(直徑2~3mm程度の 砂を含む。クサリ穂毛 少量含む。)	良好	口部~基部 50%		IV-I
第113回	366 933	浮生土層	広口短縦巣	(16.5)	残8.0			(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑1mm以下のチャ ート、クサリ穂毛含む。)	良好	口縫部 20%		IV-I
第113回	367 831	浮生土層	広口短縦巣	(16.8)	残7.4			(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑1~2mm以下の チャート、クサリ穂毛 含む。)	良好	口縫部 15%		IV-I
第113回	368 836	浮生土層	広口短縦巣	16.3	残7.2			(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑1mm以下の白色 砂粒を含む。)	良好	口縫部 100%		IV-2
第113回	369 634	浮生土層	広口短縦巣	(16.6)	残6.1			(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑3mm以下の 黄色砂粒を含む。)	良好	口縫部 16%		IV-1
第113回	370 837	浮生土層	広口短縦巣	(16.4)	残10.7			(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑1mm以下の長石 石英、チャートを含む。)	良好	口縫部 40% (断)5%		IV
第113回	371 652	浮生土層	段状口縦巣	(25.6)	(50.7)			(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑1mm以下の長石 石英、チャート、クサリ 穂毛を含む。)	良好	30%		IV-I
第113回	372 627	浮生土層	段状口縦巣	(16.3)	残8.3			(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑2mm以下の長石 石英、チャート、クサリ 穂毛を含む。)	良好	口縫部 45%		IV-I
第113回	373 626	浮生土層	段状口縦巣	(24.4)	残24.6			(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑2mm以下の長石 石英、チャートを含む。)	良好	口縫部~基部 70%		IV-2
第113回	374 828	浮生土層	段状口縦巣	(25.5)				(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑2mm以下の白 石、石英、接合砂粒を含む。)	良好	口縫部 75% (断)5%		IV-2
第114回	376 838	浮生土層	段	(19.5)				(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑2mm以下の長石 石英、チャート、クサリ 穂毛を含む。)	良好	口縫部 10% (断)5%		IV
第114回	378 849	浮生土層	段	(24.0)	残10.0			(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑1mm程度の長石 石英、チャートを含む。)	良好	口縫部10%		IV-2
第114回	377 850	浮生土層	段	(14.0)	残4.0			(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑1mm程度の長石 石英等を含む。)	良好	口縫部15%		IV
第114回	378 654	浮生土層	段	(32.0)	残9.3			(内)10YR8/6灰 (外)10YR8/6灰 (断)10YR8/6灰	赤(直徑3mm以下の長石 石英、チャートを含む。)	良好	口縫部 80%		IV-3
第114回	379 646	浮生土層	段	15.0	残8.1			(内)10YR7/2C灰白 (外)10YR7/2C灰白 (断)10YR7/2C灰白	赤(直徑1mm以下の細砂 等を含む。)	良好	口縫部 76%		IV
第114回	380 651	浮生土層	集	(36.0)	残9.6			(内)10YR7/6灰 (外)10YR7/6灰 (断)10YR7/6灰	赤(直徑1mm以下の白色 砂粒、クサリ穂毛を含む。)	良好	口縫部 40%		IV-2
第114回	381 428	浮生土層	新納巣	4.6	10.8			(内)10YR8/8灰 (外)10YR8/8灰 (断)10YR8/8灰	赤(直徑3mm以上の長石 石英、チャートを含む。)	良好	100%		浮生中期
第114回	382 632	浮生土層	段		残2.4	(8.2)		(内)10YR8/1灰白 (外)10YR8/1灰白 (断)10YR8/1灰白	赤(直徑1mm以下の長石 石英、チャートを含む。)	良好	底部70%		浮生中期
第114回	383 629	浮生土層	段	(5.5)	8.6			(内)10YR8/6灰 (外)10YR8/6灰 (断)10YR8/6灰	赤(直徑2mm以下の石英、 高嶺石細砂を含む。)	良好	底部100%		浮生中期
第114回	384 953	浮生土層	段		残8.1	8.2		(内)10YR7/2C灰白 (外)10YR7/2C灰白 (断)10YR7/2C灰白	赤(直徑1mm以下の無砂 等を含む。)	良好	底部100%		浮生中期
第114回	385 647	浮生土層	段		残6.8	7.9		(内)10YR8/4灰白 (外)10YR8/4灰白 (断)10YR8/4灰白	赤(直徑1mm以下の無砂 等を含む。)	良好	底部85%		浮生中期
第114回	386 645	浮生土層	段		残11.1	(9.6)		(内)10YR8/4灰白 (外)10YR8/4灰白 (断)10YR8/4灰白	赤(直徑1mm以下の無砂 等を含む。)	良好	底部53%		浮生中期
第114回	387 643	浮生土層	段		残11.3	10.4		(内)10YR8/4灰白 (外)10YR8/4灰白 (断)10YR8/4灰白	赤(直徑1~2mmの長石、 石英、チャート、クサリ 穂毛等を含む。)	良好	底部80%		浮生中期
第114回	388 641	浮生土層	段		残14.0	7.0		(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑1~2mmの長石、 石英、チャートを含む。)	良好	底部100%		浮生中期
第116回	389 584	浮生土層	広口長縦巣	(16.6)	残7.2			(内)10YR8/6灰 (外)10YR8/6灰 (断)10YR8/6灰	赤(直徑2~3mm程度の 石、砂粒、クサリ穂毛 多量に含む。)	良好	口縫部 20% 389と同一個 体		II
第116回	390 583	浮生土層	広口長縦巣		残21.3	7.7		(内)10YR8/3灰黃 (外)10YR8/3灰黃 (断)10YR8/3灰黃	赤(直徑1~4mm程度の 石、砂粒、クサリ穂毛 等を含む。)	良好	底部100% 389と同一個 体		II
第116回	391 687	浮生土層	広口長縦巣		残(19.6)			(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑2~3mmの石英、 高嶺石細砂を含む。)	良好	口縫部 30%		II
第116回	392 585	浮生土層	段		(22.2)	8.0		(内)10YR8/2C灰白 (外)10YR8/2C灰白 (断)10YR8/2C灰白	赤(直徑2~3mmの石英、 高嶺石細砂を含む。)	良好	口縫部96%、 底部100% 389と同一個 体		II

遺物觀察表14

標図番号	Pno.	種類	苔種	口径	高さ	底径	その他	色調	土質	形成	残存	備考	時期
第117図	393	231	須恵器	杯身	(11.4)	残2.9		(内)5PB7/1灰青岩 (外)N6/0白 (底)N7/0白	密(直徑2mm以下の砂粒 を多量に含む) 良好	20%		南朝 II-5	
第117図	394	256	須恵器	短縦腹	(7.2)	残3.25		(内)N7/0白 (外)N6/0白 (底)N7/0白	密(直徑1mm以下の砂粒 を含む) 良好	15%		古墳後期	
第117図	395	621	寄生土器	広口短縦腹	(19.0)	残6.3		(内)7.5VR7/4C2灰 (外)7.5VR7/4C2灰 (底)10VR7/4C2灰	密(直徑2mm以下の長石、 石英、チャートを含む) 良好	20%		I	
第117図	396	624	寄生土器	広口短縦腹	(22.4)	残6.3		(内)7.5VR7/4C2灰 (外)7.5VR7/4C2灰 (底)7.5VR7/4C2灰	密(直徑2mm以下の長石、 石英、その他の砂粒を含む) 良好	20%		IV-1	
第117図	397	711	寄生土器	広口短縦腹	(20.4)	残3.8		(内)7.5VR7/4C2灰 (外)7.5VR7/4C2灰 (底)7.5VR7/4C2灰	密(直徑2mm以下の長石、 石英、チャート、クサ、良好 リ葉を含む) 良好	15%		II-2	
第117図	398	708	寄生土器	広口短縦腹	(20.0)	残4.8		(内)7.5VR7/4C2灰 (外)7.5VR7/4C2灰 (底)10VR7/2C2灰	密(直徑2mm以下の長石、 石英、チャート、クサ、良好 リ葉を含む) 良好	20%		IV-3	
第117図	399	714	寄生土器	広口短縦腹	(14.6)	残4.8		(内)10VR6/3C2灰 (外)10VR6/3C2灰 (底)10VR6/3C2灰	密(直徑2mm以下の長石、 石英、角閃石を多量に含む) 良好	20%		寄生西端	
第117図	400	710	寄生土器	広口短縦腹	(8.0)	残8.8		(内)8VR6/6灰 (外)8VR6/6灰 (底)8VR6/6灰	密(直徑4mm以下の長石、 石英、その他の砂粒、相羽、良好 リ葉を含む) 良好	22%		寄生中期	
第117図	401	620	寄生土器	盤	(24.0)	残4.8		(内)10VR7/4C2灰 (外)10VR7/4C2灰 (底)10VR7/4C2灰	密(直徑2mm以下の長石、チャート を含む) 良好	不明		I	
第117図	402	705	寄生土器	盤	(22.4)	残4.3		(内)7.5VR6/4C2灰 (外)7.5VR6/4C2灰 (底)7.5VR6/4C2灰	密(直徑2mm以下の長石、 石英、チャートを含む) 良好	18%		II-2	
第117図	403	531	寄生土器	盤	(11.5)	残5.0		(内)10VR6/2灰白 (外)7.5VR6/4C2灰 (底)10VR6/2灰白	密(直徑1mm以下の長石、 石英、その他の砂粒を含む) 良好	30%		III	
第117図	404	703	寄生土器	先	(15.0)	残3.2		(内)8VR6/6灰 (外)8VR6/6灰 (底)8VR6/6灰	密(直徑1~2mm程度の 砂粒を含む) 良好	15%		III	
第117図	405	623	寄生土器	盤	(26.0)	残5.6		(内)7.5VR7/4C2灰 (外)7.5VR7/4C2灰 (底)7.5VR7/4C2灰	密(直徑1mmの角閃石、 石英、良好 リ葉を含む) 良好	18%		生駒西端	
第117図	406	707	寄生土器	盤	(18.0)	残4.2		(内)8VR6/8灰 (外)8VR6/8灰 (底)10VR7/3C2灰	密(直徑2mm以下の細砂 を含む) 良好	10%		IV-3	
第117図	407	607	寄生土器	盤	(24.8)	残5.3		(内)10VR7/3C2灰 (外)7.5VR7/4C2灰 (底)10VR7/3C2灰	密(直徑1mm以下の長石、 石英、良好 リ葉を含む) 良好	9%		IV	
第117図	408	709	寄生土器	盤		残3.7 (6.6)		(内)10VR7/3C2灰 (外)7.5VR7/4C2灰 (底)10VR7/3C2灰	密(直徑2mm以下の長石、 その他の砂粒を含む) 良好	正常33%		II	
第117図	409	717	寄生土器	真輪壺		残6.1	4.8	(内)10VR7/4C2灰 (外)10VR7/4C2灰 (底)7.5VR7/4C2灰	密(直徑1~2mmの砂を 含む) 良好	底部100%		寄生中期	
第117図	410	712	寄生土器	真輪壺		残7.8	4.8	(内)7.5VR7/4C2灰 (外)7.5VR7/4C2灰 (底)7.5VR7/4C2灰	密(直徑2mm以下の長石、 石英、チャート、クサ、良好 リ葉を含む) 良好	底部100%		寄生中期	
第117図	411	706	寄生土器	底部		残3.5 (8.0)		(内)7.5VR5/2灰 (外)7.5VR5/2灰 (底)7.5VR5/1灰	密(直徑1~2mmの長石、 石英、その他の砂粒を含む) 良好	底部80%		寄生中期	
第117図	412	715	寄生土器	底部		残4.8	8.8	(内)10VR6/3C2灰 (外)10VR6/3C2灰 (底)10VR6/3C2灰	密(直徑1~2mmの角閃 石、2~3mmの長石を多量に含む) 良好	底部80%		寄生中期	
第117図	413	716	寄生土器	底部		残8.2	9.1	(内)7.5VR7/3C2灰 (外)7.5VR7/3C2灰 (底)7.5VR7/3C2灰	密(直徑3~4mmの白、 黒色の石、礁を含む) 良好	底部70%		寄生中期	
第117図	414	527	寄生土器	底部		残6.8	12.9	(内)10VR7/3C2灰 (外)7.5VR7/3C2灰 (底)10VR7/3C2灰	密(直徑2mm以下の長石、 石英、チャート、クサ、良好 リ葉を含む) 良好	底部100%		寄生中期	
第117図	415	626	寄生土器	盤		残11.7	13.9	(内)10VR7/3C2灰 (外)7.5VR7/3C2灰 (底)10VR7/3C2灰	密(直徑2mm以下の長石、 石英、チャート、クサ、良好 リ葉を含む) 良好	底部100%		寄生中期	
第118図	416	395	石製品	輪軸車			直徑4.5 厚さ1.6				100%	滑石 重量: 49.5g	弥生時代
第118図	417	496	石器	石包丁			残存長: 6.4 幅: 4.7 厚: 0.5				不明	結晶片石、 重量: 22.1g	弥生時代
第118図	418	391	石器	石包丁			残存長: 12.4 幅: 4.7 厚: 0.6				96%	綠色片石、 重量: 57.5g	弥生時代
第118図	419	698	石器	石鋸			残存長: 6.0 幅: 1.85 厚: 0.3				92%	サヌカイト、 重量: 1.6g	弥生時代
第118図	420	683	石器	石鋸			残存長: 2.9 幅: 1.85 厚: 0.3				90%	サヌカイト、 重量: 1.5g	弥生時代

遺物観察表15

発掘場所	No.	種類	器種	口径	基高	底径	その他	色調	地土	性状	残存	備考	時期
第118回	421	416	石器	石鏡			長3.1 幅1.9 厚0.35				100%	サヌカイト、重量：2.9g	弥生時代
第118回	422	375	石器	石鏡			長2.5 幅1.8 厚0.3				100%	サヌカイト、重量：1.8g	弥生時代
第118回	423	410	石器	石鏡			長3.2 幅1.65 厚0.35				100%	サヌカイト、重量：1.3g	弥生時代
第118回	424	466	石器	石鏡			長3.05 幅1.4 厚0.35				100%	サヌカイト、重量：1.5g	弥生時代
第118回	426	373	石器	石鏡			長3.6 幅1.5 厚0.35				90%	サヌカイト、重量：2.0g	弥生時代
第118回	426	398	石器	石鏡			長3.9 幅1.1 厚0.6				100%	サヌカイト、重量：2.7g	弥生時代
第118回	427	368	石器	石鏡			長4.7 幅1.8 厚0.3				100%	サヌカイト、重量：3.7g	弥生時代
第118回	428	460	石器	石鏡			長2.75 幅1.7 厚0.4				100%	サヌカイト、重量：1.8g	弥生時代
第118回	429	372	石器	石鏡			長4.7 幅2.4 厚0.25				90%	サヌカイト、重量：3.5g	弥生時代
第118回	430	377	石器	石鏡			長5.2 幅1.55 厚0.55				100%	サヌカイト、重量：3.8g	弥生時代
第118回	431	392	石器	石劍			長18.0 幅3.2 基部厚1.3				100%	サヌカイト、重量：103.2g	弥生時代
第119回	432	307	石器	石槍			残存長5.5 幅3.1 厚1.3				不明	サヌカイト、重量：30.1g	弥生時代
第119回	433	390	石器	石槍 (漆皮石劍の 再利用)			長7.3 幅3.0 厚0.6				100%	粘板岩、重量：13.0g	弥生時代
第119回	434	405	石器	大刀柄刃石 斧			残存長7.5 幅7.7 厚5.2				不明	緑色粘板岩、 重量：616.3g	弥生時代
第121回	435	713	弥生土器	広口短腹復	(12.1)	残3.3		(内)2.5Y7/3浅黄 (外)10YR4/4暗 (底)2.5Y7/3浅黄	赤(直径1~2mm以下の 長石、石英を含む)	良好	口縁部 13%		IV-3

遺物観察表16

(注)

各遺物の時期について略号を付して表記したものは、下記の文献による編年である。

「陶邑」・大阪府教育委員会『陶邑』III 1980年

「飛鳥」・古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』1982年

「尾上」・尾上実「南河内の瓦器検」(『藤澤一夫先生古希記念古文化論述』1983年)

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	いけがみそねいせき
書名	池上曾根遺跡
副書名	拠点集落東方の墓域の調査
卷次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	1998-1
編著者名	藤澤眞依、広瀬雅信、地村邦夫、井西貴子、大洞真白
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村 遺跡番号	°	°			
いけがみそね 池上曾根遺跡	おおさかふいしづ しいりがねちゆう 大阪府和泉市池上町	27219	34 28 29 55	135 1次 1996年8月 ~1997年3 月 3 2次 1997年8月 ~1998年3 月	1次 4942 宮線建設	府道池上ド	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池上曾根遺跡	環濠集落	弥生時代中期 古墳時代～平安時代 中世	方形周溝墓・土器棺・木棺墓・土壙墓・人溝・土器 窪・自然河川 自然河川・土坑・溝 掘立柱建物・井戸・土坑・溝・条里関連遺構	繩紋土器・ 弥生土器・ 石器・土器 製品・土器 筒形器・須 恵器・黑色土器・ 瓦器・陶磁器	弥生時代中期の 拠点集落における墓域の確認

大阪府文化財調査報告1998-1

**池上曾根遺跡 挿点集落東方の墓域の調査**

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

T E L. 06-6941-0351㈹

発行日 1999年3月

印刷 ダイコウ印刷株式会社

〒544-0034 大阪市生野区桃谷5丁目3番3号

T E L. 06-6712-6709㈹

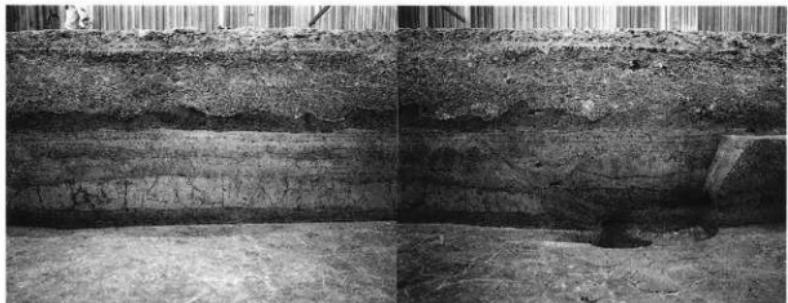
# 図版



1区 全景(北から)



1区 下層確認トレンチ全景(北から)



2区 南壁土層断面



2区 第1面全景(北から)



第2面全景(西から)



第3面全景(北から)



第3面掘立柱建物SB48(東から)



第4面全景(西から)



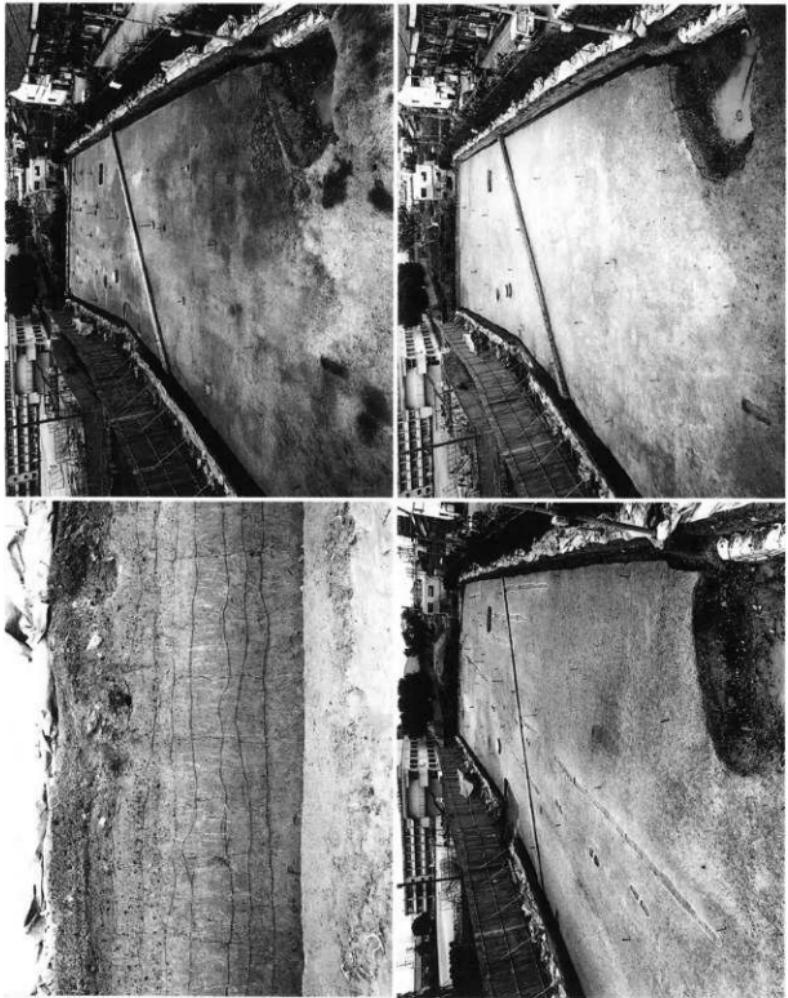
第5面全景(西から)



第6面全景(北西から)



第7面全景(西から)



(左上)  
南壁土層斷面

(左下)  
第1面全景(東かん)

(右上)  
第2面全景(東かん)

(右下)  
第3面全景(東かん)



第4面全景(西から)



第4面方形周溝墓(手前 SI164、奥 SI165)(西から)



木棺墓SK153検出状態(東から)



同木棺掘り下げ状態(東から)



同掘形裏込み上除去後(東から)



同掘形完掘状態(東から)



同埋土横断面(東から)



同左



木棺墓SK154検出状態(東から)



同棺内掘り下げ状態(南から)



同木棺掘り下げ状態(東から)

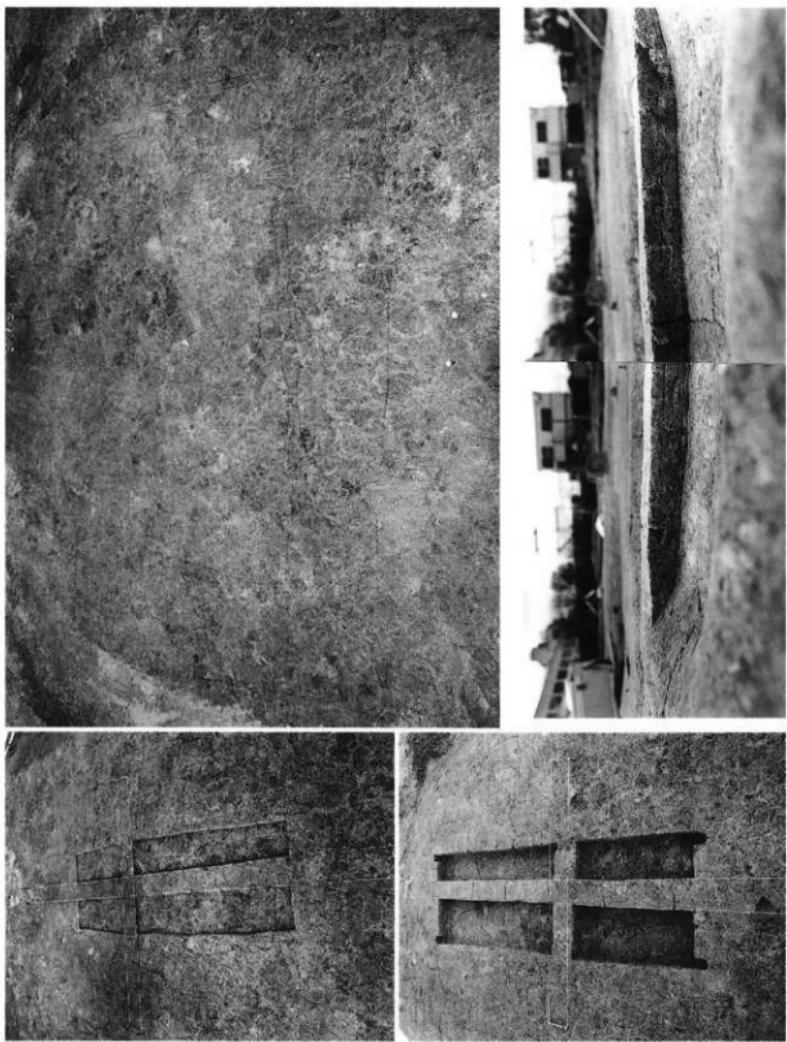


同掘形完掘状態(東から)



同理土塁断面(東から)





(右上)  
木棺墓SI162  
検出状態(東かご)

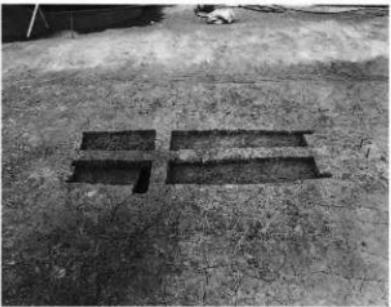
(左上)  
同布内掘り下げ  
状態(北かご)

(左下)  
同木棺掘り下げ  
状態(南かご)

(右下)  
同埋上縦断面  
(東かご)



木棺墓SK163検出状態(東から)



同木棺掘り下げ状態(南から)



同埋土縦断面(北から)



同埋土横断面(南から)



木棺墓SK167検出状態(東から)



同棺内掘り下げ状態(南から)



木棺墓SK167木棺掘り下げ状態(南から)



SK167埋土縦断面(東から)



SI164周溝埋土断面(南から)



SK167埋土横断面(南から)



SI164頂丘盛上断面(南から)



方形周溝墓SI165全景(東から)



木棺墓SK155検出状態(北から)



同木棺掘り下げ状態(東から)



同掘形完掘状態(東から)



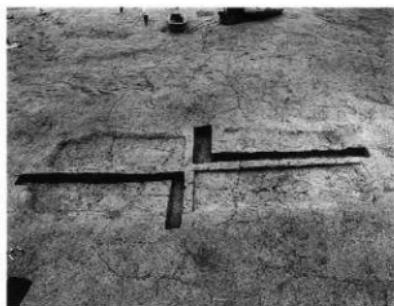
同埋土横断面(東から)



木棺墓SK156検出状態(東から)



同木棺掘り下げ状態(東から)



木棺墓SK156掘形完堀状態(東から)



同埋土横断面(南から)



木棺墓SK157検出状態(東から)



同木棺掘り下げ状態(東から)



同掘形完堀状態(南から)



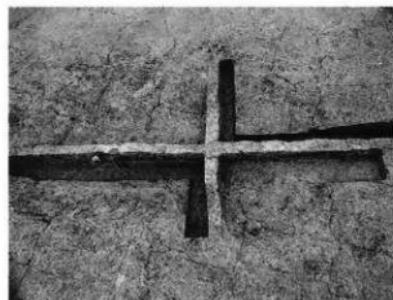
同埋土横断面(南から)



木棺墓SK158検出状態(北から)



同棺内掘り下げ状態(北から)



同掘形完掘状態(南から)



同埋土横断面(西から)



木棺墓SK159検出状態(南から)



同木棺掘り下げ状態(南から)